

第35回 洛和会ヘルスケア学会

抄 録

日時 2025年10月19日(日)

開場・受付：8:30

開 会：8:45

第1～8会場

会場 洛和会京都看護学校

(京都市山科区小山北溝町2-2)

第9会場

洛和会音羽リハビリテーション病院

らくまちテラス (テラス棟1階)

(京都市山科区小山北溝町32-1)

特設サイト



本学会抄録は
Webサイトにも掲載しています。



いのちを見つめ、人間を支える。



洛 和 会
ヘルスケアシステム®

洛和会丸太町病院 洛和会音羽病院
洛和会音羽記念病院 洛和会音羽リハビリテーション病院

ファクトベースでの実践を

洛和会ヘルスケアシステム

理事長 矢野 裕典



矢野一郎会長が始めた洛和会ヘルスケア学会の理念は、臨床や仕事だけでなく、業務を通じて自己研鑽を図るということにあります。

洛和会ヘルスケアシステムは、臨床・現場を持っています。日々、患者さん・利用者さんのために業務を遂行している皆さんを信じていますし、その皆さんの仕事が社会に尊敬され、守られてほしいと心から願っています。

私たちは、医学、科学をベースに、エビデンス・根拠に基づいて活動する立場にあります。職員の皆さん一人一人が、それぞれの職場におけるプロフェッショナルとして、知識と経験をともにアップデートして、人に伝えていくということが職務の根幹です。昨今、科学的根拠の乏しい言説やフェイクニュースが飛び交っています。とりわけ、医療従事者や介護・福祉の従事者にとって当たり前のことが世間にとっては必ずしもそうではないということが多く、一般の方にもご理解をいただく機会として、この学会を位置付けていくことが重要です。社会の安定、やさしい社会を創造するためには、揺らいではいけません。

医療部門においては、医師・薬剤師・看護職をはじめとして、多くの専門職が活躍してくれています。そして、電子カルテの全面リニューアルを受けて大きく業務改善が図られています。また、全部門を通じて、TQM活動やiPhone・teamsを活用したDXの推進をしています。ぜひ、新しいことに、受け身ではなく、積極的に取り組んでいってください。関連する発表も楽しみです。

深い知識やファクト・エビデンスに基づく実践を通じて、フェイクに負けず、社会の分断を防ぎ、融和に向かって前進させ、「やさしい社会を創造する。」というパーパスを改めて確認しましょう。

英知の交流の場に

第35回 洛和会ヘルスケア学会

学会長 黒田 啓史



洛和会ヘルスケア学会の開催にあたり、謹んでご挨拶申し上げます。

本学会は、医療・介護・福祉の現場で日々研鑽を重ねる職員が、知識と経験を共有し、より良いケアの実現を目指す場として年々その意義を深めております。急速に進展する医療技術や社会の変化に対応するためには、専門職の垣根を越えた連携と、現場からの創意工夫が不可欠です。洛和会ヘルスケアシステムは、「顧客第一に、質の高い医療、介護、保育を提供します」という理念のもと、患者・利用者の皆さまの生活に寄り添うケアを追求していますが、本学会がその理念を実践するための「英知」の交流の場となることを心より願っております。

今年度は、「つながる～今、真の連携が必要な時～」をテーマに、一般口演121題、ポスター展示89題、TQM活動発表18題などが予定されており、現場の課題に真摯に向き合った取り組みが数多く発表されます。これらの内容が、参加者の皆さまにとって新たな気づきや学びとなり、日々の実践に活かされることを期待しております。また、それぞれの取り組みは、本学会での発表にとどまる事なく、ぜひそれぞれの専門学会で報告され、できれば論文化されることを期待しています。

特別講演は、平成医療福祉グループの創設者であり、現在は同グループの会長として活躍されている武久 洋三先生にお願いしています。先生は慢性期医療の発展に大きく貢献された医師・経営者として高名で、「絶対に見捨てない」というグループ理念のもと、専門多職種による徹底したチーム医療を実践し、全ての患者さん・利用者の皆さまに最善の医療・福祉サービスを提供されています。裨益する所大の講演と思いますのでご期待ください。

結びに、本学会の開催にご尽力いただいた関係者の皆さまに深く感謝申し上げますとともに、参加者の皆さまの今後のご活躍を祈念いたします。

第 35 回 洛和会ヘルスケア学会

主 管：洛和会音羽病院

役 員

学会理事長	洛和会ヘルスケアシステム	理事長	矢 野 裕 典
学会長	洛和会音羽病院	病院長	黒 田 啓 史
副学会長	洛和会音羽記念病院	病院長	廣 川 隆 一

実 行 委 員

実行委員長	洛和会学術支援センター	センター長	長 坂 行 雄
副実行委員長	洛和会音羽病院	部長	土 谷 美 知 子
	〃	看護副部長	松 本 修 一
	〃	次長	佐々木啓四郎
実行委員	洛和会丸太町病院	主席係長	八 木 健 太 郎
	洛和会音羽記念病院	副病院長	細 川 典 久
	〃	副部長（看護部長）	南 出 か お る
	〃	課長	高 橋 祥 人
	洛和会音羽リハビリテーション病院	医長	浅 田 麻 樹
	〃	看護部長	川 井 倫 子
	〃	課長	多 胡 和 樹
	洛和会東寺南クリニック	副係長	二 宮 稔 之
	介護事業部	看護部長	福 田 裕 子
	介護教育センター	次長	榊 原 学
	洛和会本部	部長（本部部門長）	井 上 博 志
	〃	副部長	井 關 博 喜
	〃	部長（本部部門長）	伊 藤 文 代
	洛和会 TQM 支援センター	センター長	児 島 純 司
	子ども未来事業部	主席課長（管理部長）	岡 田 裕 之
	Medical Design Create	次長	神 田 貴 庸
学会事務局	洛和会学術支援センター	参事	小 寺 勝 明

《参加者へのご案内》

- 開催日** 第35回 洛和会ヘルスケア学会 2025年10月19日（日）
- 会場** 洛和会京都看護学校・洛和会音羽リハビリテーション病院 らくまちテラス
- 第1会場（開会・閉会式・／特別講演／口演）
 - 第2会場（口演）
 - 第3会場（口演）
 - 第4会場（TQM 支援センター）
 - 第5会場（口演）
 - 第6会場（口演）
 - 第7会場（口演）
 - 第8会場（展示）
 - 第9会場（ワークショップ・シンポジウム）
- ※フロア図参照（P.6,7）

受付時間 8：30 開始 ※職員は IC カード（社員証）を持参の上、打刻してください。

開会時間 8：45 開会式（第1会場）

1. 参加者は受付を済ませ、各会場に入室してください。
2. 会場内、会場付近では発表の妨げとならないよう、私語は控えてください。
3. 発表に対する質問は演題ごとに行います（各演題の質疑応答時間は2分）。
4. 託児所（洛和若草保育園）は事前申請された方のみご利用いただけます。

《座長・演者へのお知らせ》

口演の座長・演者

1. 来場されたら、受付にて座長・演者受付をお願いします。
2. 発表予定グループの開始10分前までに発表会場に入り、「座長・演者」席にて待機してください。
3. 口演発表は1演題につき、発表5分、質疑応答2分の計7分です。
経過時間はベルでお知らせします。制限時間を超過しないようご注意ください。

展示の演者

1. 来場されたら、受付にて演者受付をお願いします。
2. 開始5分前に展示会場に入り、所定時間中は各展示の前で待機し、参加者からの質問に答えてください。

《会場までのアクセス》

洛和会京都看護学校

〒607-8113 京都府京都市山科区小山北溝町 2-2

- ▷京阪「四宮駅」から徒歩約15分
- ▷JR／京阪／地下鉄「山科駅」から徒歩約20分
- ▷京阪バス「国道音羽」から徒歩5分

洛和会音羽リハビリテーション病院 らくまちテラス

〒607-8113 京都市山科区小山北溝町 32-1

- ▷京阪「四宮駅」から徒歩約20分
- ▷JR／京阪／地下鉄「山科駅」から徒歩25分
- ▷京阪バス「国道音羽」から徒歩6分

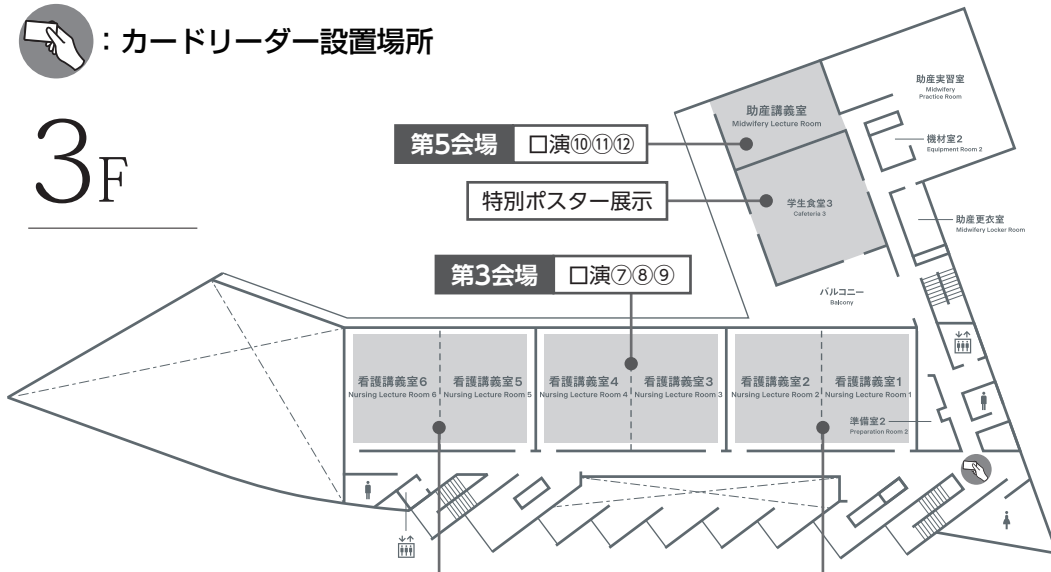


《洛和会京都看護学校 フloor図》

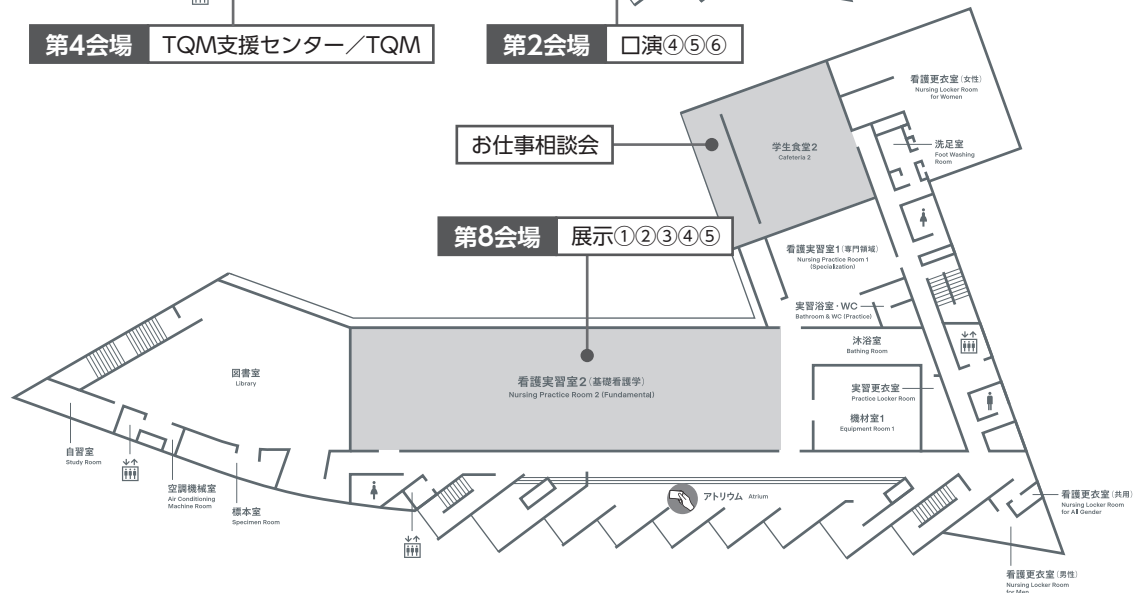


：カードリーダー設置場所

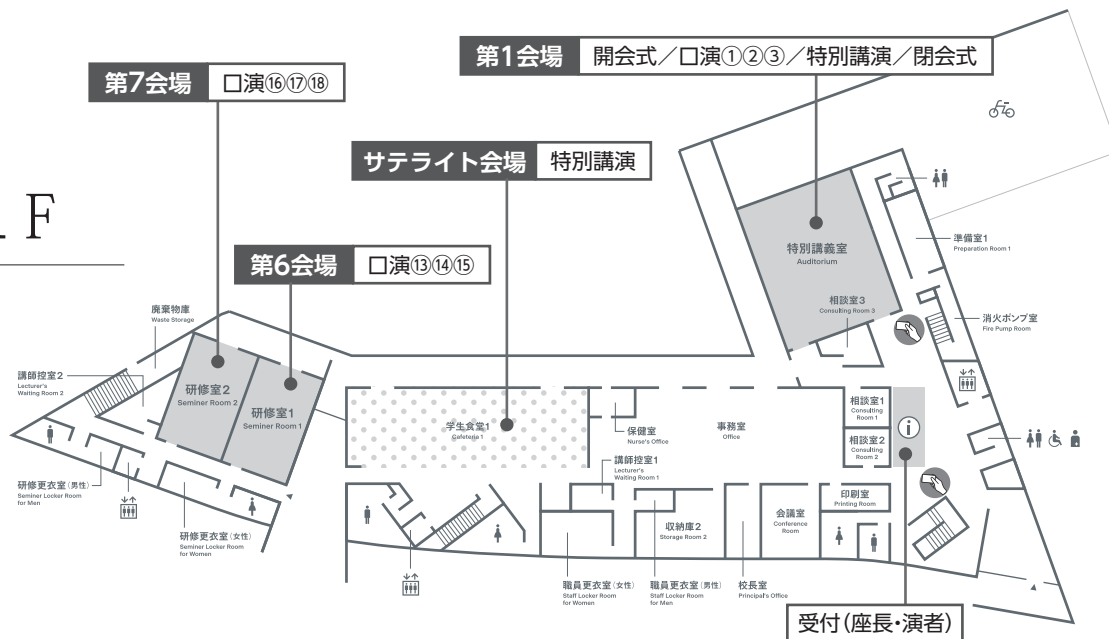
3F



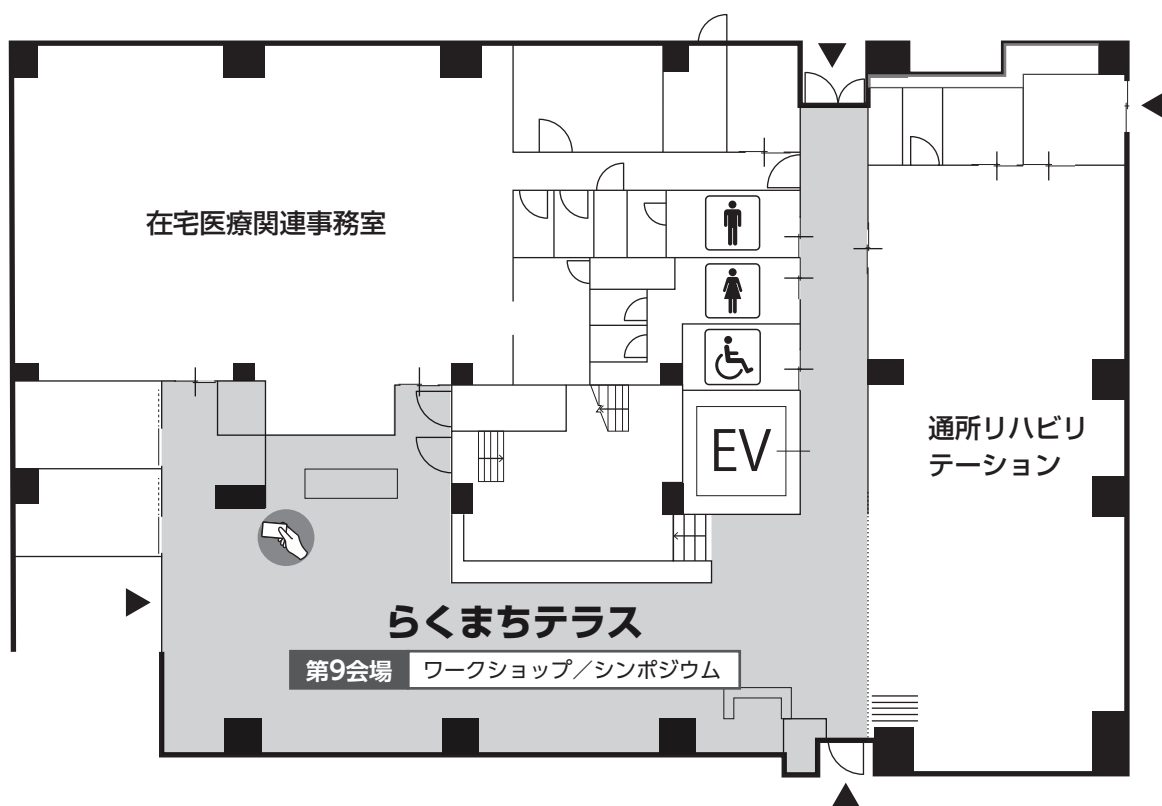
2F



1F



《洛和会音羽リハビリテーション病院 らくまちテラス フloor図》



受付手順

- 1

ICカード(社員証)をカードリーダーにかざしてください。
- 2

「ピッ!」と音が鳴れば、受付完了です。

※来場者数把握のため、ご協力の程よろしくをお願いします。

※入館時もしくは退館時にICカード打刻をしてください。(設置場所はフロア図をご参照ください)

第35回 洛和会ヘルスケア学会 プログラム

《開 場》 8:30 受付開始

《開 会》 8:45 開会のあいさつ
学会長のあいさつ

理事長 矢野 裕典
学会長 黒田 啓史

	第1会場	第2会場	第3会場	第4会場	第5会場	第6会場	第7会場	第8会場	第9会場	
時間	特別講義室	看護講義室1・2	看護講義室3・4	看護講義室5・6	助産講義室	研修室1	研修室2	看護実習室2	らくまちテラス	時間
	看護学校1F	看護学校3F	看護学校3F	看護学校3F	看護学校3F	看護学校1F	看護学校1F	看護学校2F		
8:45	【第1会場】開会式（8：45～8：55）※他会場で配信・放送有（第8会場を除く）									8:45
9:00	□演① 9：00 ┆ 9：49	□演④ 9：00 ┆ 9：49	□演⑦ 9：00 ┆ 9：49	T Q M 支 援 セ ン タ ー	□演⑩ 9：00 ┆ 9：49	□演⑬ 9：00 ┆ 9：49	□演⑯ 9：00 ┆ 9：49	展示① 9：00 ┆ 9：25	ワ ー ク シ ョ ッ プ	9:00
9:30								展示② 9：30 ┆ 9：55		9:30
10:00	□演② 9：54 ┆ 10：43	□演⑤ 9：54 ┆ 10：43	□演⑧ 9：54 ┆ 10：43		□演⑪ 9：54 ┆ 10：43	□演⑭ 9：54 ┆ 10：43	□演⑰ 9：54 ┆ 10：50	展示③ 10：00 ┆ 10：25	シン ポ ジ ウ ム	10:00
10:30								展示④ 10：30 ┆ 10：55		10:30
11:00	【第1会場】特別講演（11：00～12：30） ※他会場で配信・放送有（第8会場を除く）									11:00
11:30										11:30
12:00										12:00
12:30	□演③ 12：35 ┆ 13：17	□演⑥ 12：35 ┆ 13：17	□演⑨ 12：35 ┆ 13：17	T Q M	□演⑫ 12：35 ┆ 13：17	□演⑮ 12：35 ┆ 13：17	□演⑱ 12：35 ┆ 13：17	展示⑤ 12：35 ┆ 13：00		12:30
13:00										13:00
	【第1会場】閉会式（13：20～13：30） ※他会場で配信・放送有（第8・第9会場を除く）									

《閉 会》 13:20 次回学会長のあいさつ 洛和会音羽記念病院 病院長 廣川 隆一
閉会のあいさつ 洛和会音羽病院 看護部長 飯古美詠子

※展示発表は発表時間に各ポスター横で待機し参加者からの質問に答える形式です。

特別講演のご案内

洛和会京都看護学校 第1会場(特別講義室)

11:00~12:30

第一部

特別講演 病院経営はコメディカルの働きにかかっている

看護・リハビリ・栄養・薬剤・介護、そして事務——多職種連携こそが質と経営を両立させる原動力です。急性期後の患者さんを全人的ケアで回復し、AIとデータで業務効率化を目指し、得た利益は人材・設備へ再投資。地域ニーズを先取りした「地域包括期」のケアサービスの質を磨き、患者さんを早く“日常”へ帰す努力を徹底しましょう。

講師

武久 洋三 (平成医療福祉グループ 会長)

第二部

フリートークセッション

第一部の講演を受け、特別講師 武久洋三 氏と当会理事長 矢野裕典によるトークセッションを開催します。

登壇者

武久 洋三 (平成医療福祉グループ 会長)

矢野 裕典 (洛和会ヘルスケアシステム 理事長)

(プロフィール)

昭和41年3月岐阜県立医科大学卒業。大阪大学医学部付属病院インターン修了。徳島大学大学院医学研究科卒、徳島大学第三内科を経て、現在、社会福祉法人平成記念会理事長、平成リハビリテーション専門学校校長等を務める。病院（一般・医療療養・回復期リハ・地域包括ケア）・介護老人保健施設・介護老人福祉施設・ケアハウスなどを経営。



○団体役職など

一般社団法人日本慢性期医療協会名誉会長、
厚生労働省医療介護総合確保促進会議構成員、
独立行政法人国立長寿医療研究センター認知症医療介護推進会議委員、
地域包括ケア推進病棟協会顧問、日本介護支援専門員協会相談役、徳島県慢性期医療協会顧問、
徳島県老人保健施設協議会副会長、NPO法人徳島県介護支援専門員協会最高顧問

○専門医認定・資格など

日本内科学会認定内科医
日本リハビリテーション医学会認定臨床医臨床研修指導医
THP産業医、介護支援専門員、介護支援専門員指導員
ケアマネジメントリーダー、日本臨床検査医学会臨床検査管理医
日本糖尿病協会療養指導医、認知症サポート医

○著書

「高齢者が急性期病院に殺されないために知っておくこと」（幻冬舎メディアコンサルティング）
「令和時代の医療・介護を考える」（中央公論事業出版）
「どうするどうなる介護医療院」（日本医学出版）
「こうすれば日本の医療費を半減できる」（中央公論新社）
他多数

TQM 招聘発表のご案内

～外部医療機関における TQM 大会受賞事例～

◇場所 洛和会京都看護学校 第4会場(看護講義室5、6)
◇時間 9:00～9:22
◇座長 洛和会TQM支援センター センター長 児島 純司

講演 1

9時2分～
12分

京都府立医科大学附属病院 TQM 大会 2024 優秀賞受賞

所属 患者サポートセンター／がん相談支援センター
チーム名 新しい病院のリーダーズ患者サポートセンター
演題名 がっちりサポートでコストいただきます！
発表者 服部 美景

- ▶入院前から入退院支援の強化、地域の関係者との連携が求められているが、本院は基準を満たす人員配置ができないことや地域との連携が十分でないことから、「入退院支援加算2」を算定してきた。
病院経営の視点から「入退院支援加算1」を取得し、患者サービス向上のため、入院支援部門と退院支援部門が連携・協働し、入院から退院まで切れ目のない支援を行うための体制強化に取り組んだ。

講演 2

9時12分～
22分

独立行政法人地域医療機能推進機構京都鞍馬口医療センター 2024 年度 TQM 大会 最優秀賞受賞

所属 看護部
チーム名 褥瘡戦隊ジョクソーズ
演題名 踵の褥瘡を撲滅しよう
発表者 古瀬 美和子

- ▶踵の褥瘡は人の視線よりも低い位置で、背側にあるため医療者の観察が不十分になりやすい。また心臓から遠いため血流に乏しく難治となりやすい。当院でも深い褥瘡になってから褥瘡対策チームへの介入依頼がされるケースが多く、予防と早期発見・早期介入につなげるために啓蒙活動を行った。

特定看護師会、認定・専門看護師会の ポスター展示

洛和会京都看護学校 3階 学生食堂

特定看護師、認定看護師、専門看護師って普段何をしているの？
そんなあなたに届けたい、リソースナースの活動報告です。

らくまちテラス ワークショップ

らくまちテラス

9:00～10:00

その"肩こり"どう診るの？

～リハビリ専門職の頭の中、覗いてみませんか？～

肩こり—

それは、医療・介護の現場で働く多くの職員が抱える、身近でつらい悩みのひとつです。
長時間の同じ姿勢、日々の緊張や疲れが積み重なって、「いつも肩が重い…」「マッサージ
してもすぐ戻る…」と感じている方も多いのではないのでしょうか？

このワークショップでは、そんな肩こりの正体と対策について、リハビリ専門職（理学療法士）の視点からわかりやすくお伝えします。

肩こりに悩む方も、周りの方をサポートしたい方も、きっと役立つヒントが見つかるはず。
肩こりに対する“新しい視点”と“ちょっとしたコツ”を、ぜひ一緒に学んでみませんか？

講 師

三浦 雄一郎（丸太町リハビリテーションクリニック リハビリテーション部 次長）

理学療法士

辰田 明紀（洛和会丸太町病院 リハビリテーション部 主席係長）

森下 悠貴（洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 係長）

シンポジウム

らくまちテラス

10:00～11:00

「なんか変だな…」それ“集中治療後症候群（PICS）”かも!?

～多職種で考える命を救ってから退院までの支援～

患者さんに関わる中で、こんな場面に出会ったことはありませんか？

「ICUから退室した患者さんのリハビリが進まない、笑顔がない、食欲がない、せん妄かな？」

それはもしかすると、集中治療後症候群（PICS）の影響かもしれません。PICSとは、ICU在室中あるいはICU退室後に生じる身体的・認知的・精神的な障害の総称であり、患者さんの生活の質（QOL）に大きく関わる重要な課題です。

本企画では、医師・看護師・薬剤師・管理栄養士など多職種がそれぞれの専門性を活かした取り組みを紹介します。さらに、症例をもとにどのような支援ができるのかを多職種で協議します。

患者さんの「いのちを救った後」を支えるために、チーム医療の力をどう生かすか——ぜひご参加いただき、共に考える機会としていただければ幸いです。

座 長

細川 康二（洛和会音羽病院 診療部 ICU・CCU 部長）

加藤 尚（洛和会音羽病院 看護部 ICU・CCU 副主任）

登壇者

碓井 文隆（洛和会音羽病院 総合内科・連携医療科 副部長）

山本 綾（洛和会音羽病院 看護部 ICU・CCU 主任）

勝田 那帆（洛和会音羽病院 薬剤部 副係長）

二澤 歩美（洛和会音羽病院 栄養管理室）

松田 裕馬（洛和会音羽病院 リハビリテーション部 副係長）

坂本 恭矢（洛和会音羽病院 リハビリテーション部）



いのちを見つめ、人間を支える。
RKW 洛和会
ヘルスケアシステム

職員の家族・友人・知人対象！

お仕事相談会

ご家族やご友人に「就職・転職」で悩んでいる方がおられたら、
当会の採用担当者・キャリアコンサルタントに
お気軽にご相談ください！

参加無料・予約不要

参加資格

洛和会職員の家族・友人・知人

相談時間

一人当たり20分程度
※先着順となります。

日 時

第35回洛和会ヘルスケア学会
10月19日（日） 10時～13時30分

場 所

洛和会京都看護学校 2F
学生食堂2

【問い合わせ先】

洛和会本部 採用教育課

〒600-8461

京都市下京区仏光寺通油小路東入ル木賊山町171

洛和木賊山ビル

TEL 0120-81-3140

お気軽にお越しください♪



らくの助
洛和会ヘルスケアシステム
公式キャラクター

資料はうまく作れましたか？

いのちを繋ぐ、人間を支える。
RKW 洛和会
ヘルスケアシステム

洛和会学術支援センターの



研究支援を利用しましょう

相談

計画する段階での
相談が理想的



立案

倫理審査

重要なポイントです
しっかりとアドバイスします



データ取得

解析

論文指導

完成まで
サポート



まずはご相談ください

お問い合わせ 洛和会学術支援センター 研究支援部 TEL 075 (593) 0417

治験は、未来への贈り物

詳しい説明と信頼できるサポート体制で、治験は進められます。
参加する方の健康状態には、いつも細心の注意が払われます。



1
はじめの
診療

2
治験の
説明

3
同意書に
署名

4
検査

5
治験
開始

途中でやめる自由があります



6
診察・
検査

治験には必ずしも参加できる
訳ではありません

お問い合わせ 洛和会学術支援センター 新薬開発支援部 TEL 075 (593) 4117

第1会場

座長 洛和会音羽病院 病院長室

病院長 黒田啓史

口演① 9:00～

- 1 ホタルイカ生食後に腸閉塞をきたした一例
洛和会音羽病院 総合内科／連携医療科 太田隆子
- 2 骨盤腔までの筋層下膿瘍を伴う左有癭性膿胸の一例
洛和会音羽病院 呼吸器外科 堀本かな
- 3 経膈分娩2週間後に骨盤内膿瘍を発症したUreaplasma parvumの一例
洛和会音羽病院 臨床研修科 小國綜一郎
- 4 当院における急性期脳梗塞に対する機械的血栓回収療法の現状
洛和会音羽病院 脳神経外科 永田 学
- 5 初回MRIのみで診断遅延し、CT Angio追加とMRI再検で確定診断に至った脳底動脈塞栓症の一例
洛和会丸太町病院 臨床研修科 西尾 悠
- 6 大伏在静脈グラフト不全によるNSTEMIに対してNIRS-IVUSを用いて血行再建した一例
洛和会音羽病院 心臓内科 北山貴章
- 7 心筋梗塞を契機に本態性血小板血症を診断した一例
洛和会音羽病院 心臓内科 山中宏高

座長 洛和会音羽病院 3A病棟

副師長 屋良朋子

口演② 9:54～

- 8 法人全体への感染管理教育の現状と課題～感染対策に強い組織づくりを目指して～
洛和会丸太町病院 感染防止対策室 小野寺隆記
- 9 看護師の手指衛生行動の実態調査～手指衛生のタイミングから見る感染対策意識～
洛和会丸太町病院 3病棟 岡田柚香
- 10 夜間勤務時間におけるインシデント予防のための看護師の意識・行動に関する質的研究
—新人レベル看護師と達人レベル看護師との比較から—
洛和会丸太町病院 2病棟 森野 葵
- 11 若手看護師を対象とした身体拘束マネジメントチェックシートの活用評価
—教育的有用性と今後の支援への示唆—
洛和会丸太町病院 救急・HCU 伏田敬祐
- 12 クリティカルケア領域におけるShared Decision Making(SDM)
～概念分析から患者の意向を尊重した看護師の役割を考える～
洛和会音羽病院 看護部長室 松本修一
- 13 心不全症例の認知機能の実態 ～京都心不全ネットワークレジストリー研究の解析から
洛和会音羽病院 外来 福田 紘
- 14 母性看護専門看護師が行う特定妊婦への看護支援
洛和会音羽病院 2D病棟 佐藤麻里

口演③ 12:35～

- 15 バスキュラーアクセス作成後、術後出血持続症例に対してステロイドパルス法後止血した1症例
洛和会音羽記念病院 病院長室/腎臓内科・透析センター/洛和会京都腎臓病センター 細川典久
- 16 両下肢疼痛と紫斑を契機に診断された成人壊血病の一例
洛和会丸太町病院 救急・総合診療科 大橋史矢
- 17 免疫チェックポイント阻害薬使用後、複数の内分泌障害 (irAE) を併発した一事例
—診療看護師 (NP) との協働を通して— 洛和会音羽病院 内分泌・糖尿病内科 廣瀬久美
- 18 胃瘻造設を行い自宅退院が可能となった一例
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション科 大石 瞳
- 19 外反型変形性膝関節症に対する外側アプローチを用いたTKAの治療成績
洛和会丸太町病院 臨床研修科 市丸智規
- 20 丁寧な問診と身体所見が高位診断に有用であったL4神経根症の1例
洛和会丸太町病院 臨床研修科 津村由梨香

第2会場

口演④ 9:00～

- 21 セル看護提供方式® 導入後の看護ケアの現状と課題
洛和会音羽病院 3C病棟 木下沙織
- 22 セル看護提供方式を導入後ナースコールの時間帯による回数と原因の実態調査
洛和会音羽病院 4A病棟 西田綾音
- 23 救急看護師が行っている褥瘡ケアに関する現状調査
洛和会音羽病院 救命救急センター・京都ER 吉岡優佑
- 24 手術室入室後からのプレウォーミングの有効性について
洛和会音羽病院 看護部 手術センター 倉谷明優
- 25 ICU入室患者におけるせん妄スクリーニング陽性割合の調査
～外科患者を対象にしたアセスメントツールの比較～ 洛和会音羽病院 看護部 ICU・CCU 石橋紗理菜
- 26 回復期リハビリテーション病棟における、夜間の移動・移乗のADL評価を看護師が判断するための基準
～フローチャート作成に向けて～ 洛和会音羽リハビリテーション病院 4A病棟 田中梨伽
- 27 救急病棟に緊急入院される高齢者の口腔状態を評価してみた 洛和会音羽病院 2B病棟 中濱麻里

口演⑤ 9:54～

- 28 みなし訪問看護の成果～早期介入し在宅へつなぐことの意義についての一考察～
洛和会音羽病院 看護部 医療介護サービスセンター 入退院支援センター 渡邊道子
- 29 看護小規模多機能サービスにおける理学療法士・言語聴覚士の配置による連携の必要性と課題
洛和会訪問看護ステーション壬生 米田智尋
- 30 がん終末期療養者の訪問リハビリ導入における訪問看護師と訪問リハビリ専門職との
連携・協働に関する質的研究
洛和会訪問看護ステーション大津サテライト GRe-NS 唐崎 坂口里香
- 31 退院支援へ繋げるための看護実践の現状とジレンマ
洛和会音羽病院 3A病棟 木津 遥
- 32 選ばれる訪問看護ステーションの要因
洛和会訪問看護ステーション宇治 長谷川裕恵
- 33 看取りプロセスにおける家族支援の実態 ～余命「2年」と「2ヶ月」の誤解～
洛和ヴィラアエル 別府美穂
- 34 「今が人生で一番幸せな時」～訪問看護ステーションとの合同カンファレンスで見えてきたこと～
洛和会医療介護サービスセンター四条鉾町店 橋本知香

座長 洛和会音羽病院 救命救急センター・京都ER

主任 大泉恵未

口演⑥ 12:35～

- 35 遺族調査結果を使用した緩和ケアのアウトカム評価 ～看護師のアンケート調査結果を踏まえて～
洛和会音羽病院 4C病棟 高崎桃恵
- 36 認知症研修によるスピーチロック(言葉による拘束)の使用状況の変化と課題
洛和会音羽病院 2C病棟 栗林愛美
- 37 地域包括ケア病棟における退院支援の現状 ～患者のQOL向上に繋がる家族カンファレンスに向けて～
洛和会音羽リハビリテーション病院 2A病棟 岸本七海
- 38 外来化学療法室で治療を受ける患者の満足度調査
洛和会丸太町病院 外来 中野 遥
- 39 入院化学療法を受ける患者の不安とニーズ
洛和会音羽病院 1D病棟 辻川絵理
- 40 外来の業務改善を目指すためのクラークとの協働
洛和会音羽病院 外来 上山雅子

第3会場

座長 洛和会音羽病院 リハビリテーション部

主席課長 吉川晋矢

口演⑦ 9:00～

- 41 頸椎症性脊髄症患者に対して運動連鎖に着目して介入した理学療法経験
～筒井先生からの学び～ 洛和会丸太町病院 リハビリテーション部 廣津 昂
- 42 リハビリテーション初期介入における転倒・転落リスク評価の標準化に向けた取り組み
洛和会丸太町病院 リハビリテーション部 池田 凱
- 43 ResMoを用いた労作時の呼吸運動モニタリングの試み 洛和会丸太町病院 リハビリテーション部 阿部駿也
- 44 心不全再増悪後に外来心臓リハビリテーション介入を行い良好な経過をたどった症例
―アドヒアランスに着目して― 丸太町リハビリテーションクリニック リハビリテーション部 岡安陽菜
- 45 床からの立ち上がり動作難渋症例に対する環境調整の効果検証
洛和会音羽リハビリテーション病院 医療介護サービスセンター 訪問リハビリテーション 牛尾 龍
- 46 回復期リハビリテーション病棟における計画的な退院支援の取り組み ～リハスタッフの視点から～
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 石束紗野香
- 47 当院における外来心臓リハビリテーション状況および今後の取り組み
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 白井健雄

座長 洛和会丸太町病院 リハビリテーション部

課長 櫻井玲奈

口演⑧ 9:54～

- 48 回復期病棟リハビリテーション部でのカスタマージャーニーの取り組み
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 河内大晟
- 49 「こんなこともできるね。」を引き出した作業療法
～慢性期の頸髄損傷患者に対する母指対立スプリントの活用事例～
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 由良純子
- 50 杖の長さの違いによる歩行動作の変化 ―追尾型歩行計測システム(CORE-Ler)を用いた計測―
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 木下晃暢
- 51 長期的リハビリテーションによる失語症者の回復過程について
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 笠井智晴
- 52 通所リハビリテーション・訪問リハビリテーション併用利用を通じた社会参加への有効性と
その効果について 洛和会音羽リハビリテーション病院 医療介護サービスセンター 通所リハビリテーション 森岡史江
- 53 療法士による病棟ラウンド活動の実施 ～褥瘡ゼロを目指して～
洛和会音羽記念病院 リハビリテーション部 堀 貴弘

54 追尾型歩行計測装置CORE-Lerを用いた歩行動作の見える化と今後の運用方法の提案

洛和会音羽病院 リハビリテーション部 福田拓真

座長 洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

課長 廣松直樹

口演⑨ 12:35～

55 当院の人工股関節全置換術後における現状と今後の課題

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 福山 徹

56 TKA定量評価の現状と今後の展望

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 森下悠貴

57 地域包括ケア病棟における間接介入の導入の効果検証 ～脊椎圧迫骨折患者の後ろ向き比較研究～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部 小関康春

58 地域に開かれた小児STリハビリテーションを目指して

～開設5年間の取り組みと今後の多職種連携による発展～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部 前川大史

59 認知症対応型共同生活介護での「リハケアスタッフ育成」の取り組みと成果

介護事業部 品質管理部 小森健太郎

60 現場で信頼される第一歩。～私も同じ1年生～

洛和ヘルパーステーション北花山 村田幸穂

第4会場

座長 ファシリティケア

ウエルネット

TQM支援センター

主席係長 石井達也

次長 福井 良

主席係長 田中久美子

TQM 9:00～

1 洛和会丸太町病院におけるLINEを活用した医療安全活動

洛和会丸太町病院 TQM委員会 起塚美沙

2 患者・利用者への有効な情報発信

丸太町リハビリテーションクリニック TQM委員会 青木哲幹

3 入院時の待ち時間短縮についての取り組み

洛和会音羽記念病院 TQM委員会 小嶋彩葉

4 転倒転落ゼロを目指して ～院内多職種で力を合わせ不可能を可能に!!～

洛和会音羽リハビリテーション病院 TQM委員会 島川隼典

5 管理課職員としての必須知識の標準化

5病院管理課 TQM委員会 林 峻哉

6 入院につながる紹介件数の獲得に向けた地域連携課の取り組み

5病院地域連携課 TQM委員会 中前則江

- 7 不適切ケアの撲滅
介護事業部 TQM委員会 銅子大介
- 8 介護スタッフの観察力と報告力の向上と緊急コール適正化を目指した取り組み
介護事業部 訪問看護課 TQM委員会 清水真由美
- 9 資材センターにおけるセグメント目標進捗報告会議見直しの効果
資材センター TQM委員会 山本航汰
- 10 Microsoft office365のアプリFormsによる問い合わせ受付による電話の問い合わせ削減の取り組み
本部医療情報部 TQM委員会 寺島達朗
- 11 ガソリン消費を削減する
トランスポート TQM委員会 樋口吾一
- 12 定例研修会の見直しによるファシリティにおける専門的な知識のさらなる向上
ファシリティケア TQM委員会 石井達也
- 13 請求書業務の時間削減
ワイズファイナンス TQM委員会 西田虎太郎
- 14 看護学科教員 業務内容の統一化
洛和会京都看護学校 TQM委員会 阪口和哉
- 15 ヒヤリハット報告の習慣化による、保育現場の安全な環境確保への取り組み
子ども未来事業部 TQM委員会 大槻香奈恵
- 16 紙媒体業務の見直しによるペーパーレス化
ウエルネット TQM委員会 長谷明夏
- 17 CRC業務の標準化と可視化
新薬開発支援部 TQM委員会 本田陽子
- 18 健康診断における顧客満足度向上を目指した取り組みについて
洛和会京都健診センター TQM委員会 原田珠未

第5会場

座長 洛和会音羽リハビリテーション病院 薬剤部

課長 多胡和樹

口演⑩ 9:00～

- 61 MRCPで用いる経口造影剤の代替品の有用性の検討
洛和会音羽病院 放射線部 河守海陸
- 62 1.5T装置における冠動脈MRAの撮像条件についての基礎検討
洛和会音羽病院 放射線部 篠岡 雅
- 63 乳房撮影におけるトモシンセシスを用いた撮影モードの比較検討
洛和会音羽病院 放射線部 小崎美乃里
- 64 嚥下造影検査における頸部ハレーション防止策の検討
洛和会音羽リハビリテーション病院 放射線部 岡本織人

- 65 新生血管型加齢黄斑変性に対するファリシマブ硝子体注射の治療成績
 洛和会音羽病院 視能訓練室 野田雄太
- 66 外部との連携 ～洛和会における日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの役割～
 丸太町リハビリテーションクリニック フィットネス部 西山伸吾
- 67 生成AIによる業務文書作成におけるプロンプト設計の最適化
 洛和会インフォマティクスセンター 石岡佳記

座長 洛和会丸太町病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室 主席係長 中野匡徳

口演⑪ 9:54～

- 68 退院支援における他職種の意識変容を目的とした勉強会の開催
 洛和会丸太町病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室 宮下怜子
- 69 外来適正化に向けた逆紹介促進の取り組みとその評価
 洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 地域連携課 倉田明人
- 70 病院郵送業務における効率化の取り組み ～自動織り機導入と電子カルテ活用による改善～
 洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 地域連携課 木村あゆみ
- 71 京都市内で唯一!「オーバーナイト透析」営業の取り組みについて
 洛和会音羽記念病院 医療介護サービスセンター 地域連携課 岸本奈津美
- 72 当院におけるAge-Friendly Health Systems (AFHS) 認証に至る活動内容と今後の展望
 洛和会音羽リハビリテーション病院 経営管理部 大藪誠士
- 73 マイナ保険証利用率UPのための取り組み
 洛和会丸太町病院 管理課 宮田季美子
- 74 メディカル・フロント・コンシェルジュとしての役割 ～サービスの質の向上を目指して～
 洛和会音羽病院 管理課 寺田恵伊子

座長 Well-being推進室 副部長 菊元力也

口演⑫ 12:35～

- 75 車いす・車いすクッションの利用による利便性と身体的効果への検証
 ウエルネット 本社 相見忠弘
- 76 臨床研究CRC部分的支援開始のその後 ～開始から2年半を経過して～ (CRC:治験コーディネーター)
 洛和会学術支援センター 新薬開発支援部 榛澤直美
- 77 洛和ヴィラ大山崎での音楽療法の取り組みについて ～多職種協働から入居者のQOLの向上をめざす～
 洛和会京都音楽療法研究センター 堀内美里
- 78 45分間ルールの導入の検討 ～職員の喫煙者ゼロを目指して～
 Well-being推進室 大久保圭
- 79 看護師国家試験対策における全員合格につながった要因
 洛和会京都看護学校 教育部 古川翔也

80 産後ケア実習における助産学生の気づきと助産師の支援についての理解

—実習記録からみる教育的意義—

洛和会京都看護学校 教育部

上村真紀

第6会場

座長 洛和会音羽病院 臨床検査部

主席係長 荻野真由

口演⑬ 9:00～

81 一包化薬剤自動監査システム導入による影響について

洛和会丸太町病院 薬剤部

白石大理

82 一包化監査システム PROOFIT 1D II導入による調剤業務の変化

洛和会音羽記念病院 薬剤部

上井桃花

83 レミエール症候群の診断に頸静脈超音波検査が有用であった1症例

洛和会丸太町病院 臨床検査部

佐伯 悠

84 口腔細胞診鑑別困難症例の考察 ～口腔内病変の多様性の理解を目指して～

洛和会音羽病院 臨床検査部

吉岡沙織

85 超音波検査において経験したシャント合併症の一症例 ～スチール症候群～

洛和会音羽記念病院 臨床検査部

中上麻里

86 NST活動における多職種での関わりについて

洛和会丸太町病院 栄養管理室

柏木瑠莉

87 回復期病棟におけるGLIM基準を用いた栄養状態の推移と疾患別傾向

洛和会音羽リハビリテーション病院 栄養管理室

金子万祐

座長 洛和会音羽病院 放射線部

課長 大城怜央

口演⑭ 9:54～

88 思考場療法がパニック発作に伴う予期不安の軽減に有効であった1症例

洛和会音羽病院 臨床心理室

中島陽大

89 PTSD治療における安心感構築の有効性の検討

洛和会音羽病院 臨床心理室

吉田幸平

90 VinelandIIを用いて適応行動機能の発達についての評価し適切な介入につながった2症例

洛和会音羽病院 臨床心理室

外川由佳

91 MRI検査における手指屈筋腱描出への試み

洛和会丸太町病院 放射線部

上田千智

92 消化器手術支援画像を作成した症例の報告

洛和会丸太町病院 放射線部

土橋健史

93 頭頸部CTA撮影における基礎的検討

洛和会音羽病院 放射線部

中島史珠香

第5会場

第6会場

94 1.5T MRI装置を用いた静音MRIにおける臨床応用の検討

洛和会音羽病院 放射線部 尾崎胡桃

座長 洛和会音羽記念病院 CE部

主席課長 明石有加

口演⑮ 12:35～

95 異なるACT測定機器間における測定値の乖離とその換算式の臨床的有用性

洛和会丸太町病院 CE部 谷口 葵

96 OneNoteを活用した自部署内情報共有の試み ―アプリ1つで業務効率アップ―

洛和会丸太町病院 CE部 増永日菜乃

97 パルスオキシメーターの特性について

洛和会音羽病院 CE部 新田康太郎

98 ソフト凝固搭載電気メスの適正運用の検討

洛和会音羽病院 CE部 石田龍之介

99 腸閉塞に対する高気圧酸素療法の治療効果について

洛和会音羽病院 CE部 中尾 圭悟

100 積層型ダイアライザ(AN69膜)における栄養状態改善効果の検討

洛和会音羽記念病院 CE部 中之庄桂花

第7会場

座長 洛和デイセンター音羽のさと

係長 山本美佐

口演⑯ 9:00～

101 医療を拒否する方の支援について

京都市朱雀地域包括支援センター 水川達也

102 利用者・家族・多職種が“本当につながる”サービス担当者会議を目指して
～参加の「質」と「継続性」を重視した実践的なアプローチ～

洛和ヴィラウラノス 南島恵美

103 入居者主体のクラブ活動

洛和ホームライフ山科東野 高見幸太

104 心をつかむ“おもてなし7箇条” ～体験から新規獲得100%への道～

洛和デイセンター右京山ノ内 家長純子

105 「私だって外に出たい」その一言が導いた“理解”への第一歩

洛和グループホーム八幡橋本 小山由美香

106 ICTを活用した介護支援

洛和グループホーム宇治 塩見早人

107 ヘルパー15年生 ～歩んできた道にはいつも支えがあった～

洛和ヘルパーステーション桃山 上田敦子

口演⑰ 9:54～

- 108 利用者が心身共に健やかな生活を送れる為に ～防げる事故をなくし転倒件数の減少を目指す～
洛和ヴィラアエル 榎本篤志
- 109 生活場面を意識した環境整備による高齢者の自立支援と機能訓練
～施設環境を活かした機能訓練の実践～
洛和デイセンター宇治 北谷 昂
- 110 新人教育における効果的な事例検討法とは
居宅介護支援事業所宇治 嶋澤香織
- 111 「行きたい」が「生きたい」に ～思い出の地へ、チームで叶えた看取り期の外出支援～
洛和ヴィラ大山崎 山本 蓮
- 112 退院後のQOLを上げるために出来る医療連携
～グループホームで特別指示書にて訪問看護師によるリハビリ導入で見えた成果と課題～
洛和グループホーム花園 上田隆世
- 113 110年の人生に寄り添う ～ショートステイでのチームによる最期の支援～
洛和ヴィラ文京春日 菊池沙季
- 114 介護事業部 Rakuwa Standard for Care 10か条を活用した取り組みと利用者様への還元
文京大塚みどりの郷 八尋睦乃
- 115 特定施設におけるアルツハイマー型認知症利用者の生活について
洛和ホームライフ御所北 小林裕三郎

座長 洛和小規模多機能サービス伏見竹田

係長 宇野友浩

口演⑱ 12:35～

- 116 びわこ成蹊スポーツ大学との連携を通じての利用者の意欲向上
洛和グループホーム山科西野 阪本幸子
- 117 利用者様に寄り添ったコミュニケーションと対応
洛和ヴィラ南麻布 板橋輝昌
- 118 部屋とトイレと私 ～長期化している利用者にもアプローチ～
洛和ヴィラサラサ 中川奈央子
- 119 個別ケア外出 ～本人と家族と、ときどき職員～
洛和グループホーム二条城北 谷 靖子
- 120 地域の見守り力レベルアップ ～高齢者見守り活動マニュアル作成と運用の取り組み～
京都市音羽地域包括支援センター 中野隆行
- 121 地域交流の活性化 ～選ばれる事業所へ～
洛和グループホーム守山大門 伊達尚克

第8会場

発表者は発表時間に自身のポスターの横で待機し、参加者からの質問に答えてください。

展示① 9:00～

- 1 手術センター術後疼痛チームを立ち上げて
—PCA装着患者に対する手術室看護師の介入についての実践報告—
洛和会丸太町病院 看護部 手術センター 中西優香
- 2 急性期病棟におけるセル看護提供方式導入による看護師の身体拘束に対する意識の変化に
関する研究 ～看護師へのインタビュー調査から～
洛和会丸太町病院 4病棟 関紗矢香
- 3 外来や検査室等で働く多職種の転倒リスクに対する認識
洛和会音羽病院 アイセンター 松木真紀
- 4 4C病棟で使用中の手作りカレンダーの効果について
洛和会音羽病院 4C病棟 文字綾花
- 5 当院における『職員の抗体価およびワクチン接種歴管理』の現状と課題
—抗体管理を自分ごとにするために—
洛和会音羽病院 感染防止対策室 柿谷めぐみ
- 6 入退院を繰り返す心不全患者の療養生活支援 ～心不全看護外来を中心に地域連携を実施した一例～
洛和会音羽病院 3D病棟 勝木哲郎
- 7 静脈鎮痛薬の第一選択が術後回復に及ぼす影響
洛和会音羽病院 2A病棟 川路歩奈
- 8 歯の日に実施するNST口腔ケア活動が患者ケアと看護師の意識に与えた影響
洛和会音羽病院 5A病棟 湯浅 葵
- 9 5A病棟における看護補助者のADL表の活用
洛和会音羽病院 5A病棟 島田朋子
- 10 コロナ禍の面会制限によって退院支援の経験が少ない看護師へのアプローチ
～退院支援に関するパンフレットの効果～
洛和会音羽病院 SCU 大原菜の香
- 11 A病棟でのACPの充実を目指して～現状と課題～
洛和会音羽病院 4D病棟 宮井瑞葉
- 12 外国籍職員への指導教材の作成と導入～母国語に変換した効果～
洛和会音羽記念病院 1病棟 棕木天音
- 13 看護を語るブロックカンファレンスの定着 ～ファシリテーター教育の取り組み～
洛和会音羽記念病院 2病棟 木村明日香
- 14 自己摂取困難な患者の「食べたい」思いへの関わり ～KTバランスチャートを用いて～
洛和会音羽記念病院 3病棟 三津川真衣
- 15 回復期リハビリテーション病棟における多職種での退院支援カンファレンスの効果
洛和会音羽リハビリテーション病院 3A病棟 寺川 香

- 16 認知症治療薬を始めた患者とその家族への支援 洛和会音羽リハビリテーション病院 外来 古久保侑実子
- 17 クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)進行期の患者家族への看護ケア
～キューブラー＝ロスの死の受容過程理論を用いた考察～ 洛和会音羽リハビリテーション病院 2B病棟 矢掛梨沙
- 18 外来通院を維持するための他職種連携 ～地域連携における透析室看護師の役割～
洛和会東寺南クリニック 透析室 高松 萌

展示② 9:30～

- 19 透析出血感知センサー導入の効果 ～事故報告書からの検討～
洛和会音羽記念病院 透析センター 井上佑亮
- 20 褥瘡が改善しない在宅療養を行っている脊髓損傷患者の看護についての一考察
洛和会訪問看護ステーション四条鉾町 大野 文
- 21 訪問看護ステーションにおけるスタッフのアドバンス・ケア・プランニングに対する実態調査
洛和会訪問看護ステーション亀岡千代川 北村真持
- 22 補聴器外来における認知症合併症例へのアプローチ
～言語聴覚士による個別対応が装用成功に繋がった症例～ 洛和会音羽病院 リハビリテーション部 前川大史
- 23 退院後も続けられる運動習慣～がん患者のためのリハビリテーション支援～
洛和会音羽病院 リハビリテーション部 宮川裕太郎
- 24 外来心臓リハビリテーション終了後3ヶ月および6ヶ月における運動習慣の定着と
再導入に関連する因子の比較検討 洛和会音羽病院 リハビリテーション部 西村亮汰
- 25 Virtual Reality機器を使用したリハビリテーションの取り組み
洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部 石川 泉
- 26 不安のない円滑な在宅生活を目指し関わった症例 ～退院前カンファレンスの重要性を通して～
洛和会訪問看護ステーション右京山ノ内 山本龍之介
- 27 洛和会音羽病院における糖尿病教育入院患者への薬剤師の取り組み
洛和会音羽病院 薬剤部 又木智世
- 28 終末期にかかる外来がん患者支援における職員の意識と行動の実態調査
洛和会音羽病院 薬剤部 戸田理沙子
- 29 セラピスト向け薬剤勉強会実施後のアンケート調査
洛和会音羽リハビリテーション病院 薬剤部 松尾茉祐
- 30 リハビリテーション・栄養・口腔連携体制加算の取り組みについて
～洛和会音羽病院3C病棟での義歯の使用状況における食事内容と栄養状態の関連～
洛和会音羽病院 栄養管理室 石崎和真
- 31 Teamsを用いた効率的なヴィラアエル入所透析患者の電話送迎
洛和会音羽記念病院 CE部 近藤宏紀

- 32 意識改善による医療廃棄物減少調査 洛和会音羽記念病院 CE部 吉岡龍志
- 33 移動型外科用X線撮影装置更新前後での拡大率の比較 洛和会音羽記念病院 放射線部 中川 優
- 34 マンモグラフィにおける放射線技師による読影補助と精度向上についての取り組み
洛和会京都健診センター 経営管理部 業務推進課 東寺南健診センター 松本紋佳
- 35 WISC-Vに見られるASDとADHDの知能の特徴 洛和会音羽病院 臨床心理室 倉本咲良
- 36 歯科衛生士による手術室業務への参画とその効果 ～多職種連携による手術枠拡大への取り組み～
洛和会音羽病院 京都口腔健康センター 久保田実侑

展示③ 10:00～

- 37 看護師による新人救命士教育と今後の展望について 洛和会音羽病院 救命救急室 武唾伽歩
- 38 Office365を活用した医師へのDPC調査項目依頼 洛和会丸太町病院 医療情報・がん登録統計課 大賀美奈
- 39 連携強化診療情報提供料算定率アップへの取り組み 洛和会丸太町病院 ドクターエイド課 本多由香
- 40 “選ばれる医療機関”へ 地域連携課で取り組むCRM活用術
洛和会丸太町病院 医療介護サービスセンター 地域連携課 宮川大夢
- 41 適正な診療報酬確保に向けた取り組み～多職種の連携を強化した結果～
洛和会丸太町病院 管理課 半田 望
- 42 連携強化診療情報提供料算定アップに向けたドクターエイドの取り組み
洛和会音羽病院 医局支援部 ドクターエイド課 岡田里穂
- 43 クリニカルパス申請運用の見直しによる管理体制の強化
洛和会音羽病院 医療情報・がん登録統計課 大宮 梓
- 44 超急性期病院への移行における退院支援の行動変容について
洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室 上村美沙乃
- 45 全職員iphone導入による情報伝達の迅速化と業務効率の向上
洛和会音羽記念病院 経営管理部 庶務課 田中葉生
- 46 退院後の生活実態から考える院内連携支援
洛和会音羽リハビリテーション病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室 飯島大成
- 47 デジタルサイネージ導入がもたらす効果について 洛和会音羽リハビリテーション病院 管理課 西田亜夢
- 48 セット項目活用による業務効率化 洛和会音羽記念病院 ドクターエイド課 長山凧紗

- 49 復点に繋がる再審査請求～減点内容の分析からわたしたちが得たこと～
洛和会音羽記念病院 管理課 野村朋香
- 50 Microsoft Formsを活用した設備点検システム導入とその成果
ファシリテイクア 廣瀬拓海
- 51 精神行動障害のある高齢者の在宅支援と情報共有
居宅介護支援事業所洛和ヴィラ南麻布 荻島裕美
- 52 精神疾患を持つ利用者との関わりについて
居宅介護支援事業所北花山 久保 茜
- 53 文京区 車いすステーション事業
高齢者あんしん相談センター大塚 吉原喜久雄
- 54 ホームライフ四ノ宮の働き方改革～1.25夜勤～
洛和ホームライフ四ノ宮 高尾和樹
- 展示④ 10:30～**
- 55 看護小規模多機能型居宅介護の強みを生かした一例
～看取りケアにおける多職種連携と家族支援について～
洛和看護小規模多機能サービス壬生 島田真晴
- 56 認知症ケアにおける家族様への負担軽減をどう向き合うか
洛和ヘルパーステーション音羽 太良京子
- 57 「やってみたい」という気持ちに寄り添い、「かたち」にしていこう
障がい者就労支援事業所 らくわ 田中久臣
- 58 開設から現在までの、看取り対応の職員の意識調査
洛和ホームライフ室町六角 八木海音
- 59 「ピークタイムの多職種連携」
洛和デイセンター音羽のさと 外山佳子
- 60 家族の葛藤に対してのケアマネジャーとしての支援とは
洛和ヴィラ桃山居宅介護支援事業所 石岡輝子
- 61 発見できること！ ～元気になる訪問介護へ～
洛和ヘルパーステーション醍醐駅前 鈴木真哉
- 62 自立支援の取り組み
洛和デイセンターウラノス 藤田恵美
- 63 退院後の生活改善を見据えた入院時の連携 ～医療機関との連携にて、生活を支える～
洛和会医療介護サービスセンター丸太町店 柏原真理子
- 64 人に寄り添うケアの形 ～迷わずに、安心して生きる場所へ～
洛和ホームライフみささぎ 伊藤れもん
- 65 ちょっと用事があるので帰らせていただきます ～在宅でその方らしく生きるための支援～
洛和デイセンター南麻布 坪川歩野加
- 66 グループホームで安心できる夫婦生活
洛和グループホーム瀬田 西村恒大

- 67 施設生活から在宅生活へ ～多職種連携で在宅復帰を支援する～ 洛和ヴィライリ奥斯 山岡隆太
- 68 通所リハビリテーションと訪問リハビリテーションの併用により, ADLの改善・活動範囲が拡大し、介護度の改善に至った症例 洛和デイセンターイリオス 渋谷建太
- 69 高齢者と栄養 ～私たちの学びとケアマネジメント～ 洛和会医療介護サービスセンター西京桂店 赤島美佐恵
- 70 法人内の連携方法における業務効率化の可能性について
～居宅介護支援事業所における電話割合～ 居宅介護支援事業所山科 楠本 綾
- 71 「グループホームにおける日常的な医療連携について」 洛和グループホーム太秦 松本日菜子

展示⑤ 12:35～

- 72 経口摂取終了からご逝去までの関わりを振り返って 洛和グループホーム西院 森祐一郎
- 73 週休3日制度を導入してみて ～充実したワークライフを目指して～ 洛和ヴィラ桃山Ⅲ番館 木村吉博
- 74 「利用者の発語を増やし笑顔を引き出す取り組みについて」 洛和グループホーム壬生 馬場洋一
- 75 未経験からの理想と現実のギャップ 洛和グループホーム山科小山 日下裕之
- 76 嚥下機能が低下していく人への食支援の取り組み ～最後まで食べる事の楽しみを支える～ 洛和ヴィラよつば 千田千鶴
- 77 大山崎わくわくクッキング 洛和グループホーム大山崎 吉川順子
- 78 認知症高齢者に対するADL維持の取り組み ～リハビリを通じた生活機能の改善～ 洛和グループホーム石山寺 津田有里奈
- 79 毎日いきたいと思われるデイを目指して ～稼働向上に向けてのベース作り～ 洛和デイセンター北野白梅町 小川里美
- 80 心と体を育む「たのしい」「おいしい」食を目指して ～子どもから家庭につなぐ～ 守山市立よしみ乳児保育園 三宅巴美
- 81 子どもたちと作りあげていく児童館 京都市深草児童館 木村果菜
- 82 乳幼児期の手指の発達 洛和東桂坂保育園 金沢あゆみ
- 83 からだ作り ～体幹はすべてに繋がっている～ 洛和桂川小規模保育園 富士田彩佳

- | | | |
|---------------------------------------|------------|-------|
| 84 「おじいちゃんおばあちゃんに会いに行く!」 ～幼老交流でつながる心～ | 洛和イリオス保育園 | 細見沙代 |
| 85 野菜栽培から見た子どもの成長と変化 | 洛和みずのさと保育園 | 古高友子 |
| 86 乳幼児期における防災教育のあり方 | 守山市立吉身保育園 | 川島果菜 |
| 87 『おはよう!おばあちゃん』 ～日常に溶け込む 幼老交流～ | 洛和桂小規模保育園 | 堂坂友香子 |
| 88 子ども主体の学童クラブへ | 洛和御所南学童クラブ | 丸山智也 |
| 89 おとわじどうかんまつり2年目を迎えて ～こどもの主体性を育むために～ | 京都市音羽児童館 | 犬井琴子 |

口演 1

ホタルイカ生食後に腸閉塞をきたした一例

洛和会音羽病院 総合内科・連携医療科
○太田隆子・向井拓也・碓井文隆・金森真紀

【キーワード】 ホタルイカ・腸閉塞・旋尾線虫

〈症例〉

53歳 女性

〈主訴〉

上腹部痛、嘔吐

〈現病歴〉

X年4月夕食を21時にとり、翌日の13時頃より上腹部痛を自覚、徐々に増悪し嘔気、嘔吐も出現したため翌朝6時に救急外来を受診した。腹部手術歴はない。

〈身体所見〉

来院時体温36.4℃、血圧107/81mmHg、脈拍100回/分、腹部平坦軟、腸蠕動音正常、上腹部に軽度の圧痛を認めたが腹膜刺激症状はなかった。WBC12.2×10³/μL (Neut79.7%、Eo4%) BUN/Cr 21.8 /0.64 mg/dl、CRP4.92mg/dl、腹部CT:骨盤内で小腸の浮腫状壁肥厚像があり、口側はニボー形成を伴う拡張をきたし胃の拡張もみられた。ダグラス窩に少量の腹水を認めた。

〈臨床経過〉

腹部オペ歴のない腸閉塞であり、詳細に摂食歴を確認したところ、症状発症16時間前にホタルイカを生で摂取したことがわかり、旋尾線虫による小腸炎からの腸閉塞が疑われた。胃管留置による減圧と排便にて症状は改善し、5日目に退院となった。抗寄生虫抗体スクリーニング検査では線虫、肝吸虫がClass1(疑陽性)であった。

〈考察〉

旋尾線虫typeX型幼虫はホタルイカ、スケトウダラ、ハタハタの内臓に寄生しこれらを生食することで虫体が小腸壁へ浸潤し、浮腫性小腸炎から、腸閉塞をきたす。現在日本国内で旋尾線虫type X幼虫の特異的な抗体検査は行われていない。加熱や冷凍処理により発生件数は減少傾向となっていたが、今回のように散発例もあり、腹部手術歴がなく、小腸浮腫が著名な場合はホタルイカの生食歴がないか確認することが大切である。

〈参考・引用文献〉

三上栄 他: 旋尾線虫幼虫typeXによる小腸病変を内視鏡で観察した一例
日本消化器内視鏡学会誌 2009年51巻6号 p1443-1449
大谷聡 他: 生ホタルイカ摂食後に腸閉塞をきたした旋尾線虫幼虫移行症の一例
日臨外会誌 64(5), 1133-1136, 2003

口演 2

骨盤腔までの筋層下膿瘍を伴う
左有癭性膿胸の一例

洛和会音羽病院 呼吸器外科
○堀本かな・北村将司・一瀬増太郎

【キーワード】 有癭性膿胸、胸壁穿通性膿胸、開窓術、気管支充填術

〈症例〉

60歳代、男性。1か月以上続く倦怠感と食思不振を主訴に近医を受診。ショックバイタルおよび胸部X線検査で左胸水、皮下気腫を指摘され当院へ救急搬送となった。搬送時血圧低下、頻脈に加え酸素化不良で、血液検査では著名な炎症反応の上昇と腎機能障害を認めた。胸腹部CTでは第4肋間筋融解を伴う胸壁穿通性膿気胸の状態であり、大胸筋等の筋膜下層を経由し骨盤まで膿瘍が拡大していた。左有癭性膿胸による敗血症性ショックと診断し、胸腔ドレナージおよび抗生剤投与、ICUでの全身管理を施行した。また筋層下膿瘍が重力効果で骨盤方向に伸展していると判断し、第7病日にCTガイド下骨盤膿瘍ドレナージを追加。第18病日に胸腔ドレイン入替及び局所麻酔下前胸部筋層膿瘍搔爬を施行した。入院当初より有癭性膿胸に対し膿胸腔搔爬術や開窓術等外科治療を考慮していたが、上記治療により感染のコントロールが得られ肺癰の減少と左肺再膨張、筋膜下膿瘍の減少が得られた。第32病日には骨盤部ドレインを抜去し、第39病日に肺癰停止を確認。胸腔内残存腔はあるものの第48病日に胸腔ドレインを抜去した。第63病日に退院、第125病日で抗生剤を終了した。

〈考察〉

有癭性膿胸は癭孔の閉鎖に難渋し、EWSによる気管支充填術や開窓術等の手術を要することが多い。今回胸壁穿通性の左有癭性膿胸について外科治療を回避し治癒し得た症例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

〈参考・引用文献〉

•Watanabe Y, Matsuo K, Tamaoki A, et al. Bronchial embolization using an Endobronchial Watanabe Spigot for intractable pneumothorax and bronchial fistula. J Jpn Soc Bronchol. 2001;23:510-515.
•Tsuboi M, Miyoshi T, Aoyama M, et al. A case of empyema with bronchopleural fistula treated by omentoplasty and bronchial occlusion with silicone spigots. J Jpn Soc Respir Endoscopy. 2016;38:235-240.
•岡林 寛, 吉田康浩, 濱武大輔他. 難治性膿胸の外科的治療. 呼吸. 2005;24:1015-1019.
•村西佑介, 上島康生. 保存的治療中に有癭性膿胸となり開窓術と EWS による気管支充填術が有用であった1例. 日呼吸会誌. 2011;49:917-921.

口演 3

経膈分娩2週間後に骨盤内膿瘍を発症した
Ureaplasma parvumの一例

洛和会音羽病院 臨床研修科

○小國 綜一郎※1・下園 寛子※2・久米 由樹※2・福谷 優貴※2・
瀬尾 晃司※2・野溝 万吏※2・堀 隆夫※2・伊藤 美幸※2・佐川 典正※3

【キーワード】 骨盤内膿瘍, Ureaplasma parvum

〈背景・目的〉

産後2週間後に骨盤内膿瘍を認め、腹腔鏡下膿瘍ドレナージ術を行い術中腹水からUreaplasma parvumが検出された1例を経験したので文献的考察も含めて報告する。

〈方法〉

症例は23歳。1経妊1経産。妊娠38週自然経膈分娩し、産褥経過は良好であった。産後2週間後に発熱と腹痛を主訴に来院、CTで骨盤内膿瘍を認め入院、抗菌薬投与を開始した。各種培養検査ではUreaplasma parvumを含むマイコプラズマ類縁菌は陰性であった。その後の改善が見られず、腹腔鏡下膿瘍ドレナージ術を施行した。術後抗菌薬をDOXYに変更し改善を認めた。術中腹水のPCR検査でUreaplasma parvumが確認された。産褥期のウレアプラズマの上行性感染が疑われた。

〈考察〉

マイコプラズマ類縁菌は一般培養での同定が困難で疑わしい場合はPCR検査が望ましい。〈結語〉周産期におけるUreaplasma parvumによる骨盤膿瘍の発症の報告は稀で、更なる症例の集積が望まれる。

〈参考・引用文献〉

Donders GG, et al. Mycoplasma/Ureaplasma infection in pregnancy: to screen or not to screen. J.Perinat. Med.2017;45(5):505-515

Jonduo ME, et al. Adverse pregnancy and birth outcomes associated with Mycoplasma hominis, Ureaplasma urealyticum and Ureaplasma parvum: a systematic review and me-ta-analysis. BMJ Open 2022;12

※1 洛和会音羽病院 臨床研修科

※2 洛和会音羽病院 産婦人科

※3 洛和会音羽病院 総合女性医学健康センター

口演 4

当院における急性期脳梗塞に対する
機械的血栓回収療法の現状

洛和会音羽病院 脳神経外科

○永田 学

【キーワード】 機械的血栓回収療法

〈背景・目的〉

急性期の主幹動脈閉塞に対する機械的血栓回収療法の有効性は複数のRCTで示されており、当院でも2021年より同治療を開始した。当院は常時脳卒中患者を受け入れ、tPA静注療法を含む速やかな治療が実施できる一次脳卒中センター(Primary Stroke Center: PSC)に認定されているが、脳血管内治療医の増員や症例数の増加に伴い、常時血栓回収療法が行える「PSCコア」に認定される見込みである。今後、治療適応症例の救急搬送が増加することが予想される。当院での血栓回収療法の現状を示し、今後の課題を明らかにする。

〈結果〉

血栓回収術施行数は2021年5例、2022年11例、2023年17例、2024年21例、2025年は8月8日現在で13例で、年々増加傾向であった。mTICI $\geq$ 2bの有効再開通率は75%で、院内発症を除く症例における来院から治療開始までの時間の中央値は97分であった。

〈考察〉

治療開始までの時間が短いほど予後良好となることが示されており、合理的な目標として75分以内、理想的な目標として60分以内とされている。目標よりも長くかかっており、時間短縮への取り組みが必要と考えられた。治療開始までの時間短縮には、来院時からの診断と治療を迅速に行うチーム医療を必要とし、院内プロトコルの作成及び多職種でのトレーニングが有効と考えられる。

〈結語〉

当院での血栓回収療法の現状を示した。

口演 5

初回MRIのみで診断遅延し、CT Angio追加とMRI再検で確定診断に至った脳底動脈塞栓症の一例

洛和会丸太町病院 臨床研修科

○西尾悠

【キーワード】 脳底動脈塞栓症、脳幹梗塞、小脳梗塞

〈背景〉

脳底動脈閉塞(Basilar Artery Occlusion: BAO)は多彩かつ非特異的な症状を呈し、身体所見やMRIのみでは診断が困難な場合がある。診断が遅れると、機能予後を改善し得る血栓回収療法(EVT)・静注血栓溶解療法(IVT)の適応機会を喪失するおそれがある。

〈方法〉

80代女性、意識障害で救急搬送され、不穏と眼球運動障害から脳梗塞を疑ったが、初回のMRIでは異常所見に乏しく確定できなかった。

〈経過〉

第3病日、CT-AngioとMRI再検で橋・小脳梗塞を確認し、BAOと診断したが、EVT・IVTはいずれも時間的適応外であった。保存的加療中の第17病日、腹痛と両下腿mottlingが増悪し、造影CTで上腸間膜動脈塞栓を認めた。末梢循環不全と代謝性アシドーシスが進行し、同日看取りとなった。

〈考察〉

BAOが疑われた時点で、初回MRIで診断がつかなければ、CT-Angioを追加撮像し、血管閉塞部位を迅速に評価することで、早期の段階でEVT・IVTの適応を考慮する必要がある。本症例は診断遅延によりEVTの施行機会を喪失した教訓的事例であり、後方循環虚血の診断フローの再検討が求められる。

〈結語〉

救急外来でBAOを疑った際には、初回MRIのみで確定できない場合、早期にCT-AngioおよびMRI再検を積極的に実施し、EVT適応を迅速に判断すべきである。また、BAO患者では入院後の全身性血栓塞栓症リスク管理も重要である。

〈参考・引用文献〉

Voetsch B, DeWitt LD, Pessin MS, Caplan LR. Basilar Artery Occlusive Dis-ease in the New England Medical Center Posterior Circulation Registry. Arch Neurol. 2004;61(4):496-504.

Tao C, Nogueira RG, Zhu Y, et al. Trial of endovascular treatment of acute basilar-artery occlusion. N Engl J Med. 2022;387(15):1361-1372.

口演 6

大伏在静脈グラフト不全によるNSTEMIに対してNIRS-IVUSを用いて血行再建した一例

洛和会音羽病院 心臓内科

○北山貴章

【キーワード】

13年前に冠動脈バイパス術、2年前にRCAにPCI歴のある74歳男性。1日前からの間欠的な胸痛を主訴に救急受診され、心電図でST上昇を認めなかったが、心筋逸脱酵素の上昇を認めたため、緊急CAGを施行した。LAD、LCXは閉塞し、RCA、左内胸動脈グラフト→LAD#7の開存は良好であったが、大伏在静脈グラフト(SVG)→LCX#12→#14のグラフト内に造影遅延を伴う高度狭窄を認めたため、同部位を責任病変と判断しPCIを施行した。NIRS-IVUSでmaxLCBI4mmが高値であったため、末梢保護デバイス下にDESを留置し、良好な血流を得て手技を終了した。peakCPKは690U/Lで、合併症なく第5病日に退院となった。今回我々は、バイパス術後遠隔期のSVG不全に対して、NIRS-IVUSを用いて安全に治療を完遂できた症例を経験したため、若干の文献的考察を交えて報告する。

口演 7

心筋梗塞を契機に本態性血小板血症を
診断した一例

洛和会音羽病院 心臓内科

○山中宏高※1・横井宏和※1・北山貴章※1・佐登俊允※1・
百瀬大貴※1・太田悠太郎※1・山崎真也※1・伏村洋平※1・
柳内隆※1・牛丸俊平※1・栗本律子※1・万井弘基※2・石橋孝文※3

【キーワード】

症例は80歳男性。10日前から呼吸困難を認めていたが、受診当日に強い呼吸困難と心窩部痛を自覚したため紹介受診となった。12誘導心電図は前胸部誘導に異常Q波とST上昇を認め、経胸壁心エコー検査は心室中隔と後側壁の壁運動異常を認めた。血液検査は心筋逸脱酵素の上昇を確認し、胸部X線画像では心陰影の拡大と胸水を認めた。亜急性心筋梗塞およびうっ血性心不全と診断し、緊急で冠動脈造影検査(CAG)を施行した。右冠動脈#3に造影透亮像を認め、血管内イメージングで壁血栓を確認した。右冠動脈はすでに再灌流を得ていたため、抗血小板薬を導入後、大動脈バルーンパンピング、ヘパリン投与で保存的加療をおこなった。第9病日に再度CAGを行い、血栓の消失を確認した。血液検査で血小板数73万/ μ Lと高値を認め、骨髓増殖性腫瘍、とくに本態性血小板血症(ET)を疑い。ヒドロキシカルバミドの内服を開始した。その後骨髓生検を施行し巨核球の増加を確認した。そのほかBCR-ABL陰性、JAK2遺伝子陽性よりETと診断した。内服治療を継続して血小板減少を確認した。CAGと血管内イメージング評価により血栓素因を疑い、またETの診断に至った一例を経験したため、文献的考察を交えて報告する。

※1 洛和会音羽病院 心臓内科

※2 洛和会音羽病院 不整脈科

※3 洛和会音羽病院 血液内科

口演 8

法人全体への感染管理教育の現状と課題
～感染対策に強い組織づくりを目指して～

洛和会丸太町病院 感染防止対策室

○小野寺隆記

【キーワード】 感染防止、教育、組織

〈背景・目的〉

コロナ禍で法人内の部門間連携が不十分であることが明らかになった。看護師が常在していない施設も多数あり、法人全体への感染管理教育の体制構築が求められた。医療・介護・保育など他部門に対する計画的な教育を開始し、現状と課題を明確にする。

〈方法〉

2023年度に開始した介護事業部対象研修を改変、継続して2024年度に実施した。また、2024年度より法人内病院の看護師を対象として感染管理法人内認定教育を開始した。

〈結果〉

2024年度は介護事業部看護師54人、法人内病院看護師19人に対して研修を実施した。2023年度に研修を51人が修了しており、合計124人が感染管理教育研修を修了した。

〈考察〉

2023年度は全てを対面で実施しており、講師負担の軽減、他施設感染管理認定看護師との協働を推進した。オンデマンド研修の活用により、講師負担は軽減できた。また、協働を進めることで法人内感染管理者の連携を深めることに繋がった。研修に対する評価は概ね好評であったが、研修終了者が現場でアクションを起こせていないことが課題として残った。

〈結語〉

研修修了者が現場で活動ができ、感染対策を推進することが求められる。修了者に対してフォローアップ研修を開始して、現場での活躍を後押ししていく。また、2025年度からは研修対象者を全職種へと拡大し、感染対策に強い組織を目指して継続していく。

〈参考・引用文献〉

森田 夏代、田原 恭子、日本シミュレーション医療教育学会雑誌 9: 11-17, 2021.

口演 9

看護師の手指衛生行動の実態調査
～手指衛生のタイミングから見る感染対策意識～

洛和会丸太町病院 3病棟

○岡田柚香・高橋早耶・志野舞・長崎葵・岡本望・大谷和輝・
木村夏実・田中杏映・竹下加奈枝・今川明江・河本由美

【キーワード】 病棟看護師 手指衛生 実態調査

〈背景〉

令和5年11月より当院では手指消毒剤の個人携帯を導入した。高齢者や術後患者が多いA病棟では、感染予防が看護の質に直結する。手指衛生は「患者接触前後や汚染の可能性のある行動後」に毎回行う必要があるが、実際には使用量やタイミングにばらつきが見られる。看護師の実施状況を把握し、感染対策意識の向上と安全なケア環境の構築を目指す。

〈方法〉

アンケート調査とマンホイトニーのU検定により自己評価傾向を分析。自己評価上位・下位5項目を抽出しスコア化し、直接観察による遵守率を記述統計で分析した。

〈結果〉

自己評価では5つのタイミングに対する理解はあるが、処置後の項目が高評価、処置前は低評価だった。直接観察では処置後の遵守率は53%以上、処置前は25%以下と低かった。全体の分析では自己評価と遵守率には相関があることを示唆する結果であった。

〈考察〉

自己の感染予防行動のための手指衛生の遵守率は高かったが、患者を守るための行動は不十分である。高齢者や創部管理が必要な患者が多いため、処置前の手指衛生に関する教育が課題として明確になった。

〈結語〉

手指衛生に対する必要性は理解していても、自身が感染源になるという認識は不足していた。今後は処置前の手指衛生を徹底できるよう、教育していく必要がある。

〈参考・引用文献〉

吉田製薬 文献調査チーム:消毒薬テキスト エビデンスに基づいた感染対策の立場から 第4版:42、株式会社協和企画、2012

口演 10

夜間勤務時間におけるインシデント予防のための
看護師の意識・行動に関する質的研究
—新人レベル看護師と達人レベル看護師との比較から—

洛和会丸太町病院 2病棟

○森野葵・北川珠奈・山本裕美・田村結・深尾美空・岡本彩香・
岡田充代・岩田沙織

【キーワード】 インシデント、夜間勤務時間

〈背景・目的〉

筆者らの先行研究¹⁾により、インシデントの発生要因が多忙さだけではないことが示唆された。そこで、本研究では、看護師にインタビュー調査を実施し、看護師の夜間勤務時間における安全な看護実践がどのように行われているのか、その実態を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

研究対象は、研究への協力依頼に同意が得られた看護師経験年数1～2年目の看護師5名と看護師経験年数7年以上の看護師5名を選定した。データ収集は、1対1の半構造化面接法にて行ない、その内容は研究者が定性的データに変換した。

〈結果〉

内容分析により、新人レベル看護師は【一人に対応しない】【常に考えて対応する】【基本に立ち戻る】【何度も確認する】【自分なりの工夫】、達人レベル看護師は【チームで支援する】【リスクを考えてマネジメント】【常に考えて患者対応】【過去の経験からリスクを考える】【基本に立ち戻る】の5つのカテゴリーに分類した。

〈考察〉

看護師は、経験年数や勤務時間に関わらず事故のリスクをアセスメントし、常に優先順位を考え、看護を実践していることがわかった。さらに、達人レベル看護師は、疲労感によるインシデントを予防するため、業務負荷の分散や休憩時間を確保する等のマネジメントを意識的に行っていたことがわかった。

〈結語〉

本研究により、夜間勤務時間における看護師の安全な看護実践は、経験年数に関わらず、行われていることが明らかになった。特に、達人レベル看護師は、リスクアセスメントに加え、休憩時間の確保等、マネジメントを意識的に行うことでインシデント予防に寄与していた。今後は、チーム間の協働体制を整備し、インシデントの予防に関する意識を高め、行動につなげたい。

〈参考・引用文献〉

- 1)河西洋子,石川陽子,習田明裕,志自岐康子:交代勤務制を行う看護師のヒヤリ・ハット,インシデント,アクシデントに関する要因. The Journal of Japan Academy of Health Sciences :p14-23, 2016
- 2)佐々木章雄,浦山奈々,山口文恵,安藝寿美:医師表出が困難な患者の観察における看護師の経験年数差による着眼点の違い,国立病院看護研究学会学術集会集録集:p28-30,2018
- 3)西尾果菜,島岡理恵:新人看護師のインシデント発生状況の把握. 奈良県立医科大学付属病院報42:77-80,2015
- 4)白岩麻衣子,山名富美子,神農真貴,森野葵,山口陽子,岡田充代,高橋映美:業務多忙な日勤帯でのインシデント発生防止のための看護師の意識・行動に関する質的研究—新人レベル看護師と達人レベル看護師との比較から—.第34回洛和会ヘルスケア学会抄録:p34

若手看護師を対象とした 身体拘束マネジメントチェックシートの活用評価 －教育的有用性と今後の支援への示唆－

洛和会九太町病院 救急・HCU

○伏田敬祐・土井千春・上川真悠・安井涼華・辻萌菜・竹村恭平・
馬越良実・田中さえ子

【キーワード】 身体拘束、身体拘束の三原則、身体拘束マネジメントチェックシート、若手看護師、HCU

〈背景・目的〉

2024年診療報酬改定により、医療現場では身体拘束の最小化が求められている。HCUでは重症患者への迅速な対応が必要とされる中、若手看護師の判断支援と教育体制の整備が課題である。本研究は、身体拘束マネジメントチェックシートの活用が若手看護師の臨床判断やケアに与える影響を評価し、教育的有用性と支援体制への示唆を得ることを目的とした。

〈方法〉

HCU勤務の看護師18名を対象に記述的横断研究を実施。リッカート尺度による定量評価と自由記述による質的分析を行い、群間比較にはMann-WhitneyのU検定を用いた。

〈結果〉

分析の結果、4カテゴリー・11サブカテゴリーが抽出された。定量評価では「判断の整理」「情報共有」「教育的有用性」の評価が高かった。対象人数が少なく、統計的有意差は認められなかった。

〈考察〉

若手看護師は、身体拘束マネジメントチェックシートを活用することで、臨床判断・ケアをする際には、【評価・判断・継続看護への有用性】や【教育・理解促進への効果】を得たが、「時間がかかる」「SSIに反映された方が良い」などの【使用感・効率性に関する意見】【改善・課題に関する意見】も示され、運用方法に課題があることが明らかとなった。

〈結語〉

本チェックシートは経験年数や教育の有無にかかわらず、判断支援・教育・継続看護に有用であり、今後の運用改善と教育体制の強化が期待される。

〈参考・引用文献〉

- ・石倉未沙絵,鹿田和樹,杉本英里華,中島奈都美,吉岡伸一(2015):臨床現場における身体拘束,抑制の実態と実施基準に関する研究,米子医誌,66,pp.36-46
- ・桑原美弥子,飯島佐知子(2018):集中治療室における身体拘束率に関連する要因,順天堂大学医療看護研究,14(2),pp.19-29
- ・小林みゆき(2019):急性期病院における身体拘束解除に向けたプログラムを用いた看護介入,老年看護学,24(1),pp.12-18
- ・パトリシア・ベナー/井部俊子訳(2015):ベナー看護論 新訳版 初心者から達人へ, pp.21, 東京:医学書院.
- ・南崎真綾,土肥真奈,叶谷由佳(2022):身体拘束の廃止・軽減に成功した急性期病院の看護管理実践,日本看護研究学会,45(5),pp.905-914
- ・森野美由紀,平田弘美(2018):一般病棟における看護師の教育背景と高齢者患者への身体拘束に対する認識との関係,人間看護学研究,16,pp.27-34
- ・山本美輪(2004):高齢者の身体的抑制に直面する病棟勤務看護職のジレンマの概要,老年社会科学,25(4),pp.417-428

クリティカルケア領域における Shared Decision Making(SDM)

～概念分析から患者の意向を尊重した看護師の役割を考える～

洛和会音羽病院 看護部長室

○松本修一

【キーワード】 Shared Decision Making(SDM)、概念分析、クリティカルケア領域

〈背景・目的〉

クリティカルケア領域でのSDMの活用の可能性を検討するために、SDMの概念に含まれる要素や構造を明らかにする。さらに、患者の意向を尊重した支援のための一助を得る。

〈方法〉

国内文献を医中誌Web版Ver6(1903-2023年)で、『SDM』or『共同意思決定』or『共有意思決定』or『シェアードディシジョンメイキング』、海外文献についてはPubMed(1976-2023年)で、『Shared Decision Making』をキーワードとし検索した。概念分析には、Walker&Avantの手法(2008)を用いた。

〈結果〉

クリティカルケア領域におけるSDMの属性は、【相互作用で生まれるプロセス】【いざとなった時の拠り所】【患者の尊厳を中心とした価値観のバランス】の3つであり、『患者の価値観(推定)と家族の価値観のバランスに揺れながらも、いざとなった時の拠り所を上手く使いながら、繰り返される相互作用の中で患者の尊厳を中心とした意思決定を行うプロセス』と定義された。

先行要件には【進歩するテクノロジーの過剰使用と不確実性】【繰り返される代理意思決定の課題】【家族の心理的負担の症状】【患者尊重の困難さ】【異なる文化的状況】の5つが含まれ、帰結には【家族の負担軽減と満足度の向上】【患者を尊重したケア提供】【家族の絆の再形成】【医療費の削減の効果】の4つが含まれた。

〈考察〉

クリティカルケア領域では、医療者は代理意思決定をする家族のためにいざとなった時の拠り所として、患者の尊厳を保つための話し合いを繰り返し、その上で意思決定が家族にとって満足な体験となるように調整することが重要である。

〈結語〉

クリティカルケア領域での看護師の役割は、【いざとなった時の拠り所】として、【患者を尊重したケアの提供】【家族の絆の再形成】【家族の負担軽減と満足度の向上】に向けた支援であった。

〈参考・引用文献〉

ウォーカーL.O.,アヴァントK.C.中木高夫,川崎修一:看護における理論構築の方法,医学書院,東京.(1983/2008)

口演 13

心不全症例の認知機能の実態
～京都心不全ネットワークレジストリー研究の解析から洛和会音羽病院 外来
○福田紘※1・栗本律子※2

【キーワード】 心不全、認知機能、地域連携、京都心不全ネットワーク

〈背景・目的〉

京都心不全ネットワーク協議会（以下、khfnet）は2019年8月発足以降、現在京都府下26病院と17の循環器科クリニックが参加し、心不全患者の予後改善を目指し活動している。

〈方法〉

Khfnetでは、多施設前向き登録研究として、参加施設中23病院から回答をもらい、2022年7月から一年間の心不全入院症例を、急性心不全登録研究（症例数1905例、男性47.6%、平均年齢82歳）として登録し、解析した。

〈結果〉

レジストリー症例に対しMoCA-Jを用いた認知機能評価を行った。78%がMoCA-J<23と認知機能障害が疑われる結果であった。MoCA-J<23はMoCA-J≥23（平均年齢84歳vs74歳）よりも、有意に高齢であった。また、MoCA-J<23は≥23と比べ栄養不良例（CONUTスコア≥8）が多く（40%vs 26%）、サルコペニア（SPPB<10）が多い（73%vs39%）ことも示された。MoCA-J<23の40%は独居で、内65%は家族や介護者などの支援者がいなかった。MoCA-J≥23では、本人や介護者による心不全のセルフモニタリング、マネジメントが62%で可能であったが、23点未満では38%にとどまった。また、MoCA-J<23では介護認定を受けていたのは申請中（6%）も含めて49%であり、介護サービス利用をしていたのは内13%であった。

〈考察〉

心不全診療ガイドライン¹⁾では心不全の疾病管理に関して、「高齢者、独居者、認知機能障害者など、セルフケア能力に限界がある患者には、家族への教育支援とともに、訪問診療や訪問看護などの社会資源を積極的に活用する。」と述べている。今回の研究結果から、地域の現状を加味し、個々の症例の状況に合わせて地域連携をはかりながら支援を実践していく必要があると考える。

〈結語〉

地域には認知機能が低下しているが、独居で介護者のいない心不全症例が多く存在し、在宅での心不全管理における地域医療・介護リソースの活用は、喫緊の課題である。

〈参考・引用文献〉

1)日本循環器学会2025年改訂版心不全診療ガイドライン:https://www.j-circ.or.jp/cms/wp-content/uploads/2025/03/JCS2025_Kato.pdf、2025年、（閲覧日：2025年7月24日）

※1 洛和会音羽病院 外来
※2 洛和会音羽病院 心臓内科

口演 14

母性看護専門看護師が行う特定妊婦への
看護支援洛和会音羽病院 2D病棟
○佐藤麻里※1・工藤里香※2

【キーワード】 母性看護専門看護師、特定妊婦、協働

〈背景・目的〉

母性看護専門看護師が特定妊婦を把握した時から、その特定妊婦が養育困難に陥らないための看護支援について明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

ジャッジメンタルサンプリング法にて、母性看護専門看護師5名に協力を得た、半構造化面接を用いた質的記述的研究である。京都橋大学研究倫理委員会の承認（23-56）を得たのち、実施した。

〈結果〉

母性看護専門看護師5名の特定妊婦への看護支援の語りから、346のコード、64のサブカテゴリ、12のカテゴリが生成された。

〈考察〉

母性看護専門看護師は特定妊婦を捉えたところから、単にその特定妊婦を理解するだけではなく、「ストーリーを理解することがケアの鍵となる」ため、「自分を無にして対象者に歩み寄り」ことを行いながらその人の思考をたどり、その行動に意味づけをし、思考や行動を言語化することにより、他の医療者へ対象の理解を促すことができる。その看護実践は、【チームを支援し、個人に依存しないシステム作りを行う】ことを目指していることが明らかになった。

〈結語〉

母性看護専門看護師の実践は、その人のストーリーに入りこむことを意識し、その人の立場に立って支援を考え続けること、つまり「相手の物差しで考える」実践である。それは特定妊婦の人々だけでなく、一緒に支援を行う人々に対しても同じである。常に相手の立場に立って考えた支援が、切れ目のない支援に繋がっていることが示唆された。

※1 洛和会音羽病院 2D病棟
※2 京都橋大学

口演 15

バスキュラーアクセス作成後、術後出血持続症例に対してステロイドパルス法後止血した1症例

洛和会音羽記念病院 病院長室 腎臓内科・透析センター
洛和会京都腎臓病センター

○細川典久

【キーワード】 出血、透析、バスキュラーアクセス、ステロイド

〈背景〉

透析患者のバスキュラーアクセス(以下VA)術時に止血困難を来す症例が時々ある。その中には術後出血を持続する場合もある。時には、VA閉鎖を必要とすることもある。今回我々はVA作成後、術後出血が持続したため、VA閉鎖を施行したが、出血が治まらなかったが、ステロイドパルス療法を施行後改善した1症例を経験したので報告する。

〈症例〉

59歳、男性

アルコール性肝硬変のため、他病院で加療中。急激な腎機能低下を認めたため、急性腎不全の診断で、右内頸静脈にカテーテルを留置した上、その後人工血管移植術を施行するも、術中より止血困難で、ドレーン留置して手術終了した。出血が持続し、止血の目処がたたないため、当院紹介となった。

〈入院後経過〉

即日シャントを閉鎖施行。連日濃厚赤血球輸血、新鮮凍結血漿投与するも出血持続。

貧血の改善認めなかった。後天性血友病が疑われステロイドパルス療法を施行したところ創部から出血は認めず、その後貧血も改善した。

〈考察〉

止血困難の原因はアルコール性肝硬変によるものであったが、ステロイド療法と止血効果との関係は不明だが、ステロイド療法により、ある程度肝機能が改善した可能性が考えられる。

〈結語〉

バスキュラーアクセス作成後出血持続していたが、ステロイドパルス療法後止血したアルコール性肝硬変を合併した透析患者の1症例を経験した。

〈参考・引用文献〉

倉持 元ら: 日農医師 2007(1)
谷口英明ら: 日消誌 2012(109)

口演 16

両下肢疼痛と紫斑を契機に診断された成人壊血病の一例

洛和会丸太町病院 総合診療科

○大橋史矢

【キーワード】 ビタミンC欠乏、貧血、紫斑

〈背景・目的〉

既往歴に特記事項のない49歳男性。主訴は下肢痛による体動困難で当院受診された。入院7日前より左大腿内側および両下腿内側に点状出血が出現し、徐々に増大した。入院3日前から下腿内側疼痛が強く、体動困難となったため救急要請し入院となった。既往歴、内服歴なし。身体所見では両下肢に紫斑と下腿把握痛を認め、採血で凝固異常はなく二系統の血球減少、ビリルビン上昇を伴っていた。下腿エコーでは血栓や血腫を認めなかった。歯肉炎とcorkscrew hairを認めた。追加病歴にて、数年来、塩やソースのみで味付けされたパスタを毎日摂取し、果物や野菜を摂らない著しい偏食が判明した。血中ビタミンC値は0.3 $\mu\text{g/mL}$ と著明低下しており、壊血病と診断した。入院当日よりビタミンC 1000 mg/日の補充を開始し、4日目に立位可能、7日目には歩行可能となり、9日目に退院した。今回は症例数の少ない壊血病を経験したため報告する。本症例から、紫斑や両下肢痛の鑑別には血小板減少や血栓症だけでなく壊血病を含める必要があると学んだ。偏食によるビタミンC欠乏は現代でも起こり得るため、詳細な食事歴聴取が診断の鍵となる。血腫が画像で確認できなくても、骨膜下出血や結合組織脆弱化に加え、カルニチン欠乏による筋エネルギー障害も下肢痛の一因となり得ることを想起し、早期の補充治療につなげることが重要である。

口演 17

免疫チェックポイント阻害薬使用後、複数の内分泌障害 (irAE) を併発した一事例 ー診療看護師 (NP) との協働を通してー

洛和会音羽病院 内分泌・糖尿病内科

○廣瀬久美・千丸貴史

【キーワード】 内分泌有害事象 (irAE)、副腎不全、甲状腺機能異常、1型糖尿病、血糖管理、ステロイド、タスク・シフト / タスク・シェア、診療看護師 (NP)

〈背景〉

化学療法後の有害事象 (irAE) により、複数の内分泌異常を併発した症例を経験した。

〈症例提示〉

50歳代男性

(病名) 左腎腫瘍(経過) IOIO療法実施。約2週目、甲状腺機能異常にて投薬開始。約24週目、副腎不全、ケトosis (HbA1c 8.3%、BS 701mg/dL) にて主科緊急入院時より併診開始。

〈結果〉

ステロイド調整と並行し、血糖管理を実施。インスリン治療受け入れ困難に対し療養指導実施。退院後、リブレ導入、インスリン自己調整を中心に指導を継続。

〈考察〉

一般に irAEの時期は推測困難だが、早期に介入が望ましい。また、退院後も生活に合わせた療養指導が必要である。

口演 18

胃瘻造設を行い自宅退院が可能となった一例

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション科

○大石瞳

【キーワード】 胃瘻、摂食嚥下

〈背景・目的〉

胃瘻造設は延命治療のイメージを持たれることがあるが、転帰先の選択肢を増やすことができる一例を経験したため発表する。

〈方法〉

症例は76歳女性。併存疾患は1型糖尿病、シェーグレン症候群。X年7月第12胸椎椎体骨折で2度の手術を経てリハビリ目的に当院入院。尿路感染症・肺炎を繰り返し、COVID-19にも感染した結果、耐久性が大きく低下した後、食事摂取・内服が困難となり血糖コントロールも悪化した。本人・家族は経口摂取継続と、自宅退院の希望が強く訓練意欲はあったが現状では困難であったため、X年12月に胃瘻造設することとなった。

〈結果〉

胃瘻造設によって安定した栄養供給が可能となり耐久性が向上した結果、X+1年1月ペーストハーフ食を10割摂取できるようになり血糖コントロールも安定し、X+1年3月に自宅退院した。

〈考察〉

胃瘻は経鼻経管栄養よりも管理が簡便で在宅管理に適しており、鼻咽腔での嚥下の妨げになりにくいことから本症例では経口摂取を継続する上で有効であった。また経口摂取が不十分であっても、胃瘻での供給によって一定の栄養・水分摂取が確保されており、血糖コントロールにおいても有用であった。胃瘻造設は延命治療のイメージが持たれることもあるが、適応やメリット・デメリットを理解した上で活用することで、退院後の転帰先の選択肢を増やすことができると考える。

〈結語〉

胃瘻をうまく利用することで、患者のQOLを上げ転帰先の幅を増やすことも可能である。

〈参考・引用文献〉

静脈経腸栄養ガイドライン 第3版等

外反型変形性膝関節症に対する 外側アプローチを用いたTKAの治療成績

洛和会丸太町病院 臨床研修科
〇市丸智規

【キーワード】 変形性膝関節症、TKA

〈背景・目的〉

当院で施行した外反型変形性膝関節症(以下外反型OA)に対する外側アプローチを用いたTKAの治療成績を評価したので報告する。

〈方法〉

2021年から2025年に当院でTKAを行った立位FTA170°以下の外反型OA患者22例24膝関節を対象とした。臨床評価は術前後のKOOS-JRscore,膝関節屈曲ROM,使用したインサートの厚みを用いた。X線学的評価は術前後の立位FTA,内反動揺角,術後インプラント設置角度(α 角、 β 角)を測定し、統計学的に比較検討した。

〈結果〉

術前後のKOOS-JRscoreは有意に改善したが(46.2 ± 3.34 , 81.3 ± 2.95)、ROMは有意差を認めなかった($119 \pm 9.07^\circ$, $124 \pm 7.75^\circ$)。使用したインサートは平均10.56mmであった。立位FTAは有意に改善したが($162.3 \pm 1.57^\circ$, $173.5 \pm 0.64^\circ$)、内反動揺角は有意差を認めなかった($2.91 \pm 0.82^\circ$, $2.67 \pm 0.74^\circ$)。インプラント設置角度では平均 α 角は 96.6° 、平均 β 角は 89.8° であった。

〈考察〉

外反型OAの解剖学的特徴として外側支持機構の緊張があり、TKAにおいて外側アプローチを用いることは軟部組織バランスの獲得において有利である。一方本研究では展開時に腸脛靭帯を全剥離して視野を獲得したが異常な内反動揺性は認めなかった。外反型OAに対する外側アプローチでのTKAは有用な術式の一つと考えられる。

丁寧な問診と身体所見が高位診断に 有用であったL4神経根症の1例

洛和会丸太町病院 臨床研修科
〇津村由梨香

【キーワード】 問診、身体所見、高位診断、神経根症

〈背景・目的〉

腰椎間板ヘルニアは頻度の高い疾患であるが、MRI画像の所見があっても無症候性であることは少なくない。症状の原因となる真の責任病巣を同定するためには、問診と身体所見に基づく正確な神経学的高位診断が極めて重要である。本症例では、当初の疼痛の訴えが解剖学的に非典型であったものの、神経解剖に基づく仮説を立てて再度問診を行い、MRIでその臨床仮説を裏付け得たので報告する。

〈症例〉

症例は65歳女性。特記すべき既往歴はない。当科受診から7年前に腰痛を自覚し始め、9日前から左下肢痛が増悪し、鎮痛剤内服するも改善せず当院救急受診した。受診時発熱なく他のバイタルサインも安定していた。当初の訴えは腰から左下肢前面の安静時の強い疼痛だった。身体診察では、Straight Leg Raising test (SLR test) 陰性、側臥位での左Femoral Nerve Stretching test (FNS test) 陽性、左膝蓋腱反射減弱していた。神経解剖を考えて疼痛部位を再聴取すると、左大腿外側から左下腿内側にかけた疼痛であることが判明した。これらよりL4神経根障害を強く疑い、MRIを施行した。MRI矢状断でL4/L5椎間板の突出、水平断で左後方の突出と左外側陥凹狭窄を確認し、L4/5の腰椎椎間板ヘルニアによるL4神経根障害と診断し、整形外科に紹介した。

〈結果〉

同日試行された仙骨部硬膜外ブロックにより下肢痛は著明に改善し、自立歩行にて帰宅可能となった。

〈考察〉

本症例から得られる学びは以下の2点である：

1. 疼痛の訴えが非典型な場合、解剖学的推論に基づいて再度問診を行うことが重要である
2. 問診や身体所見に基づいて責任病巣を判断した上でMRIを行うべきである

問診と身体所見により高位診断を行ったことで、MRI画像における無症候性の異常所見を有意とし誤診するリスクを避けることができたと考ええる。

〈結語〉

本症例は、解剖学的推論に基づいた問診と身体所見で神経学的高位診断を行い、MRI所見でそれを裏付けて診断に至った。画像所見に先立ち、問診と身体所見によって病変部位を絞ることの重要性を改めて認識する症例であった。

セル看護提供方式® 導入後の 看護ケアの現状と課題

洛和会音羽病院 3C病棟

○木下沙織・河原田美礼・山中裕介・長本茜・和住阿弥・
赤田エリカ・松本昌子・伊藤浩武

【キーワード】セル看護提供方式、教育、退院支援

〈背景・目的〉

セル看護提供方式®導入後のA病棟における看護ケアの現状と課題を明らかにし、病棟スタッフの認識を整理することで、看護師のアセスメント能力を向上させ、看護ケアや退院支援の充実を図ることを目的とした。

〈方法〉

量的研究デザインにて管理職を除くA病棟看護師14名を対象に5段階選定方式によるアンケートを実施し、集計・内容分析を行った。

〈結果〉

「看護ケアや身体拘束解除に向けたケアの実施」は、ラダーに関係なく肯定的な回答が多く見られた。一方、「セル看護を理解し実践している」「セル看護導入により退院支援に繋がっている」では、ラダーⅠ・Ⅱは肯定的な回答が半数を占めたが、ラダーⅢ・Ⅳでは中立的・否定的な回答が目立った。

〈考察〉

セル看護提供方式®導入により、動線改善やケアの迅速化が図られ、患者の傍にいる時間の確保が可能となった。しかし、退院支援に対する認識や満足度にラダー間で差があることが示唆された。これは、年数に伴うアセスメント能力の偏りや、看護ケアの質的向上・退院支援の充実が十分に図られていない現状を反映していると考えられる。全てのスタッフが退院支援や看護ケアの充実を実感しているわけではなく、特にラダーⅢ・Ⅳにおいては、本来求められるセル看護の実践やカンファレンスの強化に対して課題を感じている可能性が示唆された。

〈結語〉

セル看護の理解を深める、情報共有やスタッフ教育、多角的な視点でのカンファレンスを通じて、退院支援の充実を図る。

〈参考・引用文献〉

- 1) 本庄恵子:セルフケアの視点から見る退院支援、看護実践の科学 45(8)、6-11
- 2) 細貝加代子:セル看護提供方式は叶えたい看護を実現する部署内教育
- 3) 日本看護学会誌 41巻 914ページ(2021年)
- 4) 宇都宮宏子:退院支援実践ナビ 18-48、医学書院、2011
- 5) 須藤久美子:セル看護方程式導入による変化:看護管理 256-261 2020

セル看護提供方式を導入後ナースコールの 時間帯による回数と原因の実態調査

洛和会音羽病院 4A病棟

○西田綾音・志村友里絵・田村美空・屋部鈴仁・丸尾香澄・木戸茜・
榮谷ゆり・小林相子

【キーワード】ナースコール、セル看護提供方式

〈背景・目的〉

令和6年4月よりセル看護提供方式(以下:セル看護)が導入され、業務整理は行われているが患者の意見としてナースコール対応が遅いとの指摘も散見された。ナースコールが鳴る原因を分析することで、先取り看護の実現に繋げることを目的として本研究に取り組んだ。

〈方法〉

令和7年7月1日～15日までの期間に実施。対象は調査期間中に日勤帯で勤務している看護師約40名を選定した。

調査用紙を用いてデータ収集を行い、看護師が対応したコールの種類や頻度を分析対象とした。また、ナースコールの使用履歴データも併せて収集し、客観的な指標として活用した。

〈結果〉

調査期間中1日あたりの平均入院者数は約43人で、認知機能・ADLは自立な方が半数以上と多く、ケアコムの記録でコールが多かった時間帯は13時～15時であった。全ての時間帯でもっとも多いのは排泄コールで4～5割を占めていた。また、その他に分類される入院環境調整の理由が2番目に多かった。

〈考察〉

セル看護において、患者の排泄パターンの把握および患者特有のニーズを把握して、事前の声かけや配慮をすることが重要である。

〈結語〉

日勤帯すべての時間帯において排泄でのコールが多かったことから、患者の排泄パターンを把握することが先取り看護へ繋がると考える。また、患者特有のニーズを把握することで、事前に配慮できるよう患者の思いをくみ取り、より良い看護へ繋げていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 上條実名子他:先取り看護の提供 ナースコールの分析から 信州大学医学部附属病院看護研究集録 第44巻第1号 2016年
- 上野由美子他:セル看護提供方式導入後の現状と課題 飯塚病院見学から見た今後の取り組みについて.新潟県立中央病院医誌(1341-4062).32巻1号.40-41.2024年12月
- 翁長多代子他:中頭病院の取り組み 先取り看護を目指して病棟移転に伴う急性期病院でのベッドサイドケアの充実.看護管理30巻3号pp.251-255.2020年3月

救急看護師が行っている褥瘡ケアに関する 現状調査

洛和会音羽病院 救命救急センター・京都ER
○吉岡優佑・滝川雄大・中西郁宙・大泉恵未

【キーワード】 救急看護師・褥瘡ケア・現状調査

〈背景・目的〉

褥瘡予防について自力で寝がえりや離床が行えない患者に対して、2時間を超えない範囲で体位変換を行う事が推奨されている。しかし当該施設の救命救急センター(以下ER)では、固いストレッチャーで2時間以上臥床している患者が多く褥瘡発生のリスクが高くなると考えた。

そのため救急看護師が普段行っている褥瘡ケアやケアに対する困難感等の現状が分かれば、今後の褥瘡ケアに対する教育に繋がり、褥瘡発生予防や増悪を防ぐことに繋がるのではないかと考えた。

〈方法〉

倫理審査承認後～2025年8月中旬にERに所属する看護師へ無記名自記式アンケート調査を行う。

〈結果〉

アンケートはER看護師20名に配布し18名より回答が得られた。経験年数が上がるごとに褥瘡ケアの実施率は上昇していた。また褥瘡ケアに対して困難に感じていることは「ER多忙時は対応ができない」「褥瘡排泄ケア認定看護師(以下WOC)への相談方法がわからない」といった意見があり、特に経験年数が少ない看護師からは「WOCの存在自体を知らない」という回答があった。

〈考察〉

今後はWOCとの連携を行い、褥瘡ケアに関する知識や技術の共有を図ることが必要であると推察された。

〈結語〉

本調査より、ER看護師が行っている褥瘡ケアの実態と、経験年数別に異なる問題点が明らかになった。今後はERの特性に考慮した継続的な教育と、WOCとの連携を図ることで、褥瘡の発生予防と質の高いケアを目指す。

〈参考・引用文献〉

- 1) 一般社団法人日本褥瘡学会:体位変換・褥瘡予防・管理ガイドライン第5版:34-35, 2022
- 2) 松原真由美 他:救急外来での褥瘡予防調査 ストレッチャー専用マットレスの導入を試みて、日本褥瘡学会誌 15 (3):419, 2013
- 3) 日本褥瘡学会:褥瘡関連項目に関する指標:12-14, 2018
- 4) 前掲書1)

手術室入室後からのプレウォーミングの 有効性について

洛和会音羽病院 看護部 手術センター
○倉谷明優・川瀬智絵・村松麻莉萌・佐伯こころ・森谷春香・山本真奈美

【キーワード】 プレウォーミング、手術室、全身麻酔、体温管理

〈背景・目的〉

術中低体温は、出血量の増加や術後感染などのリスク因子である。全身麻酔で行う口腔外科の手術では、露出部位が限定されているが、レミフェンタニルを多量に使用するため、体温低下をきたしやすい。そのため口腔外科手術の症例を対象とし、患者が手術室入室後から麻酔導入前の数分間プレウォーミングを実施することで、体温低下をどの程度予防できるかを明らかにする。

〈方法〉

口腔外科骨切り(LeFort1型、IVRO、ILRO、SSRO)、抜釘+Genioの手術を受ける18～60歳までの男女を研究対象者とする。手術室入室後から全身用の温風加温装置を用いて約5分間の加温を行い、手術中は38度の設定で加温を一定に行う。評価は膀胱温度センサーで行い、執刀前の体温、手術中の一番低い体温、手術終了時の体温で評価する。

〈結果〉

研究対象者は男性1人、女性2人で平均年齢は32歳であった。膀胱温度センサーの平均値は執刀前36.1度、手術中の一番低い体温35.8度、手術終了後37.2度であった。手術中の体温低下の平均は0.2℃であった。すべての対象者に術後のシバリングはみられなかった。

〈考察〉

手術室入室後からプレウォーミングにより麻酔導入後の体温低下が抑制され、術後のシバリングも認められなかったことから、短時間の加温でも低体温を予防できることが明らかになった。当院に既存の機器を活用してプレウォーミングを実施できたため、専用の機器を新たに購入することなく、限られた資源でも十分に対応可能であることが確認された。

〈結語〉

手術室入室後からのプレウォーミングは、術中の低体温や術後のシバリング予防に有効であり、当院の機器でも対応可能であった。今回口腔外科の症例を対象としたが、体表露出の多い開腹症例や腹腔鏡下での手術症例でも検証し、術中の体温低下を予防できるように取り組んでいきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 鈴木聡:周術期酸素投与、周術期体温管理と術後予後(手術部位感染を中心に)、麻酔70巻9号:945-950 2021
- 2) 関根秀介、横山雄樹、萩原幸彦、他:神経麻酔アップデート 体温管理療法の現状、日臨麻会誌40(2):172-177 2020
- 3) 中田仁美、内藤祐介:周麻酔器看護師からみた術中体温管理:理想と現実のギャップを埋める! :2023

ICU入室患者におけるせん妄スクリーニング 陽性割合の調査 ～外科患者を対象にしたアセスメントツールの比較～

洛和会音羽病院 看護部 ICU・CCU

○石橋紗理菜

【キーワード】せん妄 CAM-ICU(Confusion Assessment Method for the Intensive Care Unit) ICDSC(Intensive Care Delirium Screening Checklist)

〈背景・目的〉

ICUにおけるせん妄スクリーニングとして過去の情報から評価するICDSCと現時点の情報で評価するCAM-ICUが存在する。当院ICUにおいてそれぞれの評価ツールでの陽性割合を調査したので報告する。

〈方法〉

対象は2025年2月から3月に当院のICUに入院した外科の全患者62名(平均年齢73歳、男性39名、女性23名)を対象に、後ろ向き研究観察を行った。せん妄の評価はCAM-ICUとICDSCを使用して毎日各勤務評価を行った。ICU入院期間中に1度でも陽性になった患者を陽性有りと定義した。

〈結果〉

対象者は62名であった。CAM-ICUのみで陽性になった人数は9名(15%)で、ICDSCのみが1名(2%)であった。両方で陽性であったのは4名(6%)であった。

〈考察〉

ICDSCは一定時間のせん妄評価に基づくツールであり、CAM-ICUは特定の時間(現状)を評価している。ICUにおいてCAM-ICUの方がよりせん妄発症を表していた。ICDSCでは、せん妄を発症した患者の半分以上を見逃していた。評価スケールは、より患者の状態を明確に表すツールとしてその選択は重要であり、呈しては患者の予後に影響を与える。定期的に多職種での評価を共有し予防的介入を継続していくことが望ましいといえる。

〈結語〉

ICU入院患者におけるせん妄評価はICDSCとCAM-ICUの両方を実施した方が良い可能性がある。

〈Webサイト・電子資料〉

清水真人(2022年) . 〈CAM-ICU、RASSスコア〉集中治療室患者のせん妄評価方法とは?

<https://hokuto.app/post/tnwQWpo4Fxl3OqFlKzPv>(閲覧日:2025年2月1日)

回復期リハビリテーション病棟における、夜間の移動・ 移乗のADL評価を看護師が判断するための基準 ～フローチャート作成に向けて～

洛和会音羽リハビリテーション病院 4A病棟

○田中梨伽

【キーワード】ADL評価 評価基準 実態

〈背景・目的〉

患者の自立支援と転倒予防の両立が求められる中、夜間の移動・移乗のADL評価(移乗・移動)の判断基準がなく、経験年数によって判断基準や視点に差がある可能性が指摘されている。この実態を明らかにし、当病棟における判断基準のフローチャートを作成したいと考える。

〈方法〉

回復期リハビリテーション病棟(A病棟、B病棟)で夜勤帯に勤務している看護師に対し、質問紙を作成し書留法による無記名自記式でアンケート調査。回答された記述を内容分析の手法を用いて分析する。

〈結果〉

アンケート結果から評価項目の内容に有意な差は認められなかった。経験年数が豊富な看護師は、共通の評価項目に加えて、ナースコールが押せるか、疼痛の有無、指定された正しい歩行補助具を使用しているか等の多角的な視点からの評価が多かった。

〈考察〉

評価項目の内容に有意な差はないが、経験年数が浅い看護師は評価の数が少なく、経験年数が豊富な看護師は評価項目が多い。よって経験年数により評価視点の数に差がみられたことから、判断のばらつきが患者の自立支援に影響を及ぼす可能性が示唆された。今後は一貫性のある判断基準の整備が必要である。

〈結語〉

明らかになった実態をもとに当病棟で判断基準のフローチャートを作成することで、経験年数を問わず一貫性のある夜間の移動・移乗評価ができる。

〈参考・引用文献〉

- 1) 一宮禎美:「看護・介護10か条」でスッキリわかる回復期リハビリテーション看護 MCメディカ出版 リハビリナース 通巻110号(P11)2023
- 2) 長谷川翔:回復期リハ病棟で、看護師はなにすればいいの?まずはこれだけ!リハ看護入門 株式会社メディカ出版 リハビリナース 通巻114号(P25)2024

救急病棟に緊急入院される高齢者の口腔状態を評価してみて

洛和会音羽病院 2B病棟

○中濱麻里

【キーワード】 口腔ケア、OHAT-J、救急病棟、高齢者

〈背景・目的〉

A病棟は救急病棟で、緊急入院の患者は身体的ケアや処置が優先されて口腔ケア介入への意識が希薄となってしまう現状がある。今回、緊急入院された患者の要介護度・認知症自立度・入院前の生活場所とOHATを用いて口腔内環境を知ることによって今後の口腔ケアに活かすことを目的とした。

〈方法〉

観察研究で65歳以上の患者を対象に、入院時のOHATスコアについて1か月間分析し、評価を行った。

〈結果〉

65歳以上151名(全体の83%)を対象にOHATスコアの分析を行った。それぞれOHATスコアに基づく平均点より見ていく。要介護度別では、介護度が高くなるにつれてOHATスコアも上昇していく傾向があった。その中でも要介護2の患者はOHATの2点(病的)が多かった。次に日常生活・認知症自立度との関連についてはOHATスコアの結果にばらつきが大きく、特徴を掴むことは困難であった。

生活環境においては、施設入所者のOHATの平均点が5点と最も高い結果となり、独居の患者の平均点が一番低い結果を示した。

〈考察〉

介護認定1-2の患者は特に口腔状態を観察した上で介入・指導を行い清潔が保てるように介入が必要なのではないかと考えられる。

また、独居患者は患者本人だけでなくその患者家族にも指導していき、施設入所中の患者も同様に患者に関わる施設職員にも指導を行い、患者の口腔内環境の清潔を保てるように介入を行うことが必要である。

〈結語〉

実際に口腔ケア介入をする際には日常生活・認知症自立度のみで指導の有無を判断するのではなく、患者の状態に合わせて介入を行っていくことで、口腔内の清潔を維持でき、また改善に繋がる。

〈参考・引用文献〉

脳血管疾患患者への効果的な口腔ケアの取り組みに向けて ―口腔ケアプロトコルOHATを活用して― 長岡中央総合病院、7階東病棟:看護師 稲川優花、森 彩香、本田珠代

口腔ケアの手技とケア用品の選択. 看護技術 2018;64:35. 小原由紀

みなし訪問看護の成果

～早期介入し在宅へつなぐことの意義についての一考察～

洛和会音羽病院 看護部 医療介護サービスセンター 入退院支援センター

○渡邊道子

【キーワード】 みなし訪問看護、早期介入、再入院予防

〈背景・目的〉

2023年12月より当院の入退院支援センターでみなし訪問看護を開始した。開始後1年間のみなし訪問看護の現状と動向について報告する。

〈方法〉

2023年12月～2024年11月の期間で、みなし訪問看護を使用した患者を対象に後ろ向き研究を行った。患者数、年齢、依頼先、再入院の有無、介護保険の有無、引継ぎ先について調査を行った。

〈結果〉

対象期間内にみなし訪問看護を利用した患者は63名であり、うち74歳以上が69.8%を占め、依頼先は循環器病棟と外来(救急外来含む)からが多く、1週間以内に再入院になった患者は6名であった。またみなし訪問看護からの引継ぎ先としては、訪問看護が22件、地域包括支援センターが13件、居宅介護支援事業所8件、往診1件、引き継ぎ先なしは13件であった。

〈考察〉

高齢者は複合疾患を抱えている方が多く、自宅退院後も継続的な医療的管理が必要なケースが少なくない。しかし、高齢者世帯や独居世帯では、本人や家族による管理の継続が困難な場合も多く見受けられる。そのような状況において、退院直後からの早期介入を可能とする「みなし訪問看護」は、病院と在宅をつなぐ重要な役割を担っていることが分かった。看護師が専門的な視点から問題点を明確にし、必要なサービスへつなぐことで、地域での生活を継続するための一助となっていることが分かった。

〈結語〉

みなし訪問看護による病院と在宅をつなぐ取り組みにより、医療的管理の継続が可能となるだけでなく、患者・家族の不安軽減、地域資源の活用促進、そして地域包括ケアの推進にも寄与できる。

〈参考・引用文献〉

木村恵美他:救急外来看護師の帰宅支援における困難事例への対応, 新潟県立看護大学紀要Vol.14.2025

大麻康之他:救急搬送後に帰宅支援フローチャートを用いて、帰宅時支援が必要と判断された患者の特徴, 日本救急看護学会雑誌25, 2022

鈴木誠:高齢者心不全の再入院予防策, 心臓Vol.51.NO10.2019

看護小規模多機能サービスにおける理学療法士・言語聴覚士の配置による連携の必要性和課題

洛和会訪問看護ステーション壬生

○米田智尋・藤田悠恵・庵晃人

【キーワード】 看多機、リハビリ、多職種連携

〈背景・目的〉

看護小規模多機能型居宅介護(以下、看多機)に昨年度からPT/STが訪問看護ステーションと兼任で配置された。そこで、機能訓練や介助方法等、アドバイスが効果的か、また今後の連携強化や課題を考察するためアンケート調査を行った。

〈方法〉

看護師・介護職員に対し、PT/ST配置前後での変化、連携の必要性、課題に関するアンケート調査を実施。自由記載の中から課題を抽出した。

〈結果〉

スタッフからリハビリ職に対し、施設内での介助方法、自宅での問題、家族から相談を受ける等、多様な場面で相談をしたい状況にあると分かった。また、看護師からは個別のリハビリメニューやポジショニングの相談が多かった。相談の機会ができ、介助方法や福祉用具の適切な利用、スタッフが自信を持てる等の意見があったが、一方で、スタッフ間での連携不足が課題であった。連携については、コミュニケーション不足、伝達方法が統一されていない、質問や情報共有する場が整備できていないこと等があった。

〈考察〉

看多機は、利用者の介護度が比較的高く、通所・宿泊・訪問で施設内や自宅と様々な場でサービスを提供している。そのため、困難な場面や検討する内容が多様である。介護方法の検討で介護負担の軽減が出来たことに加え、訪問看護リハビリ兼任のリハビリ職が施設・自宅を含めた助言を行うことで、実際の生活に生かしていると考ええる。ただ、連携の機会としてはまだ少なく、業務が多忙で質問する機会が少ない、スタッフ間で困っていることを共有、解決する場がないという意見もあり、今後の課題である。

〈結語〉

今後、共有ツールの強化や積極的に相談していくことで、機能訓練の場としての看多機能の発展にも取り組んでいきたい。

がん終末期療養者の訪問リハビリ導入における訪問看護師と訪問リハビリ専門職との連携・協働に関する質的研究

洛和会訪問看護ステーション大津サテライトGRe-Ns 唐崎

○坂口里香・東山智美・小北真紀子

【キーワード】 がん終末期療養者、訪問看護、訪問リハビリ、多職種連携

〈背景・目的〉

訪問看護を利用するがん終末期療養者が訪問リハビリを希望するケースが増えている。そこで、訪問リハビリをより安全・効果的に実施するため、本研究は、訪問看護師と訪問リハビリ専門職がどのように連携すれば良いか明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

洛和会大津エリアの3訪問看護ステーションに勤務し、がん終末期療養者の訪問を行っている訪問看護師5名と訪問リハビリ専門職(理学療法士)5名に、半構造化面接を行い、内容分析を用いて分析した。

〈結果〉

がん終末期療養者の訪問リハビリ導入におけるリハビリ専門職との連携について、【療養者の状態の変化の把握】、【療養者の状態に合わせたリハビリ目標の設定】、【療養者・家族の変化する想い】、【療養者の疼痛・苦痛の緩和】、【職種間の情報共有の工夫】、【リハビリ専門職の不安への対処】の6つのカテゴリーが抽出された。

〈考察〉

がん終末期療養者の訪問リハビリにおいて訪問看護師とリハビリ専門職は、療養者・家族の心情の変化を感じ取り、療養者の疼痛・苦痛の緩和を図るため、状態変化を把握し、リハビリ目標の設定につなげていた。また、職種間の情報共有方法を工夫し、リハビリ専門職の不安の対処も行いながら、より安全・効果的なリハビリの実践ができるよう連携していた。

〈結語〉

がん終末期療養者がより安全・効果的にリハビリを受けることができるよう、情報共有できる体制強化が必要である。

〈参考・引用文献〉

- 1) 小暮英輔, 原毅, 大沼剛, 阿部勉, 鈴木陽一: がん疾患終末期患者に対する訪問リハビリテーションの認識調査-リハビリテーション専門職を対象としたアンケート調査-, 理学療法東京 9: 41-45, 2021
- 2) 小俣若子, 江面昌美, 熊木綾子, 猪俣聖子, 小池恵美, 中村亜希子, 藤中英彦: 「最後まで過ごしたい」患者と妻の想いをかなえることができた背景の考察-終末期在宅医療を支える緩和ケア認定看護師、訪問看護師の役割とは何か-, IRYO 77(2):138-143, 2023
- 3) 目良幸子: 訪問リハビリテーションでの看取りの経験から, 大阪理学療法ジャーナル 38(1):37-41, 2024
- 4) 川村幸子: 在宅緩和ケアにおける訪問看護師の役割と理学療法士との連携, MB Med Reha 284:26-31, 2023

退院支援へ繋げるための看護実践の現状とジレンマ

洛和会音羽病院 3A病棟

○木津遥

【キーワード】 退院支援 ジレンマ 看護実践

〈背景・目的〉

在院日数の短縮や患者の高齢化が進む中、看護業務は複雑化かつ高度化する中で退院支援が退院調整に留まる傾向が指摘されている。そこで地域移行を見据えた退院支援の看護実践の現状とジレンマを明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

対象：急性期病棟勤務2年目以上の看護師5名

研究方法：半構成的面接を行い、内容分析をした。

〈結果〉

看護師は患者の意思を尊重しつつも、在院日数の短縮で支援が行き届かないといった【退院支援の思いと現実】を感じていた。さらに、日々の業務の多忙さが重なり【退院支援における困難とジレンマ】を引き起こしていた。【多職種連携】の必要性は強く感じており、多職種で必要な支援内容を可視化することで病棟での看護実践に繋げようとしていた。実践では【退院支援の認識と構造】において入院時から退院を見据えた支援の必要性を感じていた。

〈考察〉

急性期病院における看護師は患者の退院後の生活を尊重しようとする強い思いを抱いている一方で、現実ではその実践が困難であるジレンマを抱えていることが明らかになった。このジレンマを解消するには、退院支援に関する知識の定着、多職種連携の構築、そして病棟全体で退院支援体制を構築することが重要であると考えた。

〈結語〉

看護師は退院支援を「退院後の生活を見据えた継続的な支援」として認識しているが、日々の業務と多職種連携間でジレンマを抱えていることが明らかになった。経験の有無によって支援の質に差が生じていることがあり、知識を補う教育支援の必要性が求められる。今後は看護師個人に負担が集中するのではなく、病棟全体で支援体制を構築していく必要がある。

〈参考・引用文献〉

- 1) 永田智子:入退院支援の重要性 Journal of CLINICAL REHABILITATION
- 2) 原 裕子:急性期病院看護師の患者の退院後の生活を見据えた看護実践に関する認識の現状と課題 日本慢性看護学会誌 第16巻 2022年

選ばれる訪問看護ステーションの要因

洛和会訪問看護ステーション宇治

○長谷川裕恵

【キーワード】 訪問看護ステーション、選定要因 ケアマネージャー 連携、信頼性、サービスの質、地域包括ケア、在宅医療、利用者満足

〈背景・目的〉

近年、地域包括ケアの推進に伴い、訪問看護ステーションの役割がますます重要視されている。特に新規開設ステーションにおいては、地域内外のケアマネジャー(CM)からの信頼獲得が、利用者の安定的な確保と事業継続に直結する。本研究では、選ばれる訪問看護ステーション(訪看)の要因を知ることである。

〈方法〉

洛和会グループに所属するCM146名を対象に、2025年7月9日から17日にformsでアンケート調査を行った。アンケートの内容は、訪看を選択する時に大事にしている要因、チラシに記載があったほうが良い事項、チラシ以外で訪看を知る手段を質問した。回答は選択肢および自由回答とした。

〈結果〉

123名から回答を得た(回答率84%)。訪看を選択する時の大事な要因として最も多かったのは「迅速対応」で、続いて「24時間対応」、「多職種連携のしやすさ」であった。チラシに記載があったほうが良い事項として、最も多かったのは「強みや売り」、続いて「空き情報」、「スタッフの経歴と資格」であった。チラシ以外で訪看を知る手段として最も多かったのは「CM事業所内での情報」、続いて「医療機関からの紹介」、「地域包括支援センター」と「インターネット」であった。

〈考察〉

選ばれる訪看の要因としてもっとも大事であったものは「迅速対応」であった。訪看は依頼対応など含めて迅速に対応できる体制にしておくことが重要だと認識する必要がある。

〈結語〉

訪看が選ばれる最も重要視されていた要因は「迅速対応」であり、依頼への即時対応や緊急時の柔軟な体制が、CMからの信頼獲得に直結することが示された。訪看は、今後ますます多様化、複雑化する在宅ニーズにこたえるためにも迅速対応体制の整備とCMとの円滑な連携を重視する必要がある。これにより、地域包括ケアの中核としての役割をより一層果たすことが期待される。

〈参考・引用文献〉

- 日本在宅ケア学会誌 4 (1), 94-101, 2000
一般社団法人 日本在宅ケア学会

看取りプロセスにおける家族支援の実際 ～余命「2年」と「2ヶ月」の誤解～

洛和ヴィラアエル

〇別府美穂

【キーワード】 介護施設、看取り、家族支援

〈背景・目的〉

本事例は、医師が「余命2ヶ月」と説明した際、指で「2」を示した事で家族が「2年」と誤認し、看取りの時期や最期の場所に迷いが生じたケースである。家族への支援を振り返り、今後の家族支援の一助を得る。

〈方法〉

A氏は慢性腎不全と膵臓がん末期で看取りとなった。医師の非言語的表現により家族が余命を誤認し、最期を迎える場所に迷いが生じた。各職種の記録を基にケアの過程を整理した。

〈結果〉

医師の「2」というジェスチャーにより余命を誤認し、家族は「最期を施設で迎えるか、病院か」と迷った。そこで、①多職種が家族来設時に必ずコミュニケーションをはかり、時間をかけて家族の想いに耳を傾けた。②看護師が病状説明の機会を設けて家族の現状理解を支援した。結果、家族は施設を選択し、A氏は穏やかな最期を迎える事ができた。

〈考察〉

看取り期の家族支援には、家族の苦悩を共有する姿勢が重要である。佐藤は、1)「看取り期における看護師の役割として、他職種との調整や情報提供が不可欠であり、特に医師との連携が家族の意思決定を支えるために重要である」と述べている。本事例でも、透析室との連携が家族の現状理解を深め、意思決定に寄与した。

〈結語〉

本事例から、医療者の非言語的表現は家族の理解に影響することがわかった。今後は非言語的表現への配慮を行い、職員間の情報共有を進め、家族の意思決定を支える看護をさらに深めていきたい。

〈参考・引用文献〉

1) 佐藤れい子:絵で見るターミナルケア.p80. 学研メディカル秀潤社.2015

「今が人生で一番幸せな時」 ～訪問看護ステーションとの合同カンファレンスで見えてきたこと～

洛和会医療介護サービスセンター四条鉾町店

〇橋本知香

【キーワード】 看取り、多職種連携、家族支援

〈背景・目的〉

A氏のケース終結後、不全感を覚えたため、振り返りのための合同カンファレンスを訪問看護事業所と開催。その後担当したB氏のケースでは、カンファレンスの成果がみられたと考えられたため、その詳細を明らかにする。

〈方法〉

訪問看護ステーションとの合同カンファレンスを振り返り、「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」及びガイドラインに沿って作成されたチェックリストを参考に、2つのケースを対比した。

〈結果〉

カンファレンス前のA氏のケースでは、ターミナル期にもかかわらず、主治医の関わりが薄く、家族は現在の状態が把握できておらず、見通しも立っていなかった。支援者も主治医に十分な働きかけが出来ていなかった。一方、カンファレンス後に支援したB氏のケースでは、主治医を中心に支援者も状況に合わせて家族の意思を確認でき、サービス事業所間で共有が図れていたことが明らかになった。

〈考察〉

A氏の支援を振り返り、訪問看護ステーションと居宅介護支援事業所で合同カンファレンスを実施した。その中で訪問看護・ケアマネの役割、主治医を交えたチームアプローチについて全体で共有できたことが、次の支援となるB氏の支援につながった。ガイドラインに照らし合わせることで、それがより明確になった。

〈結語〉

在宅での看取りにおいては、ガイドラインやターミナルケアマネジメントマニュアルを確認しながら、支援者と共に活用することが望ましい。そうすることによりB氏のように「今が人生で一番幸せな時」と本人が思え、家族も満足いく最期が送れるのではないかと考えられる。

〈参考・引用文献〉

厚生労働省 人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン

厚生労働省 ターミナルケアマネジメントマニュアル 島原半島介護支援専門連絡協議会編集

遺族調査結果を使用した緩和ケアのアウトカム評価 ～看護師のアンケート調査結果を踏まえて～

洛和会音羽病院 4C病棟
○高崎桃恵・塩尻実希・山本美生

【キーワード】 終末期、緩和ケア、遺族ケア、看取り、遺族調査

〈目的〉

A病院の遺族調査の結果を把握して、それに対する看護師の認識を調査する。

〈方法〉

遺族調査は日本ホスピス・緩和ケア協会が実施した「遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究」の中から、亡くなる前一月間の入院中に患者がどのように感じていたかに関する質問項目を使用。データは202x年2月から202Y年8月のものを使用。7段階評定尺度法により、全国と比較して5%以上肯定的に感じていた項目と、ネガティブに感じていた項目をA病院の特徴として抽出。差が出た理由についてA病院緩和ケア病棟の看護師10名にアンケート調査を実施。対象者には個人が特定されないように匿名化、情報の管理について、また、学会で症例報告として発表することを書面で説明し、同意を得た。

〈結果〉

全国と比較して肯定的に差を認めた理由は、「痛み」に対して患者および医師との話し合いがよくできていたからという結果であった。否定的に感じていた項目に対しては、患者や家族の望みや意向を確認し、思いに耳を傾けることがポジティブな評価につながるという認識であった。

〈考察〉

遺族調査の結果を使用することでA病院の緩和ケア病棟は、痛みやからだの苦痛などの身体的症状緩和に関するケアが強みであり、セルフケア能力の補完については不足していることが把握できた。

〈結語〉

患者や家族の思いを尊重し、一緒に大切にすることを課題があることがわかった。

〈参考・引用文献〉

- ・宮下光令他:遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究. 4:16-26、134-136、 JHPF(公財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団、2020
- ・恒藤暁他:系統看護学講座 別巻 緩和ケア:84-93 125、医学書院、2019年
- ・NPO法人 日本ホスピス緩和ケア協会特定非営利活動法人:「日本ホスピス緩和ケア協会」: https://www.hpcj.org/staff/st_index.html、2024年、(閲覧日2024年6月10日)

認知症研修によるスピーチロック(言葉による拘束)の使用状況の変化と課題

洛和会音羽病院 2C病棟
○栗林愛美・北中希

【キーワード】 認知症、スピーチロック、拘束

〈背景・目的〉

スピーチロックの軽減にむけた取り組みとして、昨年度の当病棟の課題として挙げた、認知症に関する理解を深めるための勉強会を実施し、勉強会前後に意識調査を行うことで病棟スタッフのスピーチロックの使用状況の変化を明確化し、認知症患者の特徴を理解することがスピーチロックの軽減に有効であるかを明らかにしたい。

〈方法〉

昨年度と同様のスピーチロックに対するアンケートを病棟所属の全看護師(15名)に対して実施。勉強会前・勉強会後の計2回アンケートを行う。アンケートにより得られたスピーチロックへの意識・関わりの実際を、勉強会前後で比較し、考察していく。

〈結果〉

1回目のアンケートを実施した結果、スピーチロックの認知度は高い傾向にあったが、介助業務中に無意識に使用される傾向があり、患者に心理的・行動的な影響が見られた。使用理由には業務負担や安全確保が挙げられ、朝夕食時に集中していた。教育後の2回目では理解が深まり、削減への意欲が高まり、メラビアンの法則やロールプレイ研修など、具体的な改善策が多く挙げられた。

〈考察〉

勉強会実施後のアンケートでは、スピーチロックに対する理解と削減意識がより明確になっており、言葉遣いや態度への配慮が進んでいることが示唆される。業務負担や安全確保の中で、倫理的な対応を模索する姿勢が強まっている。

〈結語〉

継続的な教育と職員間の意識共有が、スピーチロックの削減に向けた鍵となる。今後は、具体的な対応策や研修の充実を図ることで、より良いケア環境の構築が期待される。

〈参考・引用文献〉

- 清水径子 栗栖昭雄 渡邊一平 横山奈緒枝:言葉による抑制(スピーチロック)に関する介護老人保健施設職員の認識と実態より-日本認知症ケア学会誌 15(3)624-633, 2016

口演 37

地域包括ケア病棟における退院支援の現状
～患者のQOL向上に繋がる家族カンファレンスに向けて～洛和会音羽リハビリテーション病院 2A病棟
○岸本七海・南紗耶香・福島希望・小森やよい【キーワード】 家族カンファレンス、多職種連携、在宅サービス、
情報収集、地域包括ケアシステム

〈背景・目的〉

地域包括ケア病棟に勤務する看護師は、退院支援において多様かつ重要な役割を担っている。中でも家族カンファレンスは患者の退院後の生活を多職種で共有する重要な場である。退院支援の現状と課題を把握し、質の高い家族カンファレンスの実現に向けて検討する。

〈方法〉

地域包括ケア病棟に勤務する看護師20名を対象に、家族カンファレンス参加時の不安について多肢選択型方式で質問紙を用いて行った。

〈結果〉

不安を感じている看護師のうち、56%が新人・中堅看護師であった。要因としては、【退院支援の仕組み】10%、【情報収集・事前の準備不足】52%、【精神的不安】38%であった。また、【精神的不安】と回答した看護師のうち71%が新人・中堅であり、経験年数による差が示唆された。

〈考察〉

都築 ら1)は「病棟看護師の退院支援の実践を高めるためには、病棟看護師が常に患者の退院を見据え、院内多職種に対して積極的に情報収集し、院外地域関係職種へ速やかに対応することが重要であった」と述べている。本研究で、事前準備の不足が不安の主因であり、また、新人・中堅看護師は精神的不安が大きい事が明らかとなったことから、これまで行ってきた事前準備を強化・徹底することで、不安の軽減とカンファレンスの質向上に繋がると考えられる。

〈結語〉

事前の情報収集や準備を十分に行う事で不安を軽減し、家族カンファレンスの内容を充実させることができる。今後は、患者情報や在宅サービスを整理できるツールを作成し、事前準備支援体制を整えることで質の統一を図っていく。

〈参考・引用文献〉

1) 都築 久美子、宇城 令：「病棟看護師の退院支援の実践に影響する要因」, 日本看護管理学会誌: https://www.jstage.jst.go.jp/article/janap/27/1/27_112/_pdf/-char/ja, 2023年、(閲覧日:2025年7月26日)

口演 38

外来化学療法室で治療を受ける患者の満足度調査

洛和会丸太町病院 外来
○中野遥・森田友香里・二町恭子

【キーワード】 外来、看護師、化学療法室、患者満足度調査

〈背景・目的〉

がん罹患患者の増加に伴い、A病院では外来化学療法にて治療を受ける患者が、5年間で約2倍となった。スタッフ数を増員し対応しているが、専任看護師が不在の状況で、患者に対して最適な治療法や快適な環境が提供できている状況であるのか疑問を抱いた。そこで、外来化学療法室で治療を受ける患者に対して、医療・看護の提供に関する患者満足度(アンケート)調査を実施し、質の高い医療・看護の提供に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

外来化学療法室で治療を受けている患者18名に対し、25項目5段階評価表+自由記述のアンケート調査を無記名に実施した。

〈結果〉

回収率は100%そのうち白紙回答は除外し最終的に17名を対象とした。回答内容の結果、5段階総合評価では、心理的サポート面について4・5の評価が9割以上であった。しかし、「待ち時間(診察・会計)」に対して2・3の評価割合が7割以上であった。自由記載では、肯定的な意見とほぼ同数の改善を求める意見があった。

〈考察〉

心理的サポート面において、5段階評価は高いが担当看護師を同じにしたいなど、改善を求める記述があり、社会情勢の変化や患者・家族の意向に沿ったサポート体制をより一層強化していく必要があると考える。また、設備・環境面を整備が質の高い医療・看護の提供には重要と示唆される。

〈結語〉

患者の質の高い医療・看護提供に影響を与える要因は、個別性のある心理的サポートと、設備・環境の整備であった。

〈参考文献〉

1) 大村貴子他:外来化学療法室で安心して治療の完遂を目指すために―治療環境に関する満足度調査―, 日本農村医学会雑誌 67:347, 2018.
2) 紫垣美和他:化学療法室における患者満足度の検討―外来化学療法を受ける患者の要望の変化をとらえるために―, 多根医誌 3:65-70, 2014.

入院化学療法を受ける患者の不安とニーズ

洛和会音羽病院 1D病棟

○辻川絵理

【キーワード】入院、化学療法、不安

〈背景・目的〉

入院化学療法は身体的・精神的負担が大きく、患者は治療に対する不安を抱えている。看護師は患者の思いや支援ニーズを的確にくみ取ることが難しく、対応に悩む場面も多い。本研究では、患者の不安やニーズを明らかにし、精神的・身体的苦痛の緩和につながる看護支援の一助とすることを目的とする。

〈方法〉

入院化学療法を受ける患者を対象に、治療中に感じる不安や看護師に対して求める支援について質的に分析する。（前向き研究）

〈結果〉

患者は治療に伴う副作用や今後の治療計画に対する不安を抱えており、看護師に対しては、検査や処置の説明、薬剤の副作用や効果、退院後の治療方針など、具体的かつ実践的な情報提供を求める傾向が見られた。

〈考察〉

患者の不安やニーズを的確に把握するためには、看護師による丁寧な説明と、患者の理解度に応じた情報提供が重要である。

〈結語〉

入院化学療法を受ける患者の不安やニーズを明らかにすることで、看護師が患者の思いに寄り添った支援を行うための知見が得られ、精神的・身体的苦痛の緩和につながる看護の実践に貢献できると考える。

〈参考・引用文献〉

林千春・国府浩子(2010)「化学療法を受けるがん患者に対する看護の実践状況と関連要因」日本がん看護学会誌, 24(3), 33-40.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjscn/24/3/24_33/_pdf

外来の業務改善を目指すための
クラークとの協働

洛和会音羽病院 外来

○上山雅子・山本相子・上田奈津子・宗由里子・福田紘

【キーワード】外来、クラーク、協働

〈背景・目的〉

外来では、看護師だけではなくクラークも外来診療補助業務を行っている。しかし、クラークは医療的教育を受けておらず、診療補助業務において判断に困る場面がある。そこで、クラークの不安や疑問を抽出し、安心して業務に従事できるようにすることを目的とした。

〈方法〉

クラーク10名に対し、診療補助業務において不安がある項目に対して無記名のアンケートを実施した。

不安がある項目に対する勉強会を行い、更に看護師が速やかにフォローできる体制を約2週間設け、後に同様のアンケート調査を行い前後で比較した。

〈結果〉

不安が多くみられた「生活関連」に関する項目に対して勉強会を行った。また、看護師がクラークをフォローする体制を2週間トライアルで設け、業務中の相談や支援が可能な環境を整えた。本研究は継続中であり、勉強会および看護師フォロー体制による成果は今後明らかにしていく予定である。

〈考察〉

外来では、看護師と同様にクラークも診療補助を担う重要な役割を果たしており、両者の連携が業務の円滑化と患者対応の質向上につながる。看護師が専門的な保健指導や処置に集中できる環境を整えるためにも、クラークとの協働体制の強化は今後の外来業務改善において欠かせないと考ええる。

本研究が終了した後に、事後アンケートで明らかになった結果をもとにさらに考察を深めることとする。

〈結語〉

外来診療においてクラークの介入は必須であり、クラークの教育や応援体制を確立し協働することは外来看護の充実や質向上につながる。

〈参考・引用文献〉

1) 越戸和代 他:タスク・シフト/シェアに関する実態調査の結果報告と考察, 看護展望2025.3

2) 望月泉 チーム医療における看護職の業務の明確化, 病院2018.5

3) 坂本すが 他:タスクシフト・シェア実践ガイド2022春季

頰椎症性脊髄症患者に対して 運動連鎖に着目して介入した理学療法経験 ～筒井先生からの学び～

洛和会丸太町病院 リハビリテーション部
○廣津昂

【キーワード】 頰椎症性脊髄症、運動連鎖、筒井先生

〈背景・目的〉

症例は60歳代女性。頰椎症性脊髄症により上下肢のしびれ、手の使いづらさ、歩行障害があった。頰椎椎弓形成術(C2-6)施行後、特別講師筒井廣明氏の学びを参考に、運動連鎖に着目した理学療法介入により立ち上がり動作および歩容が改善した事例を報告する。

〈方法〉

評価に基づき、大腿直筋への押圧刺激、第1・2中足骨間へのインソール挿入、スクワット位での左右重心誘導を行い、立ち上がり時および歩行時の前方重心誘導および側方安定性の改善を図った。

〈結果〉

介入後、即時的に大腿直筋およびハムストリングスの筋緊張が緩和され、体幹前傾位での股関節屈曲筋出力が向上した。また、スクワット位での左右重心移動幅が拡大し、ふらつきが減少した。さらに、立ち上がりは足尖から母趾球にかけて荷重でき、後方重心位が改善され、努力性が減少した。歩行は歩幅拡大や歩行速度上昇を認め、側方安定性も向上した。

〈考察〉

大腿直筋の押圧による抵抗運動で大腿四頭筋およびハムストリングスの高緊張が緩和された。また、インソールにより足尖および母趾球が促した。これらのことで、姿勢アライメントや荷重位置が改善し、前方へ重心が変化、側方安定性限界が拡大したと考えられる。

〈結語〉

頰椎症性脊髄症患者における、運動連鎖に着目した理学療法介入は立ち上がり動作および歩行を改善させる。

リハビリテーション初期介入における転倒・ 転落リスク評価の標準化に向けた取り組み

洛和会丸太町病院 リハビリテーション部
○池田凱・桜井貴広・山下航生・西野昌宏・関彩花・海野智也・
櫻井玲奈

【キーワード】 転倒予防、初期介入、環境調整、理学療法評価、作業療法評価

〈背景・目的〉

医療機関における転倒は骨折など重篤な合併症を招き、入院期間の延長やQOL低下につながる。当院でも前年度216件の転倒が発生しており、その予防は喫緊の課題である。現状、病棟では看護師をはじめとする多職種が予防策に取り組んでいるが、リハ職においてはセラピスト個々の判断に委ねられている部分も多く、新人セラピストでは転倒リスクの適切な評価や予防策の立案が不十分な場合がある。そこで、リハ初回介入時に使用できる統一スケールの作成を目指し、その構成要素を検討した。

〈方法〉

2025年6月に文献から転倒要因と対策を収集。7月にはインシデントレポートを分析して事象を把握、身体機能・認知機能に大別して評価項目を選定。8月には分析結果から発生場面や要因を抽出し、当院に適した基準を決定。9月より初回介入時に使用を開始し、10月に効果検証を予定している。

〈結果〉

作成した評価スケールをリハ初回介入で使用。今後現場での有用性を検証する予定。

〈考察〉

本スケールはインシデントレポートの分析を基盤に当院の実態を反映した点に特徴がある。これにより当院の転倒件数の軽減が期待され、新人でも一定基準に基づいた評価が可能となる。一方、対象外領域への対応は今後の課題である。

〈結語〉

本スケールは初期評価の標準化や情報共有のツールとして有用である。また、経験年数を問わず体系的な評価を可能とし、転倒予防体制の強化に寄与すると考えられる。

ResMoを用いた労作時の呼吸運動 モニタリングの試み

洛和会丸太町病院 リハビリテーション部

○阿部駿也

【キーワード】 ResMo、呼吸指導、胸郭可動性、酸素飽和度

〈背景・目的〉

呼吸器疾患患者における呼吸運動の客観的評価は、診断・評価・指導として重要である。呼吸モニターシステムResMo（エアウォーターメディカル社）は、非侵襲かつ高精度に呼吸運動を計測可能である。今回、気管支肺炎入院患者に対するResMoを用いた呼吸評価の活用事例を報告する。

〈方法〉

症例は、87歳女性、BMI23.7、自宅内ADLは自立、屋外歩行器歩行使用。入院数日前から咳嗽と発熱、食事摂取困難となり気管支肺炎の診断で入院した。評価は入院5日目(初期)と入院10日目(最終)に実施。呼吸指導(吸気2歩・呼気4歩のリズム歩行)の有無による通常歩行について ResMoを用いた客観的指標を用いて比較した。

〈結果〉

初期評価では、呼吸指導あり歩行は指導なしに比べ、呼吸数減少・胸郭可動性拡大・胸郭IE比増加・酸素飽和度低下率の改善を認めた。さらに、最終評価の指導なし歩行は初期の指導なし歩行と比較して同様の改善を示した。最大歩行距離は50 mから150 mへ延長した。

〈考察〉

呼吸練習により呼吸リズムが整い、呼吸筋協調性が向上した結果、胸郭可動性が増大したと考えられる。また、呼吸法指導は呼気抵抗を高め、呼気時間を延長させることで換気効率を改善し、酸素飽和度の改善に寄与した可能性がある。

〈結語〉

気管支肺炎患者において、ResMoは呼吸数や酸素飽和度の変化に加え、従来確認できなかった胸郭可動性や胸郭IE比を定量的に把握できる有用な客観的指標を計測し得る。

心不全再増悪後に外来心臓リハビリテーション 介入を行い良好な経過をたどった症例

—アドヒアランスに着目して—

丸太町リハビリテーションクリニック リハビリテーション部

○岡安陽菜※1・福嶋秀記※1・井村友哉※1・平本真知子※1・
松井知之※1・前芝邦昭※1・本山晋一郎※2・森原徹※3

【キーワード】 心不全、心臓リハビリテーション、アドヒアランス、再入院

〈背景・目的〉

心不全患者の再入院率は20～30%とされ、再入院予防には適切な疾患管理が重要である。今回、外来心臓リハビリテーション(以下、外来心リハ)の継続により、心不全手帳の記載習慣が定着し、適切なフィードバックを通じてアドヒアランスが向上した症例を経験したので報告する。

〈方法〉

80歳代男性。独居で生活保護を受給している。自宅には血圧計・体重計・風呂がなく、日常的に銭湯を利用している。そうした生活環境の中で、心不全を併発した心筋梗塞と診断され、入院した。冠危険因子に高血圧症、脂質異常症、喫煙を保有している。退院時EF46.1%、BNP597.3pg/ml、NYHAⅡ度であった。その後、外来心リハを開始したが、退院2ヵ月後、水分摂取過多により再入院した。

〈結果〉

外来心リハとして、週1回60分の運動療法と疾患指導を行った。疾患指導の面では、心不全手帳を用いた体重・水分量の記録とセルフモニタリングの定着を促した。

再入院前は、外来心リハへの参加頻度が低く、心不全手帳の記載も未実施であったが、再入院を契機に、理学療法士が継続的な声かけやフィードバックを行った。その結果、外来心リハを再開してから約1年間、心不全症状の増悪を認めていない。

〈考察〉

今回の介入では、心不全手帳の記載やセルフモニタリングの習慣化により、疾患管理に対するアドヒアランスが向上した。このことから、継続的な外来心リハは、心不全の増悪を予防できる有効な手段であると考えられる。

〈結語〉

本症例は、再増悪を契機とした理学療法士による継続的支援により、アドヒアランスが向上し、良好な経過を得られた。

※1 丸太町リハビリテーションクリニック リハビリテーション部

※2 洛和会丸太町病院 心臓内科

※3 丸太町リハビリテーションクリニック

床からの立ち上がり動作難渋症例に対する 環境調整の効果検証

洛和会音羽リハビリテーション病院
医療介護サービスセンター 訪問リハビリテーション

○牛尾龍

【キーワード】 床からの立ち上がり動作、環境調整、目標転換

〈背景・目的〉

先行研究では、高齢者の床からの立ち上がり動作（以下：床上動作）における膝伸筋力や上肢協力動作の重要性が示されている。今回、要支援2でサービス調整が不十分な中、床上動作を目標に介入した症例を経験したため報告する。

〈方法〉

本症例は70歳代男性。既往に左足関節骨折、両側腓骨断裂あり。転倒による第4腰椎圧迫骨折にて1ヶ月の入院を経て、退院後に訪問リハビリ開始。過去に転倒歴があり、家族・ケアマネジャーの希望で転倒後対策として床上動作獲得に向けた機能練習を中心としたウィークネスアプローチと環境調整を実施した。

〈結果〉

約1ヶ月間、機能訓練・動作練習に合わせてタッチアップ、ピックアップ歩行器の導入等の介入を行ったが、床上動作は獲得できなかった。また、再転倒も発生した。そこで、2ヶ月目から転倒後対策としての床上動作獲得という目標から転倒予防を目標に切り替え、歩行訓練や歩行補助具の選定・動作指導を行った。その結果、3ヶ月目以降では歩行車を使用して近隣スーパーへの買い物が可能となり、ADLが拡大した。その後、転倒もなく経過した。

〈考察〉

開始当初より本人から「歩きたい」という希望は聴取していたが、床上動作獲得の優先順位が高いと判断しアプローチを行った。しかし、セラピストとしてアセスメントを行った結果、目標達成は困難と判断した。本人・家族とも共有したことで、目標転換がスムーズに行えた。アセスメントを十分に行い、目標達成の可否を専門職として判断することで、本症例はADL・QOLの向上につながったと考えられる。

〈結語〉

できないことや失敗例ばかりではなく、やりたいことや要望を聴取し、出来ること・改善できることに着眼点を持ち目標・アプローチの再検討を行うことは、リハビリ専門職として大切である。

〈参考・引用文献〉

- ・後藤由美 他：脳卒中片麻痺患者の床からの立ち上がり動作に関する機能およびAPDLへの影響。理学療法科学, 16(2): 59-63, 2011
- ・井上修一・他：TKR後術後患者の床（畳）からの立ち上がり動作について。理学療法科学, 25(5): 308-317, 1996
- ・原聡美・他：床からの立ち上がり運動機能の関係。理学療法科学, 29(3): 367-370, 2014
- ・小関統大・他：地域在住高齢者の2分間ステップテストと身体機能の関係。理学療法科学, 36(4): 533-536 2021

回復期リハビリテーション病棟における 計画的な退院支援の取り組み ～リハスタッフの視点から～

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部
○石束紗野香※1・小林靖典※1・寺川香※2・廣松直樹※1

【キーワード】 回復期リハビリテーション病棟、退院支援、カンファレンス、多職種連携、チーム医療

〈背景・目的〉

当院では、計画的な退院支援を目的に、2024年5月より多職種による退院支援カンファレンスを開始した。2025年4月からは、退院支援を担うスタッフを限定し、責任の所在を明確化する体制を構築した。

〈取り組み内容〉

回復期リハビリテーション病棟におけるリハスタッフの役割は多岐にわたり、治療効果の向上に加え、退院支援では多職種や外部機関との連携、介護保険制度、福祉用具、住宅改修などの知識が求められる。患者一人ひとりの背景に応じた支援が必要だが、当院では経験年数5年以下のスタッフが半数を占めており、教育面に課題があった。そこで、退院支援を担うスタッフを限定し、患者マネジメントにおける責任の所在を明確化した。

〈結果〉

2025年4～6月の期間において、退院時期の偏りが軽減され、在院日数の短縮と実績指数の向上が認められた。

〈考察〉

退院支援担当者の明確化により、他職種からの情報が集約され、適切な時期に支援を行うことが可能となった。また、経験を有するスタッフが担当することで、退院時期の検討がより具体的かつ現実的に行えるようになった。

〈結語〉

患者マネジメント体制の整備により、計画的な退院支援が促進された。今後は、退院支援を担当しないスタッフも知識と経験を積める教育制度の構築を目指す。

〈参考・引用文献〉

- 1) 岡本 隆嗣 回復期リハ病棟で求められる退院支援リハビリナースvol.15 no.04 2022
- 2) 岡本 隆嗣 回復期リハビリテーション病棟における多職種連携 Jpn J Rehabil Med vol.58 no.5 2022
- 3) 大高 洋平 回復期リハビリテーション病棟の退院プロセス再考 JOURNAL OF CLINICAL REHABILITATION vol.23 no.07 2014

※1 洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

※2 洛和会音羽リハビリテーション病院 3病棟

当院における外来心臓リハビリテーション状況 および今後の取り組み

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○白井健雄・安井輝・森本佳奈江・谷川玄太

【キーワード】 心不全、外来心臓リハビリテーション、継続支援、
集団指導、高齢化、再入院抑制

〈背景・目的〉

心不全は高齢化に伴い増加し、国内推定患者は約120万人、2030年には約130万人と見込まれる。京都市山科区でも高齢化率は1995年11.9%→2015年29.1%（2017年推計29.5%）へ上昇し、患者増が予想される。外来CRは標準150日で終了する群より、月13単位程度でも継続した群で再入院率が低下し、療養指導は個別のみより集団併用で低下が報告される。当院の外来CR継続支援と、今後開始する集団指導の初期導入状況を示し、再入院抑制への可能性を検証する。

〈方法〉

2025年1月以降、他院で150日CR修了後に紹介された心不全患者を対象に、週1回60分（月4回）の外来CRを実施。9月から「らく楽ハート通信」月3号配布と月1回20分の集団指導（直近3号の振り返り）を計画。

〈結果〉

2025/1/1～8/15の登録11名（紹介9・当院2）は、外来継続9名、デイケア1名、デイサービス1名で最終継続11/11（100%）。途中離脱1名は再開し中断0。観察期間の心不全再入院0/11（0%）。集団指導は未実施。

〈考察〉

再接続手順と通所資源への橋渡し（2/11）が高い継続に寄与した可能性がある。一方、小規模・短期で選択バイアスを含み得るため過大解釈は避けるべきである。9月以降、CR単独期との前後比較でCPX、BNP、心不全手帳記載率、再入院率、出席回数などの検証していく。

〈結語〉

当院外来CRは初期運用で継続率100%、再入院0%を示し、地域における実装可能性が示唆された。集団指導併用の追加効果は今後の検証課題である。

〈参考・引用文献〉

1)心不全患者に対する外来心臓リハビリテーションの効果と参加・継続率を高めるための工夫。理学療法学 52(2), 2025. 2)日本心臓財団。心臓病の知識:超高齢社会で急増する心不全 高齢者の心不全. 3)京都市。未来につながるまちづくりを目指して～まちづくりレポート～【山科区】. 2018 4). 田尻 和子 他:高齢者における長期心臓リハビリテーションの効果。厚労省科学研究費成果報告書, 2020. 5)佐々本 雄一郎:心不全患者に対する外来心臓リハビリテーションの効果と参加・継続率を高めるための工夫。理学療法学 52:100-107, 2025. 6)芦川直也 他:心不全入院症例に対する心不全集団指導の再入院抑制効果。日本病院薬剤師会雑誌57:781-787, 2021. 7)Dastoom M, Sattarzadeh J, Faramarzi F, et al:The Effects of Group Education With the Teach-Back Method on the Readmission of Heart Failure Patients. Jundishapur J Chronic Dis Care 5:e29706, 2016. 8)北海道国民健康保険団体連合会:高齢の慢性心不全患者に係る在宅での望ましい疾病管理方法に関する調査事業 報告書:全頁、北海道国民健康保険団体連合会、札幌、2022.

回復期病棟リハビリテーション部での カスタマージャーニーの取り組み

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○河内大晟・山本亮

【キーワード】 リハビリテーション、カスタマージャーニー、TKA

〈背景・目的〉

カスタマージャーニーは顧客が辿る一連の体験を例えたものである。今回、医療に置き換え、患者体験を整理し、各治療時期での感情変化を把握するよう行った。

結果、患者視点でリハビリテーションに関わる部分の参考やきっかけ作りとなった。その結果を報告する。

〈内容と方法〉

4グループ（手術疾患:腰椎、頸椎、THA、TKA）、各3名ずつでグループワークを行い、カスタマージャーニーマップを作成した。各時期10項目毎（手術、転院時など）に、各内容4項目（感情変化、対応策など）それぞれ分析した。

〈結果〉

各時期毎の感情変化では、共通して症状出現時、通院時、OPE後、急性期リハビリ時、には「不安、恐れ、悲しみ」の感情が予想された。転院時、回復期リハビリ時、外来リハビリ時には「焦り、喜び」の感情が予想された。TKAでは、転院時、回復期リハビリ時に「不安、焦り」の感情が予想された。対応策ではリハビリ評価の可視化、目標設定、回復過程のフィードバックが「希望、喜び」の感情変化に効果的だと意見があった。

〈考察〉

患者体験の分析によって各時期毎に「不安、焦り、希望、喜び」などの感情が大きく変動することが再認識できた。リハビリは身体面だけでなく、患者の感情の変化にも寄り添う事が重要であると考え。TKA患者の転院時や、回復期リハビリ時の「焦り、不安」の感情に関して、転院後早期から紙面での自主トレーニングの指導、リハビリ前後の炎症管理や病棟ADL指導、患者との接点を増やす関わりが「焦り、不安」の軽減に効果的であると考え。カスタマージャーニーを活用することで、患者視点の重要性を再認識する機会となり、多職種連携やリハビリ内容、部内教育など今後に向けた参考となる取り組みであったと考える。

〈結語〉

カスタマージャーニーマップを作成する取り組みを行い、患者目線の分析は有意義な気づきのきっかけであった。今後もより良い支援を目指し、取り組みの継続や発展を進めていきたい。

「こんなこともできるね。」を引き出した作業療法 ～慢性期の頸髄損傷患者に対する母指対立スプリントの 活用事例～

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○由良純子

【キーワード】 作業療法、スプリント療法、慢性期、上肢機能

〈背景・目的〉

作業療法士が行うスプリント療法とは、熱可塑性素材で作製する装具療法のことである。今回、地域包括ケア病棟に入院した慢性期の頸髄損傷患者に対し、母指対立型スプリントを作製した。つまみ動作の獲得により、ADLが改善する経験を得た。その経過を報告する。

〈内容と方法〉

患者は10年前にC6/7頸髄損傷で不全麻痺を呈した70歳代男性である。ADLは電動車椅子で身辺動作は自立していた。作業療法ニーズの1つは「モノが掴めないから手が使えない。指が広がってほしい」であった。

強い痙縮により両手ともに母指CM関節は内転・伸展位、IP関節は屈曲位であり、モノを把持する動作は不可能であった為、両手で挟むように両手を使用していた。

主治医の指示のもと、利き手である右母指を掌側外転位に保持する対立型スプリントをアクアブラスト(穴なし/2.4mm)で作製することとした。

〈結果〉

スプリントを装着することで側腹つまみが可能となり、訓練場面では1cmの木片などが掴めるようになった。また、形状を調整することで装着動作が自立した。

日常生活では装具を装着した右手でコップを掴み、片手でお茶が飲めるようになった。その中で「こんなこともできるね」と笑顔を見せることがあった。

〈考察〉

スプリントを厚い素材で作成することで、強い痙縮に対しても対立位を保持することが可能となった。対立機能の中で側腹つまみを選択したことは、上肢機能から判断して適正であったと考える。また自己装着できたことで、患者が日常の中でスプリントを受け入れやすくなる手助けとなったとも感じた。

〈結語〉

この経験から、スプリント療法が有効な患者は、療法士の工夫次第で多く存在するのではないかと考える。今後もスプリント療法を有効に活用できるように努めていきたい。

〈参考・引用文献〉

やさきよし著 スプリントのすべて

藤原謙吾 麻痺側母指と示指の指腹つまみをサポートする機能的スプリントを着用することで日常生活や仕事で出来る作業の拡大を認めた一症例 作業療法P114-120.2024

杖の長さの違いによる歩行動作の変化 ～追尾型歩行計測システム(CORE-Ler)を用いた計測～

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○木下晃暢・山本ちさと

【キーワード】 CORE-Ler、杖、歩行動作

〈背景・目的〉

杖の長さ調整には、解剖学的立位肢位での床面から大転子や肘関節屈曲角度30°といった指標が用いられている。実際の臨床現場において様々な長さで杖を使用し歩行を行っている患者を良く経験する。今回は、杖の長さの違いが歩行動作に与える影響を追尾型歩行計測システム(以下CORE-Ler)で計測し、その結果を報告する。

〈方法〉

対象は転倒歴のある70才代女性、ADLは独歩自立である。左上肢で杖を使用し、杖の長さは解剖学的立位肢位での床面から大転子(以下A)、腸骨稜(以下B)、肘伸展位での中指末端(以下C)の三条件で行った。歩行動作の計測には、10m歩行実施時に対象者の前方3mの距離を維持しながら深度カメラで連続計測を行うことが可能なCORE-Lerを用いた。歩行動作の運動学変数を計測し、これらの変数のうち右立脚時間、左ステップ長、右立脚期での左右身体重心動揺距離を算出した。

〈結果〉

Aの条件がB.Cの条件と比較し最も右立脚時間の増加(A0.55sec、B0.44sec、C0.52sec)、左ステップ長が延長(A0.46m、B0.31m、C0.39m)した。また、右立脚期での左右身体重心動揺距離に大きな変化はなかった。

〈考察〉

加齢とともに歩行時のステップ長、片脚支持時間は減少し、起因として加齢による脚筋力低下が大きく影響を及ぼしていると報告がある。また、杖は立位、歩行時のバランス保持と下肢荷重の軽減を目的に使用される。Aの高さが、立脚側の下肢筋力を補足し、歩行動作における右立脚時間の増加に伴う左ステップ長の増加に寄与したと考える。

〈結語〉

杖の長さの違いが歩行動作を変化させる結果が得られた。しかし、長さだけでなく、太さや持ち手の形状、重量など他因子の検討も必要であると考え。また今後、杖による歩行動作の変化だけでなく、転倒予防や歩容改善などの観点の検討も進め、臨床現場で杖の選定を行っていききたいと思う。

〈参考・引用文献〉

1)湯 海鵬ら:8年間における高齢者の歩行動作の変化.バイオメカニズム学会誌.Vol31.No1(2007)

2)加茂野 有徳:杖を用いた歩行の特性.バイオメカニズム学会誌 Vol44.No3(2020)

長期的リハビリテーションによる 失語症者の回復過程について

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○笠井智晴

【キーワード】 失語症、高次脳機能障害、外来リハビリテーション、
退院支援

〈背景・目的〉

臨床現場では発症からの経過月数により急性期、回復期、維持期と機械的に分断されており、発症から概ね6か月程度で失語症が「維持期」に至ったと位置づけられている傾向は否めない。回復が見込める失語症例に対しても、機能回復訓練をあきらめざるを得ないのが現状のようである。今回、回復期リハ病棟入院中から退院後の外来リハビリテーションを含め、言語聴覚療法を2年間継続し、言語機能の改善と社会的生活を円滑に営むことが可能となった失語症例を経験したため報告する。

〈方法〉

回復期リハ病棟退院後に外来リハビリテーションにて週1回60分の言語訓練を実施した。言語機能向上訓練に加え、日々の出来事の報告や相談など音声言語を用いた自由会話訓練を実施した。

〈結果〉

外来リハビリテーション開始時よりも名詞表出の増加や敬語・関西弁を用いた病前の話し方が可能になるなど自然な会話が可能となった。また、言語機能の改善だけでなく生活行動範囲も拡大し、病院受診や子どもの学校行事に一人で参加することが可能となった。

〈考察〉

長期にわたって変化しうる失語症状に着目し症例に合わせた訓練を継続できたこと、回復期退院から切れ目のないリハビリテーションを提供できたことが言語機能と社会的生活を円滑に営む能力の改善につながった。

〈結語〉

長期的リハビリテーションにより年単位で言語機能が回復した。入院中のリハビリだけにとどまらず、退院後も切れ目のない支援の継続が必要だろう。

〈参考・引用文献〉

- 1) 中川良尚:失語症の長期経過－外来訓練の意義－
Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research Vol.17 No.1 pp19～28, 2020
- 2) 中川良尚:言語機能は改善するか 脳のメカニズムからみた言語リハビリテーション
神経心理学 37:251-261, 2021

通所リハビリテーション・訪問リハビリテーション 併用利用を通じた社会参加への有効性と その効果について

洛和会音羽リハビリテーション病院
医療介護サービスセンター 通所リハビリテーション

○森岡史江※1・浅野航平※1・村井りえ※1・足立絵里子※1・等々力悠※2

【キーワード】 通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション、
社会参加

〈背景・目的〉

通所リハビリテーション(以下通所)と訪問リハビリテーション(以下訪問)の役割は個別に検討されることが多く、通所・訪問を併用利用することで身体活動量や社会参加の拡大といった生活行為の変化に焦点を当てた報告は少ない。通所・訪問を1年間併用利用した事例を通して、在宅期における身体活動及び社会参加への影響を明らかにし、併用利用の有効性を検討する。

〈方法〉

対象は、好酸球多発血管炎肉芽腫による多発神経炎を有する60代女性。当院回復期病棟を退院後、訪問を開始し、およそ2ヶ月後に通所の利用を開始した。訪問では、歩行補助具の選定、屋外歩行練習を実施した。通所では、筋力トレーニング、持久力トレーニングを実施した。屋外歩行時間・距離、歩行補助具の変化、外出頻度、目標の変化を時系列で追った。

〈結果〉

併用開始時は、歩行器付き添いで屋外10分間の歩行が可能であったが、3か月後には歩行器付き添いで屋外40分間の歩行および杖付き添いで屋外15分以上の歩行が可能となった。ここでの新たな目標として「公共交通機関の利用再開」が利用者自身から自発的に提示された。1年後には、自宅から約850m先のスーパーまでの買い物の自立、友人との外出再開や公共交通機関の利用再開が可能となった。

〈考察〉

本事例では、通所での機能訓練による基盤的な身体機能の改善が、訪問での日常場面における動作練習を通じて実生活へと汎化し、活動範囲の拡大と社会参加に繋がったためと考えられる。先行研究では、通所での運動介入が下肢筋力や歩行能力改善に寄与することが報告されており、本事例でも同様に通所での集中的訓練が機能改善を支えることができたといえる。その上で、訪問を通して生活場面への展開に繋げることで、目標が「安全な屋外歩行」から「公共交通機関の利用再開」に発展することができた。

〈結語〉

本事例を通して、通所・訪問併用は機能改善だけでなく実生活での活動量向上と社会参加へと効果を波及させる可能性が示唆された。

〈参考・引用文献〉

岡村和典, 江川晃平・他:介護予防通所リハビリテーションの運動介入による歩行能力の経時的変化. Japanese Journal of Health Promotion and Physical Therapy, 2018, 8(1):23-27. 金川仁子, 金子さゆり:在宅系リハビリテーションが利用者のADLとQOLに及ぼす影響について. 日本医療・病院管理学会誌, 2014, 51(1):9-19. 佐々木由佳・小賀野操・他:在宅介護者が通所リハビリテーションサービスに見いだす意味・参加観察による分析. 老年社会科学, 2017, 39(3):330-340. 柴隆広・沢谷洋平・他:地域在住要支援・要介護高齢者に対する通所リハビリテーションの役割. 日老医誌, 2024, 61:114-122. 橋立博幸:通所リハビリテーションにおける介護予防の効果. PTジャーナル, 2011, 45(2):125-133.

※1 洛和会音羽リハビリテーション病院 医療介護サービスセンター 通所リハビリテーション

※2 洛和会音羽リハビリテーション病院 医療介護サービスセンター 訪問リハビリテーション

療法士による病棟ラウンド活動の実施 ～褥瘡ゼロを目指して～

洛和会音羽記念病院 リハビリテーション部

○堀貴弘

【キーワード】 褥瘡、ラウンド、ポジショニング

〈背景・目的〉

透析患者は血流障害により褥瘡が重症化しやすく、敗血症により死亡に至ることもある。重症化予防を目的にリハビリテーション部が中心となり、褥瘡発生予防の取り組みを行った。

〈方法〉

対象患者:2023年4月～2025年3月の間に洛和会音羽記念病院に入院していた患者。

実施内容:褥瘡の重症化予防を目的に、リハビリスタッフが定期的に病棟をラウンドし、ポジショニングの確認・修正を行う。修正内容は、病棟看護師へ提案し、ケアの質向上を狙った。

〈結果〉

2023年度の新規褥瘡発生件数は年間14件だったが、2024年度は病棟看護師との連携を月平均106件実施したことで、年間7件に減少し、発生件数を半減させることが出来た。

〈考察〉

本取り組みにより、看護師のみならずリハビリスタッフが病棟ラウンドに参加することで、患者のポジショニング不良に対する早期発見と介入が可能となった。これにより、ポジショニングの実施頻度が増加し、褥瘡形成の予防に寄与したと考えられる。また、病棟看護師とポジショニングについて検討・情報共有の時間を設けたことで、褥瘡予防の強化につながった。これらの取り組みの結果、前年度と比較して新規褥瘡の発生件数を抑制することができたと考えられる。

〈結語〉

本取り組みにより、他職種との連携を図ることで、患者の重症化予防を強化することができた。日常的にポジショニングへの意識を高めることができた点も、褥瘡予防において重要な成果である。今後も多職種協働を継続し、重症化予防に寄与していくことが期待される。

〈参考・引用文献〉

佐藤智也:透析患者における下肢潰瘍・褥瘡の管理. 日本透析医会雑誌.2016.,31(1),p174-180

追尾型歩行計測装置CORE-Lerを用いた 歩行動作の見える化と今後の運用方法の提案

洛和会音羽病院 リハビリテーション部

○福田拓真

【キーワード】 CORE-Ler、信頼性、歩行動作観察

〈背景・目的〉

今年からRDS社と共同開発を進めている追尾型歩行計測装置CORE-Lerを洛和会に常設することとなった。そこで、CORE-Lerを使用し、歩行観察をした結果と、今後の運用方法の提案をする。

〈方法〉

整形疾患を罹患され、手術を施行されている患者様を対象に急性期病院と回復期病院それぞれでCORE-Lerを用いて10m歩行を計測し、セラピストの歩行観察と実際の計測データを比較した。

〈結果〉

セラピストの動作観察と実際の計測データを比較すると、乖離点が見つかった。また、言語化できないセラピストの感覚的視点を、言語化して明確にすることができた。

〈考察〉

若手セラピストの動作観察だけでは把握しきれない要素を、計測データに基づく歩行分析で明確化できたと考える。

〈結語〉

今後、セラピストの熟練度に応じて評価結果に差が出ないよう、客観的指標として用いることができ、新人教育にも応用できる。また、病院間で評価結果を申し送ることで、担当セラピストが変わることによる評価結果の相違がなくなり、より信頼性に富んだ介入を早期から行えると考えこれを今後の運用方法の提案とする。

当院の人工股関節全置換術後における現状と今後の課題

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○福山徹・川久保広夢・森下悠貴

【キーワード】リハビリテーション、人工股関節全置換術、筋力

〈背景・目的〉

当院では人工股関節全置換術(THA)術後患者に対して定量評価を実施している。本研究では、当院における現状のリハビリ経過を把握し、今後の課題を明らかにすることである。

〈方法〉

対象は、当院回復期リハビリ病棟に入院したTHA術後患者4名とした。期間は2021年4月～2025年5月、性別は女性3名/男性1名、年齢は72.0±11.6歳、身長は154.5±9.2cm、体重は60.9±11.6kgである。評価時期は、当院入院時(術後13.8±2.1日)、退院時(術後53.3±21.6日)である。項目は、筋力(μ -tasで測定)の術側股関節屈曲、外転、術側膝関節伸展とTimed Up and Go test(以下TUG)の結果である。

〈結果〉

筋力は術側股関節屈曲(Nm/kg)で入院時0.4±0.2、退院時0.4±0.2、外転は0.3±0.1、0.5±0.1、膝関節伸展は0.4±0.2、0.7±0.2であった。TUGは19.1±7.1秒、11.6±3.2秒であった。

〈考察〉

先行報告と対象の患者属性は近似している。

筋力は、入院時に関して近似しているが、退院時の屈曲・外転は低値であった。

歩行時の遊脚期の下肢振り出し困難、立脚期の安定性低下やTrendelenburg徴候などに着目し、転倒リスクや2次的障害について今後の対応と検討が必要であると言える。

TUGでは、退院時にカットオフ値を下回っていたが、筋力との関連は限定的であり、代償的な歩行機能や他部位の筋力向上などが寄与した可能性がある。

今後、当院の治療計画に沿って一層の支援の見直し、定量評価自体の再検討を行う。筋力向上を目的とした個別性の高い介入、リハビリ内容の工夫や頻度・量などの調整、生活指導など多面的に支援全体を再考していきたい。

〈結語〉

当院のTHA患者は股関節屈曲・外転筋力の改善が課題であった。

今後、包括的に臨床的側面、運用的側面などを検討し、より良好な機能回復を目指す必要がある。

〈参考・引用文献〉

1) 塚越累ら:人工股関節全置換術後における股関節・膝関節周囲筋の筋力推移の比較-膝関節伸展筋力の回復は遅延する-理学療法学,第36巻第2号,41～48頁,2009

TKA定量評価の現状と今後の展望

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○森下悠貴・川久保広夢

【キーワード】人工膝関節全置換術、定量評価、リハビリテーション

〈背景・目的〉

当院は、2021年より人工膝関節全置換術(TKA)後患者に対して治療経過を客観的に把握するために定量評価を行っている。今回、TKA患者の現状把握を目的に定量評価の分析を行った。

〈方法〉

対象は、当院回復期病棟入院中に、定量評価を行ったTKA患者83名93膝(2021年10月～2025年5月)である。評価時期は、当院入院時、術後1ヶ月、退院時である。評価項目は、患者属性の年齢、身長、体重、BMI、男女比、左右比、機能評価として、膝関節伸展および屈曲の関節可動域(ROM)、膝関節伸展筋力、10m歩行速度、Timed Up and Go test(TUG)を集計した。

〈結果〉

患者属性は年齢77.3±7.0歳、身長154.3±9.0cm、体重59.1±10.9kg、BMI24.7±3.6 kg/m²であった。男女比(男:女)は20:73、左右比(右:左)は54:39であった。各評価時期は、入院時が術後16.3±4.9日、術後1ヶ月が30.2±2.27日、退院時が53.9±19.5日であった。集計結果(入院時、術後1ヶ月、退院時)の、ROM(°)伸展は-4.8±6.2、-3.0±5.1、-2.1±4.3、屈曲は98.2±20.6、106.7±15.2、120.5±8.5であった。膝関節伸展筋力(Nm/kg)は0.3±0.2、0.4±0.1、0.4±0.1であった。歩行速度(m/sec)は0.9±0.3、0.9±0.4、1.2±0.3であった。TUG(sec)は18.2±12.0、16.7±12.5、11.9±6.3であった。

〈考察〉

TKAの患者属性は先行研究と平均年齢、BMIが同程度であった。TKA患者は地域高齢者に比べ筋力や固有受容感覚が低下し、転倒リスクが高くなる。今回、TUGは運動器不安定症の基準値となる11秒以上であり、退院時の身体機能では閉じこもりや転倒予防には不十分であり、リハビリ内容の再検討が必要と考える。ROMは、先行研究の術後4週と術後8週の比較と同程度であった。筋力は、先行研究で術後3週間頃から術後3ヶ月において向上するが、今回、術後1ヶ月から退院時に変化がみられなかった。評価時期の日数差はあるが、自主練習指導や入院中のリハビリ内容を見直す必要があると考えられる。また、大腿四頭筋の筋力はTUGの結果に関連があり、大腿四頭筋の筋力増強を目的としたリハビリ内容を検討する可能性がある。TKA機能評価に関して、10m歩行速度を計測しているが、先行研究において最大歩行速度の報告が多く、評価項目の検討は必要であると考えられる。運用上、評価時期にばらつきが多く運用方法の見直しも併せて必要と考える。

〈結語〉

今後TKA患者の身体機能向上のためには大腿四頭筋の筋力増強に着目したリハビリテーションの提供、定量評価を測定する必要性が考えられる。今後は評価時期の運用を見直し、入院中だけでなく、退院後にもTKA機能評価を実施し、長期的な経過を追っていきたい。

〈参考・引用文献〉

1) 大西邦博ら:人工関節全置換術患者に対する術後1年までの身体機能回復の推移.理学療法科学34(6)771-775.2019
2) Levinger P, Menz BH, et al. Physiological risk factors for falls in people with knee osteoarthritis before and early after knee replacement surgery. Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc.19:1082-1089.2011
3) 大西邦博ら:人工関節全置換術患者に対する術後1年までの身体機能回復の推移.理学療法科学34(6)771-775.2019
4) 鈴木秀基ら:当院における人工膝関節全置換術後の身体機能変化とホームエクササイズとの関連性.理学療法42 P2-C-0559.2015
5) 小林昂史ら:当院における人工膝関節全置換術の術前可動域推移の特徴各時期との関連性に着目して.静岡県理学療法士会学術誌41 118.2021
6) 眞田祐太郎ら:人工膝関節全置換術後患者における大腿四頭筋およびハムストリングスの膝関節角度別等尺性筋力の推移.理学療法科学32(4)553-557.2017

地域包括ケア病棟における間接介入の導入の効果検証

～脊椎圧迫骨折患者の後ろ向き比較研究～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部

○小関康春

【キーワード】 地域包括ケア病棟、間接介入、脊椎圧迫骨折

〈背景・目的〉

本邦では、慢性的な医療資源の不足が深刻な課題であり、特に地域包括ケア病棟では、多職種連携による包括的支援が求められ、早期の在宅復帰支援や生活機能の維持・向上を目指している。近年では看護師や介護士がADL支援を担う「間接介入」の有用性が注目されている。本研究は、脊椎圧迫骨折患者を対象にリハビリスタッフ主導の間接介入がADLに及ぼす効果を検証し、その有効性を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

対象は、2018年1月から2020年12月、2022年1月から2024年12月に当院地域包括ケア病棟に入退棟した脊椎圧迫骨折患者72名。介入群には歩行支援、トイレ誘導、離床支援などの間接介入を実施した。評価項目は性別、年齢、BMI、FIM、在棟日数とし、FIM利得とFIM効率を算出した。統計解析はt検定およびロジスティック回帰分析を実施し、有意水準は5%とした。

〈結果〉

介入群は非介入群に比べ、ADL項目「トイレ動作」「移乗」「移乗(トイレ)」「歩行・車椅子」の4項目で有意な改善差が認められた($p<0.05$)。FIM利得とFIM効率も介入群が優れていた。また、ロジスティック回帰分析により間接介入が移乗動作の改善に関連していた。

〈考察・結語〉

地域包括ケア病棟におけるリハビリスタッフ主導の間接介入が脊椎圧迫骨折患者のADL改善に寄与する可能性が示された。特に移乗動作の向上は在宅復帰支援に直結し、FIM利得とFIM効率の向上は、間接介入がADL全体の効率的な向上の可能性を示すものである。

〈参考・引用文献〉

- ・田口真衣 他:急性期病院における早期病棟ADL向上のための多職種連携 - 作業療法士と看護師で病棟ADLトレーニングを行い奏功した症例 - 日本作業療法学会抄録集 55: 556-556, 2021.
- ・郷上東 他:地域包括ケア病棟入院患者における入院時の身体活動量が日常生活動作改善に与える影響 慢性期リハビリテーション学会誌 (8): 256-256, 2021.
- ・岡本伸弘 他:回復期リハビリテーション病院におけるFIMを用いた在宅復帰因子の検討 理学療法科学27(2)103-107, 2012

地域に開かれた小児STリハビリテーションを目指して

～開設5年間の取り組みと今後の多職種連携による発展～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部

○前川大史

【キーワード】 リハビリ、言語聴覚士、小児、発達障害、連携、地域

〈背景・目的〉

近年、地域社会において発達障害児への支援ニーズは増大し、乳幼児期から学童期に至るまで、年代や障害像に応じた多様な支援が求められている。こうした社会的需要に応えるため、当院では5年前より小児言語聴覚療法(ST)外来を開設している。

〈方法〉

本報告は、小児ST外来開設後5年間の実践を振り返りながら、地域での言語療法におけるニーズを検討、また多職種連携を通して見出された地域中核病院としての役割を考察する。

〈結果〉

当院ST外来を利用した症例は、機能性構音障害、発達性言語障害、自閉スペクトラム症、吃音、嚥下障害など多岐にわたった。言語・口腔機能評価に強みを持つ言語聴覚士(ST)による専門的介入に加え、対象児の多様なニーズに対応するため、作業療法士、臨床心理士、音楽療法士との連携も行った。

〈考察〉

各専門職が連携し、多角的な視点から評価・支援を行うアプローチは、対象児の全体像を的確に捉え、個性の高い支援を提供する上で極めて有効であった。これは、複数の専門職が院内に在籍し、日常的に連携できる地域中核病院ならではの強みであると考察する。

〈結語〉

今後は、院内連携をさらに深化させるとともに、地域の保育園や学校等の療育・教育機関との連携強化が不可欠である。診断から就学後までを見通したシームレスな支援体制を構築し、地域全体の療育水準向上に貢献したい。

〈参考・引用文献〉

- 1)発達障害教育推進センター,統計情報,<https://cpedd.nise.go.jp/horei/tokei>
- 2)中川信子:知的障害,発達障害の子どもの育ちを支援するために,言語聴覚研究 Vol.12No.2.71-77,2015

認知症対応型共同生活介護での 「リハケアスタッフ育成」の取り組みと成果

介護事業部 品質管理部

○小森健太郎・後藤隆宏・小嶋優子

【キーワード】 リハケア、アセスメント、生活リハビリ、介護職員育成、ケアの質向上

〈目的〉

認知症対応型共同生活介護（以下、GH）では、医療職の常勤配置がないため、介護職が生活機能低下した利用者変化を捉え適切なケアで生活を継続するためのアセスメントとケアが求められる。しかし、根拠に基づいたアセスメントやケアの実践が十分ではなく対応にばらつきが見られた。そこで令和6年7月よりリハビリ職が中心となり、身体・認知機能維持向上や活動参加を引き出す「生活リハビリ」の視点を取り入れたケア（リハケア）の実践力向上目的に『リハケアスタッフ育成』に取り組んだ。

〈方法〉

当法人31事業所のGH介護職62名を対象に研修受講と課題取り組み、各職員が利用者選定し、アセスメントとケア実践報告。育成効果は自己評価『リハケアセルフチェック』を3回実施し検証。

〈結果〉

アセスメント意識は「いつもと違う状態に『なぜ?』と思えるか」に対し「いつも思える」と回答した割合33.9%から59.4%に上昇。ケア実践は「趣味活動や役割が提案できるか」には「いつもできている・ほぼできている」が53.2%から81.2%に上昇。

〈考察〉

研修を通じて標準的なアセスメントとケア方法を共通認識として確立し、実践したケアに対してフィードバックを受けたことで、「なぜ?」と考える意識が高まり変化に気づく視点が養われた。これにより生活リハ視点のケア実践を促進し、「ケアの質」と「働きがい」向上に寄与した。

〈結語〉

本取り組みにより、リハケアスタッフが「生活リハビリ」の視点を持つことで、アセスメント力とケアの実践力が向上した。今後もこの取り組みを継続し、質の高いケアの実践を目指す。

〈参考・引用文献〉

堀田和司・奥野純子・戸村成男・柳久子(2009). 介護老人保健施設に勤務する介護職員の「仕事へのモチベーション」を促進する要因. 日本公衆衛生雑誌, 56(12), 927-937.

現場で信頼される第一歩。 ～私も同じ1年生～

洛和ヘルパーステーション北花山

○村田幸穂

【キーワード】 新人教育、コミュニケーション

〈背景・目的〉

入職して1か月目の新人職員が「自分には向いていない」と涙ながらに退職の訴えがあった。自身も管理職になって1か月目となり、指導方法の見直しや、支援内容を一緒に検討しながらお互いを高めあっていこうとコミュニケーションを厚く取り合う。

〈方法〉

面談の機会を増やし、事務所内では相談がしにくい場合は活動に同行し、二人きりで話し合う機会や、訪問介護について指導する機会を作った。

〈結果〉

新人職員は、業務に対する自信が徐々に芽生え「今日は○の業務が一人でできた」などと、前向きな言葉が増えていった。自身の思いを表に出すことが出来るようになり、表情や行動にも変化が見られた。また、管理者も後輩職員との連携を通じて相談しやすい体制を気付くことができ、支援のあり方等を見直すきっかけとなった。

〈考察〉

新人職員との関係づくりに置いて。立場にとらわれずコミュニケーションを重ねる事が信頼関係の構築と離職防止につながる可能性があると考え。今後も職場全体で声掛けや対話の機会を意識的に取り入れていく必要がある。

〈結語〉

相手を思いやる気持ちがコミュニケーションの第一歩で、小さな声かけややり取りの積み重ねが、信頼関係の構築につながることを実感した。

洛和会丸太町病院におけるLINEを活用した医療安全活動

洛和会丸太町病院 TQM委員会

〇起塚美沙・加藤浩一郎・岡本直樹・小林亜矢・榊容子

【キーワード】 TQM活動、LINE、情報発信、医療安全、熱中症、熱中症対策

〈背景・目的〉

洛和会丸太町病院では、TQM委員会が病院をもっと知ってもらい、よりよい情報を伝えたいという目的でスマホアプリのLINE公式アカウントを開設した。その結果、お友達登録数が増加し、「知らなかった病院の良さや有益な情報を得ることができた」という声が寄せられている。そこで、本年度は「医療安全」に焦点を当てて情報発信を行い、患者やご家族を巻き込み、日常生活でのリスク回避を支援することを目的とした取り組みを行った。

〈方法〉

丸太町病院公式LINE上にて医療安全の意識を高める情報を月ごとに配信した。2025年5月～9月は熱中症対策に関する情報（水分摂取の工夫、適切な運動、セルフチェックリストなど）を配信した。11月～12月は医療安全標語を職員に募集し職員の意識を高める計画である。取り組みの効果を評価するため、①熱中症による搬送・入院件数の推移、②LINEアンケートによる情報の有用性について調査を行う。

〈結果〉

熱中症対策に関する情報は2025年5月から9月にかけて配信済みであり、現在LINE上でお友達からの反応を募っている。職員への医療安全標語の募集は準備中である。

〈考察〉

LINEによる情報提供は、手軽かつタイムリーに患者や家族が医療安全に関与する契機となり、日常的なリスク回避行動を促す手段として有用と考えられる。

〈結語〉

今後もTQM委員会ではLINEを活用し、感染症や災害時対応などの医療安全情報を継続的に発信していく。

患者・利用者への有効な情報発信

丸太町リハビリテーションクリニック TQM委員会

〇青木哲幹

【キーワード】 情報過多から、適切な情報発信への転換

〈背景・目的〉

待合室の壁には、掲示板でない所にも掲示物を貼っており、適宜、壁やガラス窓等の掲示物は撤去するも、依然として掲示物が多く、患者・利用者にとって優先度の高い情報が埋もれてしまう状況であった。今回、無駄な掲示物を撤去し、患者・利用者にとって有効な情報発信について改善に取り組んだ。

〈方法〉

無駄な掲示物を全て撤去。掲示板の不足も課題であったため、掲示板を追加。適切な掲示場所を確保することで、壁に煩雑に貼られることを抑制。

デジタルサイネージなど、動画による情報発信も検討中。

〈結果〉

いたるところにあった掲示物がなくなり、掲示板に発信すべき情報を集約することができた。また、学術発表などの実績など、従来にない掲示物の手配にも着手できた。

〈考察〉

患者・家族へ情報を届けようとするのが逆に情報を埋没させてしまっていたと言える。適切な情報量と掲示方法を実現することで、患者・家族が情報を得やすくなったものと考えられる。また、発信する情報の内容を、提供サービスの内容や注意事項に健康情報や学術的な内容も含めることは、今後、患者・利用者にとって有益な情報発信になるものと考えられる。

〈結語〉

掲示による情報発信も、紙面だけでなく動画での情報発信やホームページや公式LINEへの誘導など、バリエーションを増やすことで患者・家族へ到達する可能性が高まると考える。引き続き情報発信の手段については、検討を進めていく。

入院時の待ち時間短縮についての取り組み

洛和会音羽記念病院 TQM委員会

○小嶋彩葉

【キーワード】 TQM活動、協働、透析患者、入院待ち時間

〈背景・目的〉

当院の特徴として、シャントトラブルが発覚した際に早期に治療を行うため、予定入院だけでなく臨時入院が受け入れることが多い。ベッドが満床であることもあり、臨時入院患者は、透析後に退院予定患者が退院してからベッドに案内するため、部屋に案内するまでの時間を要している現状があった。そのため、病棟・透析センター・MSW・管理課などが協働して透析後に病室に戻らない退院の仕組みについてフローを作成することで入院患者の待ち時間取り組みを行った。

〈方法〉

透析後退院におけるフローを作成し実行する

①透析センターからの退院の患者説明、同意を得る②退院予定の透析患者に昼食を食べるか確認し、透析後の退院準備を行う。③退院延期となった場合の居室を確保する。

〈結果〉

現在以上のフローによる退院患者は3名であった。その間の入院時の待ち時間の最大待ち時間20分の短縮につなげることができた。

〈考察〉

入院待ち時間が発生していた透析後退院の患者への対策に関して、各部署が協働し多くの視点で検討し透析室から直接退院できるように知恵を出し合い、協力し合えたことが目標達成につながった大きな要因だといえる。そして、そのフローを可視化、標準化、実行することで待ち時間の短縮につながったと考える。今後継続していく中で入院受け入れ環境全般の改善につながれば、顧客満足度向上にもつながると考えられる。

〈結語〉

1つの問題に対して、1つの部署だけで改善策を考えていくのではなく、関連する部署が問題に対して考え、協働して取り組むことで問題解決につなげることができたと考えられる。

転倒転落ゼロを目指して ～院内多職種で力を合わせ不可能を可能に!!～

洛和会音羽リハビリテーション病院 TQM委員会

○島川隼典

【キーワード】 TQM活動、転倒転落、多職種協働

〈背景・目的〉

地域包括ケアの中核施設として、当院は患者の生活背景に寄り添った医療を提供している。ADL向上や積極的離床を推進する中で、2024年度は転倒転落インシデントが334件発生。患者の安全と在宅移行支援の両立を図るため、多職種協働による転倒転落ゼロへの取り組みを検討した。

〈方法〉

2025年5月インシデントデータを収集・分析。6～7月①昼食前のラジオ体操による離床促進、②ピクトグラムによる転倒リスクの可視化、を立案。8月①を2病棟でトライアル、②は全病棟で運用開始。9月に評価を行い、全病棟展開に向けて運用方法と改善点を検討する。

〈期待される結果〉

離床促進と転倒リスクの可視化により、生活リズムの改善と安全な療養環境の両立を図る。多職種協働による介入を通じて、インシデントの減少、スタッフの意識向上、患者のQOL向上が期待される。

〈考察〉

本取り組みは、患者の生活リズムの整備と安全管理に寄与し、多職種協働が情報共有体制の強化とケアの質向上を促す可能性が示唆される。

〈結語〉

転倒転落は、患者の負担や在宅移行の遅延を招く重大な課題である。院内多職種での協働により当院のバリュー「チームワークと貢献」の実践と医療安全の向上に繋げていきたい。

管理課職員としての必須知識の標準化

5病院管理課 TQM委員会

○林峻哉・寺嶋天志・町田美保子・野村朋香・宮田季美子・
西村仁菜・進藤柚里・松元亜弥・増本隆弘・加藤忠・鷺見晴永

【キーワード】 TQM活動、管理課職員、必須知識、標準化

〈背景・目的〉

5病院それぞれの患者層や診療科の違いから管理課職員への教育内容・進捗に差やばらつきが生じている。このことは患者・家族への対応への差につながっているため、病院管理課職員として必須となる知識について統一化し習得することで、病院管理課職員の知識の標準化を図る取り組みを行った。

〈方法〉

管理課職員として必要とする知識や教育内容の洗い出しを行い、優先順位をつけ、5病院共通の教育資料を作成する。この共通資料を用いて研修計画し教え方の差や知識の偏りをなくす。教育資料策定前後で在籍職員にテストを行い回答率の変化を評価する。

〈結果〉

管理課職員として必要な知識を優先的に3つの大項目に絞りこみ、それぞれに小項目をあげることができた。R7年9月よりWeb研修を実施質疑のような成果につながった

- ・所管による特色の隔たりをなくし異動の際にもスムーズに対応できる知識を身に付けることができた。
- ・課内全体の知識の底上げし、どの所管誰が患者に聞かれても同じ回答が出来るようになった。
- ・各所管の必須知識を持ち寄る事で、自部署では気づかなかった新たな知識の共有が出来た。
- ・必須項目について職員同士話す事でコミュニケーションが取れた。

〈考察〉

管理課職員として必要な知識の差、ばらつきがなくなり、短期間でのスキル定着が可能となったのはTQM委員会での5病院の課長、係長がディスカッションし考え方や知識の違いを洗い出せたことにより必須知識の絞り込みにつながったと考える。またWeb研修にしたことで容易に研修に参加できたことも効果的であった。

〈結語〉

病院管理課は病院の窓口であり、管理課職員のサービスの質が患者・家族の満足度に大きな影響を与える。今後も管理課職員としての自負をもって精進していきたい。

入院につながる紹介件数の獲得に向けた地域連携課の取り組み

5病院地域連携課 TQM委員会

○中前則江・森田真一郎・北田景子・北村明宏・藤野里紗

【キーワード】 TQM活動・地域連携・病診連携・病病連携・紹介・営業

〈背景・目的〉

紹介入院患者の確保は、病院経営の根幹を支える重要な要素であり、地域連携課にとっても最重要課題の一つである。この課題の解決に向けて、昨年秋に洛和会の5病院による地域連携課TQM委員会を発足させ、連携強化と紹介件数の増加に向けた取り組みを進めてきた。今回は、紹介入院の獲得に焦点を絞る地域連携課の取り組みを行うこととした。

〈方法〉

紹介入院患者の獲得を目指し、重点的に取り組むべき項目を明確化した上で、具体的なアクションにつなげるための議論を重ね、①各地域連携課のかかりつけ医との連携活動を可視化し、②紹介元医療機関への情報提供を工夫し、関係性の強化を図る活動を行うこととした。

〈結果〉

- 各病院が連携し、以下の2つの重点施策に絞って取り組んだ。
- 1.地域連携スタッフ+医師で、紹介元医療機関へ同行訪問を実施し、一部紹介数が増えた。
 - 2.提供する情報について、連携医療機関へ配布する広報物の刷新、予約枠・空床情報を直接電話で伝えた。

〈考察〉

医師の同行訪問は開業医の満足度アップにつながり、情報提供の工夫や空床情報はお互いの利益につながり、紹介元医療機関との関係強化に効果があると考ええる。

〈結語〉

4病院の協働による取り組みは、紹介入院の安定的な確保に向けた有効な手段であり、今後も連携体制を強化し、地域医療への貢献を目指していく。

不適切ケアの撲滅

介護事業部 TQM委員会

○銅子大介・西村ひろみ・和佐ゆかり・永井試行・川嶋真理子・
別府晃哲・尾崎信哉・金澤路子・皆川直輝

【キーワード】 TQM活動、不適切ケア、虐待

〈背景・目的〉

高齢者虐待の要因となる不適切ケアは、当会介護事業部においても発生しているが、改善策は各サービスや事業所独自の取り組みとなっている。今回、当会が不適切ケアと判断する具体的内容を共通認識し、意識改革とサービスや事業所毎の特徴を把握することでより具体的改善策に取り組み、不適切ケアの撲滅を図りたい。

〈方法〉

当会独自の不適切ケアセルフチェックシートを策定し、常勤・非常勤すべての介護職員を対象として、定期的（3カ月毎）に不適切ケアに対するセルフチェックを行う。

自己評価結果を事業所毎に集計し、原因分析と改善策立案を繰り返す。

〈結果〉

8月に第一回目のセルフチェックを実施した。現時点での各事業所の回収率は80%であった。回収したデータからどの不適切ケアが多いのか可視化でき、サービスや事業所毎の特徴が把握できた。また不適切ケアとしてセルフチェックシートの項目に可視化したことにより、介護職員自身が不適切ケアに該当すると理解できておらず実施されているケースだと推測できる結果も多かった。

〈考察〉

不適切ケアと判断される内容について不適切ケアセルフチェックシートに可視化したことで介護に関わる管理者、現場の介護職員が統一した認識を持ち、意識改革につながったと考える。また、標準化したセルフチェックシートを用いることにより、職員間による抑止対策にもつながっていくことを期待している。

〈結語〉

不適切ケアが行われる背景には、様々な環境要因がある。今回の取り組みによりサービスや事業所毎の特徴の把握につながったと同時に、不適切ケアが少なからず行われていることもわかった。セルフチェックを定期的に実施し個人の意識改革を行いながら、職員間による抑止と事業所毎に不適切ケアが行われている背景を分析し改善策を講じることで、不適切ケアの撲滅につなげていきたい。

介護スタッフの観察力と報告力の向上と 緊急コール適正化を目指した取り組み

介護事業部 訪問看護課 TQM委員会

○清水真由美

【キーワード】 TQM活動、訪問看護、グループホーム、入居者の変化、日常の気づき、観察の指標、緊急コール、コミュニケーション

〈背景・目的〉

グループホームと訪問看護ステーションは契約を結び、医療連携体制加算を算定しており、入居者は訪問看護サービスを受けることができる体制となっている。

しかし、現状では介護スタッフによる観察・判断・報告にばらつきが見られる。そこで今回、介護スタッフが入居者の状態変化に気づき、適切に報告できる力を高めることで、医療的対応の遅れを防ぎ、報告の適正化を図ることを目的にTQMに取り組んだ。

〈方法〉

TQM委員会にグループホーム職員を加え、訪問看護とともにこれまでの緊急コール事例を出し合ってディスカッションし、緊急コール事例の共通認識を行う。次にグループホーム職員が困惑することがない観察方法とスムーズに報告ができる方法を策定する。

〈結果〉

グループホーム職員が日々の観察を通して利用者の異常に気づきやすい特性を踏まえ、観察を項目列挙ではなく状況の変化を指標として捉える方法を導入した。そのための日常変化を把握する観察指標を作成・運用した結果、報告や緊急コールの判断基準が明確となり、情報共有および報告の適正化が図られた。

〈考察〉

TQMの取り組みの中で、ホームのスタッフと緊急コール事例について日々の気づきを確認・共有する過程において、こうした連携には双方のコミュニケーションの改善が不可欠であることが明らかとなった。

今後は、作成した緊急コールの指標の有用性を評価するとともに、夜間を含めた緊急コールの適正化を図るため、さらなるコミュニケーションの強化が求められる。

これらを踏まえ、具体的な運用方法について検討していきたい。

〈結語〉

今後も作成した緊急コールの指標の標準化に向けて、TQM活動を継続していくことで、介護スタッフの判断力と報告力の向上を図り、より安心・安全なケア体制の構築を目指す。

資材センターにおけるセグメント目標進捗報告 会議見直しの効果

資材センター TQM委員会
○山本航汰

【キーワード】 TQM活動・働き方改革・セグメント目標

〈背景・目的〉

資材センターでは毎週水曜日の朝にセグメント目標進捗報告会議を行っている。

毎回、数人のみの固定されたメンバーで、全員参画ではないため、報告方法を変えることにより、職員全員がセグメント進捗報告書を確認でき、職員全員のセグメント目標への参画意識を高めることを目的に改善に取り組んだ。

〈方法〉

改善内容を起案書に作成・提出し、所属長の下承を得て、資材センター職員全員に報告方法が変更になることを周知し開始する。

①毎週のセグメント進捗報告を月1回とし、報告方法はTeamsのチャンネルに資料を提出し、職員は必ず確認し、「いいね」マークを付けることをルール化した。

②Teams報告だけでは多くの人前での発表機会を失ってしまうため、年2回(上半期・下半期)集合形式での全体発表会議を実施した。

〈結果〉

職員全員が好きな時間にセグメント進捗報告書を確認できることで、今まで会議に参加していなかった職員も参加でき、職員全員のセグメント目標への参画意識が高まった。

「いいね」マークは100%つくようになった。

〈考察〉

従来の報告会議では、参加メンバーが自然と固定され、参加していないメンバーの報告に対する理解度が低かったが、毎月Teamsを用いて報告し、職員全員が必ず確認するようにすることで、参加していなかったメンバーの意見が出たことや全員がセグメント目標への参画意識を高めることができ、セグメント達成への期待が高まった。

従来の資料の内容と数字では伝わりづらくなってしまうという欠点もあるため、より詳しい内容の資料が求められた。

〈結語〉

セグメント目標は重要な到達課題であり、職員一人一人が意識を持つことで価値があるものになる。今回、職員全員の前で発表する機会を設けることにより、よりセグメント目標達成意識が高まり、今後さらに人材育成にも繋げられることも期待したい。

Microsoft office365のアプリFormsによる 問い合わせ受付による電話の問い合わせ削減の 取り組み

本部医療情報部 TQM委員会
○寺島達朗

【キーワード】 TQM活動・働き方改革

〈背景・目的〉

現状、簡易な問合せ内容であっても電話による問い合わせが一定頻度で発生している。問い合わせ内容に応じて適切な担当者へ取次ぐ必要が生じ、その際、担当者は遂行中の業務を中断せざるを得ない状況となる。また、受電内容については記録・管理を行っている為、簡易な問合せ内容であっても業務負担が多くなる傾向がある。これらをインターネットによる(Forms)による問い合わせ方法を取り入れることにより効率化・省力化を図る。

〈方法〉

①Microsoft office365のアプリFormsを用いた問い合わせの仕組みを開発する。

- ・Power Automateを用い、問い合わせ内容をListへ蓄積
- ・受付用Formsを用いて問い合わせ案件に担当振分、受付処理⇒問い合わせ投稿者と問合せ受付報告と担当任命連絡をチャット連絡
- ・担当が対応完了後、受付用Formsを用いて完了報告送信⇒問い合わせ投稿者へ完了報告をTeamsチャット連絡&Listへ対応内容を更新

②職員へのFormsによる問い合わせ方法の案内をTeamsにて行う

〈結果〉

FormsとPower Automateによる問い合わせ送信・受付の仕組みは完成し、職員への案内は、これまで医療情報部への問い合わせ方法の「電話」「医療情報部課員へ直接チャット」「チャンネルへの投稿」に加え、土・日・祝日・平日の急を要さないお問い合わせについてFormsの「お問い合わせフォーム」の活用を案内した。また、マウス・キーボード交換などのついても受け付けることとした。

〈考察〉

現在、仕組み自体が運用して間もない為、電話による問い合わせの減少は図れていないが、運用が周知されてくればFormsでの問い合わせが増えてくると期待している。また、電話以降自分の問い合わせがどのような状態で誰が担当か分からなかったが、受付・担当振分時点でチャット連絡が送信される為、問合せ者が自身の問い合わせの進捗が分かりやすくなったため、今後の問い合わせ業務量の省力化が図れると考える。

〈結語〉

本取り組みにより、従来の電話対応に伴う業務中断や進捗不透明性が改善され、問い合わせ対応業務の効率化と可視化が多少は実現されたと思料する。今後はさらにFormsでのやり取りを拡大しより業務の効率化を目指したい。

ガソリン消費を削減する

トランスポート TQM委員会
○樋口吾一・古田大輔・大下久美子

【キーワード】経費削減 SDGS 地球温暖化と二酸化炭素の排出抑制

〈背景・目的〉

物価上昇 ガソリンの高騰もあり燃料費削減

〈方法〉

社内の安全運転講習会にて

①使用する全車両の空気圧の点検 ②アイドリングストップの徹底 ③高速道路での80km巡行④踏み込み運転禁止の4つの改善案を説明し実行する。

〈結果〉

空気圧点検をしたところほぼ全車低下していたので空気圧を高めに設定して昨年の7月と今年の7月を比較したところ、1リッターあたり0.4キロ燃費向上が見られ金額にして5万円の削減になった。毎月5万円削減できれば1年間で60万円の削減効果になる 仮に燃費が1キロ向上できればさらに倍の毎月10万円 1年間で120万円の削減の見通しである。

高速道路を80キロで巡行して前車との車間距離を空けて走行する事により今までに多く見受けられた前車からの飛び石によるフロントガラスの破損が劇的に減少し修理代も減少 保険を使うこともなくセグメント評価が下がることもなくなった。

〈考察〉

今年は梅雨明けが異常に早かったうえに連日の猛暑 時には40℃に迫る酷暑の中で冷房しながら運転していたにも関わらず改善策①②④により燃費減の効果につながったのは安全運転講習会において燃費減の考え方を再認識でき職員が一体となって改善策を実施した事が効果を生み出したと考える。③高速道路での80km巡行については職員の意識が統一したことにより高速道路上の飛び石の発生がなくなったという事故防止につながったと考える。

〈結語〉

暦の上では立秋を過ぎて暑さのピークは越えたのでこれから涼しくなれば車内の冷房の必要も無くなるが、今回の取り組みで運転の方法を見直したことで更なる燃費の向上が期待したい。

定例研修会の見直しによるファシリティにおける専門的な知識のさらなる向上

ファシリティケア TQM委員会
○石井達也

【キーワード】TQM活動・ファシリティ業務・専門性 スキルアップ

〈背景・目的〉

職員間交流、スキルアップ・知識を高める、経費・費用を抑える、伝え方を学ぶことを目的に令和3年より月に1回音羽エリア丸太町エリア合同で行っているが、現状は職員間のコミュニケーションと施設管理等の勉強会になっていた。そこで、定例研修会の目的を明確にし、ファシリティ業務を行う専門職としての知識、スキルを向上させる研修内容とした年間計画を作成し知識向上を図る取り組みを行うこととした。

〈方法〉

年間スケジュールにファシリティ業務に必要な専門知識を組み込み、講師を選定し、毎月の研修会を計画。次に講習内容に沿ったテストを実施する。テストは単なる評価だけでなく定量評価として活用することとした。

〈結果〉

年間計画に基づき7月8月の研修会を実施した。参加者の反応は知らなかった事もあったので勉強になった。と良好であり、講師については、講師行う事により知識の再認識が出来た。との反応であった。テストは12月に実施する予定である。

〈考察〉

研修計画を専門的な内容に絞って実施することにより、学習の体系化と継続的なスキルアップを図ることにつながっていくと考えている。講習に合わせたテストを実施していくことにしているが、このテストにより学習の習得度を評価し、研修内容の改善につなげることと職員自身が知識の不足を自覚し自己研鑽できることを期待している。

〈結語〉

今後も定例研修会を通じて、専門性の向上と組織力の強化を図り、より質の高いファシリティ業務の実現を目指す。

請求書業務の時間削減

ワイズファイナンス TQM委員会
○西田虎太郎

【キーワード】 TQM活動

〈背景・目的〉

請求書処理において、会計ソフトとExcelの二重管理による重複作業や法人ごとに異なるExcel様式の使用により、非効率な作業や業務の引継ぎに時間を費やしている。また関連会社における手作業での支払処理についても改善の余地がある。これらの課題を解消するため、作業・管理方法の見直しとExcel様式の統一化を推進する必要がある。

〈方法〉

全社的にExcel様式を共通化し、処理件数が多い洛和会ではExcelを会計ソフトへデータ取込が可能なフォーマットへ変更する。関連会社ではExcelデータから業者への支払処理を行うことにより作業時間を短縮する。

〈結果〉

洛和会では一部を会計ソフト取込に変更したことで、10分程度かかっていた手入力作業が短縮され、入力ミスも減少した。ただし、按分処理が多い請求書はExcel入力に時間がかかるため、別の方法の検討が必要である。関連会社ではウエルネットの買掛金支払業務から対応を開始し、約20分の作業時間短縮を実現した。一方で、初回のExcel加工に時間を要するため、取引件数の少ない法人ではかえって非効率となる場合がある。

〈考察〉

Excel様式の統一および会計ソフトへのデータ取込は、処理件数が多く按分が少ない法人において、業務効率化に有効である。一方、取引先が少なく按分が多い法人では、かえって作業負担が増す可能性があるため、状況に応じた導入が望ましい。

〈結語〉

請求書処理の効率化を図るには、各法人の業務特性を踏まえた対応が求められる。会計ソフトへの取込は一定の条件を満たす法人に有効であるが、そうでない場合は非効率となる。効率化が見込まれる法人には導入し、他法人には様式統一を推進すべきである。

看護学科教員 業務内容の統一化

洛和会京都看護学校 TQM委員会
○阪口和哉

【キーワード】 看護教員、業務、統一化、働き方改革

〈背景・目的〉

本校は、豊かな人間性と看護に必要な態度・知識・技術を持った人材育成を教育理念とし、学生個々のレディネスに応じた関りができるように日々尽力している。しかし、学生一人ひとりに関わる時間を確保する事が非常に困難になっている現状がある。そのため、学生に関わる時間を確保していくために教員の業務の見直しが必要と考え、教員に関わる業務の統一化の取り組みを行った。

〈方法〉

昨年度TQMで策定した「教育に係る業務体系」の各中項目における小項目(教員の実行レベルの業務)を洗い出し標準化する。

〈結果〉

大項目「カリキュラム」の中項目「時間割作成」において、年度内に学生に次年度の時間割を配布することができるようになった。他の中項目における小項目の標準化は継続中である。

〈考察〉

業務内容の標準化を図ることにより、担当教員が明確になり、業務量の分散が整理され则认为。引き続き標準化したことを全教員が統一して実施していくことで学生教育への時間の確保が期待できる。

〈結語〉

今後、引き続きより良い教育活動を展開していくためにも、教職員一丸となって教員業務の改善を図っていきたい。

〈参考・引用文献〉

・今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書:厚生労働省

ヒヤリハット報告の習慣化による、 保育現場の安全な環境確保への取り組み

子ども未来事業部 TQM委員会

○大槻香奈恵

【キーワード】・TQM活動 ・ヒヤリハット ・安全 ・共有

〈背景・目的〉

ヒヤリハットの報告は、保育環境の見直し・質の向上には不可欠である。しかし、記入基準が施設によりばらつきがあったり、記入に対する業務負担感があったりなど、報告件数に施設差・個人差が見られ、全体的に少ない傾向にある。今回、子ども達の安全な環境確保のために、保育士が様々なヒヤリハットを意識できることをねらい、報告件数の増加への取り組みを行った。

〈方法〉

下記内容のルール化

- ①書式の見直し…押印欄の削除と記入欄の削減
- ②記入基準の提示…ヒヤリハット事例を提示
- ③報告方法…報告書記入後にPDFで新設した共有フォルダへ保存。
- ④共有方法…毎月の報告内容を集計し、全職員へ報告件数や内訳などの周知

〈結果〉

R7年4月は、51件(16施設)。今回の取組後、6月には134件、7月は176件(18施設)と増加。職員にも書く意識づけが見られるようになり、今まで記入していなかった職員の報告も見られるようになった。また、他施設の事例を気軽に共有できるようになり、事例の検討・対策につながっている。

〈考察〉

職員が子どもの危険につながる些細なことに気づき、記入するようになることで、自施設ではどのような事例があるのか分析していく。

〈結語〉

保育現場では日々、子ども達の安全のために対応や対策をしても予期せぬ怪我やトラブルにつながってしまうことがある。今回ルール化した報告方法を習慣化し、ヒヤリハットの報告件数が増えることで、様々な事例を共有し、子ども達のアクシデントが最小限になるようにしていきたい。

紙媒体業務の見直しによるペーパーレス化

ウエルネット TQM委員会

○長谷明夏・福井良・明崎博和・伴圭一郎・塚本聡・北村佳代子・
山田貴子・村上真希・小松香澄

【キーワード】TQM活動、業務効率化、ペーパーレス、働き方改革

〈背景・目的〉

日常業務で発生している紙媒体は、業務効率を妨げる要因でもある。当社では、従来の慣習により、紙を使用し続けている場面も多数存在した。本活動では、これらの業務実態の見直し、紙媒体を削減・廃止することで業務改善と経営効率の向上を図ることを目的とした。

〈方法〉

部署ごとに紙媒体の一覧表を作成し、必要・不要の分類を実施。不要と判断された書類は、理由や今後の運用方法を明確化した上で削減を実行。必要に応じて行政確認を行い、Excelでの一括管理及びデータ化による代替手段を導入。また、随時削減対象を社内全体に周知していった。

〈結果〉

ペーパーレス化の対象96種類のうち、不要と判断した紙媒体は計23件あった。内訳には、紙運用を廃止したものとデータ化に変更したものがある。各業務では紙を使用しない運用体制に移行し、業務効率があがっている。

〈考察〉

本活動により、従来からの一部紙媒体を廃止でき、紙媒体の方が効率的という議論やIT化を取り入れ、その業務全体を見直すことに有意義であったと考える。しかし、行政等が紙媒体を求めるものもあり、容易に進められない要因であった事が、今後の課題である。紙媒体業務の見直しを継続的に行うことで、業務時間や経費削減に繋がり、環境への配慮とも一致し、持続可能な運用の一環として有意義であったと考える。

〈結語〉

今回の取り組みを通じて、紙媒体不要書類を可視化し、実際に23項目の削減が成功した。この結果を踏まえ、さらに見直しを広げていく必要がある。業務効率化・働き方改革・経営改善という複数の視点から効果を確認でき、継続的なTQM活動として今後の定着と波及効果が期待される。

CRC業務の標準化と可視化

新薬開発支援部 TQM委員会

○本田陽子

【キーワード】 TQM活動 みえる化 業務量 標準業務 標準業務規定 役割

〈背景・目的〉

長年のメンバーの固定化により、現状の業務スタイルが当たり前になっており、それ故他職種がどのような業務をしているかに目を向けてこなかった。今年度のTQM委員会で各々の業務内容、業務量の洗い出しを行い、事務とCRCの重複業務はなかったが、CRC自体の業務の標準化が図れていないことが分かり、改めて標準業務規程の見直し修正を行うことに取り組んだ。

〈方法〉

CRC5人の業務を細かく洗い出し、重複業務、個別業務の分析、分類化を行い、標準化作業を行った。最終的には洛和会新薬開発支援部標準業務規定に組み込み、全体への可視化を行う。

〈結果〉

CRC業務において、「治験準備段階」「治験開始段階」「治験終了段階」3つの軸で小項目を整理できた。

〈考察〉

標準業務規定の再構築は、新人、異動者にも業務内容のイメージがしやすくなるだけでなく、他職種からも我々が日々どのような業務をしているかという理解も深まり、今後の治験への取り組み方にも期待が持てると考える。

〈結語〉

標準業務規定を整備することで、組織全体の効率性や信頼性を高め、新薬開発センターとしての役割をさらに果たしていきたい。

健康診断における顧客満足度向上を目指した取り組みについて

洛和会京都健診センター TQM委員会

○原田珠未・村上公崇・坂口加代・永田みゆき・松田三矢子・石原聖子・佐藤利香

【キーワード】 TQM 健康診断 業務改善 顧客満足

〈背景・目的〉

健康診断に求められるものは正確で効率的な検査の提供だけではなく、健康診断に対する満足感および充実感である。特に受付時の対応、待ち時間、説明のわかりやすさ、プライバシーへの配慮、安全性などのサービス全般に対する期待は高く、常に見直し改善が求められている。本健診センターはTQM活動として顧客満足度向上に焦点をおいた取り組みを行うこととした。

〈方法〉

健診センターのすべての担当が顧客満足に係る見直しを行い、音羽病院健診センター、東寺南病院健診センター、巡回健診の受診者を対象に満足度調査を行う。

〈結果〉

健診センターの各担当の顧客満足に焦点をおいた取り組みを以下に行なった。音羽病院健診センターは検査の待ち時間短縮、東寺南病院健診センターはリピーター率増加、コールセンターはWeb問診の普及、成績管理は結果返却までの期間短縮、巡回健診はバリウム受診率増加、業管理は詳細な顧客情報の共有と各部署の取り組みに協力した。現在満足度調査は実施中である。

〈考察〉

今回の各担当の改善策はこれまで行っていた健診の流れや対応の欠点に焦点をあてたことで対策を絞り込むことができたといえる。さらにより良い健康診断を提供するために新たな工夫を組み込んだことで他の健診との佐部かを図れたと考える。

〈結語〉

顧客の声に耳を傾けながら、今後も継続的に顧客満足度調査と改善を繰り返し、多くの方から選ばれる健診機関を目指して質の高いサービス提供に努めていく所存である。

MRCPで用いる経口造影剤の代替品の有用性の検討

洛和会音羽病院 放射線部

○河守海陸・池ノ上大輔・大城怜央

【キーワード】 MRCP、MRI検査、造影剤

〈背景・目的〉

MRCPにおいて、腸管内容物の高信号は胆道・膵管の描出を阻害するため、経口消化管造影剤の併用が推奨されている。当院でのMRCP検査で使用しているクエン酸鉄アンモニウムは一定の信号低下の効果を得るが、鉄過敏感症等を有する患者には禁忌である。そのため市販果実飲料を用いた代替経口造影剤の有用性について検討をする。

〈方法〉

健常ボランティアを対象に、当院で使用しているMRCPプロトコルを用い消化管の信号低下の比較を造影剤服用なし、市販飲料服用時、クエン酸鉄アンモニウム服用時とそれぞれ撮像を行った。得られた画像から消化管の信号低下度合いと観察部位の描出を比較した。

〈結果〉

得た画像を比較すると、市販飲料を服用したMIP像の胃や十二指腸および腸管の信号が低下し、胆管と膵管の描出能が向上した。しかし、MIP像で一部だが膵管の描出不良と考えられる画像が見られた。

〈考察〉

結果から市販果実飲料の服用による生理的反応など様々な要因が描出不良に関与していると考ええる。今後は飲料の種類や投与量、絶食時間といった条件を見直し、検証が求められる。

〈結語〉

本研究から特定の市販果実飲料は、フェリセルツの禁忌となる鉄過敏感症等を有する患者に対する安全かつ有効な代替手段になり得る可能性が示唆された。膵管描出の安定性に課題があるため当院の臨床での代替造影剤としての汎用的な運用は現時点では困難であり、今後臨床応用を見据えさらなる検証が望まれる。日本医療科学大学研究紀要第15号(2022) P63 塩化マンガン四水和物内用液代替品としての果汁飲料の有用性について

〈参考・引用文献〉

日本医療科学大学研究紀要 第15号(2022) P63-70
塩化マンガン四水和物内用液代替品としての果汁飲料の有用性について 齋藤蓮

1.5T装置における冠動脈MRAの撮像条件についての基礎検討

洛和会音羽病院 放射線部

○篠岡雅・高崎拓朗・大城怜央

【キーワード】 MRI、MRCA、冠動脈検診

〈背景・目的〉

当院では3.0T装置にて心臓MRI検査は行っていたが、冠動脈MRA(MRCA)撮像の実績はなかった。近年、検診やフォローアップを目的としてMRCAの適応が広がりつつあり、当院でも冠動脈検診が検討されている。今回、新たに導入されたPhilips社製1.5TMRI装置Ingenia Ambition Sを用いて、撮像パラメーターの変更による画質への影響を検討した。

〈方法〉

撮像には3D balanced SSFP(bTFE)シーケンスを使用し、健常ボランティアとファントムを対象に撮像パラメーターを変え撮像を実施した。得られた画像より、撮像パラメーター変更による画質への影響を複数の方法で評価・比較した。

〈結果〉

AI CS sense factorを適切に設定することで画質を保ちつつ撮像時間の短縮が可能であることが示された。また、TFE factor等の撮像パラメーターも画質に影響することが認められた。

〈考察〉

撮像時間と画質の関係から、条件により短時間撮像となると検査効率は向上するが、必ずしも診断に有効な画像ではないと考える。よって、検査効率と画質のバランスが重要である。

〈結語〉

本研究により、1.5T装置でのMRCA撮像において、撮像パラメーターの変更が画質と効率の両方に影響する可能性が示された。今後の臨床応用に向けて診断と患者負担を考慮した、撮像パラメーターの最適化の検討が期待される。

〈参考・引用文献〉

上田優 他, 次世代Compressed SENSE “SmartSpeed AI”による高速化, 高画質化の実現:Innavi net:https://www.innervision.co.jp/sp/ad/suite/philips/technical_notes/220986, 2022年、(閲覧日:8月20日)
小原 真 他, SENSEとDLRの融合:「SmartSpeed AI」. Innavi net : https://www.innervision.co.jp/sp/ad/suite/philips/technical_notes/230410, 2023年、(閲覧日:2025年8月20日)

乳房撮影におけるトモシンセシスをを用いた 撮影モードの比較検討

洛和会音羽病院 放射線部

○小嶋美乃里

【キーワード】 マンモグラフィ検査

〈背景・目的〉

2023年4月より当院ではFUJIFILM製デジタルマンモグラフィ装置「AMULET Innovality」を導入し、トモシンセシス撮影において検診患者にはSTモード、外来患者にはHRモードを使い分けて運用している。両モードは撮影時間や被曝量に差があり、患者負担に影響するため、画像の質を維持しつつ負担軽減を目的に運用方法の見直しを行った。

〈方法〉

乳がん術後の患者標本を用い、臨床条件を含む複数の条件下でトモシンセシス撮影を実施する。ST・HR両モードにおいて撮影条件を変更し、平均乳腺線量(AGD)等の数値的評価と、画像の視覚的評価を行った。

〈結果〉

AGDはHRモードに比べSTモードで低く、撮影時間も短い。

視覚的評価では、STモードにおいても診断に支障がないと判断される画像が得られる場合があり、条件によってはHRモードと近い評価を受けることもあった。

〈考察〉

患者の状態に応じてSTモードを選択することで、画像の質を保ちつつ負担軽減が可能である。現状の「外来=HRモード」という一律運用に加え、柔軟な選択肢を設けることで、より適切な検査が実現できる。ただし、病変の視認性がHRモードで明瞭となる場合には、診断精度を優先しHRモードを選択することが重要である。いかなる場合も、病気の早期発見につながる画像を撮影することを最も重要な目的として運用する姿勢が求められる。

〈結語〉

今後は、臨床状況に応じた撮影条件の選択を視野に入れ、適切な被曝量での撮影を通じて、患者負担のさらなる軽減に努めていきたい。

嚥下造影検査における 頸部ハレーション防止策の検討

洛和会音羽リハビリテーション病院 放射線部

○岡本織人

【キーワード】 ハレーション、撮影条件、固定具、指標

〈背景・目的〉

当院では、患者さんの嚥下機能評価のためX線TV装置を用いて嚥下造影検査(以降、VF検査)を行っている。VF検査の際にハレーションが起こるため、頸部が見えにくくなる現象が起こってしまう。当院の装置の構造上、頸部に沿って管球を傾けることができない。また、頸部全体を描写するためや患者さん自身の体動もある。そのため、照射野を絞ることもできない状態であり、ハレーション軽減が困難である。今回、VF検査を受ける患者さんの姿勢や体型を考慮し頸部が鮮明に描写される撮影条件を検討した。また、嚥下機能評価の際に頸部や嚥下物の大きさがわかる指標となるものも検討した。

〈方法〉

VF検査を受ける患者さんは一人一人姿勢や体型が違うため、位置合わせの透視確認の際に頸部が鮮明に描出されるよう、マニュアルで撮影条件を設定した。そのデータを集計し、撮影条件を決定した。指標の検討に関しては、患者さんの頸部に合った固定具を作成し、そこに10円玉を設けて指標となるものを計った。また、顎を引いて嚥下を行うような激しい動きのある患者さんは固定具を使用できないため、顎に指標になるものをつけるなどの検討も行った。

〈結果〉

ハレーションが軽減され、頸部がきれいに描写されるようになった。また、嚥下機能評価の指標となるものができた。

〈考察〉

検査姿勢によって検査範囲が変わることや、体型によって頸部の太さも異なるため、撮影条件にバラツキがあった。

〈結語〉

X線TV装置では、ハレーションが起こり画像劣化につながるやすい検査である。撮影内容によっては照射野を絞ってハレーション軽減できない時もある。検査上での工夫をしていくように今後も検討していきたい。

新生血管型加齢黄斑変性に対する ファリシマブ硝子体注射の治療成績

洛和会音羽病院 視能訓練室

○野田雄太

【キーワード】 加齢黄斑変性、硝子体注射

〈背景・目的〉

新生血管型加齢黄斑変性（AMD）は高齢者において後天性の重大な視力低下を引き起こす疾患であるが、抗血管内皮増殖因子薬が標準的な治療となっている。本研究では、ファリシマブ硝子体注射（IVF）の治療成績を検討し、その成績について報告する。

〈方法〉

当院に通院中のAMD症例で2022年6月から2025年3月にIVF治療を施行した27例27眼を対象とし、治療前後の視力、中心網膜厚（CRT）、中心脈絡膜厚（CCT）、再発について検討した。

〈結果〉

注射前のlogMAR視力は 0.408 ± 0.339 、6か月 0.426 ± 0.399 （ $P=0.679$ ）、12か月 0.461 ± 0.426 （ $P=0.307$ ）と変化はなかった。注射前のCRTは $367.2 \pm 168.0 \mu\text{m}$ 、6か月 $268.5 \pm 104.0 \mu\text{m}$ 、12か月 $265.5 \pm 157.2 \mu\text{m}$ と有意に減少していた（いずれも $P<0.01$ ）。注射前のCCTは $193.8 \pm 81.8 \mu\text{m}$ 、6か月 $182.3 \pm 81.7 \mu\text{m}$ 、12か月 $186.2 \pm 83.4 \mu\text{m}$ と有意な変化は見られなかった（いずれも $P>0.05$ ）。27眼のうち、IVFの導入投与（1か月ごとに3～4回のIVF）を施行したのは14眼、単回投与は13眼であった。治療後に滲出性変化が消失したのは18眼（導入群12眼、単回群6眼）であった。再発に関しては、投与後3か月以内に再発を認めなかった症例は27眼中9眼（導入群8眼、単回群1眼）であった。そのうち5眼（導入群4眼、単回群1眼）は6か月経過後も再発を認めなかった。

〈考察〉

本研究では、視力の有意な改善は認められなかったが、滲出性変化の消失や再発において、単回投与群よりも導入投与群の方が良好な傾向を示した。木成ら¹および宮本ら²の報告でも、ファリシマブ硝子体注射による視力改善には有意差は認められていないが、滲出性変化の抑制に一定の効果が示されている。今回の結果からも、導入投与による複数回の治療が、病勢のコントロールや再発予防に有効である可能性が示唆された。

〈結語〉

IVFはAMDの滲出性変化による改善に効果が期待でき、導入による投与が望ましいと考えられた。

〈参考・引用文献〉

1. 木成玄他 臨床眼科 78巻 7号 pp. 875-880(2024年07月)
2. 2. 宮本紀子他 滲出型加齢黄斑変性に対するファリシマブ硝子体注射の短期効果 洛和会病院医学雑誌 Vol.35:1-5, 202

外部との連携

～洛和会における日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの役割～

丸太町リハビリテーションクリニック フィットネス部

○西山伸吾

【キーワード】 日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー
渉外活動、アスリート、地域貢献

〈背景・目的〉

日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー（以下、AT）は主にスポーツ現場でアスリートの身体をサポートを行っている。

丸太町リハビリテーションクリニックでは多くのアスリートが受診、リハビリを行っている。現在ATの経験を活かし、クリニックとスポーツ現場（高校、大学などの部活動など）の連携強化のために渉外活動に取り組んでいる。

〈方法〉

現在週に2回程度、渉外活動としてスポーツ現場に訪問している。そこで痛みを訴える選手の対応などを行い、必要であれば丸太町リハビリテーションクリニックや丸太町病院などの病院受診を促している。また監督からの診察の相談も受け、対応している。洛和会におけるATの役割はスポーツ現場と医療を繋ぐことである。

〈結果〉

渉外活動先で指導者や選手とのやり取りを重ねることで怪我による診察の依頼などが増加した。R6年度の下期で私が渉外活動に行っているチームから59人の選手が受診した。

〈考察〉

洛和会はハンナリーズのサポートを始め、スポーツを通じた地域貢献を推進している。ATが行っている渉外活動も活動先からのクリニック受診者が増加しており、スポーツ現場との連携強化が進んでいる。今回のスポーツ現場への渉外活動も地域貢献に繋がっていることが考えられる。

〈結語〉

今後も渉外活動を行いスポーツ現場との連携強化を行っていく予定であるが、課題として洛和会内でのATの認知度向上が必要である。今後は洛和会内でも職種として認知されるよう働きかけていく必要がある。

生成AIによる業務文書作成における プロンプト設計の最適化

洛和会インフォマティクスセンター

○石岡佳記

【キーワード】 生成AI、プロンプト設計

〈背景・目的〉

生成AIの進化により、業務文書作成の自動化が現実的な選択肢となっている。海外では利用率が50～80%に達する一方、日本では26.7%にとどまる（総務省調査）。このことから、生成AIの活用、特にプロンプト設計に関する理解が国内では十分に一般化されていないと考えられる。生成文書の品質はプロンプト設計に依存しており、安定した成果を出力できるプロンプトの研究は重要である。本研究では、実務で通用する報告書を安定的に生成するプロンプトの有効性を検証する。

〈方法〉

第34回ヘルスケア学会参加を想定したメモを基に、Copilotで自然な文体の報告書を生成するプロンプトを設計。役割・目的・構成を明示し、生成結果を「自然さ」「実用性」「論理性」でAI評価後、上司による実務評価を行う。

〈結果〉

Copilotによる生成文は自然で、出張報告書として一定水準以上の品質を有していた。

〈考察〉

役割や構造を明示する手法は品質確保に有効。Zero-Shotを採用したが、類似処理ではFew-Shot提示が精度向上に寄与すると考える。人による元情報の質や要点整理も重要。AI修正の繰り返しは抽象化を招くため、過度な依存は避けるべき。

〈結語〉

適切なプロンプト設計により、生成AIは安定した文書出力が可能となる。現場知見や判断は人が担うべきであり、AIとの役割分担が鍵となる。

情報通信白書令和7年度版

(<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r07/html/datashu.html>)

The Prompt Report: A Systematic Survey of Prompt Engineering Techniques (Sander Schulhoff 他)

Large Language Models are Human-Level Prompt Engineers (Yongchao Zhou 他)

退院支援における他職種の意識変容を 目的とした勉強会の開催

洛和会丸太町病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室

○宮下怜子

【キーワード】 退院支援、多職種連携、業務改善

〈背景・目的〉

医療ソーシャルワーカー（以下MSW）の主な業務である退院調整において、日頃から他職種連携の重要性を実感しており、より円滑にするべく他部署に向けた勉強会を各課員が企画し開催することとなった。

〈方法〉

部署内で病棟や診療科、疾患ごとの退院支援の課題を抽出し、MSWの専門性や退院支援に関する発表用資料を作成。次に、各々が他職種へ向けて勉強会を開催。最後に、理解度や興味のある項目を問うアンケートを配布し集計した。

〈結果〉

勉強会を開催したことにより、MSWの専門的観点を他職種へ伝え、退院支援に関して相互理解を深めることができた。一方で、開催者が期待していた反応をアンケート結果から十分に得られなかった点もあった。また、資料を作成する過程で、MSW自身が専門性を再確認する機会を得られた。

〈考察〉

勉強会の開催は、日頃の業務の中だけでは伝わりきらないMSWとしての視点や価値観、考え方などを可視化して伝えられる良い機会となった。アンケートでは、内容に関する改善点の指摘もあったため、より相互理解を深められるよう、開催方法や資料の内容などは再考する余地があるだろう。

〈結語〉

MSWは医療現場に福祉職が配置される意義を自覚して専門性を発揮しつつ、こと丸太町病院においては急性期病院の機能を果たすための一助となることが求められる。専門性の異なる職種は目標を同じくしても考え方や価値観に差異が生じうるため、病院全体で一貫した退院支援ができるよう今後も勉強会の開催を継続していく。

外来適正化に向けた逆紹介促進の取り組みとその評価

洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 地域連携課

○倉田明人・宗清正晃・水野純子・吉田純・東浦まどか・
森田真一郎・片山翔也・酒井雅央・中前則江・林可奈子・善本紗世・
木村あゆみ・岡持真帆・原田成美・井上京子

【キーワード】 逆紹介、外来適正化、患者サポート外来、紹介率、医療連携

〈背景・目的〉

外来医療の適正化が求められる中、当院では低単価・長期通院患者の逆紹介を促進する取り組みを2025年4月より開始した。対象患者における逆紹介件数の推移を評価し、取り組みの成果と課題を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

対象は、処方60日以上かつ請求点数150点未満の外来患者（職員・他科併診を除く）。逆紹介候補者リストの配布、専用外来の設置、院内周知を実施。2024年度および2025年度の逆紹介候補患者数と逆紹介に至った件数、その割合を比較した。

〈結果〉

対象患者において、2025年度4～5月の逆紹介件数が前年同月比で2倍以上に増加し、逆紹介率も上昇。7月時点で減少傾向にはあるが、前年を上回る水準を維持している。

〈考察〉

候補者リストの配布や専用外来の設置、院内周知といった多面的なアプローチが奏功した結果と考えられる。一方で、継続的な成果の維持には課題が残る。今後は外来適正化コンサルの導入や、逆紹介会議の設置も検討する。

〈結語〉

逆紹介促進の取り組みは外来適正化に資すると考えられるが、継続的な評価と改善が求められる。

病院郵送業務における効率化の取り組み～自動織り機導入と電子カルテ活用による改善～

洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 地域連携課

○木村あゆみ

【キーワード】 郵送業務、業務改善、診療情報提供書、電子カルテ、効率化

〈背景・目的〉

洛和会音羽病院地域連携課は、1カ月約3,000通（年約3.6万通）を郵送処理している。従来はFAX送信後、全件を手作業で封筒に封入し、宛名ラベル貼付も含め手織りで対応していた。郵送記録はExcelへの転記で管理しており、処理量の増加に伴い時間負担・転記ミス・属人化が顕在化した。大量処理に適した工程短縮と記録一元化を目的に、自動織り機導入と電子カルテ更新により運用を見直した。

〈方法〉

- ①三つ折り工程を自動織り機で機械化（封入・封かん・ラベル貼付の一部は手作業継続）。
- ②郵送記録をExcelから電子カルテ内登録へ移行。
- ③導入前後で1件当たり工程時間・日次総作業時間・入力ミス・職員負担感を比較。

〈結果〉

1件当たり工程時間55秒→33秒、日次総作業時間2.3→1.3時間（43%減）。記録の一元化で転記不要となり、職員アンケートでは負担軽減の実感91%、他業務への時間再配分が可能となった。

〈考察〉

物理工程の部分自動化×情報工程の一元化は、月3,000通規模でも効率と精度を同時に向上させた。また他部署でも電子カルテで郵送処理された日程がわかるようになった。

〈結語〉

三つ折りの機械化と記録フロー統合により、限られた人員下でも安定した情報提供体制が維持できるようになった。

京都市内で唯一！ 「オーバーナイト透析」営業の取り組みについて

洛和会音羽記念病院 医療介護サービスセンター 地域連携課

○岸本奈津美※1・坂井良幸※1・廣瀬広徳※1・北村明宏※1・
東紀美※2・徳永結月花※2・小松円香※2・梶咲良子※2

【キーワード】透析、営業活動

〈背景・目的〉

今年3月より音羽記念病院では「オーバーナイト透析」という新たな透析の実施を開始した。法人内には洛和会の全職員向けにチームズを利用し案内を実施した。その後、外部向けには大きく3つの取組みを実施したため報告する。

〈方法〉

一つ目はホームページの更新。二つ目はチラシの作成。三つ目は医師による面談にて「オーバーナイト透析」の案内。病院長と共に急性期病院の医師面談を行いオーバーナイト透析に関する内容や魅力、注意点などを説明。急性期の医師へ案内する事で、今後透析が必要となった対象者に対して、オーバーナイト透析の意義を理解して頂けると考えました。

〈結果〉

周知活動は進んでいますが、オーバーナイト透析の利用者が増えていない。

〈考察〉

引き続き「オーバーナイト透析」という透析の認知度を高め、患者の需要をキャッチ出来る様に取り組みを継続して行っていく。

〈結語〉

洛和会の透析治療の中心である当院の「京都市内で唯一のオーバーナイト実施医療機関」として他院との差別化を図り、音羽記念病院をよりよい魅力的な病院として確立出来る様に努めていきたいと考えております。

※1 洛和会音羽記念病院 医療介護サービスセンター 地域連携課

※2 洛和会音羽記念病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室

当院におけるAge-Friendly Health Systems (AFHS)認証に至る活動内容と今後の展望

洛和会音羽リハビリテーション病院 経営管理部

○大藪誠士・二股美由紀

【キーワード】Age-Friendly Health Systems (AFHS)、4Ms、高齢者ケア、多職種連携、医療の質向上

〈背景・目的〉

高齢化が進む日本において、高齢者が安心して医療・ケアを受けられる体制の構築は急務である。京都市も健康寿命の延伸と、地域課題が顕著である。Age-Friendly Health Systems (AFHS) は、米国IHIが提唱する4Ms「4つのM (大切なこと、薬剤、認知、身体機能・歩行)」を中心に、すべての高齢者に安全で質の高いケアを提供する国際的な取り組みである。

〈方法〉

2024年にAFHSの理念を導入し、4Msに基づくケアの導入を開始し、レベルI認証を取得。入院時に4Msワークシートを活用した評価・記録の標準化を図った。院内における共通認識のツールとして各項目の入力率を調査した。調査期間は3月～5月の3ヶ月。

〈結果〉

入院時の入力率は大切なこと:99.4%、薬剤:95.4%、認知:98.6%、身体機能・歩行:99.4%とACP(人生会議)確認、認知機能評価の定着、薬剤師との連携、身体機能・歩行の活動性充実がみられた。2025年に日本初のレベルII認証を取得し、取り組みの質と継続性が評価された。

〈考察〉

AFHSの4Msにより、記録の標準化や職種間の理解の差といった課題が可視化され、改善策の導出が可能となっており、ケアの質向上に寄与することが示唆された。一方で、AFHSの認知度については今後の継続課題であり、領域間連携にも寄与していく。

〈結語〉

AFHSレベルII認証の成果を活かし、高齢者ケアの深化と法人内外への発信を強化していく。当会から高齢者ケアモデルを発信し、国内のロールモデルとなることを目指す。

〈参考・引用文献〉

- ・Fulmer T, Mate KS, Berman A. The Age-Friendly Health System imperative. J Am Geriatr Soc. 2018 Jan;66(1):22-24. doi: 10.1111/jgs.15076.
- ・Mate KS, Fulmer T, Pelton L, et al. Evidence for the 4Ms: Interventions to Improve Care for Older Adults. J Aging Health. 2021;33(7-8):469-481. doi:10.1177/0898264321991652.
- ・Berman A, Fulmer T, Mate KS. Creating Age-Friendly Health Systems. Healthcare. 2020;8(1):100397. doi:10.1016/j.hjdsi.2019.100397.

マイナ保険証利用率UPのための取り組み

洛和会丸太町病院 管理課

○宮田季美子

【キーワード】マイナ保険証

〈背景・目的〉

マイナ読み取り機が設置されたことを皮切りにマイナ保険証利用を推進する取り組みが始まった。開始当初低かった利用率を上げるための取り組みについて報告する。

〈方法〉

マイナ読み取り機設置当初はマイナ保険証使用のメリットが曖昧だったため、まずは機械が簡単に使用できること、窓口での保険証確認や限度額適用認定証の手続きが不要になることなどメリットを口頭、ポスターで案内し浸透させた。

〈結果〉

当初はマイナ保険証使用を躊躇されている人も多かったが、徐々に浸透してきたことから、今では約半数の人が使用されるまでになった。

〈考察〉

ポスターや配布物を作成するなどしたが、最も効果を感じたのは対面での口頭説明だった。患者さんはメリットがあると感じられると積極的に使用されるため、メリットを理解してもらうことは非常に重要だと感じた。

〈結語〉

同じような取り組みが、必要な場面が日々あると思うが、患者さんとの対話が重要だと感じた。温度感のある接遇の中で必要性を理解してもらうことの効果を感じた取り組みだった。

メディカル・フロント・コンシェルジュとしての役割
～サービスの質の向上を目指して～

洛和会音羽病院 管理課

○寺田恵伊子

【キーワード】

〈背景・目的〉

メディカル・フロント・コンシェルジュとは、接遇のスペシャリストとして来院された患者さんのお迎えや院内のご案内、あらゆるご要望にお応えしサポートを行う仕事です。

音羽病院では本館総合受付、外来総合受付、外来各フロア受付に配置しています。

〈方法〉

お困りの患者さんがいらっしゃらないか常に気を配り、車いすが必要な患者さんが来院された際にはサポートし、患者さんが院内で迷われないように付き添ってご案内しています。各受付前の混雑した状況を緩和するべく必要に応じたお声かけをし、要望を聞き取り、他職種のスタッフとも連携を図っています。

来院された患者さんの不安を少しでも和らげるよう寄り添った対応を心がけています。

〈結果〉

病院の顔としての役割を担いサービスの質の向上に繋がっています。

〈考察〉

超高齢化社会の到来により、病院に対してサービスの質の向上を求める声も高まってきています。高いコミュニケーション能力とさらに踏み込んだ細かいおもてなしを提供するメディカル・フロント・コンシェルジュの役割は大きいといえます。

〈結語〉

スタッフ一人ひとりのホスピタルマインドが、地域に根ざし選ばれ指示される医療機関となるため、人材の育成や勉強会を行い更なるサービスの質の向上を目指します。

車いす・車いすクッションの利用による利便性と身体的効果への検証

ウエルネット 本社

○相見忠弘

【キーワード】 利用者の身体状態や体型・使用環境に適合した車いす・クッションの選定

〈背景・目的〉

高齢者や身体機能が低下した利用者にとって車いすは移動能力を補完する目的として使用されるが、長時間の使用は褥瘡や姿勢不良のリスクが伴う。利用者の使用環境・身体状態を考慮した車いす・車いすクッションの選定と併用が重要な要素となる。

〈方法〉

複数の車いすとクッションを使用し、移動範囲・座位時間・姿勢保持・本人満足度を評価した。

〈結果〉

クッション併用により座位保持時間の延長、褥瘡リスクの軽減が確認され、活動範囲が拡大。車いす・クッションの種類により快適性や姿勢安定性に差が見られた。

〈考察〉

車いす・クッションの選定には、利用者の体格・筋力・皮膚状態・使用環境などの個別性を十分考慮する必要がある。適合度の高い用具は快適性と安全性を高め、介護負担も軽減する。

〈結語〉

車いすとクッションの適切な併用は利用者の生活の質向上と介護負担軽減に有効である。選定時には個別評価を行い、機能性と適合性を両立した用具を選ぶ事が重要である。

〈参考・引用文献〉

厚生労働省 福祉用具利用の手引き
福祉用具プランナーテキスト

臨床研究CRC部分的支援開始のその後 ～開始から2年半を経過して～

(CRC：治験コーディネーター)

洛和会学術支援センター 新薬開発支援部

○榛澤直美

【キーワード】 臨床研究、CRC、部分的支援

〈背景・目的〉

第33回本学会で支援開始半年経過時の内容を報告した。その後2年を経て合計2年半における支援内容の推移を抽出した。

〈方法〉

2022年(R4)9月から2024年(R6)3月までの間、研究責任医師から依頼があった試験毎に支援内容を分類。項目を5つに分類した。

〈結果〉

期間内に支援依頼があったのは28試験で、音羽病院が26試験、丸太町病院が1試験、リハビリテーション病院が1試験であった。分類結果で多かった順に(2) 倫理審査書類関係・必須文書保管:27件、(1) 窓口業務:11件、(5) 検体・画像関係:11件、(3) EDC登録・入力補助:8件、(4) 被験者来院スケジュール調整、電子カルテ内注意喚起記載:3件となった。

〈考察〉

支援開始から半年経過時(R4年度)と比較してR5年度の支援依頼件数は減少したもののR6年度の依頼件数は増加した。中でも特定臨床研究での支援依頼の増加は近年の大きな変更点である。分類結果で多かった倫理審査書類関係・必須文書保管、窓口業務は多忙な責任医師に代わりCRCが代行することで円滑な臨床研究の実施が期待される。

〈結語〉

臨床研究CRC部分的支援は開始から2年半が経過した。多忙な臨床研究責任医師からの部分的に重点を置いた支援依頼は、洛和会全体での円滑な臨床研究の適正実施へとつながる。今後も責任医師の支援依頼に寄り添い、充実した体制構築を図りつつ適正かつ円滑な臨床研究実施体制に寄与したい。

洛和ヴィラ大山崎での音楽療法の取り組みについて ～多職種協働から入居者のQOLの向上をめざす～

洛和会京都音楽療法研究センター

○堀内美里※1・峯静香※1・上村卓也※2・柴田恵美※1・
安達紗代※1・野坂彩音※1・北脇歩※1・矢野ひとみ※1

【キーワード】音楽療法、高齢者、介護、多職種協働

〈背景・目的〉

当施設では月1回、集団音楽療法(以下、集団)を実施している。実施後、職員との振り返りで、より入居者(以下、CL)の状態や状況にあわせた音楽療法について検討し、今年度より集団に加え、個別音楽療法(以下、個別)を開始した。実際の様子、職員の意見を交えて、この取り組みについて報告する。

〈方法〉

集団:45分間、身体・認知面の活性化・社会交流の場を目的に実施。音楽療法士(以下、Th.)は2名。歌唱や楽器活動、鑑賞を取り入れている。

個別:職員が対象者を選び、Th.へ情報が共有される。内容はCLのニーズに合わせて決定。

〈結果〉

集団では、CLが歌唱や楽器活動を通して一体感が生まれ、音楽をきっかけに会話が起き、他者交流の場となっている。個別では、看取りを支援するケースが多く、好みの音楽を聴き、思い出を語ったり、音楽により呼吸の変化が見られたり、穏やかに過ごす様子がある。またCLの状態に応じ、集団と個別を切り替えている。施設職員からは、個別の良さ、CLの様子、職員の介護に抱く思いなど様々な意見があった。

〈考察〉

個別介入という選択肢を増やし、集団・個別を組み合わせることによって、CLのニーズに応じた関わりができ、CLは豊かな時間を過ごせたのではないか。これはCLのQOLの向上に繋がり、日常CLを介護する職員の気持ちをも支える一つになるのではないかと考える。

〈結語〉

職員とのコミュニケーションから、CLに対する思いを知り、ニーズに合った方法の展開と選択をし、CLにとってより良い時間を提供できた。この一連の流れが多職種協働だと言える。今後、この取り組みを介護現場における音楽療法の在り方として、他の現場にも活かしていきたい。

※1 洛和会京都音楽療法研究センター
※2 洛和ヴィラ大山崎・洛和ヴィラ天王山

45分間ルールの導入の検討 ～職員の喫煙者ゼロを目指して～

Well-being推進室

○大久保圭

【キーワード】健康、禁煙、受動喫煙

〈背景・目的〉

当会ではすべての職員のWell-beingのため、職員の喫煙者ゼロを目指し卒煙を推進している。R5年に「洛和会卒煙宣言」を出し、敷地内禁煙や就業時間内の喫煙を禁止した。これまで主に喫煙者本人に向けた禁煙サポートを継続してきた結果、R6年度末には喫煙率は9.8%まで減少してきた。しかし、就業時間外の禁煙を会社が強制することは難しいのが現状である。

一方、今年2月に実施した職員アンケートでは、タバコの臭いで多くの職員が迷惑していることが判り、対策を求める意見が多数寄せられた。そのため、望まない受動喫煙による、職員や患者さんらを含む周囲の人たちの健康被害を防ぐ必要があるため、さらなる対策を検討した。

〈結果〉

他社の取組み事例を参考に検討を重ねた結果、今年7月1日より、喫煙後45分間の敷地内立ち入り禁止(45分間ルール)を導入した。

〈考察〉

本ルールの導入により、就業時間外の喫煙に対しても一定の制約を設けることが可能となり、タバコの臭いによる周囲への影響軽減や、受動喫煙防止に寄与する取り組みとなった。また、喫煙者本人にとっても喫煙機会を抑制する効果が期待され、卒煙の後押しとなる可能性が考えられる。

〈結語〉

喫煙後の行動にも責任が伴う事を周知し、職員や患者さんも含むすべての人々の健康と快適な環境を守るため、喫煙者ゼロを目指し卒煙の取り組みを強化したい。

〈参考〉

産業医科大学 大和教授 実験データ

看護師国家試験対策における 全員合格につながった要因

洛和会京都看護学校 教育部

○古川翔也

【キーワード】 看護師国家試験 合格率100% 国家試験対策

〈背景・目的〉

昨年度、当校では15年ぶりの国家試験全員合格を達成した。それまでも全国の合格率より高い状況であったが全員合格には至っていなかったため昨年度の卒業生に行った国家試験対策を分析し、その要因を明らかにすることで今年度以降の国家試験対策に活かしていく。

〈方法〉

2024年度卒業生の入学から卒業までの模試の合格基準に達している人数、偏差値をグラフ化する。グラフをもとに実施した国家試験対策と比較し、要因を検討した。

〈結果〉

1・2年生の間は徐々に合格圏内に達する学生が増え、3年生の4月時点で必修の合格圏内は少ないものの一般・状況設定では50%以上が合格圏内であった。9月には必修も約60%の学生が合格圏内となり、1月には約80%以上の学生が全ての問題範囲で合格圏内に達していた。

〈考察〉

例年のデータと比較すると3年生のスタート時点での合格圏内にいる学生の人数が多く、これは2年時に毎日、朝学習として1～3問の問題を解き、振り返りを行っていたことが要因である。また、必修対策を12月までに行い、それ以降は一般・状況設定に集中して対策を行ったことで安定して合格圏内の得点率になったことも要因であったと考える。

〈結語〉

3年生の国家試験対策として必修の基礎固めを行ってから一般・状況設定を実施していくことは得点率が安定化するため効果的である。

国家試験全員合格を目指すためには3年生の取り組みだけでなく1・2年生で国家試験問題に触れ、普段から学習習慣を身に付けられる取り組みが必要である。

〈参考・引用文献〉

土田直人他. 看護学生の卒業年次の学習の支えに関する研究—国家試験に対するアンケートを通じて—, 厚生連医誌 第33巻 1号 35～38 2024

産後ケア実習における助産学生の気づきと 助産師の支援についての理解 —実習記録からみる教育的意義—

洛和会京都看護学校 教育部

○上村真紀・樋口昌代・南文子・吉田貴子

【キーワード】 産後ケア、学生の気づき、助産師の支援、教育的意義

〈背景・目的〉

産後の母親支援は助産師の重要な役割であり、学生がその本質を実習でどう理解するかは教育上の課題である。本研究では、助産学生の実習記録をもとに産後ケア支援への気づきと理解の過程を明らかにし、教育的意義を考察することを目的とした。

〈方法〉

対象は、令和6年度助産学科に在籍した学生10名の実習後に提出された自由記述形式の実習記録を分析対象とした。分析にはModified Grounded Theory Approach (M-GTA)を用い、学生の気づきや理解の過程をカテゴリー化した。

〈結果〉

分析の結果、①母親の育児負担への理解、②心理的支援の重要性の認識、③育児技術の習得支援の理解、④個別性のある支援の理解、⑤地域資源との連携の必要性の5カテゴリーが抽出され、コアカテゴリーとして「育児への共感と助産師の支援の本質理解」が導出された。

〈考察〉

学生は育児の過酷さや母親の不安に共感し、助産師の寄り添う支援から関係性の重要性を学んだ。育児支援や個別対応、地域連携を通じて、助産師の多面的な役割と「共感・関係性・柔軟性」を含む専門性への理解を深めた。

〈結語〉

産後ケア実習は、学生が母親との関係性を通じて支援の本質を体験的に学ぶ教育機会であり、共感や柔軟性を含む専門性の理解を促す。今後はこうした学びを深める教育内容の充実が求められる。

〈参考・引用文献〉

- 1) 日本助産学会. 助産師教育課程における産後ケアの位置づけ, 日本助産学会誌, 34(2), 123-130.2020.
- 2) 渡辺美智子. 助産教育における実習の意義と学生の学び, 助産教育研究, 12(1), 33-40.2020.
- 3) 川島みどり. 看護における質的研究のすすめ, 医学書院.2018.

一包化薬剤自動監査システム導入による影響について

洛和会丸太町病院 薬剤部
○白石大理・中村美樹

【キーワード】 薬剤、医療DX、医療安全

〈背景・目的〉

一包化調剤における鑑査業務の質と安全性向上を目的に、一包化薬剤自動監査システム「PROOFIT」を導入した。本研究では、導入による業務への影響を解析し、今後の運用改善に活用することを目的とした。

〈方法〉

導入前（2024年4～6月）と導入後（2025年4～6月）の調剤過誤報告件数および処方箋1枚あたりの発生率を比較。さらに薬剤部員へのアンケートを実施し、頻回処方（4剤）および複雑処方（15剤）の鑑査時間をPROOFIT使用時と未使用時で比較した。加えて、QRコードによる薬剤情報取得に関する看護部員へのアンケートも行った。

〈結果〉

調剤過誤は6件（0.047%）から1件（0.008%）へ有意に減少（ $P=0.008$ ）。鑑査時間も頻回処方で66.6秒から39.4秒、複雑処方で270.2秒から126秒へ短縮された。薬剤情報の取得方法では、85%が直接印字を支持し、QRコードは操作の煩雑さが課題とされた。

〈考察〉

PROOFIT導入により鑑査時間短縮と精度が上昇し効率的になったと考えられるが、管理面での手間が増えている。効率的に業務を行うためにエラー対応やマニュアルの整備が課題である。また、QRコードによる薬剤情報は、外見と名称だけでは満足度が低く、より詳細な情報を求めていることがわかった。

〈結語〉

PROOFITは医療安全に貢献しつつ業務効率化を実現する有用なツールであるが、運用面の改善が今後の鍵となる。

〈参考・引用文献〉

片倉道啓, 任田宜史, 國本雄介, 高橋, 和也, 中村勝之, 益子寛之, 佐々木直美, 山崎紀恵子, 荒谷典子, 藤森美千子, 岡原恵一, 船山幹男, 中田浩雅, 野田師正, 宮本篤 薬剤識別コードにおよび調剤総数の筆記照合による調剤過誤防止対策の効果 北海道大学附属病院薬剤部 一般論文34(11)997-1003 (2008)

一包化監査システム PROOFIT 1D II導入による調剤業務の変化

洛和会音羽記念病院 薬剤部
○上井桃花

【キーワード】 DX、一包化監査システム、調剤、業務改善

〈背景・目的〉

当院は、複数の疾患を抱えた多剤併用の高齢患者が大半を占めるため、一包化する錠数が多く、鑑査業務の負担が大きいという課題があった。一包化監査支援システム「PROOFIT 1D II」を導入し、業務の効率化と安全性向上を図っている。本研究は導入後の業務変化を定量的・定性的に評価し、利点と課題を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

2025年7月から8月に、目視鑑査とPROOFITを併用した鑑査時間を比較した。また薬剤部職員にアンケートを行い、5段階評価と自由記述で回答を得た。

〈結果〉

鑑査時間は平均で約40秒短縮された。アンケートでは「集中度向上」「ストレス軽減」など肯定的な回答が多く、操作性や継続使用への満足度も高かった。一方で、半錠や複数薬剤の重なりによる判別困難、ラベル貼付エラー対応の負担などの指摘もみられた。

〈考察〉

鑑査時間の短縮効果が明らかとなったが、認識精度やエラー対応に関する課題も存在する。また、錠数が少ない処方では目視鑑査の方が効率的である傾向が認められた。しかし、一包化錠数が多い処方が大半を占める当院のような施設においては、PROOFITによる短縮効果が優位であると考えられる。

〈結語〉

PROOFITは調剤業務の効率化に有用であったが、導入によって生じた負担も明らかになった。今後は頻発するエラー事例やシステム更新情報などを部内で共有し、定期的な運用方法の見直しを通じて、業務の改善を図っていききたい。

〈参考・引用文献〉

1) 富士フイルム株式会社. 一包化監査支援システム PROOFIT 1DII. <https://www.fujifilm.com/jp/ja/healthcare/pharmacy-and-health-support/pharmacy-assistance/proofit-1d-2>

レミエール症候群の診断に 頸静脈超音波検査が有用であった1症例

洛和会丸太町病院 臨床検査部

○佐伯悠※1・瀧井智香子※1・中田帆風※1・中島悠理※1・
北風麻衣※1・金羽美恵※1・牛山多恵子※1・
武藤あずさ※2・井上弘貴※3

【キーワード】 検査

〈背景・目的〉

レミエール症候群は、内頸静脈の化膿性血栓性静脈炎であり、口腔内感染症から始まり、静脈壁の炎症、内腔の血栓、ときには化膿性塞栓症を呈する疾患である。レミエール症候群の診断は造影CTが標準であるが、代替手段として超音波検査も有用である。今回、頸静脈超音波検査でレミエール症候群の診断・評価を行った一例を経験したので報告する。

〈方法〉

既往のない20代男性。5日間続く咽頭痛で当院救急外来を受診し、細菌性扁桃炎として抗菌薬を処方。発症7日目に造影CTで右扁桃周囲膿瘍を認め、入院加療となった。この時点では静脈内血栓は認めなかった。入院4日目に血液培養からFusobacterium necrophorumが発育し、入院5日目に右頸静脈の圧痛が出現したため、入院6日目に頸静脈超音波検査を施行した。右内頸静脈に広範囲の浮腫性の壁肥厚および血栓閉塞を疑う所見を認め、レミエール症候群と診断された。

〈結果〉

投薬治療期間は4週間となり、治療中や治療後に超音波検査で繰り返し検査を行い、血栓の拡大がないことを確認し終診となった。

〈考察〉

今回、頸静脈超音波検査でレミエール症候群を診断し、治療経過のフォローを行った。超音波検査で診断・評価を行うことのメリットとして、簡便で迅速にベッドサイドで行えること、血管周囲の軟部組織など詳細な評価が行えること、繰り返して評価が必要な場合に無用な放射線や造影剤曝露を避けられることがあげられる。

〈結語〉

頸静脈超音波検査は、レミエール症候群の簡便で迅速な診断・評価に有用である。

※1 洛和会丸太町病院 臨床検査部
※2 洛和会音羽病院 臨床検査部
※3 洛和会丸太町病院 総合診療科

口腔細胞診鑑別困難症例の考察 ～口腔内病変の多様性の理解を目指して～

洛和会音羽病院 臨床検査部

○吉岡沙織※1・北健二※1・佐野守※1・森藤哲史※1・
小山真理子※1・嶋田恵里※2・安井寛※2

【キーワード】 検査, 病理, 細胞診, 口腔

〈背景・目的〉

口腔細胞診は、口腔領域の前がん病変を含む腫瘍性疾患の早期発見に有用な検査である。しかし、口腔は常に刺激にさらされる環境であるため細胞にも様々な程度に変化が起こり、良悪性の評価はときに困難となる。当院では口腔細胞診を陰性／鑑別困難／悪性疑い／悪性の4段階評価にて報告しており、例年20%程度の症例を鑑別困難と判定している。今回、鑑別困難症例を後方視的に再評価したので報告する。

〈方法〉

2024年1月1日から2024年12月31日までに採取された口腔細胞診にて鑑別困難と報告した10例を対象として、細胞像と組織像および肉眼像の比較、検討を行った。

〈結果〉

対象10例の組織診断結果は、良性粘膜病変6例、CIS 2例、扁平上皮癌2例であった。組織診にてCIS～扁平上皮癌と診断された症例の口腔細胞診標本には、クロマチン増量が軽微ながら核形不整や結合性の低下を示す深層型細胞集団や細胞質輝度の高い細胞の混在を認めた。

〈考察〉

口腔扁平上皮癌由来の深層型細胞は、顕著なクロマチン増量を伴わない場合があり良悪性の評価は注意を要する。クロマチン増量の程度ではなく、核形不整や深層型細胞集団内への表層型細胞の混在、出現細胞の多彩性等を重視して評価することで、細胞診の精度向上が期待できると思われる。

〈結語〉

口腔病変の細胞像は実に多彩であり、正確な評価には更なる検討が必要である。病変の肉眼像の把握も重要な要素であり、口腔外科との密な連携で質の高い診断につなげていきたい。

※1 洛和会音羽病院 臨床検査部
※2 洛和会音羽病院 病理診断科

超音波検査において経験した シャント合併症の一症例 ～スチール症候群～

洛和会音羽記念病院 臨床検査部

○中上麻里・上田可奈子・山内涼平・神田拓真・大西沙也加・
曾根友枝・小川隆

【キーワード】血液透析 シャント合併症

〈背景・目的〉

血液透析を行う際、十分な量の血液を体外で浄化し体内に戻す行為を繰り返すため、動脈と静脈を人工的につなげた血管（以後シャント）を作成する。当院では近畿全域から困難なシャント手術患者を受け入れているが、その中にはシャント閉塞などに伴う合併症を発症している場合がある。その中から当院で見られた合併症、スチール症候群の症例を報告する。

スチール症候群は通常手指側に流れる血液がシャントに盗血され指先の血流が低下する合併症である。原因は末梢循環障害、シャント過剰流量等があげられる。指先の冷感、疼痛、潰瘍等が主症状である。

〈方法〉

患者は、50代男性。多発性嚢胞腎による慢性腎不全にて透析導入。シャント肢第1指尖潰瘍、脱血不良を主訴に当院に来院。シャント超音波検査にて上腕動脈血流量261ml/min、血管抵抗0.64であった。タバコ窩吻合部付近にて橈側動脈閉塞を認め、側副血行路に流れる動脈血を確認した。また尺側動脈閉塞、第1指動脈血流低下を認めた。以上より末梢循環障害によるスチール症候群と診断しシャント肢閉鎖術方針となった。

〈結果〉

右上肢シャント閉鎖術及び左上肢タバコ窩AVF造設手術。術後2日目の造設された左シャント肢超音波検査評価にて上腕動脈血流量234ml/min、血管抵抗0.69、シャント音良好であった。また、右上肢の末梢循環血流の改善により右第1指尖潰瘍治癒経過良く

退院に至る。

〈考察〉

スチール症候群は、シャント過剰血流や動脈硬化による末梢循環障害とされる合併症である。基本的診断として自覚症状を基本とし他疾患との鑑別や治療方針決定の為、血行動態把握と原因検索が重要である。その手段として超音波検査が有効であり

治療方針として閉鎖術、縫縮術が効果的である。

〈結語〉

スチール症候群は、シャント肢の自覚的所見及び色調変化等種々変化の早期発見及び超音波検査における診断が有用であると考ええる。

NST活動における多職種での関わりについて

洛和会丸太町病院 栄養管理室

○柏木瑠莉

【キーワード】栄養管理、栄養サポートチーム

〈背景・目的〉

当院では平成16年に栄養サポートチーム（以下NST）を立ち上げ、令和2年よりNST加算の算定を開始している。NST回診は15時に実施していたが、栄養状態の改善には食事時の姿勢や介助方法、嚥下機能に適した食形態の選定など喫食状況の把握が重要と考え、令和6年8月よりミールラウンド形式での回診に変更した。

今回、循環器疾患で入院した患者へのNST介入において、早期の嚥下機能障害の発見と治療へと繋げることができた症例について報告する。

〈方法〉

入院時MNA-SFにて栄養スクリーニングを実施、低栄養のおそれあり・低栄養と判断された場合はGLIM基準を用いて低栄養の診断を行い、介入が必要な患者へ依頼型でNST介入を行っている。症例患者は、GLIM基準で重度低栄養と診断され、NSTの介入が開始となった。

〈結果〉

NST回診・カンファレンスにて嚥下機能の低下が疑われたため主治医へ耳鼻科へのコンサルの提案を行い、嚥下内視鏡検査が実施された。結果、嚥下機能低下が認められた。入院中には安全な食形態での食事提供と言語聴覚士による嚥下訓練指導を実施した。退院時には在宅での栄養管理が継続出来るよう妻同席にて栄養指導介入した。また、月1回の外来栄養指導を継続し、今後も経過を見ていくこととした。

〈考察〉

NST回診を昼食時に変更したことで食事における実際の問題点をよりリアルに知ることができ、患者に適した栄養サポートに繋げることができたと考える。また多職種が回診に参加していることで早期に各専門領域からのアプローチを行うことができ、質の高い栄養管理に繋げることができた。

回復期病棟におけるGLIM基準を用いた 栄養状態の推移と疾患別傾向

洛和会音羽リハビリテーション病院 栄養管理室

○金子万祐・山田舞・下野寛子・岩城千歌

【キーワード】 栄養、GLIM基準、多職種協同、評価

〈背景・目的〉

2024年診療報酬改定を受け、当院では2024年6月より全入院患者に対して多職種が連携のもとGLIM基準による低栄養の評価を行っている。

回復期病棟における入退院時の栄養状態の推移と疾患別による相違の有無を評価した。

〈方法〉

2024年6月1日～2025年4月30日に回復期病棟へ入院し退院した患者541名を対象とし、入院時と退院時のGLIM基準による栄養評価を調査した。

〈結果〉

患者541名のうち入院時低栄養は65.6%、退院時低栄養は41.6%であり、24%は栄養状態の改善を認めた。退院時に低栄養を脱した脳血管疾患患者49名のうち24名は「意図しない体重減少」、17名は「消化吸収能低下」に該当していた。運動器疾患患者82名のうち77名が「炎症疾患負荷」に該当し、GLIM基準上低栄養と判定されやすい傾向がみられた。

〈考察〉

脳血管疾患の低栄養患者は、嚥下機能低下による食形態の見直しや食思低下が関係していると推察される。運動器疾患では術後の炎症反応がGLIM基準に反映されやすく、低栄養と判定される要因となっている。GLIM基準は国際的に標準化された評価基準ではあるが、管理栄養士が臨床的な視点を加えることでよりの確な介入に繋がると考える。

〈結語〉

GLIM基準による評価では、回復期病棟に入院した一定数の患者において低栄養の改善が認められた。今後も多職種と連携し、入院早期から管理栄養士による病態や経過に応じた栄養介入を行うことが重要である。

思考場療法がパニック発作に伴う 予期不安の軽減に有効であった1症例

洛和会音羽病院 臨床心理室

○中島陽大・吉田幸平・外川由佳・倉本咲良・安部すず・森真治

【キーワード】 思考場療法、Thought field Therapy、パニック発作

〈背景・目的〉

思考場療法(TFT)は心理的な苦痛や身体的疼痛に暴露している状態で、鍼のツボを指でタッピングすることで脱感作させる方法である。今回、パニック発作の予期不安にTFTが有効であった症例を経験したので報告する。

〈症例提示〉

30歳代女性。主訴:パニック発作を経験してから同じ症状出るのではないかと不安。経過: X-1年12月に職場でパニック発作が急に出現した。その後更衣室に入りにくくなり休職した。その後自宅の浴室でもパニック発作が生じた。日常的に予期不安が出現するようになったため当院臨床心理室を受診した。見立て:パニック発作の体験が予期不安を惹起していると見立てた。心理介入:不安に対する心理教育を行った後、職場のパニック発作の記憶をターゲットにTFTを実施したところ、SUDsが5から0に減少し、「あのときのことを思い出そうとおもってもしんどくない」と述べられた。その後、予期不安は生じなかった。

〈考察〉

予期不安は、過去の体験や記憶に基づいて過度に警戒している状態であると考えられる。パニック発作時の体験に伴う記憶と感情を処理したことによって、予期不安が軽減したと考えられた。

〈結語〉

精神症状の背景に症状を誘発している過去の体験や記憶が見られないかに注意を払うとともに、その影響が考えられる時のひとつの介入手段としてTFTが有効であると考えられる。

〈参考・引用文献〉

日本TFT協会(編):TFT思考場療法 アルゴリズムレベル・マニュアル. 一般社団法人日本TFT協会. 2025.

PTSD治療における安心感構築の 有効性の検討

洛和会音羽病院 臨床心理室

○吉田幸平・外川由佳・中島陽大

【キーワード】 心理療法, PTSD, リラクゼーション

〈背景・目的〉

心的外傷後ストレス障害(PTSD)からの回復過程は安心感の獲得、外傷体験の再構成、関係性と生活の再構築だとされている¹。一方、強いストレス場面に晒された個人は安心感を得にくくなる傾向にある。2症例の回復経過を分析し、治療における安心感の構築の重要性を検討する。

〈症例1〉

50代女性A、幼少期から度重なるストレス場面に晒されてきた経過があり、医療場面での不適切なケアを契機にPTSDの諸症状が増悪。いくつかのリラクゼーション法を実施し安心感が獲得できるようになっていった。その後の治療期間中、PTSDの諸症状が出現してもA自身が対処できるようになり、積極的に自身の体験を振り返ることが容易になっていった。1年の治療期間を経て、生活内でも安心感を得られ症状コントロールが可能になったことで終結となった。

〈症例2〉

10代女性B、学校での強いストレスイベントに晒されたことでPTSDを発症し諸症状を呈した。簡便なリラクゼーション法を実施し、治療場面での安心感は比較的早期に得られるようになり、また家族への援助を申し出ることができたことで孤独感も軽減していった。症状のコントロールが3回程度で可能になり、その後環境を変えることを選択に至った。

〈考察〉

2症例とも、安心感の構築が得られた後に症状のコントロールが可能になり、PTSDに関わる記憶を語ることが可能になった。安心感の構築は治療関係のためだけでなく、症状コントロールを可能にし、自己効力感を高める。

〈参考・引用文献〉

1) Judith L. Herman著 中井久夫,阿部大樹訳 心的外傷と回復(2023)

VinelandIIを用いて適応行動機能の発達に ついての評価し適切な介入につながった2症例

洛和会音羽病院 臨床心理室

○外川由佳※1・西本忍※2・大西喜代子※2・澤村桃子※3・
宇留野圭※3・前田真治※4・中島陽大※1

【キーワード】 適応行動、発達障害、虐待、反応性愛着障害、コミュニケーション、社会性

〈背景・目的〉

子どもの集団適応には知能の発達だけでなく、社会性やコミュニケーションといった社会適応スキルの発達が関連する。しかし、社会適応スキルの習得を従来の知能検査では測ることができない。VinelandIIを用いて、適応行動を測定することで具体的な介入支援につながった2症例を報告する。

〈症例提示〉

症例1:11歳女兒。対人関係の苦手さ、場面緘黙を主訴に来院。FSIQは104と年齢平均。VinelandIIで測定された全般的適応機能は低く、日常生活スキルは年齢平均であるが、コミュニケーションと社会性の発達に遅れがみられた。他者への関心が薄く、衝動行動がみられ、ASDにより社会性やコミュニケーションの発達が妨げられたと見立てられた。学校での発達特性への配慮・支援につながった。

症例2:9歳女兒。癇癪、育てにくさを主訴に来院。被虐待体験があり、行政による支援・介入がなされている。FSIQは80と平均以下。VinelandIIで測定された全般的適応機能は57とFSIQと比較しても低く、下位尺度すべてが低い。生活習慣が身についておらず、夜驚や悪夢といったトラウマ関連症状もみられる。ASDというよりは、虐待や養育環境の不備による適応機能の未発達と見立てられた。行政による家庭への育児支援や学校での対人関係や学習への支援につながった。

〈考察〉

知能は正常であっても適応行動スキルが未発達であると、適応行動が困難になり、社会適応が妨げられると考えられる。また、適応機能の発達を妨げる要因は、発達障害だけでなく虐待や養育環境の不備も関係する。知能の発達だけでなく、VinelandIIで適応行動スキルの習得度を測定し、未習得の適応スキルを明らかにすることで、具体的な支援を適切に行うことができる。

〈参考・引用文献〉

辻井正次・村上隆:日本版Vineland-II適応行動尺度マニュアル.日本文化科学社.2014

※1 洛和会音羽病院 臨床心理室

※2 洛和会音羽病院 1D 病棟

※3 洛和会音羽病院 小児科

※4 洛和会音羽病院 こころの発達センター

MRI検査における手指屈筋腱描出への試み

洛和会丸太町病院 放射線部

○上田千智・江崎茉莉・幸坂育歩・芝田龍輝

【キーワード】MRI 手指屈筋腱 3D

〈背景・目的〉

当院ではMRI検査による手指屈筋腱損傷の評価と手部全体の評価に、同一のプロトコルを使用していた。しかし、既存のプロトコルでは手指屈筋腱の鮮明な描出が不十分であった。そのため、診療科の医師と協議のうえ、臨床で有用なプロトコルの作成を目的として検討を行った。

〈方法〉

手指屈筋腱を対象にT1W・STIR・T2*W・T2W・PDWの5種類のシーケンスを、それぞれ2Dと3Dの2種類で撮像した。各シーケンスにおいて画質、撮像時間などを比較し臨床で活用できるかどうかの検討を行った。

〈結果〉

coronal画像の撮像を従来使用していた2Dから3Dに変更することで連続したスライスでの画像確認が可能になり、従来では不十分であった腱の断端の評価が容易となった。さらに、インバート画像(白黒反転画像)を作成することで骨と腱との位置関係が明瞭となり術前評価にも有用であることが確認された。

〈考察〉

3Dで撮影すると腱の連続性の描出能が向上する一方で、スライス厚が薄くなることによりSNRが低下し、撮像時間の延長や画質の低下が課題となる。また、撮像するシーケンスによっては腱が不鮮明となる場合もあり、3Dより2Dの方が明瞭に描出できるケースもあった。2Dと3Dの撮像にはそれぞれ利点欠点があるため、シーケンスに応じて最適な撮像方法を選択する必要がある。

〈結語〉

撮像時間と診断に必要なかつ有用な画像であることを考慮したうえで、T1W,STIR,T2*Wの3Dcoronal画像とPDWの2Daxial画像の4つのシーケンスを新たなプロトコルとして採用した。これにより手指屈筋腱の描出能が向上し、臨床診断において有用な情報が得られるようになった。

消化器手術支援画像を作成した症例の報告

洛和会丸太町病院 放射線部

○土橋健史※1・村井ユミ※1・藤皓文※1・山条純基※2・上田剛士※3

【キーワード】画像検査、造影CT、消化器、血管3D解析

〈背景・目的〉

消化器外科手術では、病変部周囲の血管走行や臓器との位置関係を正確に把握することが術前計画の精度向上に重要である。通常は動脈と静脈をそれぞれ撮影し合成画像を作成するのが一般的であるが、腸管の蠕動や呼吸差により位置ずれが生じる。そのため当院では静脈に循環され始めるタイミングで撮影を行っていたが、中枢血管の描出が困難となることもあった。このため今年1月から、位置ずれがなく動静脈の描出能に優れた Split Bolus 法を採用した手術支援画像の提供をおこなっており、その一例を報告する。

〈方法〉

80代男性。食欲不振を主訴に受診し、単純CTで上行結腸腫瘤を疑われ、内視鏡検査で進行大腸癌が疑われた。病変部位と転移巣評価のため造影CTを施行し、術前支援として3D構築が可能となるようSplit Bolus法を用いた。

〈結果〉

動脈・静脈とも同一スキャン内で高コントラストかつ明瞭に描出され、従来法に比べ血管視認性が向上した。位置ずれのない3D画像を作成でき、病変周囲の血管解剖を明確に提示できた。術者からは手術計画に有用との評価を得た。

〈考察〉

動静脈を同時描出することで血管3D解析の精度と視認性が向上し、術前評価に有用と考えられた。今後は造影条件の最適化を進めるとともに、技師の技術向上も重要である。

〈結語〉

本症例でのSplit Bolus法は、消化器手術支援画像の質向上に寄与する有用な方法と考えられた。

〈参考・引用文献〉

橋爪正ほか..右側結腸癌手術に必要な主要血管の分布に関する検討.日本臨床外科学会雑誌.2012;73(4),761-768.

※1 洛和会丸太町病院 放射線部

※2 洛和会丸太町病院 消化器センター外科

※3 洛和会丸太町病院 救急・総合診療科

頭頸部CTA撮影における基礎的検討

洛和会音羽病院 放射線部

○中島史珠香・小林拓真

【キーワード】 放射線検査、CT、Dual Energy、Single Energy、サブトラクション、頭頸部CTA

〈背景・目的〉

脳外科医師の増加及び血栓回収手技の増加により、頭頸部CTA依頼が増加した。当院の頭頸部CTAは、Dual Energy撮影が行われており、サブトラ用の画像が不要であり、1回の撮影で骨と血管の分離に有効である一方で、骨と接近する血管がサブトラクション法で消失してしまうことがあり、解析手技も複雑であった。そのため、撮影方法を比較的簡便なSingle Energy法に変更した。撮影方法の変更に伴い、適切な再構成条件の検討を行った。

〈方法〉

Siemens SOMATOM Definition Flashを用いてCatphan500/600をDE法とSE法を同一条件で撮影した。MTFtask (以下TTF) はCTP404を使用して算出した。NPSはCTP486ファントムを使用して算出した。TTFおよびNPSを使用しSNRを算出した。視覚評価では放射線科医師及び技師が描出能、ノイズ量を5段階で評価し、評価者間一致度を評価した。

〈結果〉

TTFはSingle Energy法の J49がTTF50%(0.35)、TTF10%(0.71)と最も高い値を示した。

NPSは、Single Energy法の J49が低～中周波域で低い値を示した。

SNRは、Single Energy法の J49が最も高い値を示した。

〈考察〉

3つの物理特性および視覚評価より、頭頸部CTA画像の最適な再構成関数はJ49であると考えられた。主要なウィリス動脈輪から分岐する穿通枝の描出にも有用であると考えられる。

〈結語〉

頭頸部CTA画像の撮影において、SE法はDE法と比較して簡便でその再構成関数はJ49が最も適切な再構成関数である。微細な血管を描出する必要がある頭頸部CTAは今回の実験結果が診断能向上に寄与する可能性があるとし唆された。

〈参考・引用文献〉

放射線技術スキルUPシリーズ 標準 X線CT画像計測 (改訂2版)

1.5T MRI装置を用いた静音MRIにおける臨床応用の検討

洛和会音羽病院 放射線部

○尾崎胡桃

【キーワード】 静音MRI、検査

〈背景・目的〉

MRI撮影時に発生する騒音は、患者に不快感や恐怖感を与える主要因の一つである。特に小児や高齢者においては検査中断の原因となり、臨床上の大きな課題となっている。本研究ではPhilips 1.5T Ambitionに搭載されている静音シーケンスを用い、その静音低減効果および画像診断能を従来法と比較検討した。

〈方法〉

装置はPhilips 1.5T Ambitionを用い、組み込まれた静音シーケンスを適用した。比較対象として通常ルーチンで施行している撮影法で最も件数の多い頭部MRIの撮影を行った。評価には健常ボランティア、臨床症例を対象とし、騒音レベル(Ambitionに備え付けの測定機構で音量の測定)、被験者の主観的評価、画質評価、撮像時間について行った。

〈結果〉

静音シーケンスでは従来法と比較して騒音レベル低減を認め、被験者の評価も向上した。画質は臨床診断可能レベルであったが、そのレベルまで引き上げるために撮像時間が増加した場合もあった。

〈考察〉

Philips 1.5T Ambitionにおける静音MRIは画像診断能を維持しつつ騒音レベルを大幅に低減可能であり、特に小児・高齢者・不安の強い患者に有用であると考えられる。また、静音シーケンスを用いることにより勾配磁場の駆動条件を変化させたため音が小さくなる反面、撮像時間が伸びたと考えられる。

〈結語〉

Philips 1.5T Ambitionにおける静音MRIは画質をある程度維持しつつも、騒音レベルを低下させ快適性を大幅に向上させる技術である。特に小児や高齢者など騒音ストレスの影響を受けやすい患者に対して有益であり臨床応用の拡大が期待される。

一方で撮影時間延長といった課題も存在し今後はパラメータ最適化や再構成技術の導入による課題克服が望まれる。

異なるACT測定機器間における 測定値の乖離とその換算式の臨床的有用性

洛和会丸太町病院 CE部

○谷口葵※1・西部美空※1・桃田凌平※1・倉本泰志※1・
十亀夏実※1・塩井啓※1・

本山晋一郎※2・有吉真※2・山口真一郎※2・浜中一郎※3

【キーワード】 ACT値、PCPS管理、抗凝固、体外循環管理

〈背景・目的〉

PCPSやCHDF稼働時には持続的な活性化凝固時間（ACT）のコントロールが必要となる。2021年当院ICUでは新たなACT測定機器としてカートリッジタイプのヘモクロンシングニチャーエリート（平和物産）の運用を開始した。しかしこの測定方式が従来のACT測定のスタンダードであるサンプリングチューブタイプのヘモクロン401（カテ室で使用）とは異なることから測定値の乖離が生じており、コントロールの信頼性が疑問視されていた。

〈方法〉

2025年2月から4月迄の計40症例において、ヘモクロンシングニチャーエリート（以下エリート）とヘモクロン401（以下401）両者でACTの同時測定を行った。測定はヘパリン投与前後で行い、ヘパリン投与後の経過時間の条件は課さなかった。収集した両ACT値から相関式を導出し、エリートの測定値から401でのACTを算出する換算式を得た。

〈結果〉

ヘパリン投与後におけるエリートと401の同時測定の値から、近似相関式「 $y = -0.0007x^2 + 0.6557x + 93.863$ 」（x:エリート、y:401）が得られ、エリートでの測定値からこの換算式を用いて401の推定値を計算した。この式を用いて算出した401推定値と401実測値との誤差は平均11.3%であった。メーカーが提示している補正值と実測値との乖離が平均17.3%であったことから、今回の式はより実測値に近い値が得られるものであることが示唆された。

〈考察〉

カテ室、ICUといった部署間でのACTのコントロール値の指標を統一化することにより安全性と利便性の改善に寄与できた。

〈結語〉

エリートを使用しても、今回得られた換算式を用いることで従来のACT値を把握できるため、エリートでのACTコントロールに対する信頼性が担保できた。

※1 洛和会丸太町病院 CE部

※2 洛和会丸太町病院 心臓内科

※3 洛和会丸太町病院 血管内治療センター

OneNoteを活用した自部署内情報共有の試み —アプリついで業務効率アップ—

洛和会丸太町病院 CE部

○増永日菜乃

【キーワード】 手術室、Microsoft OneNote、iPhone、医療DX

〈背景・目的〉

手術室では、多様な器械や物品が使用されている。使用頻度の低い物品や特殊な器械は配置や用途の把握が難しく、特に経験の浅いスタッフにとって負担となる。従来は、紙媒体や口頭伝達での情報共有が主であり、リアルタイムでの情報取得や、内容の更新は困難であった。DXの推進に伴い、当部署では業務用iPhoneを活用して認識の統一化による準備の正確性と効率の向上を図った。

〈方法〉

Microsoft OneNoteを用い、器械・物品ごとに専用ページを作成し、必要な情報を業務用iPhoneから随時閲覧できる体制を整えた。

各ページには名称・配置場所・定数・用途に加えて器械・物品の写真を掲載し、キーワード検索を可能とした。

〈結果〉

手術室での使用物品をDX化したことで、情報が共有化され、誰でも即時アクセス・更新できる環境が整った。

夜間の緊急手術等、少人数で働く状況においても、個々が情報を得るためのツールとして活用された。

〈考察〉

OneNoteを導入したことにより、情報が共有化され、更新も容易になった。さらに、業務用iPhoneを活用したことで場所や時間に制約されず即時に情報を得られた。結果、緊急時や不慣れな状況等でもサポートとして有効に働き、現場での情報確認において、実用的なツールになったと考える。

〈結語〉

OneNoteを活用した情報共有は即時性・更新性に優れ、DX推進の一環としても有用である。今後は症例に対応した注意点等を追記し、教育資源として発展させることで、情報の標準化と人材育成、さらには安全で質の高い医療提供にも貢献できる。

パルスオキシメーターの特性について

洛和会音羽病院 CE部

○新田康太郎・後藤唯・松本蘭丸・丸子聖奈・内海一樹・
小松勇介・藤石裕之

【キーワード】パルスオキシメーター、機器比較、酸素飽和度、測定反応時間

〈背景・目的〉

昨今、COVID-19の感染拡大に伴い、パルスオキシメーター（以下、POM）の需要が高まり、それに対応するため複数のメーカーから新機種が市場に投入された。これらは低酸素血症の早期発見を求められるが、機種ごとの測定値の表示速度、低下反応時間、上昇反応時間についての検証報告は少ない。そこで、複数社のPOMを比較検討し報告する。

〈方法〉

健康人である男性5名、女性2名（平均26歳）を被験者とした。実験はJIS（T80601-2-61:2014）非侵襲試験に準拠し、1機種をSaO₂として取り扱った（二次標準POM）。SaO₂に対するSpO₂の追従性の評価としてSpO₂の低下反応時間と上昇反応時間を測定した。低下反応時間は低酸素血症（息こらえ）試験からSpO₂が1%低下開始するまでの時間を求め、上昇反応時間は息こらえ終了後のSpO₂が1%上昇するまでの時間とした。POM装着時は38℃の温水に手指を1分間浸し被験者の手指温度を統一し、左手の示指に二次標準POM、右手の示指にそれぞれのPOMを装着した。統計学的検定には分散分析を実施し、その上でBonferroniの多重比較を使用した。

〈結果〉

POM装着後の測定値表示時間はA社がB社と比較し、表示時間が7.2秒と有意な差が確認された（p値<0.01）。しかし、仮説SaO₂低下からの低下反応時間には機種ごとに有意差は認められなかった（p値0.55）。また、上昇反応時間にも有意差は認められなかったが、C社と比較しD社では上昇反応時間が約13秒の遅延を認めた。

〈考察〉

A社はSaO₂測定値表示までの時間が最も短かった。SpO₂低下反応時間では有意差は確認されず、酸素化の悪化には同等の反応が期待できると考えられる。SpO₂上昇反応時間は統計的な差は認められなかったが、機種ごとの特性は示唆された。

〈結語〉

本研究では非侵襲試験によるPOMの機種比較を行い、測定値の表示時間と反応時間と追従性の比較を行い有用性と問題点の検討を行った。

〈参考・引用文献〉

1)中井 浩司 他:経皮的動脈血酸素飽和度SpO₂測定の新たなアプローチー耳朶センサの試みー, 医機学 79:10-16, 2009. 2)小島 美香 他:指先クリップ型パルスオキシメータ導入にあたってー各パルスオキシメータの比較ー, 医機学 80:116, 2010. 3)植村 勇斗 他:パルスオキシメータの追従性の比較検討, 医機学 特集号65, 2018. 4)Litvinova O, et al:Patent and Bibliometric Analysis of the Scientific Landscape of the Use of Pulse Oximeters and Their Prospects in the Field of Digital Medicine. Sensors (Basel) 23:2098, 2023.

ソフト凝固搭載電気メスの適正運用の検討

洛和会音羽病院 CE部

○石田龍之介※1・足立京珠※1・小川蒼太※1・新敷幸太※2・
村田佑介※1・藤石裕之※1

【キーワード】ソフト凝固、出力制御、電気メス

〈背景・目的〉

ジュール熱でたんぱく質を変性させ凝固層を形成し、術後出血の軽減が期待されているソフト凝固は、焦げない凝固としてその有用性は確立されているが、各メーカーの出力方式には違いがあり、機種比較の報告は少ない。今回、アルゴリズムの異なるVIO3とFT10を院内での出力値の統一を目標に比較検討したので報告する。

〈方法〉

VIO3とFT10の二機種にて、豚肉に対してボール電極を装着したハンドピースの出力で検証した。ソフト凝固の出力をVIO3ではエフェクト2、4、6、8、10までの5段階、FT10は20W、40W、60W、80W、100W、120Wの6段階、それぞれの凝固時間をメーカー推奨10秒で測定し、各出力での凝固範囲、凝固深度を計測した。

〈結果〉

VIO3はFT-10に比べエフェクト上昇に伴い凝固深度が浅くなり、FT-10は出力変化による深度のバラつきを認めた。FT-10及びVIO3では、凝固範囲は出力ごとによる大きな変化が認められなかった。（p値0.05）熱変性はVIO3とFT-10を比較し有意な差はなかったが、FT-10は出力が増すにつれて黒色変化の割合が増加する傾向であった。FT-10とVIO3では出力制御方式は異なるが、本実験ではFT-10出力80W～100WとVIO3エフェクト6及び8周辺が同等の実験結果となった。これは各機種のメーカー推奨値である。

〈考察〉

FT10とVIO3では出力制御方式の違いにより焼灼深度に差が出たと考えている。FT10は出力を維持する制御の為、組織抵抗による依存が大きく焼灼深度に差が出たと考えられる。電圧の最大値もFT10はVIO3より高い為、スパークが発生しやすく黒色変化の割合が増加したと考えられる。上記特性を理解し適切な運用を目指すことが今後重要であると考え。

〈結語〉

今回ソフト凝固機能を有する電気メス2機種を比較した。機種と出力毎に傾向と特徴がある事に留意する。

〈参考・引用文献〉

成田紘生、佐藤史直、中山克明、福士明里、川村竜季、天内雅人、南谷克明、宗万孝次:手術部看護師に対するエネルギーデバイスの意識調査を実施して:42-44,2019
前田彩子、池岡一彦、川村研二、森下貢成、石島宏彰、高島真人、藤森利一、丑谷健次、菅幸大:ソフト凝固における出力設定の標準化ーVIO3の院内基準を目指して:45-49

※1 洛和会音羽病院 CE部

※2 洛和会音羽記念病院 CE部

腸閉塞に対する高気圧酸素療法の 治療効果について

洛和会音羽病院 CE部

○中尾圭悟※1・足立愛葵※1・吉村暁※1・伊野部仁完※1・
小松勇介※1・藤石裕之※1・花田圭太※2

【キーワード】 高気圧酸素療法、HBO、腸閉塞

〈背景・目的〉

高気圧酸素療法(hyperbaric oxygen therapy:以下、HBO)は腸閉塞への非観血的治療法として効果が期待されている。しかし、HBOの腸閉塞に対する治療としての報告はまだ少なく、設置施設も限られており、十分に普及していないのが現状である。本研究ではHBOの腸閉塞に対する有効性、安全性を検証する事を目的とした。

〈方法〉

2018年12月～2025年1月までに洛和会音羽病院で癒着性イレウスおよび麻痺性イレウスと診断された症例のうち、高気圧群23症例と非高気圧群25症例を対象とし後方視的観察研究を実施した。入院期間、食事開始までの日数、採血結果、手術移行の有無などを比較検討した。また、HBOによる合併症に関しても検討した。

〈結果〉

対象全体の平均年齢74.1歳、男性は56.3%であった。手術移行に関しては、高気圧群は0人(0%)、非高気圧群は6人(24%)と有意に高気圧群で手術移行割合が低かった(p値0.024)。高気圧群の単回帰分析結果ではCRPとHBO回数に関係性があった(p値0.025)。合併症は50%の患者で耳部不快感が認められたが、重篤な副作用の発生はなかった。

〈考察〉

当院でHBOを受けた腸閉塞患者は、HBOを受けていない腸閉塞患者と比べて有意に手術移行が少なく、HBO施行回数とCRPの低下に関連が認められた。HBOによる重篤な有害事象を認めず、HBOが腸閉塞の改善に寄与する事が示唆された。

〈結語〉

当院における腸閉塞に対するHBOは重篤な有害事象を認めず、安全に施行可能であり、有用な治療であると考えられた。

〈参考・引用文献〉

- 1) 林 裕二 他:当院におけるイレウスに対する高気圧酸素療法の検討.Medical Gases 7:66-69, 2005.
- 2) 小野 智之 他:腸閉塞に対する高気圧酸素療法. 日臨外会誌 80:256-260, 2019.
- 3) 瀧 もとみ 他:麻痺性イレウスに対する高気圧酸素療法(HBOT)の治療効果の検討. 日本臨床高気圧酸素・潜水医学会雑誌 2:76-81, 2005.

※1 洛和会音羽病院 CE部

※2 洛和会音羽病院 外科

積層型ダイアライザ(AN69膜)における 栄養状態改善効果の検討

洛和会音羽記念病院 CE部

○中之庄桂花・中山優香・趙唯純

【キーワード】 透析、ALB、ダイアライザ

〈背景・目的〉

積層型ダイアライザ(AN69膜)はアルブミン漏出量が少ないため、高齢者や低栄養状態の患者に適していると言われている。積層型ダイアライザを使用している低栄養状態の後期高齢者における栄養状態改善効果に対する評価を行う。

〈方法〉

当院維持透析患者のうち、年齢75歳以上、血清アルブミン値3.5g/dl以下の患者で積層型ダイアライザ使用群19名、中空糸型ダイアライザ使用群33名を対象とした。2群の積層型ダイアライザ開始日もしくは観察開始日から2年後までのALB値を比較検討した。

〈結果〉

積層型ダイアライザ群と中空糸型ダイアライザ群の開始日もしくは観察開始日から2年後までのALB値を比較検討した結果、有意な差が得られた。

〈考察〉

今回の結果から透析膜を積層型に変更することでALBの漏出を防ぐことができ、患者の栄養状態の悪化や免疫力の低下を減らせることに繋がると考えた。

今回は年齢、ALBの2つの条件のみで患者選定を行なったが、今後は積層型と中空糸型の人数を合わせる、DWの近い患者と比較するなど栄養状態の近い患者で比較検討する必要があると考えた。

〈結語〉

積層型ダイアライザ群と中空糸型ダイアライザ群のALB値を比較検討した結果、有意な差が得られた。また、年齢やALB値の2つの条件だけでは結果の精度が低いと考えた。これらを改善するために、積層型と中空糸型の人数を合わせる、DWの近い患者と比較するなど栄養状態の近い患者で比較検討する必要があると考えた。

〈参考・引用文献〉

積層ダイアライザAN69膜の使用による末梢循環動態および栄養状態の検討

医療を拒否する方の支援について

京都市朱雀地域包括支援センター

〇水川達也

【キーワード】 医療拒否 意思決定支援

〈背景・目的〉

地域包括支援センターでは、地域の方や行政機関からの連絡・相談を受け、即時訪問することがある。その際に明らかに身体的・医療的に課題のある状態だが、本人や家族の意向で救急搬送・受診を拒否される方が居り、対応に苦慮することがある。これまで関与した事例を通して、対応方法と課題について考察する。

〈方法〉

相談受付後、即時訪問を行い、包括支援センター内の看護師を含め、状態の把握・評価を行う。救急搬送拒否された場合でも、本人・家族の意向を尊重しながらも、受診に向けた説得を行った。事情を説明し、受け入れてくれる往診医に依頼。治療は行わないが、状態の把握と介護保険の主治医意見書の記載を了承。治療に関する本人の意向を尊重しながらも、支援体制を整えることができた。

〈結果〉

地域包括支援センターと行政、医療機関と連携することで、見守り体制が整えることができ、自宅で最期を迎えることができた。本人の意思を尊重しつつ、身体状況を多職種で共有することの重要性、地域包括支援センターが医療・介護・家族・行政をつなぐハブとして機能することが確認できた。

〈考察〉

一職員、一事業所だけで判断を行うことは難しい。本人が治療を求めているが、家族が応じない場合、ネグレクトとして扱い、行政との連携が必要となる。また、もともとかかりつけ医が居らず、医療情報や紹介のない状況で往診・訪問診療に応じる在宅医は限られており、地域の課題となっている。

〈結語〉

医療拒否は本人の自己決定権に基づく行為であり、地域包括支援センターではその意思を尊重しながらも、生命の安全を確保する重要な役割を担う。今後も行政や地域との連携を通して、柔軟かつ倫理的な対応が求められる。

利用者・家族・多職種が
“本当につながる”サービス担当者会議を目指して
～参加の「質」と「継続性」を重視した実践的なアプローチ～

洛和ヴィラウラノス

〇南島恵美

【キーワード】 サービス担当者会議

〈背景・目的〉

介護老人保健施設におけるサービス担当者会議は、利用者・家族・多職種が情報を共有し、支援方針を検討する重要な場である。従来は参加率が重視されてきたが、形式的な出席にとどまり、本人の意向が十分に反映されない課題があった。そこで、参加の「質」と「実効性」に焦点を当てた取り組みを実施した。

〈方法〉

会議に先立ち、ケアマネジャー・看護師・介護職など多職種で居室を訪問し、生活環境や日常の様子を確認するラウンドを行っている。複数の視点から現場を捉えることで、共有可能な具体的情報を得て、会議の質向上に寄与している。認知症や失語などで意思表示が難しい利用者には非言語的反応や生活歴などから「言葉にならない気持ちを拾い上げる支援」を意識し、本人の意向をくみ取る工夫を行っている。

〈結果〉

ラウンドを通じて、具体的な生活情報や環境設定を多職種間で一度に共有できた。さらに、利用者が会議に参加することで、多職種が直接その声や表情を共有できるようになった。

〈考察〉

ラウンド形式により、現場の様子をそのまま会議に反映できるようになり、非言語的なコミュニケーションも含めた情報共有が実現した。これにより、ケアプランのみならず、日常生活に関わる要望や思いを的確に把握でき、利用者中心のケア実現につながっている。

〈結語〉

利用者の参加は促進されたが、家族参加は在宅復帰や看取りなど変化時に限定される傾向がある。今後は電話や事前アンケート、Web会議等、多様な参加手段を検討し、会議後の振り返り評価も通じて改善を継続する。引き続き、信頼関係に基づく「利用者中心」のケア会議を目指す。

入居者主体のクラブ活動

洛和ホームライフ山科東野

○高見幸太

【キーワード】 質の向上、自分らしさ、認知症

〈方法〉

今年度より入居者の生活歴から「得意」や「好きだった」事をベースに園芸クラブ、調理クラブ、カラオケクラブ、塗り絵クラブを発足している。各クラブに部長となってもらい入居者を選定し、主に部長と相談しながら活動を進めている。職員は安全管理や物品準備などのサポート役に努めている。

〈結果〉

各クラブ活動を行うことで、入居者同士の交流の機会が増え、やりがいや楽しみ、ストレス発散に繋がっている。また身体活動、知的刺激、役割意識、回想効果等から認知症の予防にも繋がっている。

〈考察〉

今までの職員主体のアクティビティ活動から、入居者主体でのクラブ活動に変更を行った結果、役割を持ち、やりがいを感じてもらう事ができている。この結果から入居者自身がやりたい事を自分たちの力でやってもらう事が重要だと考えた。

〈結語〉

入居者主体のクラブ活動は、人としての尊厳や生きがいを支える重要な取り組みである。入居者が自らの意思で活動を選び、仲間とともに時間を過ごすことで、施設生活に「自分らしさ」が生まれる。活動がより活性化していくように入居者の呼びかけや計画を立てていく必要がある。

心をつかむ“おもてなし7箇条”
～体験から新規獲得100%への道～

洛和デイセンター右京山ノ内

○家長純子

【キーワード】 意識改革、接遇、おもてなし、顧客満足、アクションプラン

〈背景・目的〉

令和5年度、当事業所は低迷期にあった。体験利用者が新規獲得に繋がらず、9月に稼働69.3%まで落ちた為、緊急会議が開かれた。現在より人員配置は多かったが、業務優先やコミュニケーション不足が要因として議題に挙がった。先ずは「体験利用者は100%新規利用に繋げること」を目標に向けて、全員で取り組んだ。

〈方法〉

体験利用者に絶対に行うアクションポイントとして、利用目的の共有や丁寧な接遇など具体的な項目を挙げて、『おもてなし7箇条』を作成し、実践した。

〈結果〉

体験から利用に繋がるケースが増え、今年度は平均稼働率85%まで回復。現在は、この取り組みをデイ課全体に展開しており、課全体での新規獲得率も向上している。

〈考察〉

『おもてなし7箇条』の内容は特別なことではなく、接遇マナーの基本にある。大切なことは職員間でコミュニケーションを図り、相手に敬意を持って接すること。思いやりの心を忘れないこと。今回、職員による接遇の意識改革が新規利用獲得へと結びついたと考える。

〈結語〉

『おもてなし7箇条』は、職員一人ひとりの意識付け、日々の積み重ねが重要。これからも心をつかむおもてなしで「また来たい」デイサービスにしていきたい。

「私だって外に出たい」 その一言が導いた“理解”への第一歩

洛和グループホーム八幡橋本

○小山由美香

【キーワード】 認知症ケア・アセスメント・BPSD・気づきの視点

〈背景・目的〉

Y氏は進行性パーキンソン病により幻覚・不眠などのBPSDが顕著で、会話や食事も困難な状態が続いていた。居室で過ごすことが常態化し、職員の間でも「できない」「望まない」といった先入観が広がっていた。しかし、何気ない会話の中で前向きな発言が聞かれたことをきっかけに、Y氏の「今の力」に着目したアセスメントと支援の工夫を通じて、関わる側のケアの姿勢や環境づくりがどのように本人の変化につながったかを考察する。

〈方法〉

- ① 症状だけでなく、できることや望みを引き出す関わりを工夫
- ② 薬の拒否には負担の少ない服薬方法を検討
- ③ 車いすを使わない生活の提案

〈結果〉

Y氏の表情に変化が見られ、「やってみたい」と思いを言葉にするようになった

〈考察〉

支援とは計画通りに進めることなく、職員自身が立ち止まり、先入観に気づきながら寄り添う姿勢が重要であると学んだ

〈結語〉

認知症の行動は特別なものではなく、私たちの心理の延長線上にあると捉えることが大切なことである

ICTを活用した介護支援

洛和グループホーム宇治

○塩見早人※1・平川康次※2・富田和代※2・寺田孝治※2・
土橋晴※2・富田晶子※2・皿木伊都子※2・松村圭介※2・
馬場郁代※2・石井悦子※2・伊藤茂子※2・河井光子※2・
白井知子※2・長田美穂※2・大門眞弓※2・石田恵美※2・
岡本裕美子※2・新井晴佳※2・白田智佳子※2

【キーワード】 ICT導入・推進、認知症ケア質向上、職員業務改善、ご利用者・ご家族満足度向上

〈背景・目的〉

令和7年1月に移転新規開設となった洛和グループホーム宇治において、「歴史と文化の古都宇治で、笑顔と未来（ICT）の融合で生きがいのある生活をサポートします」をコンセプトとし、最新鋭のICT見守りシステムを導入。そのシステムを活用し、介護支援へと繋げられた実績と有効性検証結果を発表する。

〈方法〉

- ・システム導入で終わらず、良さを理解し、フル活用できるようベンダー企業との連携
- ・見守りシステムからの「睡眠」含めたライフリズム状況の把握、情報収集・傾向分析
- ・利用者様のライフリズムのひとつとして、睡眠状況情報を視覚化し、ご家族との共有
- ・職員サイドで、システムを活用することでの業務改善効果検証
- ・ご利用者の生活安全性向上、ご家族満足度向上に向けたアンケート実施

〈結果〉

最新鋭のICT見守りシステム導入を経て、利用者様・ご家族・職員それぞれの各サイドにおいて、今後も含めて、有効性の一部実績と今後への期待値も込めた兆しを見出すことができた。

〈考察〉

良きシステムと巡り会えたからこそ、その性能を理解することがまず不可欠。そして実際に使用する現場での職員の負担増大につながらないように、多角的に関わり、サポート、分析していくことで、今後へと繋がっていくであろうことはまだまだ可能性を秘めていると感じた。人も機器も日々更新し続けていく必要があると感じる。

〈結語〉

新しいものへの対応、変化に慣れていくことは容易ではないが、そこをしっかりと理解できる支援を行うことで、設備・機器導入だけで完了するのではなく、導入となった機器の性能をフル活用していくことで、利用者様へのケア・サービスの質を高めることへも繋げていけるひとつの有効な実績にもつながった。今後、情報収集・分析の上、継続して活用していきたい。

※1 洛和会本部人事・教育部門
※2 洛和グループホーム宇治

ヘルパー15年生 ～歩んできた道にはいつも支えがあった～

洛和ヘルパーステーション桃山

○上田敦子

【キーワード】 ライフステージに合わせた柔軟な働き方ができる訪問介護の魅力。職員とヘルパーの繋がりが、ライフステージを支えてくれた。

〈背景・目的〉

子育てと両立しながら訪問介護のヘルパーとして15年間働いてきた。ヘルパーの離職率は低いが新規登録者は少ない。ライフステージに合わせ柔軟に働けることや支え合いの大切さを伝え、訪問介護の魅力を広める事を目的とする。

〈方法〉

自身のライフステージごとに時系列で働き方を整理しヘルパー会議にて発表し、知ってもらう。他のヘルパーが、どのように家庭の状況に応じた働き方をしているのかアンケートや聞き取りを行う。

〈結果〉

柔軟な働き方を選択できた事で子育ての両立ができ、15年働くことができた。日々の業務には家事経験や他職員との連携も活かされ現在はサービス提供責任者常勤としてヘルパーでの経験を活かしている。

〈考察〉

訪問介護はライフステージに応じて無理なく続けられる仕事であり、多様な背景を持つヘルパーが現場で活躍している。職場での声掛けや連携が安心感を生んでいることで離職率が少なく継続年数が長いと考える。

〈結語〉

自身の経験を活かし、ライフステージごとでの働き方の提案、発信。

ヘルパーとの繋がりを深めていき働きやすい職場作りに取り組む。訪問介護が長く続けられるやりがいのある仕事であることを次の世代に伝えていく。

利用者が心身共に健やかな生活を送れる為に ～防げる事故をなくし転倒件数の減少を目指す～

洛和ヴィラアエル

○榎本篤志

【キーワード】 転倒転落、安全確認

〈背景・目的〉

転倒転落は利用者のADL及びQOLを著しく低下させてしまうリスクがあり、事故の発生場所としてベッドサイドが圧倒的に多いと述べられている¹⁾。今回は居室での転倒転落を1件でも減らすことを目的に、予防対策の一つである「訪室」に着目し調査分析する。

〈方法〉

1週間かけて各居室への訪室回数の集計をおこない、1時間おきに訪室件数をまとめグラフ化する。過去1年の居室での転倒転落のデータと擦り合わせて、分析をおこなう。

〈結果〉

転倒件数はM字曲線を示し、訪室回数はU字曲線を描いていた。朝と夕の時間帯では居室での転倒件数が各々4件であり24時間の中で一番多く、その時間帯の訪室回数は1日当たり0.56回だった。

〈考察〉

朝と夕の転倒リスクが高い時間帯に訪室回数が少ない理由として、食事をほぼ全員がリビングで食べることから、この時間帯での離床対応に追われてしまい、訪室ができていなかったと考えられる。

朝と夕の訪室回数を増やすことができれば、何件かの転倒転落を防げる可能性ができた。

〈結語〉

訪室回数と転倒件数を視覚化したことで、朝夕のリスクの高さを改めて確認できたと言える。今後は、他業務を見直すことで訪室できる環境を整え、転倒件数を1件でも減らし、利用者の健やかな生活に繋げていく。今回は、訪室のみに着目したが、転倒に繋がる要因に対してのアプローチも継続して深めることで、更なるリスクの軽減を目指していく。

〈参考・引用文献〉

- 1)「転倒・転落防止パーフェクトマニュアル」杉山良子
- 2)「転倒予防ーリスクアセスメントとケアプラン」鈴木みずえ
- 3)「高齢者の転倒ケアー予測・予防と自立支援の進め方」鈴木みずえ・浜砂貴美子・満尾恵美子

生活場面を意識した環境整備による 高齢者の自立支援と機能訓練 ～施設環境を活かした機能訓練の実践～

洛和デイセンター宇治

○北谷昂・富田萌花・鎌由紀子・藤井彩音・田辺和美・福岡真理子・奥田ひとみ・
松井幸代・脳摂子・清水直子・北陸・西村珠英・吉田裕子・西坂由起

【キーワード】 高齢者介護、自立支援、個別機能訓練、歩行訓練、日常生活動作、コグニバイク

〈背景・目的〉

高齢者介護の現場では、自立支援を意識した機能訓練の提供が重要である。しかし、移転前の施設では環境制限により十分な機能訓練が困難であった。本研究では、施設移転後の環境整備が利用者活動に与える影響を明らかにすることを目的とする。

〈取り組み内容〉

歩行訓練では施設の庭を活用し、季節折々の花を眺めながら歩行を実施した。施設玄関の階段を自宅階段に見立てた昇降訓練や、庭の石畳で足をしっかりと上げる歩行訓練を実施し、下肢筋力や歩行バランスの向上を図った。コグニバイクは身体・認知機能を同時に刺激する訓練として導入した。希望者には個室カラオケを提供し、安心して参加できる余暇活動とした。また、機能訓練に積極的に参加している利用者数名に対して、前施設と現施設の活動環境のメリット・デメリットを聞き取り、活動改善に活かした。

〈結果〉

庭での歩行訓練では歩行距離の増加や会話の活発化が見られ、コグニバイクでは身体機能と認知機能への刺激により継続意欲の向上が確認された。また、階段昇降や石畳での歩行では下肢機能や歩行バランスの改善が確認された。個室カラオケでは自発的にデンモク操作する姿が観察でき、活動の機会の拡充が肯定的に評価された。

〈考察〉

生活場面を意識した環境整備により、従来困難だった個別機能訓練が可能となり、利用者の主体的参加や自立支援に寄与した。特に、身体・認知機能を同時に刺激する訓練や庭・玄関階段を活用した歩行訓練は有用で、意欲向上や活動の幅の拡充に貢献した。

〈結語〉

移転に伴う環境整備は、機能訓練の拡充と利用者の主体的活動に寄与した。今後も利用者の声を反映しつつ、活動の定着と安心して参加できる環境づくりを継続していくことが重要である。

新人教育における効果的な事例検討法とは

居宅介護支援事業所宇治

○嶋澤香織・大畑実・神元清子・飯尾由矩・米田麻穂

【キーワード】 人材育成 新人教育 質の向上

〈背景・目的〉

ケアマネジャーの育成において、事例検討は重要な学習手法である。本研究では、新人教育における効果的な事例検討法を探るため、「PCAGIP法」と岩間伸之の「援助を深める事例研究法」の違いを検証することを目的とした。

〈方法〉

要介護4、独居、認知症および心疾患を有する男性の事例をもとに、ケアマネジャー10名（新人～ベテラン）を対象に両手法で事例検討を実施。検討の様子や参加者の感想を比較・分析した。

〈結果〉

岩間法は感情や関係性に重きを置くため、抽象的・主観的になりやすいが、援助関係の複雑さを深く掘り下げられるメリットもある。PCAGIP法では、ホワイトボードに情報を可視化することで、全員が共通のイメージを持ちやすく、新人も発言しやすい雰囲気が生まれた。事例提供者は、他者の意見を通じて新たな視点や気づきを得られ、モチベーションの向上にもつながった。

〈考察〉

PCAGIP法は、視覚的・構造的な整理により情報共有がしやすく、問題を整理しやすい。新人教育において、心理的安全性の確保と意見交換の活性化が期待でき有効。岩間法は、その後関係性や感情面を深掘でき有効と考察する。

〈結語〉

人材育成の段階的効果としてPCAGIP法は、新人ケアマネジャーの学びを促進し、主体的な事例検討を支える有効な手法である可能性がある。また事例提供者にとっても事例の振り返りと気づき、モチベーション向上の効果が得られた。その後岩間法を活用し、事例を深掘することでケアマネジャーとしての質の向上が期待できる。

〈参考・引用文献〉

- ・岩間伸之『援助を深める事例研究』
- ・Person Centered Approach Group Incident Process
九州大学名誉教授・東亜大学大学院教授 村山正治先生が考案のグループで行う事例検討法

「行きたい」が「生きたい」に ～思い出の地へ、チームで叶えた看取り期の外出支援～

洛和ヴィラ大山崎

○山本蓮・堀絢二郎・小寺由希子・永淵瑠樹菜・
シンティア ヌグラヘニ アリ フトリ

【キーワード】 看取り、多職種協働

〈背景・目的〉

看取り契約前より「もう一度琵琶湖へ行きたい」というご本人様の想いがあり、契約後のカンファレンスにおいて「ご本人様にとって最高の看取りケアとは何か」を多職種で検討した。その結果、ご本人様の「行きたい」という願いを実現する取り組みを行った。

〈方法〉

ご本人様の体調を多職種で共有し、外出の可否を検討。ご家族様へも協力を依頼し、同行の可否や体調急変時の対応について説明し、理解を得た。天候や体調に応じて予備日を設け、ご家族様と情報を共有した。

〈結果〉

外出の話を伝えると、「そこまで頑張る」と意欲が見られ、「琵琶湖を見るために生きたい」という前向きな姿勢が表れた。当日は職員運転のもと、思い出の地である浮御堂を訪れ、満開の桜とともに琵琶湖を眺め、「琵琶湖周航の歌」を歌いながら「本当に良かった」と話されていた。ご家族様も「一緒に行けて良かった」と満足された様子であった。

〈考察〉

看取り期には「もうあかん」と意欲低下がみられたが、琵琶湖に行くという目標が「生きたい」という意志を引き出した。ご本人様とご家族様の意欲を尊重し多職種で連携して実現に向け話し合った事で、行きたいが生きたいに繋がったケアができたのではないかと考える。

〈結語〉

看取り対応では保守的になり外出を控えがちだが、人は誰しも最期に行ってみたい、やってみたいことがあり、それを可能にし、実現していく役割を私たちは担っていると考え。本事例を通して、ご本人様・ご家族様の思いを尊重し、多職種で協力する重要性を再確認できた。

退院後のQOLを上げるために出来る医療連携 ～グループホームで特別指示書にて訪問看護師による リハビリ導入で見た成果と課題～

洛和グループホーム花園

○上田隆世・狩野太洋・尾方美恵子・森口草平・高木晃子・
石田みちる・高橋正子・菊池慶子・西川康子

【キーワード】 医療連携、リハビリ

〈背景・目的〉

脳梗塞発症との診断を受け入院加療する。1週間の点滴加療にて状態安定するも、後遺症によりADLの低下は顕著。今後は、入院を継続し機能向上を望むのか、ホームに戻り日常生活の中での機能向上を目指すのかの選択。

〈方法〉

医療連携のもと、家族・往診医・訪問看護師・職員の多職種のチームでご本人にとっての最適を軸として検討を行った。ご家族の思いとして「グループホームでの生活が離床し他者との交流を持つ時間が確保しやすいので、病院での生活よりグループホームに戻って生活させてほしい」との意向を示され、グループホームで日常生活能力向上にアプローチでき、ADL・QOL向上に取り組めるよう特別指示書を用いた専門職の介入を行う方法を選択し、リハビリの視点を取り入れた支援を実施した。

〈結果〉

専門職からポジショニングや嚆下についての具体的なアドバイスをもらい、手技の指導を受け職員全体で支援内容を共有し、共通認識を持って関わる事が出来た。入院中から切れ目なくリハビリを継続する事で、穏やかではあったが向上は見られた。

〈考察〉

入院生活を短くすることで環境の変化への負担を軽減し馴染みのある環境下で繰り返される生活リハビリが今回の成果を上げることが出来た要因であった。またグループホームの特性を活かし、生活リハビリの視点を持ち、職員だけでなく多職種と連携し現場全体で取り組めたことが今回の成果に繋がったのではないかと考える。

〈結語〉

今回の取り組みで、グループホームでの生活環境を活かしたりリハビリ支援の有効性を再確認する事が出来た。今後も多職種との連携を継続し、さらなるADL向上に向けた支援を継続していきたい。

110年の人生に寄り添う ～ショートステイでのチームによる最期の支援～

洛和ヴィラ文京春日

○菊池沙季

【キーワード】 看取り、多職種協働

〈背景・目的〉

背景:100歳を超える高齢者への介護ニーズが増加している。ショートステイにおける介護でも急変や終末期を迎える利用者への対応が求められるが、限られた期間での看取り支援には多くの課題がある。

目的: 110歳の利用者に対し、施設多職種、提携医療、ケアマネ、家族が連携して行ったチームでの看取りの実践を報告しショートステイでの看取り支援について考察する。

〈方法〉

- ・【家で過ごしたい】S様の意思を尊重した看取り実践。
- ・ユニット職員・ケアマネジャー・訪問看護・主治医・家族との連携。
- ・サービス担当者会議の開催。
- ・苦痛緩和のためのケア(体位調整、口腔ケア、声かけなど)
- ・急変時対応の統一。
- ・職員への事前説明と不安の共有。
- ・家族様へ送迎時や退所連絡票を通じた状態変化の報告。

〈結果〉

- ・看取りを経てご自宅で最期を迎えることができた。
- ・後日ご家族様は施設に来苑され感謝の言葉をいただいた。
- ・事前の情報共有、調整をすることで不安の少ない中での看取り対応を行うことができた。

〈考察〉

- ・ショートステイでも看取り対応は可能であり、事前の調整と関係機関との連携が
- ・職員の不安を具体化し、対応策を共有することで受け入れ体制が整う
- ・ご本人やご家族に寄り添う支援が、本人らしい最期につながる。

〈結語〉

ショートステイにおける看取りは事前の準備、施設の多職種だけではなく外部との連携により実現可能である。110歳という超高齢者の看取りにおいて、ショートステイでも利用者の意思に寄り添った介護ができることが示された。

介護事業部 Rakuwa Standard for Care 10か条を活用した取り組みと利用者様への還元

文京大塚みどりの郷

○八尋睦乃

【キーワード】 マナー・接遇、不適切ケア、職場環境、ユニットケア

〈背景・目的〉

昨年度より虐待予防としてチェックリストを使用し消極的な評価のみを行っていた。今年度より、利用者様へのマナー・接遇向上への意識づけ、職員間でのコミュニケーションをより円滑にすることを目指し目標の言語化と評価を行うこととした。

〈方法〉

虐待予防身体拘束適正化委員会より介護事業部 Rakuwa Standard for Care 10か条から1月1目標を決定。各職員へポスター掲示と口頭での伝達を行う。次月の委員会を通してユニット内外からフィードバックを受け、更なる改善に繋げていく。

〈結果〉

令和7年度5月～7月間の取り組みの結果。5月の目標「目を見て笑顔で挨拶(大きな声で)」6月の目標「目標:スピーチロックに注意」、概ね各ユニット共通してスピーチロックはみられず、クッション言葉等を活用して言葉をかけている。ユニットによっては以前と比較して改善を実感している、と委員会で評価あり。ただし掲示への関心は薄く、改めて毎月の掲示に着目意識を持つよう周知を図った。7月の目標「笑顔で明るいトーンで話しましょう」、委員会にて、介護責任者より「新卒職員は特に声が出ていて良い。他職員も負けないように。声かけの言葉遣いについても意識していることが伝わっている」相談員より「面会も多くなり現場も緊張感を持って意識する必要がある。家族様からの接遇に関するお叱り等の意見は今のところ受けていない、出来ていると思う。」との評価ある。

〈考察〉

1つずつ現場の具体的な対応へ落とし込んで目標を立てたことで行動に移しやすかったと考えられる。また、特養2ユニットのマナー・接遇に関して昨年度同時期と比較したところ、令和6年度5月～7月ではヒヤリハット74件・事故報告書53件、不適切ケア報告5件。令和7年度5～7月はヒヤリハット52件・事故報告書31件、うち不適切ケア報告は12件と、ユニット職員の入退職・利用者様の入退所がかなりあったため単純な比較とはならないが、事故を減らすことができていたと確認できた。不適切ケア報告が増えたことは意識をして介助に当たる職員が増えたため、発見と報告・共有がより健全にできるようになったとも捉えられる。

〈結語〉

「マナー・接遇の向上」は委員会でもユニット外の職員から評価があることより実感しやすいと感じた。(藤江,2015)からも虐待行為の回避や質の向上には知識・技術・思考・ストレス回避・人権意識・職業意識が上がるような研修実施のPDCAサイクルと環境要因を整えることが必要だと結論づけられていた。引き続き委員会での試行錯誤とユニット内・多職種間ともに風通しの良い環境の維持を目指したい。

〈参考・引用文献〉

小柳 緑,富山 栄子,沼田 秀穂,2019,「社会福祉施設・事業所に勤務する職員の 接遇教育の効果に関する研究」事業創造大学院大学,(新潟総合学院・新潟総合学院機関リポジトリhttps://nsg.repo.nii.ac.jp/records/4838/file_details/PPP_01%E7%B4%80%E8%A6%81_02%E5%B0%8F%E6%9F%B3%E3%81%95%E3%81%BE.pdf?filename=PPP_01%E7%B4%80%E8%A6%81_02%E5%B0%8F%E6%9F%B3%E3%81%95%E3%81%BE.pdf&file_order=0取得日2025.8.13.
藤江 慎二,2015,「介護老人福祉施設の介護スタッフが虐待行為等を回避している構造 ―アンケート調査における自由記述の分析を通して―」,社会福祉学 第56巻第2号152-162,(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssw/56/2/56_KJ00010076254/_pdf/-char/ja),取得日2025.8.13.

特定施設におけるアルツハイマー型認知症 利用者の生活について

洛和ホームライフ御所北

○小林裕三郎

【キーワード】 認知症

〈背景・目的〉

当施設にアルツハイマー型認知症である女性A氏が入所されている。症状の進行が見られ、職員への暴力・不眠・徘徊・不潔行為・収集行動（以下BPSD表記）が顕著にみられる。ケアの質・生活の質の向上に為に行った取り組みについて報告する。

〈方法〉

- ・A氏の生活歴・性格・アルツハイマー型認知症。及びBPSDについて職員理解の促進
 - ・日課計画表の見直し
 - ・不潔行為への対応
 - ・他職種連携を行い、薬の調整
- 上記4点をPDCAサイクルにて取り組む

〈結果〉

アルツハイマー型認知症の理解とA氏の生活背景を理解することで、徐々にA氏を受け入れる姿勢が出来た。また、薬の調整や統一したケアを行うことで、暴力行為・不眠の改善に繋がって笑顔が増えた。不潔行為・収集行動は継続しているが、A氏の行動を受け入れ、清掃のしやすさや清潔な環境整備の実施へと変更。

〈考察〉

認知症ケアを行う為には利用者と認知症への理解が不可欠となる。BPSDは職員への心理的負担は強いが、利用者への忌避感に繋がるとケアや生活の質が落ち、悪化に繋がる。利用者の病気に対する理解に裏付けされた粘り強い取り組みの繰り返し、利用者へのケア・生活の質の改善に繋がる。

〈結語〉

特定施設では、認知症でない利用者も入居しておられ、認知症利用者の程度も様々である。A氏のようにBPSDが顕著に表される利用者に対しては、症状への理解・課題の明確化。それに併せて多職種でPDCAサイクルを行い、安心して生活できるような取り組みを継続していく必要があると理解し、今後にも繋げていく。

びわこ成蹊スポーツ大学との連携を通じての 利用者の意欲向上

洛和グループホーム山科西野

○阪本幸子

【キーワード】 認知症・意欲向上

〈背景・目的〉

毎日の外気浴、階段昇りなど元々身体を動かす事に力を入れて来たユニットでびわこ成蹊スポーツ大学との連携前と連携後の身体能力の数値を測り、有効性を確認する。

〈方法〉

実施初日に身体能力を計測し、3カ月間週に1度インストラクターによる音楽体操を20分～30分程度行い、最終日に身体能力を計測し数値化する。終了後3ヶ月後にADL、QOLの状態を評価する。

〈結果〉

3か月間による体操の結果、身体能力の数値についてはあまり大きな変化はなかったが、利用者の楽しみ・やりがいとなり、意欲向上へと繋がった。

〈考察〉

身体能力が劇的に変化する事は無くても、毎週外部から人が来ていつもと違う人といつもと違う体操をする事で、楽しみとなり部屋で一人で過ごしていた方がリビングで過ごすようになり、寝たきりに近い状態の方が自ら歩く練習をするなど意欲が向上した。日常と違う刺激や楽しみを持つ事が利用者本人の「思い」を変えたと考える。

〈結語〉

日常と違う「刺激」がある事で楽しみをもちリビングで皆と過ごす事が多くなり、結果としてQOLの向上に繋がった。利用者自らが「やりたい」と思い行動する気持ちを持つ事がいかに大切か、そこに繋げていくのが私たちの役割であると再認識した。

利用者様に寄り添ったコミュニケーションと対応

洛和ヴィラ南麻布

○板橋輝昌

【キーワード】 個別ケア

〈背景・目的〉

個別ケアの理想は、その人その人で違った要望をできるだけ叶えるようにしていくことであるが、実際に全て叶えることはほぼ不可能であることを日々実践のなかで理解させられた。

体が思うように動かせない、話すことが難しい、自分の感情を思うように表現できない。それらの内側をどれだけ汲み取ってどのように還元していくのか、その根本がコミュニケーションにあると感じた。

〈方法〉

職員が楽しそうにハキハキと接することができれば、自ずと信頼関係は築けるのではないかと。体操や音楽鑑賞、脳トレなど積極的に取り入れ、その上で感想を利用者様と共有し会話を増やすことを意識する。

〈結果〉

楽しそうに笑顔を見せていただけるようになった。

私の名前と顔を覚え、こちらの要望に対し「あなたなら…」と、信頼の姿勢を頂く機会が増えた。

〈考察〉

人と接すということを今一度考えてみる。こちらから歩み寄る姿勢が相手側へ如実に伝わることを意識すること、この当たり前をどう実現していくかを考え続けることが重要なのではないかと。

〈結語〉

今後も実践を続けていくと共に、このようなコミュニケーションが難しい方への接し方も模索していけたらと考えている。

部屋とトイレと私
～長期化している利用者にもアプローチ～

洛和ヴィラサラサ

○中川奈央子・仁藤綾香・山崎友寛・木村優子・山本多加幸

【キーワード】 籠る、トイレ、洗面台、余暇活動

〈背景・目的〉

介護老人保健施設で過ごされている80代女性。施設内移動、排泄は自立の利用者である。主は排泄以外の時間もトイレに籠って過ごされている事が多い。その為、1日の大半をトイレで過ごしている現状である。この方にとってトイレとはどのような空間で、なぜトイレにこもるのか知り、どのようにすれば居室やリビングで過ごすことができるかアプローチしていく。

〈方法〉

居室やトイレでどのように過ごしているか、生活習慣や活動内容を知る。

午前にユニット全体で行うテレビ体操への参加の声掛け。

午後に余暇活動への参加の声掛け。

〈結果〉

こちらからの声掛けやリビングでの活動機会を増やすことで、以前より、リビングで過ごされる時間が長くなり、他利用者との交流機会は増えている。結果夜間の睡眠確保にもつながっている。またトイレの空間の洗面台にこだわりがある事がわかった。

〈考察〉

状態変化が入所時よりほとんどなく、アセスメント不足のままご本人のペースに合わせた生活を支援していた事で今回の状態が長く続いた。こだわりや習慣が異なる利用者に適切なアセスメントを行い、個別ケアを実践していく事がユニットケアにおいて重要なことの1つであると分かった。

〈結語〉

サラサは超強化型老健ではあるが、長期化している利用者もあり、その方々は同じような生活リズムになりがちである。その一人一人にも多方面からアプローチをし、長期化している利用者にも、その方の今後が決まるまで生き生きとした支援をすることが求められる。そのため、多職種で適切なアセスメントとカンファレンスを重ね、長期化している利用者にも、その人らしく生活するために適切な支援をし続けていきたい。

個別ケア外出 ～本人と家族と、ときどき職員～

洛和グループホーム二条城北

○谷靖子

【キーワード】 認知症、個別ケア、家族

〈背景・目的〉

本人の誕生日に家族様を誘い、一緒に祝うために本人の好きな所に外出に出掛けられた時に「出掛けられる機会があるのは嬉しい」と言葉を頂いた。家族様が高齢の為、一対一だと外出するのが難しいと話しを伺ったため。

〈方法〉

- ・面会に来られる家族様に職員から声をかけ、外出の提案をする。
- ・本人の行きつけの店やよく出かけていた場所や好きな場所を聞く。

〈結果〉

- ・今まで知らなかった本人の好みが出外をする事で発見できた。
- ・職員が付き添う事で、負担が軽減された。
- ・今回の個別ケアで、家族様が協力的であった。

〈考察〉

- ・本人を通して、家族様と職員のコミュニケーションが多くなり話しやすくなった。
- ・ホームでは見られない表情が見れた。
- ・家族様が本人ともしっかりと関わりを持ちたい気持ちがある事に気付いた。

〈結語〉

- ・個別ケアで密に関われる事で、家族様より次回の外出の提案や相談ができる関係性になった。
- ・次の予定を立てる事で本人との話題になったり、家族に会える楽しみができる。

地域の見守り力レベルアップ ～高齢者見守り活動マニュアル作成と運用の取り組み～

京都市音羽地域包括支援センター

○中野隆行・吉家美都子・五十棲美佳・森本法恵・梅野愛澄・池部晴紀・丸山美保・松尾苑佳・松田栄美子

【キーワード】 地域、連携、改善

〈背景・目的〉

新たに着任した民生委員・老人福祉員(以下、地域役員とする)は、高齢者の見守り活動において悩みや不安が大きい。また、以前から活動していた地域役員も高齢者の見守り活動で悩むことがあった。

当センターでは、高齢者の見守り活動がより良いものになるようにマニュアルを作成した。

〈方法〉

令和3年度:圏域内3学区の地域役員に高齢者見守り活動に関するアンケートを実施。

令和4年度:圏域内3学区の高齢者見守り活動マニュアル作成、完成。

令和5年度:圏域内3学区の高齢者見守り活動マニュアル運用。

令和6年度:圏域内3学区の高齢者見守り活動マニュアル改訂。

〈結果〉

高齢者見守り活動マニュアルを作成したことによって、各学区の地域役員が日頃の見守り活動での悩みごとや不安ごとに対応しやすくなった。また、役員交代時もマニュアルを配布し、新たに着任した地域役員の活動の基盤となった。

〈考察〉

地域役員の悩みごとや困りごとを把握でき、課題を一緒に考えたことで、より一層相談しやすい関係作りができた。

〈結語〉

圏域内の地域役員と当センターと一緒に考えることによって、お互いの関係が近くなり、地域の見守り力の向上に繋がった。また、地域役員と当センターとの連携が深まり、地域の課題を発見することに繋がった。

〈参考・引用文献〉

北海道砂川市 「高齢者見守り活動」の手引き

～いつまでも安心して暮らすことができる地域を目指して～

地域交流の活性化 ～選ばれる事業所へ～

洛和グループホーム守山大門

○伊達尚克・大島麻泰・田中智也・濱崎恵子・高橋麻里子・堀江千恵

【キーワード】 地域交流 質の向上 新規利用者増加

〈背景・目的〉

当事業所は地域への知名度UPに向けて挨拶や近隣医療機関へパンフレット設置など行ってきたがなかなか待機者にはつながらなかった。開かれたグループホーム作りや職員の個性や特技等を活かした取り組みや利用者とともに日々の生活を通してより一層地域交流の機会につなげた。

〈方法〉

2022年から開始したグループホームだよりやSNSなどでの魅力の発信、事業所イベントでは近隣の高校のバンドなどの参加、福祉施設からおやつ購入などの交流、市内の農家の野菜の販売など地域の方々の協力を得て開催した。利用者の楽しみである散歩や買い物・ドライブなど地域に出かけ事業所を知っていただく機会作りを行っている。また今年度は事業所内で利用者だけでなく家族も共に参加できるカフェも開始し、楽しみの輪を広げている。

〈結果〉

地域への知名度がUPし、本年3月頃より見学等が増加。また、協力医療機関や近隣住民からの紹介での見学者、待機者も増加していることでは日々の利用者とのかかわりやケアに対して、職員の自信にも繋がった。

〈考察〉

地域交流や魅力発信などさまざまな取り組みを利用者だけでなく、職員もともに楽しみながら「洛和グループホーム守山大門」を発信したことで見学者、待機者増加へつながったのではないかと考える。

〈結語〉

利用者の紹介を待つ側だった職員が事業所の良さをアピールする方法を模索し、続けてきた。その気持ちと力を持って、新しい取り組みを交えることで、知名度がUPし、現在待機者9名との結果となっている。今後も職員が自信も持って、胸を張って「洛和グループホーム守山大門はいい所ですよ!」と言える事業所を目指していく

展示 1

手術センター術後疼痛チームを立ち上げて —PCA装着患者に対する手術室看護師の介入についての実践報告—

洛和会丸太町病院 看護部 手術センター

○中西優香・橋本志織・三ヶ月三鈴・比嘉美咲

【キーワード】 手術室看護師 術後訪問 術後疼痛 PCA

〈背景・目的〉

急性術後痛は疼痛そのものが悪影響を及ぼす原因となる1)とされている。当院では、対象の約8割に術後訪問を実施しているが、疼痛に焦点を当てて実施したことはなかった。そこで、経静脈的患者自己調節鎮痛法(以下PCA)を装着した患者に対し、疼痛管理を意識して介入した「手術センター術後疼痛チーム」を立ち上げ活動した結果報告を行う。

〈方法〉

術後PCAを装着した患者訪問を行い、使用状況や疼痛の程度を確認した。得られた情報をチーム会や活動日報に記録し、介入内容と患者の反応を振り返った。

〈結果〉

PCA装着患者80人中71人(89%)に術後訪問を行った。PCAの理解不足で追加投与がなかった患者が10人(14%)、その中でNRSが7以上の患者が7人いた。そのため、PCAの追加投与についての提案と、病棟看護師や医師に報告し、PCAに加え鎮痛薬の追加投与の検討を依頼した。

〈考察〉

これまでの術後訪問では疼痛に対してはNRSの聴取に留まり、積極的に介入できていない現状があった。疼痛管理の一つとしてPCAの説明を術前外来で行っているが、手術まで期間が空くことでPCAの理解不足のまま装着している可能性がある。そのため、説明のタイミングの検討やPCAのデモンストレーションをするなど、患者参加型の取り組みが適正な使用につながると考える。

〈結語〉

手術室看護師の介入により、PCAの適切な使用を促し、疼痛緩和につなげる必要がある。今後も他職種と連携し、より良い疼痛管理をめざした取り組みを継続していく。

〈参考・引用文献〉

- 1) 公益社団法人 日本麻酔科学会:周術期管理チームテキスト。(4):779、公益社団法人 日本麻酔科学会、2020。
- 2) 草柳 かほる 他:手術看護-術前術後をつなげる術中看護。(2):17、医歯薬出版、2019。
- 3) 小山内 直子:A大学病院における術後疼痛回診の導入に伴う成果と課題。第38回日本手術看護学会年次大会抄録集:70、2024。
- 4) 寺平 千恵美 他:A病院におけるPCA装置の使用状況と病棟看護師のPCAに対する意識調査。第38回日本手術看護学会年次大会抄録集:161、2024。
- 5) 高野 紘平 他:手術室看護師が受け持ち意識を持ち術前訪問に取り組む～術前訪問件数増加を目指して～。第12回日本手術看護学会近畿地区大会抄録集:18、2025。

展示 2

急性期病棟におけるセル看護提供方式導入による 看護師の身体拘束に対する意識の変化に関する研究 ～看護師へのインタビュー調査から～

洛和会丸太町病院 4病棟

○関紗矢香

【キーワード】 急性期病棟 看護師 セル看護方式 抑制 認知症 せん妄

〈背景・目的〉

A病棟ではセル看護導入後1年が経過したものの、治療遂行上の安全確保のため身体拘束が行われている現状があり、セル看護導入後も身体拘束率は高く、何らかの理由によって身体拘束の解除に至っていない可能性がある。セル看護導入後の急性期病棟における看護師の身体拘束に対する意識の変化を明らかにすることを目的とした。

〈方法〉

A病棟において、4年以上勤務経験を有する看護師3名(今年度5年目)を対象に半構造的面接法を実施し、内容分析の手法によりデータを分析した。

〈結果〉

分析の結果、【身体拘束の解除を前向きに考える】【心理的安全性の実感】の2カテゴリーが抽出された。

〈考察〉

セル看護導入後、動線・配置・記録の“ムダ”を省いて、患者のそばでケアを行い、治療遂行上の安全確保のためではなく、患者を【自分の家族に置き換えて考える】【余裕が生まれ】、ケアの質や関わり方に変化が見られた。

また、セル看護導入【以前よりも身体拘束を解除しようと考え】、【ブロックメンバーと協働】し、危険行動がある患者の傍で付き添い、患者の行動を観察し、危険行動が起こる前に看護介入することで【身体拘束を解除出来たと感じ】ていた。

〈結語〉

4年以上勤務した今年5年目看護師は、セル看護導入後、心理的安全性の実感をし、身体拘束の解除に対して前向きな意識変化が認められた。

〈参考・引用文献〉

- (1) 中島浩子 他:急性期病院の看護師が入院時に行う高齢者へのせん妄予防ケアの実態。老年看護学,28(2),60-69,2024。
 - (2) 敬和会:『新たな看護師式「セル看護」の導入』。敬和会と地域をつなぐ広報誌Link<https://safe.rbi-umbrella.com/doc/docview/viewer/docN386500E6667A9a33a27375a455050293a21bd2d23d94c007d4d49231d6dd83d7dab4e8e269fa>2022年,(閲覧日:2025年05月28日)
 - (3) 佐藤マスミ 他:トヨタ記念病院における看護提供方式の見直し「患者さまのそばで優しい看護」を目指して。看護管理,30(3),249,2020。佐藤昌子 他:高齢者の「尊厳」と「安全」を守る 急性期病院における身体拘束ゼロ病棟達成の取り組み,老年看護学,24(1),25,2019。
 - (4) 綿貫成明 他:自分から変わる、今から変える「せん妄ケア」の考え方。看護管理 17(7):566-572,2007。
- 佐藤昌子:高齢者の「尊厳」と「安全」を守る 急性期病院における身体拘束ゼロ病棟達成の取り組み。老年看護学,24(1),25,2019。

外来や検査室等で働く多職種の 転倒リスクに対する認識

洛和会音羽病院 アイセンター

○松本真紀・荻田亜希子

【キーワード】 外来部門, 多職種, 転倒リスク, 認識

〈背景・目的〉

高齢者の増加に伴い、外来においても高齢患者の転倒の危険性は高まっている。外来診療では、様々な職種が関わっていることから、本研究は外来や検査室等で働く多職種がどのような視点で転倒リスクを捉え、転倒防止について考えているのかを明らかにすることを目的とした。本結果は、転倒防止における多職種との連携・協働を検討する際の基礎資料となる。

〈方法〉

外来や検査室等で働く多職種294名を対象に、転倒に対する認識に関する無記名自記式質問紙調査を行った。分析では、職種間での得点の差を検討するため、Kruskal-Wallis検定を行い、その後多重比較検定を行った。

〈結果〉

転倒防止に関する認識、多職種との連携に関する認識、転倒防止の学習に関する認識、総合計すべてに、職種間で有意差が認められた ($p=0.008$, $p=0.026$, $p<0.001$, $p=0.002$)。転倒防止に対する認識では、受付等職員は医事事務職員と比べて得点が有意に高かった。学習に関する認識では、リハビリ職、視能訓練士、歯科衛生士と比べて、医事事務職員の得点が有意に低く、受付等職員もリハビリ職、歯科衛生士と比べて、学習に関する得点が有意に低かった。

〈考察〉

結果から、外来や検査室等で共に働いていても、職種によってその専門性の違いから、転倒に関する認識について異なることが示唆された。

〈結語〉

今後は、各職種と情報共有を積極的に行い、皆が転倒リスクに対する認識を持つことが患者の転倒防止に繋がると考えられる。

〈参考・引用文献〉

吾妻知美 他:チーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働の困難. 甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 7:23-33, 2013.
倉橋陸光 他:病棟における多職種での転倒予防の取り組みについて. 日本ヒューマンケア・ネットワーク学会誌 21(1), 28-34, 2023.
大塚真理子 他:在宅要介護高齢者への援助活動におけるインタープロフェッショナルワークの構成要素. 埼玉県立大学紀要 6: 9-18, 2005.
関口真由美:外来看護師による外来高齢患者の転倒予防. 日本看護学会論文集 看護管理・看護教育 51:17-20, 2021.
総務省統計局:人口推計(2024年(令和6年)10月1日現在). <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2024np/index.html>, 2024年, (閲覧日:2025年7月5日)
山岡富美香 他:病棟看護師が多重業務に取り組みなが行っている転倒予防. 医療創生大学研究紀要 3:22-36, 2023.

4C病棟で使用中の手作りカレンダーの 効果について

洛和会音羽病院 4C病棟

○文字綾花※1・山代亜紀子※2

【キーワード】 緩和ケア、せん妄、QOL

〈背景・目的〉

入院生活では季節や日付の変化を感じる機会が少なく、せん妄の因子とも言われている。緩和ケア病棟では、患者のQOL向上を目的として、手作りカレンダーの配布を行っている。カレンダーの使用に対する職員の意識調査を行い、今後の改善につなげるために本研究を行った。

〈方法〉

洛和会音羽病院4C病棟看護職15名緩和ケア内科医師2名へ匿名のアンケートを実施。有用性に対し、5段階評価を行った。また、「有用性の評価理由」「感想やエピソード」「要望」に関して、自由記述形式で意見を拾い上げた。分析方法は内容をコード化、カテゴリー化を行った。

〈結果〉

14名より回答を得た(回収率82%)。「非常に有用」43%「有用」50%「どちらでもない」7%という評価が得られた。評価理由について「予定が確認しやすい」「認知症や見当識やせん妄のサポートになる」などの回答が得られた。感想やエピソードについては「話題のきっかけになる」「季節を感じる」などの回答が得られた。

〈考察〉

93%の有用以上の結果が得られている。緩和ケア病棟において認知症や病状により、見当識が障害され、混乱に陥ることは多い。回答から季節や日付を確認できる手段があることで混乱の予防となっていると考えられる。また、イラストから話題のきっかけになることでコミュニケーションを取りやすくなり、関係性の構築にも繋がっていると考えられる。

〈結語〉

手作りカレンダーは患者の生活環境の改善に効果を得られており、今後も継続的に続けていくことで患者・家族へのケアにつながると考えられる。

〈参考・引用文献〉

林あり子編著:緩和ケアははじめの一步:118-120,130-135,151-156, 照林社、東京、2022
長谷川真澄・栗生田友子編著:チームで取り組むせん妄ケア第2版予防からシステムづくりまで:16-29,84-94, 医歯薬出版、東京、2025

※1 洛和会音羽病院 4C病棟

※2 洛和会音羽病院 緩和ケア内科

当院における『職員の抗体価およびワクチン接種歴管理』の現状と課題

—抗体管理を自分ごとにするために—

洛和会音羽病院 感染防止対策室

○柿谷めぐみ・佐藤晴久・井上通人

【キーワード】 感染対策、職業感染対策、ワクチンプログラム、抗体管理

〈背景・目的〉

医療機関では職業感染対策として、職員の抗体価およびワクチン接種歴の管理が推奨されている。当院では『医療関係者のワクチンガイドライン』に基づき、麻しん・風しん・水痘・おたふくかぜ・B型肝炎の抗体価と接種歴を管理してきた。業務効率化を目的に、抗体価・接種歴管理システム『MY抗体価』『MYワクチン』（以下、抗体管理システム）を導入した。本発表では、システム導入後の業務評価と課題について報告する。

〈方法〉

抗体価およびワクチン接種歴管理業務を振り返り、システム導入後の効果と課題を抽出した。

〈結果〉

感染管理部門による属人的な管理から職員自身が記録を登録・確認・管理できる体制へ移行できた点は評価できる。一方で、抗体管理の重要性に対する職員の認識不足や、システムの機能が十分に活用されていないといった課題が残る。

〈考察〉

抗体管理システムは病院と職員が情報を共有できる有用なツールであるが、職員の理解と参加がなければ機能しない。病院側の管理体制整備に加え、職員の意識と知識向上が不可欠であり、教育と周知活動の強化が求められる。

〈結語〉

抗体価・ワクチン接種歴の管理は職員の健康を守るための手段である。職員自身がその意義を理解し、主体的に関与する意識を醸成していくことが重要である。教育・周知活動を通じて理解を促し、職員自身が主体的に参加する体制の構築を目指す。

〈参考・引用文献〉

日本環境感染学会『医療関係者のためのワクチンガイドライン第3版、第4版』

入退院を繰り返す心不全患者の療養生活支援 ～心不全看護外来を中心に地域連携を実施した一例～

洛和会音羽病院 3D病棟

○勝木哲郎・藤本貴久・福田紘

【キーワード】 心不全看護外来 地域連携 ケアマネジャー

〈背景・目的〉

当院では心不全患者に対し心不全看護外来で退院後の療養生活支援の状況をケアマネなど地域スタッフに情報提供を行っている。退院後の療養生活支援から、地域連携における心不全看護外来の役割を報告する。

〈方法〉

回顧的事例研究、対象に研究の主旨・方法・個人情報保護について説明し署名で同意を得た上で院内の倫理委員会の承認を得た。

〈事例紹介〉

A氏80歳代男性、ADL杖歩行、要介護2。Afに伴う心不全、内服アドヒアランス不良で半年に2回の心不全増悪で入院歴があり、外来通院時も体重増加を頻回に認めていた。1週間で内服を自身で確実に服用できる日は2日程度。

〈結果〉

外来受診の際に心不全看護外来で面談を行い、内服の状況の確認を行い、外来後に、受診後の状況をケアマネに情報提供を行った。内服、体重管理の重要性を説明し内服アドヒアランス向上のためにサービスの見直しを提案した。元々利用していたデイサービスの頻度を増やし、かかりつけ薬局の協力を得て1週間の中で内服を確実に服用できる日を5～6日に増やした。その結果心不全の増悪なく経過した。

〈考察〉

心不全看護外来で療養生活管理を把握し、必要なサービスの提案や地域スタッフとの連携を行うことで療養生活管理の支えになる。

〈結語〉

心不全看護外来で患者の疾患管理状況や生活に対する思いを把握し、地域スタッフと連携したことで、「病院」と「地域」の双方が共通認識を持った療養生活支援につながる。

〈参考・引用文献〉

- 1) 日本循環器学会:「心不全の地域連携:実態と課題今後の在り方」についてのアンケート結果とその考察 2021.7.28
- 2) 日本循環器学会:地域におけるかかりつけ医等を中心とした心不全診療提供体制構築為の研究「心不全における介護サービスの活用方法Q&A」、https://plaza.umin.ac.jp/isobegroup/results_5.php (閲覧日:2024年7月30日)
- 3) 日本循環器学会:日本循環器学会/日本心不全学会合同ガイドライン2021年JCS/JHFSガイドラインフォーカスアップデート版 急性・慢性心不全診療. https://www.j-circ.or.jp/guideline/guideline-series/JCS2021_Tsutsui.pdf (閲覧日:2024年7月30日)
- 4) 公益社団法人日本看護協会2022年. 地域包括ケア推進のための外来における看護職の役割把握調査事業報告書. https://www.nurs.or.jp/r3_role4resources.pdf (閲覧日:2024年7月29日)
- 5) 厚生労働省:IV介護の状況 <https://www.mhlw.go.jp/05.pdf> (閲覧日:2024年7月29日)

静脈鎮痛薬の第一選択が術後回復に及ぼす影響

洛和会音羽病院 2A病棟

○川路歩奈・北村裕子・横尾真里奈・新澤かなえ・堀由佳

【キーワード】 疼痛コントロール、リハビリ、静脈鎮痛薬、術後疼痛、NRS

〈背景・目的〉

術後の疼痛は回復過程に大きく影響し、離床や身体的回復を遅らせる要因となるため、的確な疼痛管理が重要である。当病棟ではアセリオやロピオンの静脈鎮痛薬を段階的に使用することが多いが、これら静脈鎮痛薬を段階的に使用しても十分な疼痛緩和が得られない症例も散見される。そこで本研究では、静脈鎮痛の第一選択としてレバタンを使用した場合の身体的機能回復への影響を明らかにし、今後の効果的な術後疼痛管理の実践に役立てることを目的とする。

〈方法〉

- ・症例:大腿骨骨折術後の疼痛管理としてレバタンを第一選択した症例(70歳代 女性 右大腿骨転子部骨折、全身麻酔下)
- ・検証方法:術直後のNRS評価(術直後、1時間後、6時間後、24時間後)および術翌日からの離床状況を確認した。

〈結果〉

術直後、NRS:8の強い疼痛を訴えていたが、レバタンを投与したところ、NRS:0となり、以後は疼痛を訴えられなかった。夜間も入眠でき、翌日には離床への不安を示すことなく、活動意欲が高まった。歩行訓練も可能となり、回復促進した可能性が示唆された。

〈考察〉

レバタンを第一選択とすることで疼痛が速やかに軽減され、疼痛の不安なく、離床可能となり、術後の回復が示唆された。

〈結語〉

レバタンを術後疼痛管理の第一選択とすることは、効果的な鎮痛に加え、患者の心理的安定にもつながり、術後回復の促進に有用であることが示唆された。

〈参考・引用文献〉

- ・dmeadow, LB et al NO rest tha wounded:early ambulation after hip suegery accelerates recovery.ANZ JSurg.2006 76(7).607-11
- ・宇田川和彦ほか、高齢者大腿骨近位部骨折に対する、積極的疼痛管理と術後せん妄についての検討 骨折.43(3)2021 820-3

歯の日に実施するNST口腔ケア活動が患者ケアと看護師の意識に与えた影響

洛和会音羽病院 5A病棟

○湯浅葵・西村優子・田原佳菜穂・倉本真智子

【キーワード】 口腔ケア 看護師 O-HAT評価 肺炎 教育

〈背景・目的〉

口腔ケアは、誤嚥性肺炎の予防や患者のQOL向上に重要なケアであるが、看護業務の多忙さや知識不足により十分に実施されていない状況がある。定期的なチームによる口腔ケアと、OHATを用いた評価を通じて患者の口腔内清潔度の改善と看護師の行動変容を図ることを目的とした。

〈方法〉

一般病棟に勤務する看護師を対象に、口腔ケアを全員で実施する日を設定し、OHATで患者の口腔内を評価した。口腔ケアを実施しながら、看護師に対して口腔ケアに関する教育を実施した。OHATスコアの推移により、患者の口腔内衛生と、看護師の知識・意識の向上を評価する。

〈結果〉

OHATスコアは改善傾向を示した。チームによる口腔ケア実施初回のOHAT平均スコアは4.9であった事に対し、実施4回目の時点で3.0まで改善を認めた。中でも唾液の項目については他の項目と比較して大きく改善を認めた。義歯の項目については平均スコアに変化を認めていない。

〈考察〉

定期的なチームによる口腔ケアの実施と看護師への教育的介入が、口腔内状態の改善と看護師の意識・行動の変容に影響を与えた。特にOHATを用いた客観的評価は、看護師が口腔ケアの効果を実感するきっかけとなり、実践意欲の向上に繋がった。後回しにされがちであった口腔ケアが、本研究の取り組みによって看護実践の一部として位置づけられたことは、今後のケアの質の向上に繋がる。

〈結語〉

定期的な集団的口腔ケアの実施と教育的支援は、患者の口腔内清潔度の向上および看護師の行動変容に有効であり、今後も継続的な取り組みが重要であると考ええる。

〈参考・引用文献〉

掲載順 ①著者名:岸本 裕充 ②表題:誤嚥性肺炎を防ぐ摂食ケアと口腔ケア ③雑誌名 エキスパートナース419号:④頁、⑤発行年(西暦)2013. 10.20

5A病棟における看護補助者のADL表の活用

洛和会音羽病院 5A病棟

○島田朋子・笠井真有美・青山佑太・グエン フォン ザン・藤野好美・
チュー チュー マ・ピョン チ・倉本真智子・伊藤洋子

【キーワード】 看護補助者 ADL表 情報共有

〈背景・目的〉

急性期病棟である5A病棟では、看護補助者も看護師とともに日常生活援助に積極的に関わっている。しかし、看護師やリハスタッフと患者のADL情報共有が十分行えていなかった。そこで、情報共有しながら現状と目標のADLを分かりやすく表示することで患者支援の質の向上に繋がると考えた。

〈方法〉

ADL表使用前後の意識変化を知るため、5A病棟のリハビリスタッフ、看護師、看護助手にアンケート調査を2回行い比較する。

1回目7月19日～7月23日

2回目8月11日～8月15日

リハビリ終了時にリハビリスタッフ、看護師、看護補助者でADL変化の有無を確認し、変化があった場合はADL表のピクトグラムを変更する。

〈結果〉

「患者の状態が一目で分かり、現状・目標とするADLを認識できる」という設問では使用前は55%であったが、使用後は80%程度となった。また、「患者への介助、ケアの質が上がっていると感じる」項目では、使用前は48%だったが、使用後は80%程度となった。

〈考察〉

ADLが一目で認識できることで現状の患者に合った関わりができ、ケアの質の向上に繋がったと考える。また、情報共有をしながらピクトグラムの変更を行うことで、介助度が理解しやすく、患者のADL拡大に対して積極的に関わることができる。

〈結語〉

患者に関わる時間は長くは無いが、ADL情報の共有を行うことで、病棟全体で患者の日常生活援助やADL拡大につなげ、ひいては退院支援の質の向上に繋がっていく。

〈参考・引用文献〉

- ）小関康春 他:ピクトグラムを用いたADLの視覚化の取り組みの効果検証。
- ）河崎憲昭 他:地域包括ケア病棟における情報共有の工夫～ADL能力の視覚化ツールの導入と導入後のアンケート調査～、石川県作業療法学術雑誌24:9～12, 2015
- ）東雲洋美 他:ピクトグラムを用いたADLの見える化の取り組み、BRAIN NURSING vol.33 no.6:613-616,2017

コロナ禍の面会制限によって退院支援の経験が少ない看護師へのアプローチ ～退院支援に関するパンフレットの効果～

洛和会音羽病院 SCU

○大原菜の香・古川健太・荒井隼人・木曾日香奈・木下明里・
大中悠平・山口剛史

【キーワード】 退院支援、面会制限解除、看護師

〈背景・目的〉

経験が5年以下の看護師は、コロナ禍の影響による面会制限で患者家族との関わり乏しい。そのため退院支援の知識が不足し説明に不安がある。パンフレットを活用することで不安や苦手意識が軽減することを目的とした。

〈方法〉

対象者:経験年数が5年以下の看護師9名

パンフレットには一般的な療養先の種類や介護保険など退院支援に関する内容を記載した。対象者へのアンケートには、介入前後での変化について4件法で点数化し評価した。

〈結果〉

導入前は退院支援に不安を抱える看護師は100%で、退院先の種類や条件が分からないは71%、退院支援の方法が分からないは85%であった。自由記載では施設の選択や介護保険、転院先の知識不足により、家族への説明や退院後についての話ができないという回答があった。導入後は退院支援に対して不安を抱えていると答えた看護師は22.2%であった。退院先の種類や条件が分からない、退院支援の方法が分からないと答えた看護師はともに33%であった。自由記載では退院先などの知識を得られたと回答があった。

〈考察〉

パンフレットを導入することで、退院支援の介入にへの不安を持つ看護師は100%から22%になり不安を軽減させることができたと考える。また、退院先の種類や条件、介入の方法に関する知識不足を感じていた看護師の割合は減少しており、苦手意識の改善につながったのではないかと考える。

〈結語〉

パンフレット導入で看護師の不安は改善したが、30%程度の看護師は社会資源についての知識不足を感じており、研修や別の方法で知識向上を図る必要がある。

〈参考・引用文献〉

- 古田 芹乃:特定集中治療室での入退院支援に関する取り組み～パンフレット導入前後の看護師の苦手意識の変化～、岡本医学雑誌第2巻,2024.
- 青木 頼子:脳卒中で入院した高齢者の「退院先を考えるガイドブック」の開発過程と普及の課題、聖路加看護学会誌第25巻2号,52-54 2022.

A病棟でのACPの充実を目指して ～現状と課題～

洛和会音羽病院 4D病棟

○宮井瑞葉

【キーワード】 ACP、意思決定支援、慢性呼吸器疾患、終末期

〈背景・目的〉

2007年に厚生労働省が「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」を制定し、2018年の改訂にてアドバンス・ケア・プランニング(以下、ACP)という概念が盛り込まれた。また、診療報酬でもがん患者指導管理料の算定要件として「適切な意思決定支援に関する指針を定めていること」と規定されるようになり、医療機関でのACPが重要視されるようになっていく。A病棟においてACPを充実させていくためには正しい知識と体制を整えていく必要がある。そのため、本研究にてA病棟でのACPの実際と課題を明確にし、今後のACPの充実を目指していきたいと考えた。

〈方法〉

A病棟に所属する看護師を対象にアンケート調査を実施し質的研究を行った。

〈結果〉

アンケート結果から、ACPに関する研修等を受講した経験がなく、知識や経験に不安を感じているという意見が多く見受けられた。これらの結果から、患者との意思決定支援に対する積極的に関与が十分ではなかったことが明らかになった。

〈考察〉

ACPを進めるうえで、困難と感じる要因は ACPの経験や知識不足であることが分かった。慢性呼吸器疾患はがん・非がん共に長い経過をたどりながら終末期に向かっていく方が多く、意思決定支援は非常に重要である。ACPを効果的に進めるためには、患者の意思決定支援を支える体制の構築が重要である。

〈結語〉

ACPを円滑に進めるには、教育による知識向上と多職種連携強化が必要である。患者個々にあったACPが実践できるような環境を整えていきたい。

〈参考・引用文献〉

1) 高橋 美賀子、木澤 義之、森 雅紀:ACPを推進したことで起こってしまったこと・起こりがちなこと、プロの臨床力をサポートする唯一の専門誌 緩和ケア 34巻:197頁, 2024

外国籍職員への指導教材の作成と導入 ～母国語に変換した効果～

洛和会音羽記念病院 1病棟

○棕木天音・大西康之

【キーワード】 業務改善、教育効果、外国籍職員、母国語、業務手順

〈背景・目的〉

外国籍職員への日本語による教育には限界があり、日本語の指導教材を理解することも容易ではない。看護補助者からはコミュニケーションが難しく、細かな指導が困難であるという意見も聞かれた。そこで日本語と母国語(ミャンマー語)の二カ国語で指導教材を作成すれば、業務手順や日本語理解が容易になるのではないかと考えた。今回の研究では、指導教材の教育効果を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

既存の業務手順を基に、日本語とミャンマー語の二カ国語で指導教材を作成した。挿絵などの視覚的な情報も活用し、言葉は補い、共通認識ができるよう配慮した。

新たに作成した指導教材を使用した後、対象となる外国籍職員2名と看護補助者にアンケート調査を実施した。

〈結果〉

外国籍職員2名からは、視覚的な説明が多く、指導教材を使い始めてから難しい内容も分かりやすくなった。看護補助者からは、写真や絵などがついていて分かりやすかったが、体位変換やクッションの位置等の写真があれば把握しやすいとの意見が得られた。

〈考察〉

指導をする側と受ける側が、作成した指導教材から同じ情報を得られること、視覚的要素が追加されたことにより、業務手順の共通理解が促進され、外国籍職員の教育効果の向上に有効であったと考える。一方、指導する側からは更なる情報の追加や修正の提案があり、内容改善の余地があることも分かった。

〈結語〉

今後も、指導教材を随時更新することで、さらなる教育効果の向上を期待したい。

〈参考・引用文献〉

1) 一般社団法人 国際交流&日本語支援Y.(2024), 外国人のための会話で学ぼう!介護の日本語第2版—指示がわかる、報告ができる—, 中央法規出版株式会社

看護を語るブロックカンファレンスの定着 ～ファシリテーター教育の取り組み～

洛和会音羽記念病院 2病棟

○木村明日香・栗原留衣・柿本祐加・安井謙成・中村理絵

【キーワード】 ブロックカンファレンス、セル看護提供方式、ファシリテーター、教育

〈背景・目的〉

A病棟は、患者について考え気づく看護を目標に2023年2月からケースカンファレンスを開催している。2024年2月より、セル看護提供方式を導入後はブロックカンファレンスに移行したが、情報共有や報告の内容であり、看護を語るカンファレンスの定着には至っていない。また、ブロックリーダーは日々担当するブロックが変わることで、患者情報が把握しづらい現状があった。今回、看護を語るブロックカンファレンスの定着を目的とし、ファシリテーター教育の取り組みを報告する。

〈方法〉

ブロックリーダーを対象に、ファシリテーションのe-ラーニングを視聴後、グループワークを実施した。また、ブロックリーダーは日々ブロックを変更せず固定し、カンファレンスを開催するとした。聞き取り調査はグループワーク後と、ブロックリーダー固定後に実施した。

〈結果〉

ブロックを固定することで情報把握がしやすく、カンファレンスで効果的なフィードバックができた。またファシリテーターの心得を学ぶことができ、看護を語る役職者を役割モデルにしていることがわかった。

〈考察〉

限られた時間の中で開催されるブロックカンファレンスでは、ブロックリーダーに情報整理能力、瞬時の判断力、多角的な視点が求められ、ファシリテーターとしての役割が重要である。

〈結語〉

ブロックリーダーの育成には、ファシリテーション能力の継続的な教育が課題である。

〈参考・引用文献〉

- 1) 浦山絵里:医療現場でファシリテーションを実践する, 看護管理, Vol.26No.10 2016
- 2) 森雅浩:ファシリテーションのスキルを学ぼう, 看護管理, Vol.26No.10 2016
- 3) 脇丸夕佳:倫理カンファレンスにおける看護師のファシリテーションスキル, 日本看護倫理学会誌, VOL.11 NO.1 2019

自己摂取困難な患者の「食いたい」思いへの関わり ～KTバランスチャートを用いて～

洛和会音羽記念病院 3病棟

○三津川真衣・熊地七星・飯干彩芽・大谷昌子・樋口尚子

【キーワード】 摂食嚥下機能・自己摂取困難・KTバランスチャート

〈背景・目的〉

M氏は自己摂取困難であり、誤嚥性肺炎を繰り返しているが、本人の「口から食いたい」という強い希望から、昼のみ経口摂取、朝夕は経管栄養を実施している。

M氏の摂食嚥下の介入を模索した結果、KTバランスチャートを使用した介入が、M氏に効果的であったため報告する。

〈方法〉

期間:2025年5月～6月

KTバランスチャート評価:1回/月実施

〈結果〉

口腔内の清潔を保持する事により、食事意欲が増し、摂取量が増加した結果、栄養状態が改善した。

変化があった項目①食べる意欲④口腔状態⑥捕食・咀嚼・送り込み⑦嚥下③栄養状態

変化がなかった項目、②全身状態③呼吸状態⑤認知機能⑧姿勢・耐久性⑨食事動作⑩活動⑪摂食状況⑫食物形態

〈考察〉

KTバランスチャートを使用したことで、食べる意欲、口腔内の状態、咀嚼・送り込み、嚥下、姿勢・耐久性など具体的な項目で評価し、点数化されることで、嚥下に関する能力の程度が把握できた。M氏の強み、弱みが明確になることで、強みを維持し、弱みを少しでも向上させていけるよう、具体的なケアを立案・実施したことで、評価点数の上昇が見られた。このことから、全介助の患者においても、KTバランスチャートの活用は有効であり、また患者の「食いたい」という思いに寄り添ったケアが出来たと考える。

〈結語〉

摂食嚥下の介入として、KTバランスチャートを使用した介入が効果的であった。今後は、摂食嚥下機能低下のある患者に対しての評価ツールとして、活用を継続していきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1) 小山珠美, 口から食べる幸せをサポートする包括的スキル, KTバランスチャートの活用と支援, 第1版第2刷, 医学書院, 2015.12.1

回復期リハビリテーション病棟における 多職種での退院支援カンファレンスの効果

洛和会音羽リハビリテーション病院 3A病棟

○寺川香

【キーワード】 退院支援 多職種協働

〈背景・目的〉

2024年度の診療報酬改定により、従来の回復期リハビリテーション病棟の疾患別入棟期間に加え、リハビリ単位が減単となるOP後60日や各種クリニカルパスの入院期間に対応する必要があった。また、2025年1月より病床数が52床から55床へ増床され、今まで以上に計画的な退院支援が求められOJTの実践が急務であった。

〈方法〉

退院支援カンファレンスでは1回/週、セラピスト、MSW、NSが参加し、患者の目標の確認と共有、面談の時期や目的、問題点を抽出した。そして、この退院支援カンファレンスを回りハ病棟における退院支援のOJT実践の場として経験の浅い看護師も参加できるようにした。

〈結果〉

患者の入院当初から退院後の生活をイメージした介入ができた結果、期限内での退院と平均28件/月の入院受け入れができています。

〈考察〉

退院支援カンファレンスでは、退院時期の検討だけでなく、患者の時間軸での生活を考えた支援の提案と共有ができたと考える。しかし、カンファレンス参加者からチームメンバーへのフィードバックに時間を要し残業に繋がることやチームメンバーが問題の解決に追われる状態でもあり、スタッフ育成が今後の課題と考える。

〈結語〉

現在も退院支援カンファレンスは継続開催しており、早朝リハビリ対象患者の選定やケアマネージャーや訪問リハビリ担当者参加により、在宅サービス担当者との連携の場となり、カンファレンス内容を拡大し実践している。

〈参考・引用文献〉

宇都宮宏子(2011). 退院支援実践ナビ(P8-48). 医学書院
宇都宮宏子・三輪恭子(2011), これからの退院支援・退院調整, 日本看護協会出版会

認知症治療薬を始めた患者と その家族への支援

洛和会音羽リハビリテーション病院 外来

○古久保侑実子・南出朱梨・陳東梅

【キーワード】 認知症、レケンビ、ケサンラ、外来、家族、Zarit介護負担尺度

〈背景・目的〉

アルツハイマー病に対する新規治療薬レケンビ、ケサンラは、軽度認知障害および軽度認知症の進行抑制を目的に導入されたが、患者と家族には認知機能維持への期待と同時に、介護負担や生活上の不安が存在する。外来看護師はその不安を把握し、支援体制を構築する役割を担う。本研究は、レケンビ、ケサンラ投与と患者家族の介護負担を評価し、支援の在り方に関する看護師の役割を明らかにすることを目的とする。

〈方法〉

倫理審査承認後、外来通院患者の家族介護者を対象にZarit介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI_8)を用いた質問紙調査を実施した。併せて、患者の認知機能(MMSE・CDR)を記録し、看護師による経過問診を収集した。介護負担度は記述統計と相関分析で整理し、問診記録は質的に分析した。

〈結果〉

介護負担度は軽度から重度まで幅広く分布し、特に介護期間が長い介護者や高齢配偶者において負担が高い傾向がみられた。患者の認知機能低下は家族の心理的負担と関連し、また外来通院に伴う生活上の制約も看護師の問診記録から抽出された。

〈考察〉

先行研究と同様に、介護負担感は身体的・心理的・社会的・経済的要因と関連していた。また、在宅療養移行に伴い家族の不安が増大する点は、厚労科研報告が指摘する「介護者支援の重要性」と一致した。外来看護師は、介護負担の可視化とレスパイトケアを含む支援体制整備に寄与できると考える。

〈結語〉

本研究は、レケンビ治療患者家族の介護負担を可視化し、看護師の支援の着眼点を明らかにした。今後は、外来看護における継続的な支援体制の改善に活用できる基礎資料となる。

〈参考・引用文献〉

1.徳永あけみ, 羽生正宗. Zarit介護負担尺度日本語版短縮版(J-ZBI_8)を用いた家族介護者の負担感分析. 山口経済学雑誌. 2011;60(3):219-246
2. 厚生労働科学研究費補助金 認知症関連研究報告書

クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)進行期の 患者家族への看護ケア

～キューブラー＝ロスの死の受容過程理論を用いた考察～

洛和会音羽リハビリテーション病院 2B病棟

○矢掛梨沙

【キーワード】 クロイツフェルト・ヤコブ病、家族看護、受容、キューブラー＝ロス

〈背景・目的〉

クロイツフェルト・ヤコブ病(CJD)は急速に進行する認知症性疾患で、家族は短期間で繰り返し喪失を経験する。本研究は、進行期のCJD患者家族の心理過程をキューブラー＝ロスの死の受容過程理論で分析し、今後の家族ケアに活かすことを目的とした。

〈方法〉

事例研究。対象は当病棟に入院した90代女性CJD患者とその家族1名。電子カルテより経過を抽出し、文献と照合して分析した。

倫理審査委員会承認・同意取得済み。

〈事例〉

入院初期、患者は軽度の認知機能の低下はあるが、ADL・会話とも保たれていた。2ヶ月頃より認知機能低下が進行し、家族を認識できなくなり、家族は現実を受け入れられず、戸惑う反応がみられた。中期には嚥下障害・ADL低下が進み、「寝たきりになってほしくない」「まだ寿命は来てほしくない」との発言もあった。後期にはコロナ罹患や窒息、急変などがあり、家族が流涙する場面はあったが、看取りの段取りや遠方の親戚との面会を組むなど死への覚悟もあり、看取り期には笑顔で過去の話をして穏やかに最期を迎えた。

〈結果〉

家族の心理過程は否認・取引・抑うつ・受容の段階を行き来していた。患者家族の反応を踏まえ、病棟内でカンファレンスを繰り返し開催し、多職種とも意見交換を行った結果を主治医へ報告した。その都度主治医から医学的見解とリハビリの現状を伝えてもらい、また看護師からも医師とは違う看護の視点で日常的な表情や言動を伝え、結果家族の訴えや表情は和らぎ、前向きな発言へ繋がった。

〈考察〉

介入当時は理論を意識していなかったが、振り返ると家族支援は理論に沿っており、日々の観察や傾聴が家族を支える基盤となっていた。理論を用いた振り返りは心理変化を体系的に捉えることを可能にし、看護師が家族により深く寄り添う視点を得ることに繋がった。本研究は家族インタビューを予定していたが、急変や看取り等により実施できず、記録分析に依存した点が限界である。今後は家族の主観的体験を直接収集し、より深い理解と実践への還元を目指す。

〈結語〉

終末期家族ケアでは、日常の寄り添いに加え、理論的視点を取り入れることで支援の質をさらに高めていきたい。

〈参考・引用文献〉

- 1.Kübler-Ross E: On Death and Dying. New York, Macmillan, 1969 (キューブラー＝ロス著, 川口 正吉 訳: 死ぬ瞬間―死とその過程について, 読売新聞社, 2005).
- 2.日本看護協会: 終末期ケアに関するガイドライン. 日本看護協会出版会, 2014.
- 3.佐藤 美穂: 認知症高齢者の家族が経験するグリーフとその支援. 老年看護学 23:45-52, 2018.

外来通院を維持するための他職種連携 ～地域連携における透析室看護師の役割～

洛和会東寺南クリニック 透析室

○高松萌・五十嵐ほのか・岩木愛里

【キーワード】 透析看護、在宅支援、地域包括ケアシステム、在宅医療

〈背景・目的〉

透析導入患者数は2021年をピークに減少傾向であり、その要因に高齢化がある。当透析室では、患者の74%が60歳以上を占める。高齢患者が継続して通院することの困難さが生じた症例が増加している。今回、カンファレンスで検討し取り組んだ事例を分析し、透析室看護師の役割を明らかにする。

〈方法〉

質的研究: 内容分析

対象は当院に通院する透析患者99名のうち60歳以上の患者で、看護師主導で開催したカンファレンスの22例。患者の問題点は課題分析に関する項目に分類する。患者に発生した課題に対して、通院を継続出来るように支援した内容から看護師の役割を分析した。

期間: 令和7年7月1日～8月21日(分析期間含む)

〈結果〉

患者の問題点は課題分析に関する項目に分類するとADL6件、IADL8件、認知5件、褥瘡・皮膚問題1件、食事摂取3件、介護力8件となった。

〈考察〉

IADLで課題となった内容は服薬状況に関する事であった。また、介護力の課題が多い。患者が透析に週3回通院する時間は、状態や生活背景の観察と情報収集が出来る。患者が安定した透析治療を行うための課題を評価し、特に介護力が問題となる場合は地域包括との連携が必要となる。患者の背景に合わせた課題解決を進める必要があった。

〈結語〉

宮下は「高齢透析患者の在宅生活を支えるには多職種連携が必要」と述べている。透析看護師から多職種に向けて、患者の課題を共有し透析治療に対する知識の提供やサービス状況と連動した支援の提供が求められる。

〈参考・引用文献〉

- 宮下美子: “透析医療における多職種連携―職種別の役割(1) 看護師の役割”. 臨床透析. 2022, 38巻3号, p.247-253.
- いまこそ考えたい高齢透析患者と家族ケア 透析ケア2024, 8 Vol.30, No.8
- 透析医療と看護師の専門性の深化 日本透析医会雑誌 Vol.35 No.1 2020
- 透析看護領域における現状と看護師の果たすべき役割 透析会誌37(3)

透析出血感知センサー導入の効果 ～事故報告書からの検討～

洛和会音羽記念病院 透析センター

○井上佑亮・塩山愛里

【キーワード】透析出血感知センサー、抜針、事故報告書、安全対策

〈背景・目的〉

透析治療において穿刺部からの異常出血は重大事故につながるリスクがあり、早期発見・対応が求められる。本研究では、透析出血感知センサーの導入前後における事故件数と、その重症度の変化を分析し、本センサーの有用性と課題を検討した。

〈方法〉

当センターにおいて、透析出血感知センサー導入前(2022年～2024年の2月から5月)および導入後(2025年2月～5月)の期間に発生した事故報告書を収集し、件数および事故レベルに基づいて分類した。抜針事故に関しては透析記録、事故報告内容に出血センサー使用の記載の有無を確認した。統計的検定としてカイ二乗検定を実施し、導入前後の差異を分析した。

〈結果〉

対象期間の事故報告書件数は649件、うち抜針件数は56件であった。年度ごとの統計結果を比較すると、2025年は抜針割合が過去より低く、レベル0～1の事故報告が相対的に増加した。本センサーによる異常検知の記録は一部に留まり、有意差は認められなかった。(p > 0.05)

〈考察〉

重大事故の抑制傾向はみられたが、本センサーによる異常検知と明確に記された記録は限定的であり、センサー単独の効果と断定するのは難しかった。導入期間の短さも評価に影響を及ぼしていると考えられる。事故発生時の記録精度の向上とその教育が今後の課題と考える。

〈結語〉

本センサー導入は、異常出血の早期発見、重大事故防止につながる事が示唆された。今後は記録精度の向上と患者安全のため、効果的に本センサーの活用を行っていききたい。

〈参考・引用文献〉

1) 矢野利幸・原田孝司・船越哲, モニタリング機器11, 透析出血感知センサー, 臨床透析, 2014; 30(10), 1343-1350

褥瘡が改善しない在宅療養を行っている 脊髄損傷患者の看護についての一考察

洛和会訪問看護ステーション四条鉾町

○大野文

【キーワード】成人期 頸髄損傷 難治性褥瘡 在宅療養

〈背景・目的〉

対象者(以下、A氏とする)は40歳代後半の男性、脊髄損傷による下肢完全麻痺と排泄機能障害、上肢の不全麻痺がある。20歳代前半に脊髄損傷を患って以降、褥瘡ができる事はなかった。しかし、今回、突然右臀部に表皮剥離が出現し、処置を行っていたが、骨髄炎を起こすまで悪化し、褥瘡が改善しなかった。そこで、褥瘡が改善しない在宅療養を行う脊髄損傷患者への看護について考察した。

〈方法〉

訪問看護記録、関わった訪問看護師、入院先の病院からの情報、心理面等については直接、A氏本人から情報を得て、時系列で状況をまとめ、分析した。

〈結果〉

時系列表から、褥瘡は入院治療と在宅での処置継続および臀部の摩擦が移動の際に強くかかる方法での自宅でのシャワー浴の中止により、現在は治癒傾向に向かっていた。

〈考察〉

当初、A氏も介助者も褥瘡の原因が認識出来ていなかったが、時系列表から、シャワー浴時の移動の摩擦が褥瘡悪化の原因と考えられた。A氏は入院生活をストレスに感じ、褥瘡が悪化しないように食生活や行動の見直しを自己で実施しているが、多人数による訪問を負担に感じ、シャワー浴は従来の方法で再開したいと希望している。今後の介入方法を検討していく必要がある。

〈結語〉

今後、A氏の希望を叶えつつ褥瘡の再発を予防するために、A氏が原因を自覚し行動を変化していく必要がある。今後は、多職種で連携しながらA氏と一緒に考えていく必要がある。

〈引用文献〉

・貝谷敏子, 西澤知江, 大江真琴, 玉井奈緒, 岡部勝行, 真田弘美: 脊髄損傷患者の褥瘡再発に対する認識と再発のプロセス-12症例のインタビューからの検討-, 褥瘡会誌 14(1):49-57, 2012
・飛澤貴子, 藤村美幸: 皮膚・排泄ケア認定看護師と訪問看護師の協働により改善した在宅難治性褥瘡の2症例, 日農医誌 65(5):1011-1018, 2017
・廣島拓也: 褥瘡が疑われたが生活状況および接触圧の評価による原因究明を行ったことで日常生活活動を制限することなく治癒にいたった症例, 褥瘡会誌:18-22, 2023
・村井恒之: 特定看護師としての活動～褥瘡を有する在宅療養者の例から～, 看護科学研究 11: 29-30, 2013

訪問看護ステーションにおけるスタッフの アドバンス・ケア・プランニングに対する実態調査

洛和会訪問看護ステーション亀岡千代川

○北村真持・橋本未奈・木全千子

【キーワード】 アドバンス・ケア・プランニング(ACP)、訪問看護、在宅ケア、終末期、実態、意思決定支援、要介護高齢者

〈背景・目的〉

アドバンス・ケア・プランニング(以下、ACPとする)の普及の推進とともに、在宅医療に携わるチームメンバーは利用者の価値観・希望に沿った医療・ケアの意思決定のプロセスに参画していく必要がある。本研究は訪問看護ステーションのスタッフにおけるACPに関する意識や実践状況について実態を明らかにする。

〈方法〉

洛和会訪問看護ステーション14カ所、サテライト3カ所に在籍している訪問看護業務に従事する訪問看護師、リハビリスタッフ170名を対象に、Webによるアンケート調査を実施した。分析方法は、対象者の基本属性および各質問項目に関して単純集計を行い、ACPに関する意識と実態に関して職種間で比較検討を行った。

〈結果〉

有効回答数は119名(有効回答率70.0%)で、内訳は訪問看護師91名(76.5%)、理学療法士24名(20.2%)、作業療法士2名(1.7%)、言語聴覚士2名(1.7%)であった。ACPの実践においてリハビリ職はほとんど関わったことがなく、ACPに関する実践状況、実践能力、連携に関する得点のいずれにおいても、看護師のほうが有意に高かった。

〈考察〉

ACPに関する実践状況、実践能力、連携に関する得点のいずれも、リハビリ職よりも看護師のほうが有意に高かった。これは、リハビリ職のACPに対する知識、経験が少ないことに起因するものと考えられる。

〈結語〉

職種に関わらず、ACPに関する理解を深めながら、多職種連携の強化を図り、ACPを進めていく必要がある。

〈参考・引用文献〉

- 1) 厚生労働省:人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン:<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000197665.html>, 2018年, (閲覧日:2024年12月14日)
- 2) 鶴若麻理, 大桃美穂, 角田ますみ:アドバンス・ケア・プランニングのプロセスと具体的支援-訪問看護師が療養者へ意向確認するタイミングの分析を通して-, 生命倫理 26:90-99, 2016
- 3) 永野さおり, 辰巳有紀子:訪問看護師におけるACPに対する認識の実態.Hospice and Home Care 29(1):32-38, 2021
- 4) 古瀬みどり, 東海林美幸:訪問看護師が要介護高齢者のアドバンス・ケア・プランニングを支援するプロセス.家族看護学研究 27(1):63-75, 2021
- 5) 大桃美穂, 鶴若麻理:アドバンス・ケア・プランニングの促進要因と障壁-独居高齢者-訪問看護師間のケアプロセスと具体的支援の分析を通して-, 生命倫理 28(1):11-21, 2018
- 6) 松永晴世, 宇佐美利佳, 高田恵子, 渡邊秀美, 木村久美子, 布施恵子, 古川直美:訪問看護における独居高齢者に対するアドバンス・ケア・プランニング支援の課題と取り組み方法の検討.岐阜県立看護大学紀要 24(1):17-27, 2024

補聴器外来における認知症合併症例へのアプローチ ～言語聴覚士による個別対応が装用成功に繋がった症例～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部

○前川大史

【キーワード】 補聴器 言語聴覚士 認知症 リハビリ 地域高齢者

〈背景・目的〉

高齢化に伴い補聴器を必要とする難聴者が増加する中、認知症を合併する症例では、記憶力や注意力の低下から補聴器の管理・操作が困難となり、装用を断念に至るケースは少なくない。そのため、補聴器適合においては聴覚の評価だけでなく、認知特性を考慮した言語聴覚士(ST)による専門的介入が重要となる。今回、当院補聴器外来において個別介入の有効性を認めた症例について報告する。

〈方法〉

対象は、認知機能低下を認める高齢補聴器外来患者。担当STが標準的な聴力評価に加え、認知機能、生活状況、家族の関わりを包括的に評価した。その評価結果に基づき、個別リハビリテーション計画を立案。介入内容として、①補聴器の音響利得の段階的調整、②補聴器の着脱方法などの反復指導、③家族に対する効果的なコミュニケーション方法の指導を実施した。

〈結果〉

一連の介入により、対象者は家族介助の下で補聴器の日常的な使用が可能となり、常時装用が実現した。その結果、家族との会話量が増加するなど、QOL(生活の質)の向上が認められた。

〈考察〉

認知症合併難聴者への補聴器適合を成功させるには、聴覚機能に加え、個々の認知特性や生活背景を多角的に評価し、それに基づいた個別的なリハビリテーションを計画・実行するSTの専門性が極めて重要である。

〈結語〉

認知特性を考慮したSTによる個別のアプローチは、認知症合併難聴者の補聴器装用継続とQOL向上に不可欠である。今後、認知機能と聴覚機能の両側面から支援できるSTの専門的役割は、高齢化がすすむ地域医療において一層重要となる。

〈参考・引用文献〉

- 1) 新田清一;ゼロから始める補聴器診療,中外医学社,2016
- 2) HAパートナーズ編;補聴器販売従事者と言語聴覚士のためのカウンセリングの考え方,2021

退院後も続けられる運動習慣 ～がん患者のためのリハビリテーション支援～

洛和会音羽病院 リハビリテーション部
○宮川裕太郎・谷口緩夏・平岡環・藤岡咲・種村美南

【キーワード】 がん、リハビリ、ADL、QOL

〈背景・目的〉

本邦では、2人に1人ががんと診断される時代であり、薬物療法を選択される患者は当院でも多い。薬物療法を継続して行うためには、パフォーマンス・ステータス(以下、PS)を高く保ち、日常生活動作(以下、ADL)を概ね自立して行える、自宅から通院ができる必要がある。身体機能を維持・向上することが入院時から退院以降も目標であり、入院中から運動療法を行うことが必要である。しかし、入退院を繰り返す中で、徐々にPS・ADLレベルが低下する高齢がん患者が多い。退院後も続けられる運動を入院中に提案し、運動を継続してもらい、PS・ADLレベルを維持・向上することで、がん治療を継続することができ、患者のQOLを高く保つことができると考える。

〈方法〉

がんのリハビリテーションガイドラインを元に、運動療法の内容・必要性についての説明を加えた、リハビリテーションパンフレットを作成し、介入時に説明・配布する。

〈結果〉

リハビリテーション介入時より、患者が運動療法の必要性を理解することで、治療中より運動療法を行うことができた。

〈考察〉

退院後の PS・ADLレベルが維持され、治療できる期間や在宅生活の延長が予想される。

〈結語〉

がんのリハビリテーションガイドラインに基づき、運動療法の必要性についてセラピストが統一して説明を行った。今後は、入院時のみならず、退院後も運動療法を実施する患者が増加し、PSの維持ができ、治療の継続ができると考える。

〈参考・引用文献〉

- ・辻哲也:高齢がん患者のリハビリテーション治療戦略と臨床研究.泌尿器外科 38(2):98-105,2025
- ・辻哲也:がんのリハビリテーション診療-現状と今後の展望-癌と化学療法 52(2):89-95,2025
- ・公益社団法人 日本リハビリテーション医学会がんのリハビリテーション診療ガイドライン
改訂委員会:がんのリハビリテーション診療ガイドライン第2版.金原出版,2019

外来心臓リハビリテーション終了後3ヶ月および6ヶ月における運動習慣の定着と再導入に関連する因子の比較検討

洛和会音羽病院 リハビリテーション部
○西村亮汰※1・木原胡桃※1・栗本律子※2

【キーワード】 外来心臓リハビリテーション(CR)、運動習慣

〈背景・目的〉

当院のCR終了後6ヶ月時点でのpeakVO2低下には運動頻度が関与することが示唆されている。CR終了後3ヶ月目での運動習慣の定着状況、身体機能を評価し、CR再導入症例の特性を明らかにする。

〈方法〉

2024年4月から9月までの間に当院でCRを終了し3ヶ月後に評価が可能であった症例を対象とした。評価項目として、身長、年齢、BMI、SPPB、SMIなどの身体機能指標を測定し、カルテより運動継続の有無やサルコペニアの有無を評価した。これらを基にCR再導入となった症例の特性を検討した。

〈結果〉

CR 終了後 3 ヶ月時点で身体機能に大きな差は認められなかったが、運動習慣が定着できていない症例が多い傾向が確認された。

〈考察〉

当院では 2020 年より 6 ヶ月後フォローアップを導入し、peakVO2 低下因子として運動継続の有無が重要であることが判明した。2024 年からの 3 ヶ月目フォローアップでは、CR 再導入となった症例ではすでに運動継続が困難であることが示された。3 ヶ月目のフォローアップを通じて早期に運動習慣の状況を把握し、運動継続の支援が重要である。

〈結語〉

CR の質と効果をさらに高めていくためには、地域との連携を強化し、退院後も継続した支援体制を構築することが重要である。また、運動習慣の定着に向けた長期的なデータの収集と研究を通じて、より効果的な介入方法を確立していく必要がある。

※1 洛和会音羽病院 リハビリテーション部

※2 洛和会音羽病院 心臓内科

Virtual Reality機器を使用した リハビリテーションの取り組み

洛和会音羽リハビリテーション病院 リハビリテーション部

○石川泉・太田尚吾

【キーワード】 Virtual Reality機器、回復期リハビリテーション、
リハビリテーション

〈背景・目的〉

近年、VR機器はリハビリテーション手段の新たな選択肢として注目されている。

本発表では当院で導入したVR機器 (mediVRカグラ®、mediVR社製) の運用について、現状の課題を検討した。

〈課題〉

mediVRカグラ®は四肢運動障害、失調、姿勢定位障害など有する患者に対し、有効とされている。導入時の使用件数は平均17件/月であり使用頻度が少ない状況であった。理由として、活用できるスタッフは限定的であった。また、スタッフ間で機器の操作方法や適応の理解に差があった。

〈取り組み〉

mediVRカグラ®を正しい方法・目的で活用できるコアメンバーを選出し、適応となる患者の選出や担当スタッフへの指導を行なった。また、実際の臨床場面でmediVR社からのサポート体制による遠隔での操作指導を複数回受けるなど、まずはコアメンバーが治療効果を出せるよう、正しい操作方法を身につけ、指導する体制を取った。

〈結果・考察〉

使用件数は平均50件/月となった。コアメンバーが、適応となる患者の選出や担当スタッフに指導する体制を取ったことにより、件数が増加したと考える。

〈結語〉

mediVRカグラ®の使用件数は増えたが、より効果的な活用に向けた質的改善が必要である。今後はマニュアルの改良や企業と連携した勉強会など、教育体制のさらなる整備を行い、有効なリハビリテーションができる一つの手段として確立していきたい。

〈参考・引用文献〉

大門恭平:リハビリテーション治療におけるバーチャルリアリティの活用 Jpn Rehabil Med 2022;59:360-365

不安のない円滑な在宅生活を目指し関わった症例 ～退院前カンファレンスの重要性を通して～

洛和会訪問看護ステーション右京山ノ内

○山本龍之介・松元友佑

【キーワード】 退院前カンファレンス、他職種との連携、在宅医療、訪問看護、退院支援

〈背景・目的〉

第6.7胸椎化膿性脊椎炎術後で対麻痺を呈した利用者が在宅生活に戻るため、退院前カンファレンス開催した。生活背景や住環境を事前に把握したところ、本人、病院職員と訪問看護師、訪問理学療法士との認識のずれが生じた症例であった。そのため、追加での訪問カンファレンスを行った事例について振り返りここに報告する。

〈方法〉

試験外出は病院の方針でできないため、本人の了承を得たうえで、訪問看護師、訪問理学療法士が自宅へ訪問し、本人はビデオ電話で参加する形で福祉用具の選定を行った。

〈結果〉

退院後より早期に介入することで、FIM運動項目は退院時60点から3か月後88点へ改善した。入浴や洗濯を自立して行えるようになり、再入院なく生活を継続している。退院前カンファレンス含めて実際に自宅訪問したことで他職種間の認識のずれを合わせることができた。

〈考察〉

退院前カンファレンス実施群は未実施群に比べFIM改善が有意に大きいとされ¹⁾、本症例も同様の結果を示した。また、多職種の情報共有により服薬管理や通院手段の課題が具体化され、在宅生活の安定に寄与した。退院前の自宅訪問は、患者や病院職員が自宅環境のイメージができ有効であったと思われる。

〈結語〉

退院前に本人を交えた自宅訪問を行うことで、不安のない円滑な在宅生活に繋がることになった。

〈参考・引用文献〉

1) 佐藤美香・高橋健：退院前カンファレンスの有無による在宅移行後のFIM変化, 日本地域看護学会誌, 23(1), 2020, 33-37

洛和会音羽病院における糖尿病教育入院患者への薬剤師の取り組み

洛和会音羽病院 薬剤部
○又木智世・大津山裕美子・三浦誠

【キーワード】 糖尿病

〈背景・目的〉

糖尿病教育入院では、患者の自己管理能力向上を目的に多職種が連携し支援を行う。なかでも薬剤師は、薬物療法の理解促進や服薬アドヒアランス向上に寄与する重要な役割を担う。当院でも薬剤師は糖尿病教育入院に携わっており、初回面談、インスリン手技指導、自己血糖測定手技指導、低血糖症状出現時の対応等の指導を行い、薬物療法を中心に患者の疾患管理の能力向上に務めている。

〈方法〉

調査は電子カルテを用いた後ろ向き観察研究。期間は2024年4月1日から2025年3月31日までの1年間。対象は糖尿病の血糖コントロール目的、糖尿病教育目的、インスリン導入目的に入院した患者。調査項目は、年齢、性別、併存疾患、退院時の処方内容、空腹時血糖値、HbA1c、服薬コンプライアンスとした。数値表記は平均値±標準偏差。

〈結果〉

対象は25名で、年齢 66.4 ± 16.1 歳、性別は男性13名、女性12名。退院時の血糖降下薬数は 2.84 ± 0.78 剤、入院初回と退院時の血糖値の変化量は朝 34.1 ± 45.6 mg/dL、昼 44.24 ± 79.1 mg/dL、103.2 $\pm$ 138.5mg/dLだった。入院前と退院後のHbA1cの変化量は $1.4 \pm 1.3\%$ だった。

〈考察〉

薬剤師の介入により、血糖管理が適切に行われ、血糖値やHbA1cの改善が期待できる。

〈結語〉

薬剤師が糖尿病教育入院患者にインスリン手技指導や自己血糖測定手技指導で介入することで、血糖値やHbA1cの改善が認められた。

〈参考・引用文献〉

臨床現場における薬剤師の役割 菅谷和也 他 日医大医会誌2015; 11(3)

終末期にかかる外来がん患者支援における職員の意識と行動の実態調査

洛和会音羽病院 薬剤部
○戸田理沙子※1・山代亜紀子※2・原田秋穂※2・伴具也※1・藤田かおり※3・相田貴子※3・木村史穂子※3・東浦まどか※4・赤井恵子※5・橋本菜月※6

【キーワード】 TQM活動、終末期がん患者、外来支援、緩和ケア、職員の意識、支援ツール

〈背景・目的〉

がん医療では緩和ケアの早期導入と包括的支援の重要性が認識されているが、現場では必要なタイミングで支援に繋がらないケースも多い。本研究では、終末期外来がん患者に対する職員の支援意識と行動の実態を明らかにし、支援体制強化の方向性を検討する。

〈方法〉

2024年12月～2025年1月、当院外来がん患者に携わる職員を対象にWebアンケートを実施。回答内容を集計・分析し、職員が支援行動に至る上で抱える背景要因を整理した。

〈結果〉

有効回答は249件。支援サービスを知っている:75%、相談窓口を知っている:80%、患者が困っていると感じている:64%、案内経験:33%。支援困難の要因は職員側:55.3%、患者・家族側:36.3%、社会制度・環境側:3.2%であった。

〈考察〉

多くの職員は支援の必要性を感じているが、制度理解不足や声かけの難しさ、時間的制約などが支援行動を妨げている。自由記述では、支援のタイミングや方法に迷いがあることや、患者・家族の反応への配慮から行動をためらう様子が見られた。支援の実施には、心理的ハードルを下げる工夫や、職員が安心して声かけできる環境整備と支援ツールの活用が求められる。

〈結語〉

本研究を踏まえ、TQM活動として「がん難民撲滅カード」を作成・配布し、職員が迷わず支援行動を取れるよう取り組みを行っている。今後はカードの活用状況を評価し、より効果的な支援体制の構築を目指す。

〈参考・引用文献〉

- 1) Hui D, et al: Integration of Oncology and Palliative Care: A Systematic Review. *Oncologist* 20:77-83, 2015.
- 2) Hui D, et al: Timely Palliative Care: Personalizing the Process of Referral. *Cancers* 14:1047, 2022.
- 3) Wong A, et al: Patients' perspective of timeliness and usefulness of an outpatient supportive care referral at a comprehensive cancer center. *J Pain Symptom Manage* 58:275-281, 2019.

- ※1 洛和会音羽病院 薬剤部
※2 洛和会音羽病院 緩和ケア内科
※3 洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター がん相談センター
※4 洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 地域連携課
※5 洛和会音羽病院 京都口腔健康センター
※6 洛和会音羽病院 栄養管理室

セラピスト向け薬剤勉強会実施後の アンケート調査

洛和会音羽リハビリテーション病院 薬剤部

○松尾茉祐・多胡和樹

【キーワード】リハビリ、他職種連携

〈背景・目的〉

音羽リハビリテーション病院(以下、当院)においては、入院患者の多くが薬物治療を受けている。そのため、薬剤師のみならず他職種の薬剤知識向上がチーム医療には重要である。そこで今回、セラピスト(PT、OT、ST)を対象に薬剤に関する勉強会を開催し、その有用性を評価するため、アンケート調査を実施した。

〈方法〉

当院に勤務するセラピストを対象に薬剤の勉強会を実施した。その後参加者を対象にアンケート調査を行った。アンケートはMicrosoft365のformsを用いて行った。

〈結果〉

アンケートは15名から回答を得た。「勉強会の内容についてどう思いましたか?」との問いには、「とても良かった」7名、「良かった」8名、「あまり良くなかった」「良くなかった」はいずれも0名であった。「勉強会の内容が業務に役立ちますか?」に対しては、「非常に活用できる」6名、「活用できる」9名、「あまり活用できない」「全く活用できない」はいずれも0名であった。「普段の業務で薬剤に関する知識が必要だと感じることはありますか?」という問いには、「よくある」7名、「時々ある」8名、「あまりない」「まったくない」はいずれも0名であった。自由記述欄では、「勉強会を通して薬剤に興味を持つことができた」「リハビリに影響する薬剤について学びたい」といった意見が見られた。

〈考察〉

多くのセラピストが、業務において薬剤に関する知識の必要性を感じていると考えられる。

〈結語〉

今回、セラピストを対象に薬剤に関する勉強会を実施し、アンケート調査を行った。今後は互いに勉強会を開催することで、薬剤師とセラピストの連携をより強めていきたい。

リハビリテーション・栄養・口腔連携体制加算の取り組みについて ー洛和会音羽病院3C病棟での義歯の使用状況における 食事内容と栄養状態の関連ー

洛和会音羽病院 栄養管理室

○石崎和真・廻神朱里・西川友加里・三宅奈穂・馬場崎仁美・
長谷川由起

【キーワード】リハビリ、栄養、口腔、多職種連携

〈背景・目的〉

洛和会音羽病院では令和6年6月から「リハビリテーション・栄養・口腔連携体制加算(以下、リハ栄養口腔加算)」の取り組みを開始した。令和7年7月から3C病棟は地域包括ケア病棟から急性期病棟に変更し、リハ栄養口腔加算への取り組みを開始した。この加算による早期栄養介入の取り組みの実態を紹介するとともに、義歯の使用状況と栄養状態の関連について調査することとした。

〈方法〉

令和7年7月1日から8月11日までの6週間で3C病棟に在籍した患者の口腔内の状態、義歯の使用状況、食事内容と栄養状態について調査した。

〈結果・考察〉

管理栄養士がリハ栄養口腔加算に取り組み、栄養状態の評価や口腔内の状況を情報共有することで、速やかな食事形態の調整が行えていた。リハ栄養口腔加算の取り組みを開始したことで、本来、義歯が必要であるにもかかわらず義歯不使用の患者が多いことで食事調整が必要になっている症例が多かった。

〈結語〉

リハ栄養口腔加算の取り組みで速やかに栄養状態や口腔内の状況を評価することにより、適切な形態の食事提供ができた。

Teamsを用いた効率的な ヴィラアエル入所透析患者の電話送迎

洛和会音羽記念病院 CE部
○近藤宏紀・伊藤剛彬・柳原蒼汰

【キーワード】 効率的、業務改善、情報管理、アンケート

〈背景・目的〉

ヴィラアエル入所透析患者の送迎の際に、体重計の側にある各患者の札の電話番号を確認して送迎の手配をしていた。しかし、忙しい時間帯で体重計の側まで毎回番号を確認しに行くのが難しい場合があり、送迎まで時間がかかる人が多数いた。そこで、送迎の時間短縮と業務効率化を図ることを目的とした。

〈方法〉

五十音順で名前の横に送迎番号を割り振ったアエル入所患者用のリストを

Teamsで作成した。透析室スタッフに配布されている業務用スマホの電話機能を用いて送迎を依頼したい患者の番号を選択すると、ヴィラアエルに電話がかかるシステムを作成した。システム作成前後でアンケートを実施し効率化されたかどうかを調査した。

〈結果〉

事前調査の「送迎リストがあれば便利だと思う」の結果が50/56(89%)であり、システム作成後の、「送迎リストを使用してみて効率が上がった」と答えた人が25/31(81%)という結果になった。

〈考察〉

即時にスマホで連絡がとれることによって、体重計の側まで行って札を探し電話する必要がなくなり、送迎の時間短縮と業務の効率が上がったと考える。

〈結語〉

医療現場は人手不足であり作業の効率を上げるために工夫をしていかなければならない。業務用スマホを活用した効率的な送迎を手配する仕組みは透析室で働くスタッフにとって便利になったといえるだろう。

意識改善による医療廃棄物減少調査

洛和会音羽記念病院 CE部
○吉岡龍志・岡時貴大・中越駿・中本司龍

【キーワード】 医療廃棄物、透析、コスト削減

〈背景・目的〉

当院では、1日あたりの透析件数が約250～330件にのぼる。透析回路の破棄にあたり医療廃棄物が多く排出される。医療廃棄物の処理にはコストが多くかかるため、意識改善による医療廃棄物の削減を目指した。

〈方法〉

意識改善前後で比較するために調査開始1週間は今まで通り廃棄してもらった。その後、Teamsを用いて透析回路の向きを縦向きに揃えて廃棄するように案内した。意識改善後の医療廃棄物の個数を案内前と同様に1週間調査した。意識改善前後での医療廃棄物の廃棄個数について比較を行った。

〈結果〉

意識改善前の1週間あたりの医療廃棄物の個数が41個に対して、意識改善後は39個となった。結果として1週間あたり2個の医療廃棄物の削減となった。

〈考察〉

今回の調査では透析回路の向きを揃えて廃棄することによって医療廃棄物の中に隙間なく透析回路が廃棄されることにより、医療廃棄物の数が減少したと考えられる。医療廃棄物減少により年間で約62.4万円のコスト削減につながると考えられる。

〈結語〉

透析回路の向きを揃えて廃棄することにより、医療廃棄物の数が減少する結果となった。その結果、年間62.4万円のコスト削減ができると考えられる。

移動型外科用X線撮影装置更新前後での 拡大率の比較

洛和会音羽記念病院 放射線部

○中川優

【キーワード】 放射線

〈背景・目的〉

当院ではシャントPTAを行う際に透視装置で撮影した血管造影画像から狭窄血管の前後径の測定を行い、その結果を参考にしてバルーンを選択を行う。測定時には、腕の厚みが異なることによる拡大率の差が生じるため、拡大率の補正の表を作成している。透視装置の更新に伴い拡大率の補正值が異なる可能性があるため、更新後の装置の補正值を測定し誤差がないかを比較した。

〈方法〉

モニタ上における血管径の測定の行程は、まず始めに造影剤を用いて血管造影を行い、造影された画像であらかじめ腕の下に置いた定規の目盛りを用いて長さの測定を行う。次に血管の計測を行うのであるが、定規と血管から線源までの距離が異なると拡大率の値も変わってくる。そこで補正值を乗することにより補正を行う。補正值の計算方法としては血管に見立てた物体の径をモニタ上での径で除することで求める。この式を用いて、手台から5mmずつ血管に見立てた物体を高くして測定し、補正值を計算した。

〈結果〉

装置更新前と更新後の拡大率の補正值を比較してみると誤差は0.01mm～0.13mmで、ほとんど差がなかった。

〈考察〉

誤差がほとんどなかった理由としては、同じメーカーの透視装置かつ線源から検出器までの距離が更新前と後で同じであったため拡大率も変わらなかったと考えられる。

〈結語〉

今回は機器更新が同じメーカーであったため、ほとんど拡大率に違いが無かったが、測定する人が異なることによる誤差、また血管の高さが大まかにしか分からない事による誤差等も考慮する必要がある。

マンモグラフィにおける放射線技師による 読影補助と精度向上についての取り組み

洛和会京都健診センター 経営管理部 業務推進課 東寺南健診センター

○松本紋佳・寺田真理・藤本理恵・佐藤利香

【キーワード】 マンモグラフィ、放射線技師、読影補助、精度向上、カンファレンス

〈背景・目的〉

マンモグラフィ検診では、早期乳がんの発見を目的とし、正確な読影が求められる。当センターでは検診マンモグラフィ認定資格を持つ放射線技師が医師の読影補助を行い、読影精度の向上や見逃し防止に貢献している。今年度より新たに認定資格を持たない放射線技師2名が加わったことで、読影精度の検証と読影補助の有効性を評価することを目的とした。

〈方法〉

令和7年5月1日から実施されたマンモグラフィ検査を対象に、放射線技師と医師の読影結果の一致率を集計し、定期的なカンファレンスを通じて評価・検討を行った。また、今年度から参加した認定資格未取得の技師2名の読影結果についても、導入初期からの変化を比較・分析した。

〈結果〉

認定資格を有する技師による読影では、医師との高い一致率が確認され、安定した精度が維持されていた。一方、認定資格を持たない技師2名については、導入当初こそ一致率にばらつきがあったものの、継続的な指導とカンファレンス参加により、読影の正確性が徐々に向上し、誤判定は減少傾向にあった。

技師全体に共通してみられた傾向として、誤判定の多くはカテゴリーを実際よりも低く評価してしまう、いわゆる見落としに該当する症例であった。

〈考察〉

技師の読影精度向上には、継続的な教育と定期的なカンファレンスが大きく寄与していると考えられる。特に、認定資格を持たない技師にとっては、症例を通じた実践的な学習が有効であり、医師との擦り合わせやフィードバックの積み重ねが重要である。また、撮影時点からの病変部位への注目や、撮影者ならではの視点を読影に活かすことで、技師としての役割をさらに発揮できる可能性がある。

〈結語〉

放射線技師による読影補助は、医師との連携を強化し、読影精度の向上に寄与する重要な要素である。今後も教育体制や症例共有の場を充実させ、より質の高い検診体制の構築を目指していきたい。

WISC-Vに見られるASDと ADHDの知能の特徴

洛和会音羽病院 臨床心理室

○倉本咲良・吉田幸平・外川由佳・森真治・安部すす・中島陽大

【キーワード】 WISC-V、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害

〈背景・目的〉

WISC-Vは神経発達症のアセスメントに用いられる一般的な知能検査である。しかし、神経発達症ごとの知能のプロフィールを示した臨床データは乏しい。そこで自閉スペクトラム症(ASD)と注意欠如多動性障害(ADHD)を対象に、これらの知的水準の傾向を調査する。

〈方法〉

対象:2024年4月～2025年6月に当院小児科こころと発達の子ども相談外来を受診した患者127名(男児73名、平均 9.2 ± 2.5 歳)のうち、ASDとADHDの診断がついた57名(男児30名、平均 9.6 ± 2.6 歳)を対象とした。なお、ASDとADHDの合併症例は除外した。診断は複数の専門医がDSM-5-TRに基づいてつけられた。評価指標:WISC-Vの合成得点(FSIQ、VCI、VSI、FRI、WMI、PSI)および補助指標(QRI、AWMI、NVI、GAI、CPI)。解析方法:JASP0.19.3を用いた。ASD群とADHD群の群間差を測定するため独立したt検定を用い、有意水準は0.05以下とした。

〈結果〉

ASD群41名(男児17人、平均 9 ± 2.6 歳)、ADHD群16名(男児13人、平均 9 ± 2.7 歳)だった。両群間の合成得点および補助指標の差を検定したところ、FSIQ($p=0.007$)、VCI($p=0.037$)、VSI($p=0.008$)、FRI($p=0.033$)、QRI($p=0.014$)、NVI($p=0.009$)、GAI($p=0.004$)で、ASD群のほうがADHD群より有意に得点が高いことが認められた。

〈考察〉

ASD児の流動性推理、視覚情報処理の優位性が報告されている1,2。こうした特徴がFRIやVSIの高さに関連していると考えられた。また今回の解析対象のASD群に従来診断のアスペルガー症候群と呼ばれる言語性の高いASD群が集まったことでVCIが高くなった可能性が考えられた。

〈結語〉

ASD群とADHD群で知能に差が見られることが示唆された。今後はサンプル数を増やし、他の疾患も考慮して研究を行う必要がある。

〈参考・引用文献〉

1. 上野 一彦 他:日本版WISC-IVによる発達障害のアセスメントー代表的な指標パターンの解釈と事例紹介ー。日本文化科学社, 2015.
2. 日本版WISC-V刊行委員会(訳・編):日本版WISC-V理論・解釈マニュアル。日本文化科学社, 2022.

歯科衛生士による手術室業務への参画とその効果 ～多職種連携による手術枠拡大への取り組み～

洛和会音羽病院 京都口腔健康センター

○久保田実侑

【キーワード】 TQM、OPE、手術、口腔外科

〈背景・目的〉

令和5年6月より、手術センターにおける口腔外科主科の手術枠が拡大された。しかし、看護師や臨床工学技士の人員不足により、歯科衛生士が手術室業務に参画する必要性が生じた。そこで、歯科衛生士が器械出しや直接介助を担える体制を構築し、手術件数の増加に貢献することを目的とした。

〈方法〉

看護師および臨床工学技士より器具の展開・準備方法のレクチャーを受け、歯科衛生士全員が理解できるようマニュアルを作成した。レクチャーを受けた者が未経験者と共に手術に入り、マニュアルを活用しながら経験者が未経験者を指導するOJT形式で教育を行った。また、ガウンテクニックや手洗い、手術室内のルールについても看護師から直接指導を受けた。

〈結果〉

2023年6月から2025年5月までの2年間に於いて、歯科衛生士が中央手術室の業務に参画してからの 小手術件数は82件から173件へと約2.1倍に増加した。

歯科衛生士が器械出しおよび直接介助を担うことで、医師1名での手術が可能となり、人的資源の有効活用と手術枠の拡大が実現した。

〈考察〉

マニュアル整備と多職種による協力体制により、歯科衛生士の手術室業務参画が円滑に進んだ。業務の標準化と教育体制の構築が、業務効率化と手術件数増加に寄与したと考えられる。

〈結語〉

現在は1日3件の手術体制が確立されており、今後は手術件数の拡大を目指している。引き続き多職種連携を強化し、病院全体の医療提供体制に貢献していきたい。

看護師による新人救命士教育と 今後の展望について

洛和会音羽病院 救命救急室

○武唾伽歩

【キーワード】 救急医療

〈背景・目的〉

2021年10月に救急救命士法の改正が行われ、院内救命士が医療行為を行える場所が大幅に拡大した。院内救命士は、以前よりも医師や看護師をはじめとする多職種連携が必要となり、医師や看護師の診療の流れや動きを把握し、円滑に対応することが求められる。ERの看護師による救命士新人教育が1年間行われたため報告する。

〈方法〉

一年間の看護師教育を受けた教育内容と実施した処置介助内容について報告する。

①看護師による教育内容について

②新人救命士教育中に行った、呼吸器疾患患者・産婦人科系患者・救急車からの搬入患者対応について

〈結果〉

看護師による教育は1年間であり、1H1人のER看護師がフォローにつき、その看護師と軽症から重症までの患者対応を行う。また、ER物品の使用方法的の確認や重症患者対応のシミュレーション訓練を行い技術向上に繋がった。

看護師の監視の下、肺摘出を行った患者のガーゼ定期交換や止血、産婦人科対応では物品の準備や内診の診察補助を行った。救急車からの搬入患者対応では、採血・検査・入院手続きまでの介助を行い、初療の流れを把握するとともに、画像検査や採血結果の見方や異常値について学ぶことが出来た。また、重症患者対応時には人工呼吸器や挿管チューブ、CVカテーテルなどのデバイスの管理方法や患者の観察項目について学ぶことが出来た。

〈考察〉

看護師からの教育を受ける事で、初療の流れを学ぶだけでなく、疾患のアセスメントや物品の使用方法的を細かく学ぶことができ、患者一人一人に適した方法での処置介助を考え、実行することが可能となった。

今後は看護師による新人教育期間内に特定行為の実施が可能な環境作りを必要と考える。新人救命士教育中に特定行為を行えるとすれば、看護師からの実施評価やフィードバックを受けることができる。その為、今後求められるより質の高い特定行為を実現できると考える。

〈結語〉

今回、看護師による新人教育を受け、アセスメント力の向上や質の高い処置介助が可能となり、円滑な診療補助を行えるように成長した。救命士の新人教育に看護師が関わることで、救急救命士養成学校では学ぶことが少ない分野や処置について学ぶことができ、知識や技術の向上に繋がった。今後の院内救命士の展望としては、以前より重要視されていた他職種連携や円滑な処置介助に加え、質の高い特定行為実施の実現と考える。その為にも、新人教育期間内からの特定行為実施の環境作りは重要と考える。

Office365を活用した医師へのDPC調査項目依頼

洛和会丸太町病院 医療情報・がん登録統計課

○大賀美奈・平川香織・新多智美

【キーワード】 Office365、Teams、Forms、Power Automate、作業効率の向上、ペーパーレス、電子化、業務改善、時短、作業負担軽減

〈背景・目的〉

当課はDPC対象病院に必要な「DPCの評価・検証等に係る調査データ(様式1)」を作成・提出している。その中の「SOFAスコア(敗血症による臓器障害の評価)」は医局の机上へ紙で配布し評価項目の問い合わせをしていたが、医師より「紙の依頼からiPhoneで完結するようにできないか?」との要望があった。そこで、iPhoneにあるOffice365と連携可能なTeamsやFormsの活用により、作業負担の軽減や時短・効率化できないか検討した。

〈方法〉

SOFAスコアの項目をFormsで作成し、回答画面へのリンクを担当医師へチャットで送付した。回答結果はPower Automateで当課のTeamsのチャンネルに通知されるようにフローを作成した。

〈結果〉

従来の紙からMicrosoft365を活用したiPhoneで完結できる依頼方法へ変更したことで、医師は紙への記入や返却、またはDPCオーダに直接入力する必要がなくなり、場所に縛られず回答することが可能となった。

〈考察〉

当課としても依頼用紙の作成・回収が不要になったため、作業時間の短縮だけでなくペーパーレスや紛失防止にも繋がった。また、作業効率の向上はもちろん、Forms・Power Automateの知識を深めることができ、その後のOffice365関連の対応時にも役立てることができた。

〈結語〉

本件と同様に紙で依頼しているケースがあれば、同じようなフローを作成することにより電子化や作業効率の向上が期待できる。今回は医師からの要望で業務改善を検討したが、同様のケースがあれば自ら提案していきたい。

連携強化診療情報提供料算定率アップへの取り組み

洛和会丸太町病院 ドクターエイド課
○本多由香

【キーワード】業務改善

〈背景・目的〉

丸太町病院ドクターエイド課では診療情報提供書の代行作成を行っている。その中で、病院の収益改善にもつながる連携強化診療情報提供料の算定率向上をセグメント目標として掲げた。令和4年より開始したが、算定率がなかなか改善しない状態が続いていた。そこで、課内で連携強化診療情報提供料算定率アップへの取り組みを行うこととした。

〈方法〉

原因を探索するために、ドクターエイド課の作成件数と管理課でのコスト算定件数の確認を行った。作成件数と算定件数の乖離が生じていることが判明したため、運用の改善を行った。

改善点を課内で話し合い、算定率が高い課員の業務方法の共有を行った。また、所属長より毎月の勉強会で各診療科、個人毎の算定率を提示し、課員のコスト算定意識向上を目指した。

基本カードの処理の際に算定漏れを防ぐため、連携診療情報提供料枠を事前に作成するなど管理課との協力を行った。

〈結果〉

昨年度は算定率が70%超えとなり、セグメント目標を達成することができた。

〈考察〉

以前はドクターエイド課全体の算定率を提示していたが、個人毎の算定率を確認することにより各課員の算定意識が向上したこと、また、業務手順の見直しを行ったことが大きいと考える。

〈結語〉

令和6年度より大幅に算定率が向上したが、依然として個人毎に差がある。電子カルテ更新に伴い、また算定率が低下しているため今後も改善意識を持って業務に取り組んでいく。

“選ばれる医療機関”へ地域連携課で取り組むCRM活用術

洛和会丸太町病院 医療介護サービスセンター 地域連携課
○宮川大夢

【キーワード】CRM、地域連携課、実績、業務改善、情報共有

〈背景・目的〉

紹介件数や訪問記録をデータ化し、月1回の地域連携会議やメダップ(株)foro CRMシステムとの定例会議を実施することで、よりはやく情報共有ができた次のアクションを早く起こすことができる。

〈方法〉

メダップ(株)foro CRMシステムを2022年7月に導入。

訪問記録や応需記録、問い合わせ内容等を記録し、課内で情報共有を図った。

各開業医の紹介件数等をレポート作成することにより、実績を可視化できた。

〈結果〉

訪問記録、応需記録、問い合わせ内容などのデータが一元化され、地域連携課内での情報共有が迅速に行えるようになった。また、システムによって作成されたレポートにより、医療機関ごとのパフォーマンスが可視化され、地域医療機関との連携が強化した。

〈考察〉

レポート機能→数字の可視化、業務効率化

コミュニケーション管理→情報を一元化したことにより、情報共有が容易になり、実績や過去の記録も把握しやすく業務の効率化に繋がった。

音声の文字起こし→訪問先での記録を音声データで録音し、データを落とし込むことで会話内容と要点を把握し手作業による記録漏れや誤記のリスクを減少

〈結語〉

本取り組みを通じて、CRMシステムが業務効率化と迅速な意思決定を支える重要な要素であることが再確認できた。今後もシステムの改善や職員のスキル向上を図り、「選ばれる医療機関」として地域医療の発展につなげる。

〈参考・引用文献〉

「メダップ」(<https://medup.jp>)

適正な診療報酬確保に向けた取り組み ～多職種の連携を強化した結果～

洛和会丸太町病院 管理課

○半田望・岡田俊吾

【キーワード】 診療報酬、多職種連携、認知症ケア加算、摂食機能療法、ICT、業務改善

〈背景・目的〉

本研究は、急速な高齢化や財政難に直面する医療機関において、限られた資源で診療報酬を適正に確保する取り組みを検討したものである。いわゆる「算定漏れ」をなくし、現場の努力が診療報酬に適切に反映される仕組みを再構築することを目的とし以下の取り組みを行った。

〈方法〉

対象は2024年10月～2025年5月に当院へ入院した患者とし、算定適正化を目的に①看護師向け勉強会、②月例多職種会議、③算定フロー整備、④院内ICT(Microsoft Teams)活用を導入した。評価項目は認知症ケア加算(A247)と摂食機能療法(H004・看護師対応分)である。介入前(4か月)と介入後(4か月)の算定率を比較した。

〈結果〉

算定率について、それぞれ認知症ケア加算は51.8%から69.5%へ改善し($p=0.108$, $d=1.35$)、摂食機能療法も6.2%から23.3%へ改善傾向を示した($p=0.075$, $d=1.59$)。収益面でも両項目は大幅に増加し、それぞれ介入前後の平均額が認知症ケア加算は約1.6倍、摂食機能療法は約4.2倍となった。

〈考察〉

看護師の記録精度向上とチーム連携強化により、従来反映されなかった介入が診療報酬に結びついた結果と考えられる。本研究は、看護師介入の結果を可視化する仕組みが、収益確保と医療の質向上の双方に寄与する可能性を示した。

〈結語〉

今回の取り組みは、多職種連携による収益増加の好例である。今後は現場スタッフの教育継続、看護師とSTとの役割整理、ICT運用(Teams)の適切な運用が課題である。

〈参考・引用文献〉

- [1] 帝国データバンク. 医療機関の倒産動向調査(2025年上半期速報). 2025年7月8日. <https://www.tdb.co.jp/report/industry/20250708iryokikan/> (参照2025年8月19日)
- [2] 診療点数早見表[医科]2024年改定準拠の診療報酬点数表. 医学通信社. 2024.
- [3] 日本看護協会. 看護業務実態調査報告書. 2022.
- [4] Cohen J. Statistical power analysis for the behavioral sciences. Routledge, 1988.

連携強化診療情報提供料算定アップに向けた ドクターエイドの取り組み

洛和会音羽病院 医局支援部 ドクターエイド課

○岡田里穂・細見紫乃・長谷夕美

【キーワード】 診療情報提供書、連携強化診療情報提供料

〈背景・目的〉

連携強化診療情報提供料とは、かかりつけ医機能を有する医療機関などから紹介された患者に対して、継続的な診療を行っている場合に、紹介元の医療機関からの求めに応じて診療情報の提供を行った場合に算定できる診療報酬である。

2023年に当院が紹介受診重点医療機関に認定されたことを受け、連携強化診療情報提供書の作成が収益向上に寄与する業務になった。

〈方法〉

ドクターエイド課では、連携強化診療情報提供書の作成件数増加を目的として以下の取り組みを実施した。

- ① 連携強化診療情報提供書の作成手順や算定要件を明記したマニュアルを作成
- ② 課内で連携強化診療情報提供料の算定要件について勉強会を開催
- ③ 現場で関わる他職種へ算定要件を情報共有した
- ④ 医師に対して連携強化診療情報提供書の必要性和意義を発信した
- ⑤ 医師と相談の上、算定に繋がる記載内容に見直した

〈結果〉

従来では診療報酬として算定されていなかった診療情報提供書が、連携強化診療情報提供料として1件150点算定できるようになり、収益向上に繋がった。

〈考察〉

課内・他職種・医師へ情報共有を行い、職種横断の啓発活動を行ったことにより、算定要件の理解が深まり連携強化診療情報提供料の件数増加に繋げることができたと考える。また、診療情報提供書に診療状況を記載することで医療機関同士の情報連携の強化及び医療の質の向上にも繋がったと考える。

〈結語〉

今後も、制度の正しい理解と運用の安定化と継続性を確保していきたい。

クリニカルパス申請運用の見直しによる 管理体制の強化

洛和会音羽病院 医療情報・がん登録統計課

○大宮梓・石井香奈子

【キーワード】 クリニカルパス、電子申請、Microsoft Forms、承認プロセス

〈背景・目的〉

クリニカルパスを新規作成・改訂した際、パス事務局へ承認依頼後、承認・修正箇所の履歴管理を目的とした台帳を作成し管理している。承認依頼時の連絡手段が電話やメールなど統一化がされていなかった。また台帳への記載漏れや転記ミスのため正確性が十分ではなかった。改訂の際、修正箇所不明のことも多く、申請者へ再度連絡をしていた。そこで申請方法・台帳管理方法の見直しを行ったので報告する。

〈方法〉

Formsを活用した申請方法へ改訂しTeamsで周知を行った。新規作成・改訂を選択式とし、改訂時には修正箇所を記載する画面を作った。入力完了と同時に、承認作業をする担当者へメールが届くよう設定した。

〈結果〉

申請方法を統一化し、担当者へメールが届く設定にしたことで、承認依頼に即時対応することが可能になった。Formsを使用することで、入力内容の台帳への転記ミスを防ぐことができた。一方、従来通りの連絡手段で申請される、申請方法の案内がどこに出ているかわからない等の意見があった。

〈考察〉

周知手段をTeamsに限定したことで、認知度に差が生じてしまったと考えられる。Formsでの申請を浸透させるにはより職員が見やすく使いやすいくところへの配置を検討する等、周知の必要があると考えられる。

〈結語〉

よりFormsが使いやすくなるよう意見を取り入れ、この申請方法が主となるよう周知をしていき、適切にクリニカルパスを管理できる体制がとれるよう活動を進めていきたい。

〈参考・引用文献〉

・神田直美他. パス作成・改訂登録審査、申請の見直し、電子化の取り組み. 日本クリニカルパス学会誌. 2024;26(3):314.

超急性期病院への移行における 退院支援の行動変容について

洛和会音羽病院 医療介護サービスセンター 入退院支援相談室

○上村美沙乃・伊達豊・深田悠紀・小林陽一・岩木友加・山村真友子・佐々木貴大・大串友見・三並美紗・栗原勇介・久世佑己・佐古ひなの・宮部真穂・足立結花

【キーワード】 退院支援、協働、連携

〈背景・目的〉

洛和会音羽病院3C病棟が地域包括ケア病棟から一般病棟へと移行した。今まで以上に迅速な退院支援の介入と在宅、施設、他院との連携が求められると考える。昨年度の地域包括ケア病棟へ転棟したケースを分析し、今後の医療ソーシャルワーカー（以下:MSW）の支援業務に活かしていくことを目的とする。

〈方法〉

令和6年7～9月の3ヶ月間に一般病棟から地域包括ケア病棟へ転棟したケースの①転棟目的②転棟に至った理由③実際の退院先について分析した。その結果をもって部署内で話し合い、今後どのようにDPCや平均在院日数を意識しながら早期退院調整を行えるか検討した。

〈結果〉

分析結果としては、3ヶ月間の転棟数は132件だった。①在宅調整目的の転棟が約7割を占めていた。②サービス調整やリハビリ目的が半数を占めていた。その他として認知症治療病棟や緩和ケア病棟の転棟待機、家族指導、レスパイトの要素が多かった。

また、身寄りのないケースは全体の7.6%（10件）あり、転院は0件であり全て自宅・施設へ退院していた。

他にも、死亡退院を除き9.8%（13件）は当初の方向性と退院先が変更となっていた。

〈考察〉

本来転院には身元保証が必要であり、身寄りのないケースの転院調整はハードルが高い。身元保証の選定を在宅にいるときから検討してもらうことが支援の選択肢を広げることに繋がると考える。また、転棟後に方向性変更となったケースの中には、MSWが改善できる点があった。それには早期から自宅生活の課題や患者家族のニーズを把握するアセスメント力が求められる。

〈結語〉

質の高い支援には個々のアセスメント力や説明力が試される。部署内での情報共有や相談援助技術の向上について取り組む必要がある。DXを活用して課題や必要な評価を多職種と共有する頻度を増やし発信していく。在宅支援者へは入院前と入院後に発生した課題は分けて退院支援を行う場合があることを理解してもらう必要がある。また、定期的に施設や病院と顔の見える連携カンファレンスを継続して行っていく。

全職員iPhone導入による情報伝達の迅速化と業務効率の向上

洛和会音羽記念病院 経営管理部 庶務課

○田中葉生

【キーワード】 iPhone、Teams、業務効率、情報共有、ICT活用

〈背景・目的〉

当院では2024年3月、全職員（常勤・非常勤）にiPhoneを配布し、ICTを活用した業務改善を目指して運用を開始した。医療現場における情報共有の迅速化と業務効率の向上を目的として導入後の変化を把握し、今後の運用改善に活かすため、調査を実施した。

〈方法〉

2024年3月時点でiPhoneを配布し、2025年7月まで在籍していた職員195名を対象に、「iPhone活用に関するアンケート」をTeams（Forms使用）で実施した。設問内容は、情報伝達や業務効率の変化、使用頻度、活用機能、使用上の課題など、選択式と自由記述を組み合わせで構成した。

〈結果〉

172名（回答率88%）から回答を得た。「情報伝達が速くなった」と回答した職員は81%、「業務効率が向上した」は82%、「1日5回以上使用」は88%であった。使用機能ではTeamsが最も多く、ついで電話連絡、写真動画の記録共有、業務関連の検索であった。一方で、「操作に不慣れ」14%、「通知が多い」12%などの課題も見られた。

〈考察〉

iPhone導入は情報共有と業務効率の向上に有効であり、特にTeamsの活用が大きな効果をもたらした。その一方で、操作に不慣れな職員や通知の煩雑さに関する課題も浮き彫りとなり、対応として操作支援や通知設定の工夫が求められる。

〈結語〉

今後は、操作支援や院内システムとの連携強化を図ることで、さらなる業務効率向上が期待される。現場職員の声を丁寧に拾い上げながら、運用方法やサポート体制を柔軟に見直していくことが重要であると考え。

退院後の生活実態から考える院内連携支援

洛和会音羽リハビリテーション病院
医療介護サービスセンター 入退院支援相談室

○飯島大成・岩田宣子

【キーワード】 退院後の生活、院内連携、SSI

〈背景・目的〉

在宅生活を想定したカンファレンスを実施しているなか、退院後の生活が安定せず再入院となるケースがある。当院では令和6年8月より、居宅介護支援事業所を含む在宅介護サービス事業所を新棟に配置し、院内連携を強化している。本研究では、在宅サービス調整の窓口となるケアマネとの連携に焦点を当て、強みを活かした退院支援の質向上を目的とする。

〈方法〉

当院ケアマネへの新規ケース数の集計と、アンケートによる分析を実施。

〈結果〉

令和6年10月～令和7年5月にかけて、当院ケアマネに繋がった新規ケースは29件。ケアマネがサービス利用の有無が未定の段階からカンファレンスに参加することで、患者・家族への具体的な情報提供が可能となり、契約成立時にはケアマネ側にも早期情報取得の利点がある。また、定期的な院内カンファレンスへの参加により、退院後の課題についての情報共有と意見交換が行われ、退院支援の質向上に寄与している。

〈考察〉

院内でケアマネと近い距離で連携することで、早期から患者・家族と関わり、支援方針の明確化が図られている。電子カルテのSSIへの変更により、情報共有の強化も期待されるが、カルテでは読み取れない部分もあるため、顔の見える関係性を重視した連携が今後も重要である。退院後の生活実態の把握が不十分である点は課題であり、継続的な連携による支援の質向上が求められる。

〈結語〉

ケアマネとの相互理解と院内連携の強みを活かすことで、退院支援の質向上に一定の成果が見られた。今後は訪問診療や訪問看護との連携も視野に入れ、より包括的な支援体制の構築を目指したい。

デジタルサイネージ導入がもたらす効果について

洛和会音羽リハビリテーション病院 管理課
○西田亜夢・進藤柚里・東綾乃・西村仁菜・坂口新奈

【キーワード】 改善、情報伝達

〈背景・目的〉

医療機関において、患者や職員への情報共有は重要である。従来は紙媒体での掲示が中心であったが、掲示作業の負担や視認性の低さといった課題があった。当院では、これらの課題解決及び情報伝達の効率化を目的として2024年8月にデジタルサイネージを導入した。設置場所ごとに得られた効果を整理し、その有効性を検討する。

〈方法〉

デジタルサイネージを病院内に計9台（外来待合室、休憩室〔職員向け〕、病院入口等）に設置し各場所に応じたコンテンツを放映した。アンケートを実施し、利用者の反応や運用に伴う業務負担の変化を調査した。

〈結果〉

待合室では、脳トレコンテンツや院内情報の発信が患者の待ち時間対策に活用され、画面の大きさによる視認性の向上も見られた。休憩室では、職員受診や院内ルール、二次健診案内等を効率的に周知できた。入口では施設基準の掲示をデジタル化したことで、従来必要であった外部発注や複数人での貼り替え作業が不要となった。掲示物の整理、作業の削減により業務時間の短縮と効率化に繋がった。

〈考察〉

デジタルサイネージの導入により、「情報伝達の効率化」「視認性の向上」「待ち時間対策」「業務負担軽減」といった多面的な効果が得られた。特に作業の省力化は職員への負担軽減に直結し、日々の業務効率化に関わっていると考えられる。今後は情報を充実させ、受け手ニーズを把握してより効果的な情報提供手段として発展させていきたい。

〈結語〉

デジタルサイネージの導入は、患者サービスの向上と職員の業務効率化の双方に有効的な取り組みである。

セット項目活用による業務効率化

洛和会音羽記念病院 ドクターエイド課
○長山風紗・長崎美幸・北村和美・川島千明・杉村智美・藤原茉衣・北川奈己

【キーワード】 医師事務作業補助、業務効率化、業務改善

〈背景・目的〉

当院における医師事務作業補助者（以下DA）の業務内容は、入退院オーダー、検査オーダー、入院・外来・中間サマリー記載、外来定期処方補助、文書作成補助、NCD登録、病棟回診など多岐に渡る。

特に入院オーダーおよび検査オーダーは毎日発生する業務であり、作業優先度・私有率が高く、DA課員全員が均一的に入力出来る必要があった。

〈方法〉

入院患者の受け入れに際しては、診療の質と業務効率の両立が求められる。

それを実現するために電子カルテ上での“セット項目登録”を活用し、入院時に必要不可欠な一連の業務を体系的に整理・登録した。

これによりオーダー時には登録済みのセットを展開し、必要に応じて加筆・修正するだけで対応可能となり、業務の標準化と効率化が大きく前進した。

〈結果〉

セット項目の活用により入力ミス・漏れの減少、入力時間の大幅な短縮に繋がった。

実務年数にかかわらず課員全員が一定レベルで業務遂行可能となった。

〈考察〉

あらかじめセット項目を作成しておくことで急な当日入院にも対応可能となり、その他業務への影響が減少したと考えられる。

また、セット項目の定期的な見直しや現場のフィードバックを反映した柔軟な運用を行うことでより効果を高めるものと考ええる。

〈結語〉

6月1日より洛和会全体で施行された新電子カルテへの移行後、これまで使用していた電子カルテとは全く異なる操作手順や画面に早急に慣れることが目下の課題となっている。課員ひとりひとりに求められる業務は多くあるが、個人の更なるスキルアップを目指しながら医師の負担軽減へ繋げたい。

復点に繋がる再審査請求 ～減点内容の分析からわたしたちが得たこと～

洛和会音羽記念病院 管理課
○野村朋香・岸直毅・小西聡子

【キーワード】再審査請求、減点、診療報酬請求、管理課

〈背景・目的〉

音羽記念病院における診療報酬の減点は減点率令和3年度:0.17%、令和6年度:0.30%へ増加となった。診療内容に大きく変更はなかったため、審査傾向が変更となった可能性が考えられた。そこで、再審査請求を通して審査側の反応を読み取ることで複点率の向上を図ることとした。

〈方法〉

レセプトの紙面上では判断が難しい診療内容について、診療録を確認し、該当するエピソードを抽出のうえ、査定に対する必要性を審査側へ説明し再審査請求を行った。

その際には、審査傾向および過去の復点実績を踏まえたうえで、医師と連携し請求の正当性をより明確に示すよう努めた。

〈結果〉

減点の審査傾向や再審査請求の知識が向上したことで、効率よく再審査請求を行うことができた。それに伴い、再審査請求数は令和3年度15件であったが、現在は40件へ増加し復点に繋がるよう実施した。再審査請求に関する分析、請求数増加の結果、一部の事案では復点が認められた。復点率としては大きな差異はなかったが、件数増加により復点金額は増加に繋がったと考えられる。

〈考察〉

査定内容の分析、復点実績の内容を再度確認することで、着実な復点に繋がると考える。また、過去の審査傾向や事例を改めて確認することで減点率低下にも繋がったと考えられる。課内においては、再審査請求数の増加により再審査請求に対する苦手意識の克服や、医療行為に関する知識および診療報酬請求の知識向上に結びついた。

〈結語〉

今後も復点に繋がるよう、診療内容の医学的正当性を明示した再審査請求を徹底していく。あわせて、未然に減点を防ぐため、査定内容や再審査結果を課内で継続的に情報共有・分析し、診療報酬請求の質の向上にも努めていく。

Microsoft Formsを活用した 設備点検システム導入とその成果

ファシリテイケア
○廣瀬拓海

【キーワード】Microsoft Forms、設備点検、DX化、業務効率化

〈背景・目的〉

従来の点検業務は記入用紙を印刷し実施しており、集計後にデータへの入力を行っているが、記入漏れや管理、業務効率に問題があった。

上記を改善すべくまた漏れによる再度の点検実施などの非効率的になりうる可能性を無くすべく現在洛和会全体で使用しているoffice365にてMicrosoft Formsを活用し点検表をデータ化し業務及び課内のDX化を図る目的とした。

〈方法〉

iPad、iPhoneでMicrosoft Formsを使用し建物毎に入力フォームを作成。

データ入力、写真添付にて入力ミスを無くした。

また前回データとの比較を即時確認できるようにした。

〈結果〉

デジタル化によりペーパーレスが行えた。

点検記録の入力ミスや紙からデータへの再入力の時間が短縮された。

またデジタルで運用をする事によりDX化が進む中の昨今に対応出来る基本知識を付ける事が出来てきた。

〈考察〉

時間の短縮及び精度の向上を図りITへの意識が向上した。

データ入力による一括管理になる為、即時の共有が可能となった。

また入力ミスによる手戻りも減少した。

以前は点検用紙でデータ記入を行い事務所で再度データ入力を行っていた。

少しでも時間の短縮と無駄な紙の使用を減らす為の実施。

〈結語〉

業務の効率化を図り今回使用したMicrosoft Formsが有効な手段である事が確認され、今後も積極的に活用し他社からの要望にも柔軟に対応出来る事を目指す。

精神行動障害のある高齢者の在宅支援と 情報共有

居宅介護支援事業所洛和ヴィラ南麻布

○荻島裕美

【キーワード】 認知症、在宅介護

〈背景・目的〉

精神行動障害を有する要介護高齢者が在宅生活を継続するには、介護サービスやインフォーマル支援が不可欠である。しかし、それらの支援のみでは対応困難な場面も多く、多職種や家族との連携による支援の工夫が求められる。本事例を通じて、在宅支援における情報共有の重要性と、介護支援専門員の役割を再確認することを目的とした。

〈方法〉

精神行動障害の強い利用者A様を中心に、事業所内の認知症利用者の支援事例を振り返り、実践された情報共有の実際や支援の工夫について検証を行った。

〈結果〉

関係者間での継続的な情報共有と、利用者の行動特性を踏まえた支援内容の調整を重ねることで、本人の在宅生活の継続が可能となった。また、情報の共有を通じて、家族も利用者の特性を理解し、支援の工夫ができるようになった。特に、デジタルツールの活用が、見守りや迅速な連絡に効果的であり、家族の安心感や支援の質向上にもつながった。

〈考察〉

精神行動障害を持つ高齢者への支援には、定型的な対応では限界があり、より頻度の高い情報共有と、利用者の状態や状況に応じた柔軟な対応が必要であることが明らかとなった。

〈結語〉

本事例を通じて、介護支援専門員が主体的に情報収集・集約・共有を行うことで、多職種が連携し、日常の気づきをケアに生かし、利用者の在宅生活継続が可能となることが示され、今後の支援の気づきとなった。

精神疾患を持つ利用者との関わりについて

居宅介護支援事業所北花山

○久保茜

【キーワード】 精神疾患、在宅介護、多職種協働

〈背景・目的〉

精神疾患を持つご利用者と自閉症の次男の対応に苦慮することが多くなっている。ケアマネジャーも精神的な訴えに気持ちが引きずられることがあった。今回の研究を通して日々の関わりや、次男の支援者との連携・協働の在り方、適切な距離の取り方を見直したいと考えた。

〈方法〉

これまでの本人に対する関わり方の見直しと、本人だけではなく、本人の息子に対応している支援者との関わりについて再度確認。また次男と本人の関係や本人の次男への想いについても再アセスメントを実施した。

〈結果〉

本人がなぜ息子に対して強い思いを持っているのかを理解できたことで、本人に対する対応も少し余裕を持てるようになった。次男の支援者からも話を聞くことで家庭として支援する視点を持てた。

〈考察〉

対応に苦慮すると感じるが多くなっていたが、前任の担当ケアマネジャーが対応しているときに比べて本人の状態は落ち着いてきている。ケアマネジャーが次男の支援者と連絡を取り、現状の聞き取りを行い情報をまとめてから本人に伝えるようになってから、本人が冷静な状態で情報を受け取ることができるようになった。次男の現状を共有できる人がいる、という安心感を持てるようになった為だと考える。

〈結語〉

利用者や家族の背景を深く知ることで訴えを理解することができ、本人にとって安心できる支援を実施することができるようになってきている。

文京区 車いすステーション事業

高齢者あんしん相談センター大塚

○吉原喜久雄

【キーワード】 車いすステーション事業、地域ケア会議、短期貸出、外出支援資源、見守り力向上、地域包括支援センターの役割

〈背景・目的〉

文京区では従来より、高齢者支援における課題として①外出支援の社会資源不足、②地域における見守り力の向上、③ハートフルネットワークの機能強化が指摘されてきた。これらは地域包括支援センターを中心とする地域ケア会議において繰り返し議論され、方策の一つとして「車いすステーション事業」が検討された。

〈方法〉

本事業は、ハートフルネットワーク協力者の参画促進も視野に入れ、区民が必要な際に移動支援用具として車いすを無料で貸し出す仕組みである。貸出期間は原則1週間以内とし、突発的なけがや体調不良、介護サービス導入前のつなぎといったニーズに対応することを目的とする。

〈結果〉

同事業は令和4年度から地域包括支援センターの地域ケア会議により検討が重ねられ、施策化に至り、令和5年10月より圏域2地区でモデルとしてサービスが開始され令和7年4月より区内全域で正式に開始された。

〈考察〉

既存の長期の車いす貸出事業で「必要なときに既に貸出済み」という顕在化していた課題を補完する形で短期利用の仕組みを整備することにより、地域における外出支援資源の不足解消と、見守りネットワーク強化が期待される。

〈結語〉

車いすステーション事業は、突発的なニーズに対応し得る短期支援として有効性が証明されつつあり、長期の車いす貸出事業を補完する施策となった。さらに、ハートフルネットワーク協力機関との連携を通じて地域包括支援体制と見守り力の強化に資する可能性が示唆された。今後は利用実績の検証を踏まえ、運用改善と地域包括ケアシステムへの定着が課題となる。

ホームライフ四ノ宮の働き方改革 ～1.25夜勤～

洛和ホームライフ四ノ宮

○高尾和樹

【キーワード】 働き方改革、業務改善 負担軽減

〈背景・目的〉

当施設での夜勤は勤務時間が長く職員に負担がかかっている。職員が健康で長く働ける職場を目指して、洛和会で進められている週休3日制を取り入れるにあたり、1.25夜勤から取り組むこととなった。1.25夜勤から始めることで週休3日制度へとつながるのか、以前の勤務体制の方が取り組みやすいのか報告を行う。

〈方法〉

新しい勤務体制の為、人員体制、タイムスケジュール、業務内容の組み直しを職員間で検討して行う。職員には作成したタイムスケジュール通りに業務を行い、問題点を毎日記入してもらいリーダー会議で改善し周知することを繰り返した。最終的に介護職員にアンケートを取り内容をまとめ継続かどうかを話し合った。

〈結果〉

アンケートの結果、1.25夜勤を行なったことでプラスの意見も挙がったが、以前の体制を希望する職員が多く、施設の利用者からも反対する意見が挙がったため以前の体制に戻った。

〈考察〉

1.25夜勤を試した結果、夜勤の時間が短縮されたことで身体への負担は軽減されたが、日中の業務量が増加し負担が大きくなった。また、夜勤明けが無くなり公休扱いになったことへの不満も挙がった。結果的には以前の体制に戻ったが業務内容の改善に繋がる事が出来た。

〈結語〉

1.25夜勤を試したことにより、業務上の問題点を見直すきっかけとなり、以前の体勢に戻したが、得られるものは大きかったと思われる。アンケートでは週休3日と合わせて試してみてもは？という意見もあり、洛和会の働き方改革を基に人員の確保、業務改善を行うことで今後取り入れることができ、新たな選択の一つとなるかもしれない。

看護小規模多機能型居宅介護の強みを生かした一例 ～看取りケアにおける多職種連携と家族支援について～

洛和看護小規模多機能サービス壬生

○島田真晴

【キーワード】 看護小規模多機能型居宅介護, 看取りケア, 多職種連携, 在宅介護, 家族支援

〈背景・目的〉

昨年度, 当事業所ではさまざまな形で複数の利用者の看取りを行った. その中で良い看取りだったと実感した事例を振り返り, 多職種連携を看護小規模多機能型居宅介護(以下, 看多機)における今後のケア(看取りケアを含む)に活かすことを目的とする.

〈方法〉

A氏のケア記録と職員への聞き取り調査を実施した内容から, 看取り期の関わりにおける多職種連携と家族支援について, 考察する.

〈結果〉

送迎時や訪問時, 電話連絡による家族との頻回な情報共有と意思確認, 対面での多職種連携や臨機応変なスケジュール変更ができたことで, 家族の負担を考慮しながらも, 本人の住み慣れた自宅で家族の協力を得て, 望むかたちの看取りができた.

〈考察〉

看取り期には医療依存度が高くなるため介護士の関わる頻度が減る傾向にあったが, A氏の事例では介護士も訪問に行くことで看取りケアに関わっている意識が生まれた. それにより, 積極的な情報共有ができたと考えられる. 家族との良好なコミュニケーションにより, 家族の意思決定の支援や対面での多職種連携, 臨機応変なスケジュール調整が可能となった. 以上のことから, 多職種との連携がスムーズに図れるという看多機の特性を生かした看取りケアができたと考える.

〈結語〉

よりよい看取りケアには多職種連携は不可欠であり, 普段から連携を意識して介護をおこなうことが大切であると再認識した. また, 望むかたちで最期を迎えてもらうためには, 多職種連携だけではなく家族との信頼関係も必要不可欠である. 今後も看多機の特性を生かして利用者や家族との信頼関係を構築し, 密な多職種連携に取り組んでいきたい.

認知症ケアにおける家族様への 負担軽減をどう向き合うか

洛和ヘルパーステーション音羽

○太良京子・井上智子・藤田献・岩田寛子・岡崎正子

【キーワード】 認知症

〈背景・目的〉

75歳、要介護4の女性。陳旧性脳梗塞、廃用症候群、アルツハイマー型認知症のため発語は少なく、理解力も乏しい。夫と集合住宅で二人暮らし。隣にキーパーソンの長男家族が居住し、介護の協力あり。本人の介護拒否が強いことから、夫が介護うつになり、負担軽減と今後の支援体制を作る為に定期巡回の利用となった。

〈方法〉

朝、夕の1日2回、排泄介助を中心に行った。その際に、本人からの拒否が強く、暴力や暴言が出るので、夫が手を握ったりしてなだめ、支援を行った。

〈結果〉

度重なる激しい拒否で、夫が「これ以上は何もしないで」「ヘルパーに申し訳ない」と言われるようになった。「私たちは大丈夫だから」と丁寧に伝え、拒否をしながらでも協力動作があることを伝え続けた。夫が介護支援に慣れてこれ、ヘルパーに手伝って欲しいことを伝えて下さるようになり、夫の負担軽減に繋がった。

〈考察〉

ヘルパーの支援に慣れて来られると、更衣介助や全身清拭、シーツ交換を一緒にしてほしいなど、ご希望を伝えて下さるようになった。息子様から訪問時間の相談があり、変更するなど、臨機応変に対応し、夫と会話することで、一人で抱え込まれないように日々の介護負担の軽減に努める事が出来た。

〈結語〉

定期巡回を利用していただくことで、ご利用者に合わせて適宜、訪問回数を見直し、支援内容の追加や短時間訪問が可能である。在宅介護での排泄、食事、服薬、安否確認など、日々の介護での不安なことをサポートし、ご自宅で過ごして頂けるよう支援していきたい。

「やってみたい」という気持ちに寄り添い、 「かたち」にしていく

障がい者就労支援事業所 らくわ

○田中久臣

【キーワード】 障がい者の就労支援、就労継続支援B型、QOL向上、余暇活動の支援、創作的活動

〈背景・目的〉

当事業所は障がい者の就労支援を行う場であるが、QOLを上げるために余暇活動の支援にも力を入れている。余暇活動を通して心身のリフレッシュや社会とのつながりを実感することで就労意欲を高めていくことを目的としている。本人が日常生活を送るグループホームには日中に支援者がいないため、就労継続支援B型の生産活動の合間に余暇活動(創作的活動)に取り組んだ。

〈方法〉

創作的活動は土曜開所日のみ実施する。陶土にこだわりがあるため、支援者と一緒に現地まで買い付けに行ったり、作業に専念できるように専用のスペースを設けたり、活動後に必要な物品がある場合はグループホームを通じて保護者から支援してもらうなど、本人の思いを形にしていた。

〈結果〉

活動開始から現在まで陶土を焼く環境が整っていないため本人の満足度は活動開始前と比べると低下していると感じるが、作品を作りたいという意欲は今も変わらず持ち続けている。

〈考察〉

完成品を展示するなど「形に残る」経験は本人にとって励みになる。また一緒に作品を見て「いい形だね」「面白い模様になったね」とポジティブなフィードバックも大切である。

本人の満足度をより向上させるために陶土が焼ける環境を整えられるよう関係者間で連携を図る必要がある。

〈結語〉

障がい者の気持ちに寄り添うには、「やりたい気持ち」を尊重しつつ、達成感のある体験に繋げることが大切である。「やってみたい」という思いを受け止め、それを形にすることがQOL向上に繋がると考える。

開設から現在までの、 看取り対応の職員の意識調査

洛和ホームライフ室町六角

○八木海音

【キーワード】 今後 増加していく看取り対応への思い…

〈背景・目的〉

令和2年に初めて看取り介護を経験して以降、現在9名の看取り介護を実施。そのなかで介護・看護職員の意識及び思いもさまざまである。今回、看取りに対する意識調査を通じて得た学びや課題を、今後チームでの看取りケアに活かしていきたい。

〈方法〉

看護・介護職・相談員・ケアマネへのアンケートを実施。

〈結果〉

アンケートの回収率は50%。看取り介護に関する調査で全職員が「家族とのコミュニケーション」に困難と感じ、「本人の意思尊重」が重要と回答。介護職の80%は「教育とメンタルサポート」の必要性も指摘した。

〈考察〉

調査により、全職員ともに利用者家族とのコミュニケーションに不安を抱えていることが判明した。

看取り時は家族の感情が不安定になりやすく、職員も家族対応に強いプレッシャーを受けていると推察される。そのため、介護技術だけでなく感情面や心理的サポートの力も必要になる。また家族対応はマニュアル化が難しく、職員の経験や性格に左右されやすい点も課題である。

〈結語〉

看取り介護における課題は、身体的なケアのみならず、利用者家族への精神的サポートにも及ぶことが本調査から明らかになった。特に接遇に不安を抱える職員が多いことから現場での実践に即した研修の必要性が高まっていると考えられる。今後は職員が安心して看取り介護に向き合えるよう継続的な支援と心理的支援の充実が求められる。

「ピークタイムの多職種連携」

洛和デイセンター音羽のさと
○外山佳子

【キーワード】「ピークタイム」

〈背景・目的〉

デイサービスでは、限られた時間の中で多岐にわたるサービスの提供がある。

その中でも、入浴、昼食前が忙しく感じる時間帯である。

当事業所の特色として、「特殊浴槽」を備えている。比較的介護度の高い利用者が特殊浴槽を利用されている。それに伴い、入浴、食事においてマンパワーが必要である。

日々のサービス提供する中で、日常のケア・業務に対する時間毎の人員不足が課題となった。そこで、時間毎の人員不足を解消するために、原因・内容を明確化し、利用者サービスに対する新たな多職種連携を図る。

〈方法〉

- ①ピークタイムとその間の業務内容の把握
・忙しく感じる時間＝人員不足と捉え、ピークタイムを表に記入し統計をとり、一覧表にする。
- ②各職種の業務の把握
- ③各職種業務の時間的優先順位の把握
- ④共有した情報をもとに実践

〈結果〉

日頃感じていた時間毎のケア・業務に対する人員不足をわずかながら解消することが出来た。

〈考察〉

職種ごとのタイムスケジュールを明確化することで、優先度の高い業務は何かあるかを認識することができた。多職種とコミュニケーションを通して情報共有や調整していく事が重要であると考えた。

〈結語〉

各職種がより充実した質の高いサービス提供へと繋げる為に、業務の優先順位を理解して行動することで、利用者のニーズに応じたケアに繋げていく。効果的なタイムマネジメントは、個別ケアの質を向上させ、スタッフの働きやすさを向上させるのに欠かせない。ピークタイムにおける連携として、一番大切なことはコミュニケーションである。チームとして話し合いと調整を繰り返し、真の連携に向かっていく道筋となるよう取り組んでいきたい。

〈参考・引用文献〉

兵庫県姫路市の介護なら社会福祉法人 太鷲会＞介護現場でのタイムマネジメント術:効率的な一日をつくるためのヒント

家族の葛藤に対しての ケアマネジャーとしての支援とは

洛和ヴィラ桃山居宅介護支援事業所
○石岡輝子

【キーワード】パーキンソン病、家族支援、今後の方向性、在宅生活、施設入所

〈背景・目的〉

A氏、80代男性、要介護3、パーキンソン病を患うA氏の今後について。

本人の心身状態に変動が大きく、家族の意見も二転三転し支援方針が定まらず苦慮していた。本人や家族の思い、ケアマネジャーとして必要な支援を検証する必要があると考えた。

〈方法〉

これまでの経過をA氏の心身状態、家族の思いや葛藤、サービス事業所の意見、ケアマネジャーの支援に区分して整理し、支援の方向性について改めて検証した。

〈結果〉

家族は先の見えない不安と戦い、施設入所をすることは本人が可哀想。自分が頑張ったら家で最後まで見ていけるのではないか?という気持ちと日々葛藤している状況が見えてきた。家族、サービス事業所と密に連携を図り、状態把握に努め、ケアマネジャーとして必要な支援に気づくことができた。介護保険負担割合が3割でありサービス導入に関して消極的であったが、サービス事業所から得た情報やアセスメントの結果をもとに、本人、家族に必要と説明することで徐々に必要なサービスの導入を進めることができた。

〈考察〉

A氏が徐々に身体面、精神面が低下していく中で、夫婦での生活を継続できるように、ケアマネジャーとして、日々状況を見極めながら寄り添い、また迅速、適切に提供することが重要だと考えた。

〈結語〉

ケアマネジャーとして関わる中で、本人の思いはもちろん家族の大切にしている思いもしっかりと見極め支援していくことが重要と再認識した。このことを今後の支援に繋げていきたい。

発見 できること！ ～元気になる訪問介護へ～

洛和ヘルパーステーション醍醐駅前
○鈴木真哉

【キーワード】 自立支援、見守りの援助、サービスの質の向上、アセスメント

〈背景・目的〉

本年度に入り、当事業所では利用者の入院が相次いだ。在宅復帰困難で終了となったケースもあり、利用者の確保が喫緊の課題となっている。自立支援を主軸としてサービスの質の向上を行い、新規顧客の獲得につなげる方法を模索している。取り組みは現在進行中である。その経過を報告する。

〈方法〉

『利用すると元気なる』訪問介護事業所となり、顧客から選ばれるための武器とする。

利用者の自立支援に主眼を置き、利用者のウオンツ(欲求)ではなくニーズ(必要)に着目してアセスメントを行う。例えば「掃除をしてほしい」という欲求は「清潔な環境で生活する」という必要からきている。利用者ができることがあるにも関わらず、ヘルパーがすべてを行う、お世話型の介護になっていないか利用者ごとに見直しを行い、ヘルパーと共同実践できることがないか検討を行う。今まで生活援助のみ行っていた利用者においては、見守りの援助も含めた身体介護の提案を行い、具体的な目標に向かって援助できるようアセスメントを行う。

〈結果〉

提案によって、一部の利用者は介護計画の見直しが行われ、ヘルパーとの共同実践によって自信が付き、自立するケースもあった。ただし、提案を受け入れられない利用者も少なからずみられた。

〈考察〉

共同実践を受け入れられない理由としては、利用区分が変わることによって負担額が上がることや、そもそもヘルパー利用をいわゆるお手伝いさんとして希望している場合があった。共同実践におけるメリットを顧客に伝えられるようになる必要性を感じた。

〈結語〉

自立支援を主軸とした援助は利用者のQOLの向上のみならず、ヘルパーのやりがいにも直結する。事業所全体で理解を深め、健やかな在宅生活を支えられるように実績を重ねていきたい。

自立支援の取り組み

洛和デイセンターウラノス
○藤田恵美

【キーワード】 デイケア・パワーリハビリ

〈パワーリハビリテーションの定義〉

マシントレーニングを軽負荷・高頻度で反復運動を行い、疾患や加齢で使用しなくなった全身筋肉を再活動化することで、動かしやすい体(動作性)と心理的活動性(意欲)を回復させるリハビリテーションである。

〈背景・目的〉

介護職のみで行えて再現性が高いケア手法としてパワーリハビリテーションの導入が令和6年1月から開始。全身の使用していない筋肉を低負荷で満遍なく動かしていくことで廃用を予防するもしくは廃用から脱却する。

〈方法〉

パワーリハビリのマシントレーニング6機種・Pウォーク歩行の実施。マシン毎に、休息・給水を行い、マシン使用は1つのマシンを10～30回で、「楽である」と感じる負荷で実施。利用者様にチャレンジシートの記入を行って頂き、利用者様の目標を明確にした。

〈結果〉

低負荷でパワーリハビリテーションやPウォークに取り組んで頂く事で、ADLの維持・向上に繋がった。また、本人様の目標達成に向けて他職種と連携を図り、個別的なリハビリテーションの実施を行うことで目標を達成することができた。

〈考察〉

・筋トレをしなくても、リハビリを軽い負荷で取り組むことで、ADLが上がる事が分かった。
・リハビリに取り組む事で、ADLは上がらないも、目標達成は出来る事が分かった。

〈結語〉

利用者様にチャレンジシートを記入して頂く事で、利用者様の目標が明確にできるようになった。

〈参考・引用文献〉

日本自立支援介護・パワーリハ学会HP

退院後の生活改善を見据えた入院時の連携 ～医療機関との連携にて、生活を支える～

洛和会医療介護サービスセンター丸太町店

○柏原真理子

【キーワード】 入院時連携 多職種連携

〈背景・目的〉

80代男性、身寄りは高齢の姉一人。掃除が滞ったアパート1室でクーラーをつけず座椅子で寝る生活をしていた。脱水、尿路感染にて入院後、病院との連携・各介護サービスの支援で環境を整え、在宅復帰できた事例。

〈方法〉

入院連携時、悪環境で生活、通院・服薬・食事摂取も困難であったこと、要支援からの区分変更申請中で結果が出るまでは十分なサービス利用が出来ないこと等を病院へ伝達した。MSWが中心となり退院にむけてカンファレンス開催、退院前と退院後に必要な事項を病院関係者と在宅側支援者、本人とが一緒に確認し、共同で退院準備を進めた。

〈結果〉

一時外出を調整、自費ヘルパーにて自宅を片付け、必要品を購入、特殊寝台等を搬入し環境を整えた。訪問診療・配薬・訪問看護を退院後すぐ開始することで、体調管理ができるようになり安定して過ごせるようになる。

〈考察〉

入院時に在宅生活の課題を伝え共有することで、入院中から在宅復帰を見据えた関わりを持ってもらうことができ、家族の協力を得られない独居であっても退院前に自宅環境を整えることができた。課題を一つでも減らし退院することで生活がスムーズに再開でき体調悪化や再入院のリスクを減らすことができることを再認識した。

〈結語〉

入院連携時、ケアマネジャーとして把握している生活の課題を明確に病院へ伝えるようにし、可能な限り顔の見える関係を築きつつ、退院後の生活がスムーズに再開できるよう支援していきたい。反省点として限られた時間での片付けとなり、退院後、「物が無くなった」という苦情もあった為、今後の課題として対応していきたい。

人に寄り添うケアの形 ～迷わずに、安心して生きる場所へ～

洛和ホームライフみささぎ

○伊藤れもん

【キーワード】 認知症、認知症ケア

〈背景・目的〉

97歳、女性、要介護2。入居された当初は不安からか夜間に徘徊、物忘れによる探し物等、不穏行動が絶えなかった。現在、認知症により記憶や判断力が低下してもその人らしさを尊重する「パーソンセンタードケア」の重要性が注目されている。A氏へのより質の高いケアの実現に資することを目指し、今回取り組んだ内容と変化について報告する。

〈方法〉

人間中心ケアの視点に基づき、現場職員と情報を共有し合い、家族と連携しながらA氏のBPSDやQOLの変化について検討した。A氏の日常生活において意味のある持ち物、筆談器を利用したコミュニケーション手段、対応方法の統一や医療との連携等を実施した。また、対応による職員のストレス状態やメンタルヘルスにも着目した。

〈結果〉

パーソンセンタードケアの導入により、A氏の安心感やBPSDの軽減が認められた。また、チームケアにおける情報共有の充実や、家族との連携体制も効果的であった。さらに、他利用者との交流もA氏の不安軽減につながっている事が認められた。一方、時間的制約や人員不足による精神的負担が課題として浮かび上がった。

〈考察〉

パーソンセンタードケアは認知症利用者のQOL向上に寄与することが明らかになった。特に、筆談器の使用は、A氏と職員間のコミュニケーションに大きな影響があった。コミュニケーション手段が増える事は、個別性を尊重したケアの実現に直結する大きな要素になると考えられる。継続的に取り組むには、現場全体での対応の統一や現場職員の連携が必要不可欠である。

〈結語〉

パーソンセンタードケアは、利用者の尊厳とQOLを守るために不可欠である。現場では課題に直面しながらも、チームでの連携や家族との協力、職員自身の心身の健康維持がより良いケアの実現に必要なものである。

〈参考・引用文献〉

厚生労働省「認知症ケア法－認知症の理解」:

<https://www.mhlw.go.jp/content/11800000/000701055.pdf>

(2025年8月5日閲覧)

ちょっと用事があるので帰らせていただきます ～在宅でその方らしく生きるための支援～

洛和デイセンター南麻布

○坪川歩野加・長谷川瑛子・狩野貴之・溝田大和・川田邦典・清水雅人・佐藤寿美玲・石田萌衣子・砂田真紀・成田英三郎・篠田あい・シャリファ アメリア スチャヌアリ ワヒディン

【キーワード】 離設、在宅生活、その方らしさ、余暇活動

〈背景・目的〉

令和7年4月の利用開始から3回離設歴があるA氏の事例を基に、通所介護利用を通じ、本人に合った余暇活動の充実と生活リズムの確立が在宅生活に与える効果について検討し、他利用者にも生かしていく。

〈方法〉

24時間生活変化シートを用いて、毎日の心身状態・行動・表情・発言を記録する。また、BONXを活用し、職員間でA氏のその日の服装、場面ごとの行動・表情等を情報共有する。さらに、A氏の嗜好や現役時代の趣味を、連絡帳を通じて家族とも共有し、歌唱、将棋、麻雀等、好みの活動を積極的に取り入れた。

〈結果〉

A氏に合った余暇活動を導入する事で、「ちょっと帰らせていただきます」と離設しようとする事が減った。また、他利用者との交流が増え、笑顔や会話も増え、在宅でも散歩やテニス、旧友との飲食といった活動にも広がった。

〈考察〉

認知症のある利用者にとって、時間的・活動的な空白は不安や帰宅願望に繋がりがやういことが改めて分かった。また、効果は、A氏だけでなく、職員の意識変化にも繋がりが、全利用者への意識の高まりに繋がった。

〈結語〉

通所介護において、その方らしさを尊重した個別の活動支援と日常の習慣化が、認知症高齢者の周辺症状の軽減、社会性の回復、在宅生活の充実に繋がる事が明らかとなった。さらに、利用者のみならず、職員全体の意識向上にも繋がった。今後も利用者一人ひとりを尊重しながら、在宅で安心して暮らし続けられる支援を継続していきたい。

〈参考・引用文献〉

認知症介護情報ネットワーク <https://dcnet.gr.jp/>（閲覧日:2025年8月23日）

グループホームで安心できる夫婦生活

洛和グループホーム瀬田

○西村恒大・奥田康裕・大江悦子・内山朋征・松井裕哉・上木真美・中村千夏

【キーワード】 認知症

〈背景・目的〉

今年5月に入居契約を結ばれるが、ご本人達の拒否が強く家族様に説明され渋々入居される。入居後は自宅に戻りたい、家やお金などの心配事を訴えられる日が続いた。入居し間もなく、なれない場所で、どのようにかわればご夫婦が安心して暮らせるか、職員やご家族とともに考えた。

〈方法〉

環境整備として二部屋あるうち、一部屋を職員や家族様とゆっくり話しができる場所、もう一部屋にベッドを二つ入れ、常にご夫婦と一緒に過ごせる環境を作る。帰りたい気持ちや心配事の訴えがあった時の職員の言葉がけを曖昧にせず統一する。ご家族の協力を得、職員とともに不安を軽減し、ご夫婦の生活を支えていく

〈結果〉

帰りたい気持ちや心配事の訴えが多かったが環境作りやケアの統一、ご主人には野菜の水やり、奥様には家事を職員とともにを行い、役割を持つ。グループホームで自宅のような馴染みの生活をする事で徐々に訴えなども減り不安が軽減するようになった。今では「死ぬまでここにいたい」等の発言も聞かれるようになった。

〈考察〉

ご夫婦での入居は初めての経験だったが、ご利用者の生活歴やご家族から得た情報からより家に近い環境作りや役割づくり、ご家族など信頼されている方とすぐに話せる環境を作ることで不安を取り除くことができた。今後も一人一人の利用者様に対し職員がチームとして話し合い考え実践することで安心して生活が出来る場所を作ることが大切だと考えさせられた。

〈結語〉

一人一人、価値観や性格は異なる。それぞれのご利用者が安心して過ごせる環境にする為には定期的に見直したり、信頼できる家族様とのパイプ役になり不安のない環境作りを今後も目指していく。

施設生活から在宅生活へ ～多職種連携で在宅復帰を支援する～

洛和ヴァイリオス

○山岡隆太

【キーワード】在宅復帰 自立支援 多職種連携

〈背景・目的〉

当施設は、超強化型の介護老人保健施設として在宅復帰、自立支援の意識を持ちながらケアに努めている。1人の利用者を対象として入所から退所までの支援を振り返り評価していく。

〈方法〉

在宅復帰(独居)の予定である。イリオスでの日々の生活の中でできる事、支援が必要な事を評価しながら在宅でより良い生活ができるように多職種と連携しながら支援をしていく。退所された状況を評価して達成できた点、課題について検討をしていく。

〈結果〉

リハビリ、生活リハビリを行う事でADLの向上はみられた。自身でできる事が増えた事は、良い結果であった。利用中に多職種で連携、意見を出し合って在宅復帰できたケースであると考ええる。

〈考察〉

リハビリと連携をとって歩行の耐久性が上がった段階ですぐに車椅子からシルバーカー歩行に移行した事でADLの向上に繋がったと考える。転倒リスクがあるが日々の生活で歩行する事で全体的なADLの向上に繋がるケースであった。

〈結語〉

最後に今後も在宅復帰に関わる施設として多職種で連携をとりながら個々人に合わせたケアを検討し、在宅復帰に向けて利用者のできる事を増やしていける施設を目指して参ります。

通所リハビリテーションと訪問リハビリテーション の併用により、ADLの改善・活動範囲が拡大し、 介護度の改善に至った症例

洛和デイセンターイリオス

○渋谷建太

【キーワード】通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション、リハビリ会議、多職種連携

〈背景・目的〉

買い物に行きたい、冬は浴槽で温まりたいとの希望があるご利用者様。通所リハビリテーション(以下、通所リハ)と訪問リハビリテーション(以下、訪問リハ)の併用により、ADLの改善・活動範囲が拡大し、介護度の改善に至った症例を経験したので報告する。

〈方法〉

右大腿骨頸部骨折により右人工骨頭置換術を施行された70歳代女性。退院後、通所リハにて機能訓練・動作練習を実施した。利用から3ヶ月後、身体機能は向上したが、入浴動作の獲得・外出の再開に至らなかった為、リハビリ会議で訪問リハの導入を提案した。

〈結果〉

通所リハ開始時:要介護4 FIM 120点 LSA 34点

片足立ち 右1.7秒 左1.0秒 TUG13.5秒 10m歩行11.3秒

通所リハ開始3ヶ月後:FIM 121点 LSA 34点

片足立ち 右13.4秒 左55.0秒 TUG13.0秒 10m歩行10.2秒

身体機能の改善を認めるが、活動範囲の拡大には至らなかった。

訪問リハでの浴槽跨ぎ動作・買い物練習の実施を依頼。

通所リハ開始6ヶ月後:FIM 124点 LSA 71点

片足立ち 右24秒 左60秒 TUG11.4秒 10m歩行9.2秒

身体機能の改善に合わせて、自宅環境での動作練習を実施できたことで、入浴動作は自立し、徒歩10分のスーパーまで1人で買い物に行くことが出来るようになった。

通所リハ開始9ヶ月後:炊事・洗濯・掃除・買い物自身が自身の家庭での役割となり、要介護度は要支援2に改善。訪問リハビリは終了となる。

〈考察〉

リハビリ会議で課題を共有することで、通所リハでは必要性の高い身体機能・動作練習に介入することができた。また、訪問リハで自宅生活に汎化することで、活動範囲を拡大することができたと考えられる。

〈参考・引用文献〉

濱地 望, 山口 寿, 金子 秀雄・他:地域在住高齢者における生活空間と運動機能の関連. 理学療法科学, 2019, 34:485-489

高齢者と栄養 ～私たちの学びとケアマネジメント～

洛和会医療介護サービスセンター西京桂店
○赤島美佐恵・藤田まゆみ・河崎友美・亀原郁衣

【キーワード】食支援・MNA-SF・認知症・独居・チーム支援

〈方法〉

要介護者111名を対象に栄養スクリーニング(MNA-SF)を用いて栄養評価を実施。スクリーニング値を「良好」「リスクあり」「低栄養」の3群に分類し、生活状況・疾患・支援内容との関連を分析した。

〈結果〉

このツールは、ケアマネジャーでも利用可能であり、高齢者の低栄養リスクを早期に発見できる。スクリーニング値から栄養改善に向けて支援をもって解決していくことが大切である。

〈考察〉

- ・リスクに気づいても、精神的・社会的・身体的要因から支援につながりにくい。この方々に早期から介入し、食生活をブラッシュアップすることで、QOLの低下予防に役立てられる
- ・これらツールを使って得られた結果から、低栄養状態に陥りやすい方には一定の特徴があることがわかった。ケアマネジャーはこれら特徴を持つ方について、低栄養状態に陥っていないか注意深く見守る必要がある

〈結語〉

利用者が低栄養状態になるという気づきを得るためには、ケアマネジャー自身も改善するための方法について現在よりも深い知識を持つことが重要である。様々な要因から支援につなげられないこともあるが、低栄養が身体にもたらす影響や栄養状態を把握することで利用者に適した支援ができる。そのためにも、栄養に関する知識の豊富な支援チームを形成し、ケアマネジャーがリーダーシップをとって、支援を進めていくことが求められる。

法人内の連携方法における 業務効率化の可能性について ～居宅介護支援事業所における電話割合～

居宅介護支援事業所山科
○楠本綾

【キーワード】業務改善

〈背景・目的〉

ケアマネジャーの業務において相談・調整業務が占める割合が高い。Teams導入後も依然として電話連絡は多く、業務改善の可能性があるのではないかと考えた。本研究の目的は電話の実態を把握することで業務の改善に繋げることである。

〈方法〉

当事業所のケアマネジャー7人を対象に調査を実施。7月初旬・中旬・下旬のそれぞれ2日ずつ、1か月間で計6日調査。1日の電話回数をカウントし1日の電話を受信・発信・取り次ぎの3つに分類、それぞれ電話の相手・内容・所要時間・対応方法を記録し集計した。

〈結果〉

1日の電話件数平均は91件、うち受信した電話は全体の53%、発信した電話は47%であった。
受信した電話のうち利用者・家族が21%、事業所・行政機関が79%であった。
事業所のうち法人内部事業所は41%で外部事業所は59%であった。

〈考察〉

受信した電話のうち法人内部事業所からのものが41%と多くを占めていた。
Teams導入より1年以上が経過しているが、現在も電話での連絡件数が多くなっている。緊急性の高い連絡や文面では伝わりにくい相談など、電話連絡が必要となる内容もあるが、さらなる業務効率化のために法人全体として連絡手段のあり方を考える必要がある。

〈結語〉

1日の電話件数のうち内部事業所からの割合が多くを占めており、Teamsへ連絡手段を移行することで電話件数削減が期待できる。

「グループホームにおける日常的な医療連携について」

洛和グループホーム太秦

○松本日菜子・野原ひろみ・山下美穂・小俣啓祐・元木陽子・
福永真由美・小川和紀

【キーワード】 医療連携、認知症、業務改善

〈背景・目的〉

週1回の訪問看護師とグループホーム職員の関係性が希薄になっている。

緊急性のない異変などを訪問看護師に連携する際に、FAXを使用してteamsの活用が進んでいなかった。効率的で安定的な医療連携を目指す。

〈方法〉

Teamsでの医療連携の工夫点などを課内で聞き取りする。訪問看護の担当者に聞き取りを行い、医療連携プロジェクトのアンケート結果も活用し、グループホームとの連携方法を検討し、実践する。

〈結果〉

現時点では、目標に対して課内の聞き取りにより、太秦で活かせる方法を検討している。しかし、もっと安定した医療連携を目指して、効率的なteamsの活用方法や訪問看護師との関係性づくりを行っていききたい。

〈考察〉

- ・デジタル化への苦手意識
- ・担当看護師がいない為、連携先の顔が見えない不安
- ・医療連携のフローチャートの活用方法（職員個人での緊急性の有無の判断など）

〈結語〉

現時点では、取り組んでいる最中である。また、はっきりと解決するような問題ではなく、変わっていく状況のなかで、その場に適した方法をチームで検討していかなければならず、こまめな見直しが必要である。

経口摂取終了から ご逝去までの関わりを振り返って

洛和グループホーム西院

○森祐一郎・荒川門久・高島明子・高橋満子・奥村愛子・脇裕子・
村田妃葉

【キーワード】 看取り

〈背景・目的〉

4年間看取り対応を続けたA氏。一時は痰の窒息で入院しながらも、退院後は吸引の必要もなく経口摂取を続けていたが、急激に嚥下状態が悪化。誤嚥、窒息のリスクが高まり、医療職の判断で経口摂取終了となった。約3週間のご逝去までの関わり、それに伴う職員の気持ちの変化などを振り返り、今回の看取り対応について検証する。

〈方法〉

A氏が食事を欲しそうに口を開けている姿をみて、「本当に何も提供しなくてよいのか？」と当初はスタッフに困惑がみられた。看護師により改めて勉強会を実施し「終末期の自然な経過」であることを再学習し、職員の困惑も解消された。口渇を防ぐために口腔ケアの回数を増やす、褥瘡や拘縮予防の為にポジショニングを実施する、職員や他利用者と交流する時間を確保し孤独を感じないように努める等、食事ができなくても安楽に過ごせることを心掛け、日々のケアを行った。

〈結果〉

ご本人に苦痛の表情はなくなり、笑顔や笑い声が増え、職員のモチベーションにつながった。栄養が全く摂れていない状態であったが、最期まで褥瘡はじめ皮膚状態の悪化はみられず、拘縮の悪化も予防できた。ご家族から「綺麗な姿で最期を迎えられて、感謝しています」との言葉をいただいた。

〈考察〉

再度勉強会を開催したことで「何も食べられなくてかわいそう」から「日々を安楽にすごしてもらえるように」と職員の意識が変化したのではないかと。その結果、精神面のわだかまり少なく、A氏を送り出すことができたのではないかとと思われる。

〈結語〉

突然のケア方針の転換による職員の困惑は、自然な反応といえる。状態変化後の再学習によって根拠を再確認するとともに、職員の不安を解消していくことも、看取り対応のなかで、大切な過程であることを理解できた。

週休3日制度を導入してみて ～充実したワークライフを目指して～

洛和ヴィラ桃山Ⅲ番館

○木村吉博

【キーワード】 週休3日制・ワークライフバランス

〈背景・目的〉

洛和ヴィラ桃山Ⅲ番館は令和6年4月1日に開設された。2ユニット24床の地域密着型特養である。開設より週休3日制を導入している。慢性的な人員不足の中、職員が感じているメリットやデメリットについてアンケートを実施し、分析した。対象者は常勤職員9名である。

〈方法〉

・常勤職員へのアンケート分析

〈結果〉

デメリットとして、勤務時間が約十時間あるうえ、残業が重なると心身ともに疲労がたまる。夜勤明けが公休となる為、24時間公休が少ない。家族から不満の声があるなど多くの意見が出た。

メリットとしては、夜勤の時間が短い。趣味に費やす時間が増えた。連休が取得しやすいなどの意見があった。

職員は、週休3日制はメリットよりデメリットが多いと感じていることが分かった。

〈考察〉

長時間勤務を続けている中で、残業が発生すると疲れが溜まっていく一方である。また、必然的に夜勤回数が多いほど休みが少ないと感じられる。少ない休みの中で心身のリフレッシュをはかるのは難しいと考える。

また、連休が取りやすく、趣味に多くの時間を費やすことができる職員もいる。

〈結語〉

人員不足が著しいこの業界でも週休3日制を取り入れている事業所はたくさんある。Ⅲ番館は試行錯誤しながらも継続している状態である。人員が揃ってない中で導入する事では、多くのメリットを得る事は難しいと考える。

業務改善や勤務時間の見直し、少しでも負担が軽減し、充実したワークライフが送れるようにしたい。

「利用者の発語を増やし 笑顔を引き出す取り組みについて」

洛和グループホーム壬生

○馬場洋一・稲荷雅都・徳永康子・辻大和・山本樹衣・蒲池由佳子・松本潔美・ノフィ マグフィロー

【キーワード】 発語、失語症、QOL向上

〈背景・目的〉

コロナウイルスがユニット内で出てから如実に認知症が進行する。それに伴い失語症も進行し、様々な意欲の低下が見られるようになった。それでも、仲のいい利用者との時間や役割のある生活が戻ってくると、発語や意欲も多少取り戻すことができていた。今年3月にユニットで風邪が蔓延したことから居室対応をとったが、以降発語が更に減少する。家族の心配もあり、ご本人にまた笑顔と意欲ある生活を過ごしてもらえればと思う。

〈方法〉

暫く出来ていなかった口腔体操を再開し、口を開き、声を出すことを改めて習慣づけてもらう。また以前の様な意欲を取り戻してもらう為、本人が一番意欲を持って行っていた食器洗いなどの家事に参加してもらった。

〈結果〉

ケアを見直し、実施してからそんなに長い期間が経ったわけでもなく、また認知症の進行故の点もあり、顕著な結果が出たわけではない。それでも、会話をしていると言葉少なにただ笑って頷く事が多かったのに、言葉が出にくいながらも何とかそれを探し、思いを伝えようとする意志は段々強くなり、笑顔も増えたと感じられた。

〈考察〉

失語症の進行や意欲の低下は、居室対応で他者との関りが希薄になり、家事の習慣が消失したことから顕著に見られ始めた。口腔体操で口を開き、声をだすことも大事ではあったと思うが、他者との関りと役割を改めて持ち続けたからこそ自己肯定感が上がり、意欲が向上し笑顔や発語が増えていったのだと思う。

〈結語〉

ありきたりではあるものの、他者との関わりと役割を持つ事でQOLが向上し、失語が改善し発語が増え、笑顔を引き出せる結果になった。

未経験からの理想と現実のギャップ

洛和グループホーム山科小山

○日下裕之

【キーワード】 認知症ケア、関係構築、介護技術の向上

〈背景・目的〉

無資格、未経験で入職。以前、自宅での父親の身体介護を行った経験はあったが、配属先で初めて認知症介護を経験し、今まで漠然と考えていた介護との違いにギャップを感じる。利用者との関りがメインであり、傾聴し求められることを行うことが寄り添いだと考えていたが、すべてを行うことは利用者の能力低下や自立の妨げになると知った。利用者の意にそぐわない対応に対しての反応に理不尽さ感じることもあるが、正しい知識を身につけ利用者の有する力の維持、向上が重要であり、適切なケアを提供できるように日々学んでいきたい。

〈方法〉

利用者の話を傾聴し、求めていることを理解した上で安全で質の高いケアを提供できるよう、アシスター制度を通して不明点など先輩職員にその場で質問、指導をして頂きながらチームケアの大切さを学んでいく。

〈結果〉

アセスメントが大切であり、自分だけでは出来ないことが多いからこそチームケアが大切である。介護技術や知識の不足はあるが、専門的知識を身につけるために資格取得を目指し今後も学び続けていく姿勢が大切であると考えている。

〈考察〉

入職前の自身にとって介護は身近なものではなく、「困っている事の手伝いをする」「高齢化社会においてニーズがある」など安易なイメージしかなく、想像と違ったと感じる場面も多い。しかし実際の介護の仕事は人の人生に深く関わるやりがいのある仕事であり、正しい知識と介護技術を身に付けることで、利用者へより良いケアができ、自分自身の成長にもつながると考える。

〈結語〉

無資格、未経験で入職し手探りの中、日々アシスターや先輩職員の方々に教わりながら利用者へのケアを行っている。答えの無い仕事であるからこそ、模索しながら今後も考え学び続けることが大切であると考えている。

嚥下機能が低下していく人への食支援の取り組み ～最後まで食べる事の楽しみを支える～

洛和ヴィラよつば

○千田千鶴

【キーワード】 嚥下機能の低下 食支援

〈背景・目的〉

介護医療院の入所者は要介護度が高く、その大半に嚥下機能の低下がみられる施設である。食事を通して口から食べる事の楽しみを感じて頂くこと、摂取量増加による健康維持、QOLの向上を目指し、多職種や給食委託業者を交えて連携しながら取り組んだ。

〈方法〉

嚥下機能の低下がみられる3名の入所者に、月1回のSTのミールラウンドに合わせて、看護師、介護士、リハビリ、栄養士もミールラウンドを行った。ST評価後、それぞれに合った食事形態、姿勢の調整をしながら食事摂取量、食事にかかる時間、ムセの回数、体重の変化を記録した。

〈結果〉

3名のうち2名がムセの回数が少なくなり、食事がスムーズに摂取できた為、体重の増加がみられた。また、残り1名はムセの回数に変化はないが、食事にかかる時間が少し短縮されるなどの変化があった。

〈考察〉

STを交えて多職種で観察・評価、また給食委託業者と連携することにより、個々に合ったアプローチを実践でき、ムセの減少、食事にかかる時間の短縮、体重の維持や増加など一定の効果があり、新しい気づきとすることができた。

〈結語〉

食べる事の楽しみを支える為、私たちに何ができるのか、できていないのかを考える良い機会となった。入所者に寄り添い、最後まで食べる楽しみを持って頂けるように、多職種で協力しながら今後も取り組んでいきたい。

大山崎わくわくクッキング

洛和グループホーム大山崎

○吉川順子

【キーワード】改善

〈背景・目的〉

チルド食の導入、コロナ禍があり、食事を作る機会が減少してしまった。日常において、グループホームらしい家庭的なメニューを考え、皆で楽しく調理し、以前のように『ワイワイと一緒に食べる機会を持ちたい』という思いから取り組んだ。

〈方法〉

日頃から、ご利用者さまのアセスメントを行い、献立を考え、食材購入し、月に1回、皆で昼食を手作りすることに取り組んだ。

〈結果〉

女性のご利用者さまが多いフロアでもあり、皆さま、昔を思い出し、会話をしながら調理を楽しみ、活気づく様子が見られた。

〈考察〉

ご利用者さまが『できる』ことに目を向け、取り組むことができた。献立から一緒に考え、家庭的な料理の香りがする空間で、昼食を食べることができ、ご利用者さまの満足度が向上したと考える。

〈結語〉

家庭的な雰囲気の中で『やりがい』『ほっとできる空間』『楽しい食事』が提供できるように今後も取り組んでいきたい。

認知症高齢者に対するADL維持の取り組み ～リハビリを通じた生活機能の改善～

洛和グループホーム石山寺

○津田有里奈

【キーワード】リハビリ・多職種連携

〈背景・目的〉

90代女性。認知症があり、日中は寝て過ごす時間が多く、活動性の低下が見られていた。特に排泄動作が困難で、職員は全面介助を要していた。立位保持も不安定でふらつきが見られ、ご家族の「できることを維持したい」という希望もあり、ADLの維持・向上を目的としてリハビリ入院となった。

〈方法〉

ご家族や本人の意向もあり、維持の為リハビリ入院となった。退院後、見守り程度で排泄動作を自身で行えるようになり車いすの自走もスムーズになった。訪問看護の理学療法士（PT）による座位・立位訓練やトイレ動作訓練の実施、職員への対応方法の指導があり、本人の意思を尊重し、できることは見守りと声かけを中心に職員の対応を統一した。GHの職員として声掛けの例は、本人が立ちやすい位置に車いすがあるかの確認・声掛けや、動作が難しそうに際に手すりの位置のアドバイスなどを行い本人が継続して排泄動作を行えるように声掛けを統一して行った。

〈結果〉

退院後、できるようになった排泄動作や車椅子で移動に対して職員が統一したケアを行うことでADLの維持となった。できることが増え、継続できることで本人の全体的な意欲も向上している。本人の「できる力」に応じた継続したケアは結果、介助の負担軽減にもつながった。退院から1年が経過した現在も、日常生活動作の維持が継続できている。

〈考察〉

認知症高齢者であっても、適切な支援とリハビリ、職員の統一したケアを通じてADLの維持・向上が可能である。特に「本人の意思」を尊重すること、多職種間での連携と継続的支援が成果に直結したと考える。

〈結語〉

高齢であっても認知症があっても、「できる力」を引き出す介入は、本人の尊厳の保持や生活の質向上につながる。今後多職種連携により、個々の力を支える支援を継続していくことが重要である。

毎日いきたいと思われるデイを目指して ～稼働向上に向けてのベース作り～

洛和デイセンター北野白梅町

○小川里美

【キーワード】 デイセンター、レクリエーション、運動、振り替え利用、臨時利用

〈背景・目的〉

デイセンター(以下デイ)では一日の利用登録者数に比較して一定数のお休みがあり予定通りの稼働にはなりにくいことがある。安定した稼働を目指すためベース作りの取り組みを報告する。

〈方法〉

①スタッフの意識と行動変容に対しての取り組み:イベントに対する臨時利用の声かけやお休みした際の振り替え利用に対する声かけの強化。

②デイでの質向上のための取り組み:利用者にアンケートを実施し、その中でやってみたい事を分析。アンケート結果から脳トレや運動の意見が多く優先度の高い項目に対しての取り組みを開始した。

〈結果〉

①朝の会や会議でのイベント時の臨時利用、休まれた際の振り替え利用についての促しと声掛け方法とフィードバックを行うことで声掛けの頻度が向上した。

②アンケート結果から脳トレや運動の内容を充実させることで利用者の意欲が向上しデイでの生活を楽しむ姿や声が多くなった。

脳トレの回数を増やし、ファイルを作成することで自主的に取り組む事が出来るようにした。運動では運動機能評価を実施し、個々の運動に対する目的や効果などを理解してもらいやすくなる事で運動意欲の向上がみられた。

臨時利用の促しにも良い返事をもらえることがおおくなり取り組み開始前後での4月-5月と6月-7月を比較すると臨時件数、振替件数ともに増加傾向となった。

〈考察〉

アンケートから利用者の求めるサービスの質向上を図ることで利用者の満足度が向上したと考えられる。利用者の満足度が向上する事で振り替え利用や臨時利用に対する反応に良好な変化がえられた。そのことでスタッフの声掛けの意識も変化し行動変容が起こることで声掛けの頻度も向上した。

〈結語〉

スタッフの声掛けでは声掛け方法とフィードバックを行うことで声掛けの頻度が向上した。また脳トレや運動の内容を充実する事で利用者の満足度の向上が認められ、臨時件数、振替件数ともに増加傾向となった。

〈参考・引用文献〉

山田実:介護・転倒予防における理学療法からみた取り組みP Tジャーナル:第 50巻第4号:363, 2016

心と体を育む「たのしい」「おいしい」食を目指して ～子どもから家庭につなぐ～

守山市立よしみ乳児保育園

○三宅巴美・上田明日香・下山早苗・川勝夢乃・岡本ひとみ

【キーワード】 保育 子ども 食育 保護者支援 連携 絵本

〈背景・目的〉

本園では、育児担当保育を行う中で「食事」は保育の一環として大切にしている。昨年度から「食育」として野菜の栽培・収穫や行事食、絵本にちなんだおやつなど給食担当者と保育者が相談しながら、「たのしい」「おいしい」食を目指して取り組んできている。保護者アンケートなどから保育園での食事について興味・関心が高いが、好き嫌い等の課題については、家庭で取り組むことが難しく、園への期待が大きい。そこで、保育園だからできることを生かしながら、子どもを通して保護者と園が共に子どもの育ちを支えていけるように取り組んでいくことを目指していく。

〈方法〉

- ・野菜の栽培・収穫・体験
- ・絵本にちなんだ給食・おやつと遊び(子どもの様子の写真や展示)
- ・保育参加・給食試食会・個別懇談会
- ・展示食・レシピの配置・もぐもぐだより発送
- ・給食担当者との会話の機会

〈結果〉

・子どもは、保育者と一緒にする野菜のお世話、収穫、遊びを通して食材への関心を持つようになり、そこから食への意欲にもつながっている。

・保護者は、給食試食会や、レシピの配置、給食担当者と直接話す機会などを設けたことで、家庭でも取り組んでみようという声が聞かれている。

・子どもの様子の展示などを通して、親子での会話に繋がり、楽しく食事をする事の大切さを感じてもらえている。

〈考察〉

・保護者にとって子どもの変化や成長が見られることは喜びや安心につながっている。仕事をしながらの子育ては、悩みも多くどうしても園に委ねてしまう傾向にあるが、楽しく取り組む、大人も楽しむことが子どもの笑顔に繋がることを感じてもらえているのではないかと思う。

〈結語〉

・子どもの育ち、「生きる」ことに大きくかわる食事について乳幼児からの「おいしい」「たのしい」体験の大切さを感じている。保護者と共に子どもの育ちに関わる職員でその体験をたくさんできるように努めていきたい。

〈参考・引用文献〉

- ※1 汐見 稔幸(監修):保育所保育指針ハンドブック2017告示版:146、株式会社学研教育みらい、2017
- ※2 島田 ゆか:パムとケロのにちようび:表紙、文溪堂、1994
- ※3 西内ミナミ(作) 堀内誠一(絵):ぐるんぱのようちえん、表紙 10 26-27、株式会社福音館書店、1966
- ※4 小西英子 カレーライス:表紙、福音館書店 2016
- ※5 彦坂 有紀 もりと いずみ スープになりました:表紙、講談社 2017

子どもたちと作りあげていく児童館

京都市深草児童館

○木村果菜

【キーワード】 こども家庭庁、こども基本法、こどもまんなか社会、児童館ガイドライン、放課後児童クラブ運営指針

〈背景・目的〉

子どもがまんなかの社会を実現するために『こども基本法』がある。その中に「全ての子どもは意見を表明する機会が確保されること」という条文がある。児童館でその機会を設け、子どもたちと周囲の大人が一緒に児童館を作りあげていくことを目的とする。

〈方法〉

学童クラブ児童の高学年から、取組への有志を募った。集まった5年生の男子6名に、児童館に新しく置くおもちゃの種類やルールなどを考える役割を与えた。条件として、以下の2点を設けた。①他の学童クラブ児童たちの意見も反映させること②みんなで仲良く安全に遊べるようにすること

〈結果〉

代表児童たちがアンケートを作成し、学童クラブ児童に回答してもらった。結果をもとに職員と協議し、新しく出すおもちゃの種類やルールなどを決めてもらった。決定事項を全体に伝えてもらい、新しいおもちゃで遊べる環境が整った。

〈考察〉

今回の取組により、学童クラブ児童は「自分たちにも意見を表明できる権利がある」ということを実感できたと考えられる。また、表明するだけでなく、意見が実際のルールとして適用される経験も伴った。子どもたちと職員が意見を出し合い、児童館での新たな遊びが設定された。以上のことから、取組の目的は達成されたといえる。

〈結語〉

子どもの意見を表明する機会を設けることは『こどもまんなか社会』の実現につながる。さらに、大人にはない視点や発想を取り入れて事業を展開することも期待できる。今後も、子どもたちと一緒に、より多くの利用者にとって過ごしやすい児童館を作りあげていきたい。

〈参考・引用文献〉

こどもまんなか こども家庭庁

<https://www.cfa.go.jp/>

児童健全育成推進財団

<https://www.jidoukan.or.jp/info/news/b62965ebb97d>

乳幼児期の手指の発達

洛和東桂坂保育園

○金沢あゆみ・赤松佳奈・山本ありさ

【キーワード】 保育、乳幼児期、発達

〈背景・目的〉

手や指は「第2の脳」と言われ、手指を動かすことは子どもの脳の発達に大きく影響を与えとても重要なことである。そこで手指の動き=微細運動に着目し、園生活の中でどのような遊び・玩具・生活習慣が発達を促すのに影響しているのかを考察した。

〈方法〉

各年齢の子どもたちが玩具や道具をどのように使っているのかを観察する。

〈結果〉

乳児は、基本的な動作“つかむ”“にぎる”“つまむ”をたくさん経験できる玩具で遊んでいた。幼児は、年齢が上がるごとに、スプーンやお箸を持ったり、歯ブラシを使ったりと、生活習慣にも深く関わっていた。また、紐を結ぶ、はさみを使う、細かなパーツをはめるなど乳児期よりもさらに高度に手先の動かしながら遊んでいた。

〈考察〉

保育園では玩具で遊ぶことの他に、年齢や発達に応じた粘土遊びや新聞紙遊び、手遊びやじゃんけんなども行っている。その中で5指を使う動きから2指へと指の動きができるようになり、だんだんと自分の思い通りに手指が動かせるようになり、細かい動き=微細運動も可能となってくるのだろうと考えられる。

〈結語〉

普段の遊びの中で楽しみながら指先を使うことで発達が促され、育まれる。指先の発達が必要な動作は、日常生活を送るうえで重要で、自分でできる日常動作が増えると子どもも、「自分でしよう」と意欲的になる。このことから、手指の発達は、子どもの自立の第一歩でもあり、子どもの脳の発達に大きく影響しているのだと考えられる。

からだ作り ～体幹はすべてに繋がっている～

洛和桂川小規模保育園
○富士田彩佳

【キーワード】 からだ作り・体幹

〈背景・目的〉

給食時食べ進めるにつれて姿勢が崩れたり、散歩時にお散歩車の中で立っていられなかったり、手先を使った活動が苦手な子どもが多く見られます。

そのような様子から、「どのようにすれば姿勢が安定し、運動機能の発達につながるのか」と考えた結果、体幹を鍛えることが有効ではないかという結論に至りました。

〈方法〉

遊びの中で体幹を鍛えることを目的に、リズム遊びを積極的に取り入れました。以前から行っていた活動ですが、改めて動きの意味やねらいを職員間で共有するため園内研修を実施し、意識を高めました。その結果、子どもたちにも姿勢や動きのポイントを伝えやすくなり、少しずつ意識して体を動かす姿が見られるようになりました。手先の遊び、ハイハイ、バスタオル電車、斜面遊びなど、体幹を使う活動を意識的に取り入れています。また、食事の際には補助マットや足置きを使用し、安定した姿勢で食事ができるよう配慮しています。

〈結果〉

子どもたちはリズム遊びに意欲的に参加し、保育者の動きや声かけを意識しながら体を動かすようになりました。食事の際も椅子からずり落ちることが減り、補助マットを使いながら少しずつ安定した姿勢を保てるようになってきています。

〈考察〉

発達の基盤となる乳児期の遊びに体幹を鍛える活動を取り入れることで、食事時の姿勢が安定したり、怪我が減ったりする傾向が見られました。ただし、短期間で補助マットが不要になるほど体幹が十分に育つわけではないため、今後も長期的な視点で継続的に見守っていく必要があります。

〈結語〉

これからも、手先や全身を使った遊びを日々の保育に取り入れ、子どもたちが楽しみながら体幹を鍛え、体の使い方を自然に身につけていけるよう支援していきます。短期間で成果が見えるものではありませんが、継続的な取り組みを通して、子どもたち一人ひとりの健やかな成長を温かく見守っていきたいと考えています。

「おじいちゃんおばあちゃんに会いに行く!」 ～幼老交流でつながる心～

洛和イリオス保育園
○細見沙代

【キーワード】 幼老交流、連携

〈背景・目的〉

当園は、2017年8月に開園した0～2歳児までの子どもを預かる保育施設である。

近年、核家族化が進み、子どもと高齢者の交流機会が減っている中、隣接する洛和ヴィライオス介護老人保健施設との関わりを深めるために、昨年度から交流を開始した。

〈方法〉

交流を開始した当初は、ハロウィンやクリスマスなど年間の行事の際に訪問し、季節の歌を一緒にうたったり、手遊びをしたり、利用者の方と握手をしたり、簡単なやりとりをして過ごした。今年度からは、行事に関わらず連絡を取り合い、AIロボットを見学させてもらったり、散歩の帰りに施設の職員やデイの利用者の方に挨拶をしたりするだけの機会もつづけている。

〈結果〉

人見知りや場所見知りで、泣いてしまう子どもがいることを懸念していたが、「泣き声さえも利用者の方にとっては、良い刺激となるから遠慮せずに来てください。」と言ってもらい、ためらわずに交流することができている。人見知りや場所見知りだった子どもも、日を重ねるごとに慣れて、今では自ら利用者の方のそばへ向かい、手を握って挨拶するまでとなった。大勢の前で、歌をうたったり踊ったりすることで、子どもたちにも自信が付き、自己肯定感が高まり、お互い良い刺激になっていると感じる。

〈考察〉

さまざまな年代の方との交流は、子どもたちにとってとても貴重な経験である。年齢的に言葉でのやりとりは難しいこともあるが、手や表情から伝わり合うものがあると実感できている。

〈結語〉

今後も幼老交流を通して、保育園だけの世界に留まらず、子どもたちの視野を広げていけたらと思う。子どもたちにとって、もう一つの居場所となるよう、今後も定期的に交流する機会を設けていきたい。

野菜栽培から見た子どもの成長と変化

洛和みずのさと保育園

○古高友子

【キーワード】食育 野菜栽培 クッキング

〈背景・目的〉

開園当初はまだコロナ禍であり、様々な制限の中、食育も限られていた。

野菜が嫌いな子どもは少なくないが、その中で「まめがきらい」と言った一人の幼児の言葉に対して、おやつによく出てくるきな粉は大豆から出来ていることを話すと、「大豆」と「きな粉」が結びつかないようだった。クラスで相談して、大豆を栽培して、収穫した大豆を使い、きな粉を作ってみようということになった。

〈方法〉

大豆を苗から育て、収穫を行い、穫れた大豆を乾燥させる。

①大豆を鍋で炒る、②ミルで大豆を挽く、③振るいで漉す、④そのまま食べる。

炒ったときの匂いを感じたり、ミルで挽くときの感触や、粉になっていく様子を見たり、挽いているときの音を聞き、五感に働きかける。

〈結果〉

自分たちで大豆を育て、収穫をし、クッキングをしたことで、きな粉は大豆からできていることの理解につながった。そこから他の野菜や植物にも興味を持つようになり、観察したり、図鑑で調べる姿があった。様々な野菜を栽培し、収穫した野菜を給食に取り入れると、野菜への抵抗感が薄れ、苦手だった野菜も食べてみようとする姿があり、給食の残食量も減ってきた。

〈考察〉

実際に自分たちで農作物を栽培し、自分で関わった食材に対しては興味や愛着が湧きやすく、食べてみようという変化が現れ、食べてみたら「おいしかった」、「給食が楽しみ」ということにつながり、残食の減少傾向が見られた。

〈結語〉

子どもの好き嫌いや偏食は一定数あるが、食育の一環として大豆からきな粉への変化を体験したことによって、育てることや作ることの大変さを知ることができ、食べることへの向き合い方の変化が感じられた。コロナ禍明けからの実践期間がまだ短く、今後も継続して、栽培やクッキングを行っていききたい。

乳幼児期における防災教育のあり方

守山市立吉身保育園

○川島果菜・森岡裕子・藤野絵美・西瑞穂・村上由佳

【キーワード】避難訓練、火災、雷、地震、大規模災害

〈背景・目的〉

保育園において、火災や地震などの災害時に乳幼児を安全に避難させるためには、日頃からの訓練と職員の的確な判断力、対応力が不可欠である。本発表では、大災害を想定した対応の実際について報告する。

〈方法〉

あらゆる災害を想定し月1回の避難訓練を行っている。火災においては、出火の場所、程度に合わせて避難経路を変え、地震においては大地震も想定し避難する。避難場所によっては、乳児や歩行が困難な子どもは避難車や抱っこによる避難を行い、経路や所要時間の確認を行っている。幼児では年齢に応じた簡単な言葉かけや、防災をテーマとした絵本や紙芝居、合言葉を用いている。大規模災害時を想定した二次避難訓練も組み込み、保育園全体で近隣の小学校への避難も行い、ライフライン停止時の対応では保護者との引き渡し訓練を実施している。

〈結果〉

繰り返し訓練を行うことで、園児の避難行動は安定し、子どもたちが泣く、動けなくなる、ということはなく、避難時の不安は軽減されている。また、防災意識を保育の中で自然に組み込むことで、子どもは安心して職員の指示に応じられるようになり、結果として避難行動の自立性が育まれると考える。

〈考察〉

毎回訓練後に職員間で振り返りを行うことで、気づきを共有しながら継続的な改善、見直しを行い、職員の判断力、チームワークの強化に繋げている。一方で、想定外の状況への備えや、地域との情報交換、連携体制、保護者との連携、情報提供体制の強化が今後の課題である。

『おはよう!おばあちゃん』 ～日常に溶け込む 幼老交流～

洛和桂小規模保育園
○堂坂友香子

【キーワード】 幼老交流

〈背景・目的〉

開設当初から行っている幼老交流では、新型コロナウイルスの流行により交流が難しくなった時期を経て、ここ数年はおばあちゃんたちとの交流を、より日常にしていきたいという思いで取り組んでいる。

〈方法〉

昨年度から毎週水曜日にはグループホームに訪問し一緒に朝の会をすることにした。

また相互理解を深め効果的な交流を継続するために、昨年度からは年度初めに会議を持ち、その年の予定を決めた。

〈結果〉

毎週訪問することで交流が特別なものではなく、次第に日常になり「おばあちゃんの所に行くよ」と声を掛けると名札を付けて、おばあちゃんに会えることを楽しみにしている。

おばあちゃんたちも、子どもたちが菜園で活動をしている姿を見つけると、嬉しそうに窓際に来てくれるようになり、幼老交流がより一層日常になっている。

またグループホームと連携しながら見通しをもって取り組めるようになってきたことで、例えば季節の制作や行事など、みんなで集って楽しめる機会が増え、卒園式には数名列席してもらうことができた。式後には卒園児がグループホームへ最後の挨拶に行き、1年を通して交流を深めた園児たちの門出を見届けてもらうことができた。

〈考察〉

今後の課題としては、低年齢の子どもたちと、より高齢化していくおばあちゃんたちとの交流をどのように進めていくか、グループホームと保育園の職員でより連携を深め、歩み寄りながら検討していく必要がある。

子ども主体の学童クラブへ

洛和御所南学童クラブ
○丸山智也

【キーワード】 学童クラブ、主体的、ルール

〈背景・目的〉

令和7年4月に放課後児童クラブ運営指針の改定が行われた。その中で『子ども主体の運営』というのが重要なポイントとして挙げられている。そこで、現在学童クラブ内にあるルールやイベントについて子ども達と話し合い、子ども主体のルールについて考えた。

〈方法〉

『新入生オリエンテーション』『終わりの会』『夏休みの取り組み』を通じて、子どもたちと話し合いを行い、学童クラブ内のルールの改善点やイベントについての意見を出し合った。

〈結果〉

子どもたちから、現行のルールに対する、継続すべきルール、見直しが必要なルール、曖昧なため明文化してほしいルール、やってみたいイベントなど様々な意見が寄せられた。これらの意見をもとにルールの改善イベントの決定を図った結果、自分たちで決定したルール、イベントであるという認識が芽生え、ルールを守ろう、イベントを盛り上げようという意識につながった。

〈考察〉

上級生からは、経験を活かした意見が多く寄せられた一方。新たに入会した児童からあげられた疑問の中にも新たな視点や気づきが見られました。こうした多様な意見を積極的に取り入れることで、よりよいルールの見直しにつながった。

〈結語〉

今後も継続的な見直しを行い、引き続き、子どもたちの主体性を尊重した運営を心がけていきたい。

〈参考・引用文献〉

厚生労働省『放課後児童クラブ運営指針』
子ども家庭庁『放課後運営指針解説書』

おとわじどうかんまつり2年目を迎えて ～こどもの主体性を育むために～

京都市音羽児童館

○犬井琴子

【キーワード】 こども 行事 取組 主体性 ニーズ

〈背景・目的〉

音羽児童館では、地域福祉促進活動の一環として、昨年から「おとわ児童館まつり」の取り組みを行っている。この取り組みでは、地域住民に児童館へ足を運んでいただき、児童館を知ってもらいきっかけになることがねらいである。また、こどもの主体性を育むために、今年度から発足した、小学4年生から中高生の児童が対象のスタッフクラブと、連携をして実施した。地域社会は、こどもが成長する上で重要な場であると考え、当施設ができる「つなぐ」役割についても検討する。

〈方法〉

今年の6月に行った、「おとわ児童館まつり」の参加者に筆記式のアンケートを実施した。アンケートでは、スタッフクラブの知名度やスタッフクラブの活動に参加したいか、自分のこどもにスタッフクラブとして活動してほしいか、などの質問を実施した。

〈結果〉

本取り組みの参加者は、115名（乳幼児含む）であった。アンケートでは、児童館まつりは楽しかったか、今後行事の企画や準備、運営などをしてほしいか、こどもにしてほしいかという質問の結果から、こどもたちや保護者が児童館の取り組みに意欲があり、関心があるということを知ることができた。

〈考察〉

昨年度から、児童館利用者や、クラブ活動に参加する児童が増えており、児童館のアピールが少しずつ実になっている。スタッフクラブ児童は、自分たちで企画、運営、実現できる力が育ち、楽しさや達成感を感じている。また、低学年児童は高学年児童に憧れを抱き、意欲のある発言が増え、より主体性が育まれやすい環境になっている。児童館まつりをきっかけに、スタッフクラブ児童、低学年児童だけでなく、保護者はこどもたちの普段見られない姿や、児童館でどのように過ごしているのか見ることができ、地域住民は、音羽学区に住んでいるこどもたちと関わることもできた。このことから、地域社会のコミュニティ機能を復権させ、共生のまちづくりに貢献していると考えられる。

〈結語〉

児童館は、乳幼児から中高生世代までの児童が自由に利用できる場所である。そのような施設特性を生かし、取り組みを通して児童館のアピールを行い、普段から気軽に児童館を利用してもらう。地域としてこどもたちを見守っていけるように、地域住民と連携して、つながりを築き、こどもと子育て家庭を支えていきたい。

いのちを見つめ、人間を支える。			
 洛和会 ヘルスケアシステム®	医療法人社団 洛和会	医療法人 和宏会	社会福祉法人 洛和福祉会
学校法人洛和学園			
本部			
洛和会ヘルスケアシステム 本部			
医療			
洛和会丸太町病院			
〒604-8401 京都市中京区七本松通丸太町上ル ☎075(801)0351(代) 予約☎09010120(489)244			
洛和会音羽病院			
〒607-8062 京都市山科区音羽珍事町2 ☎075(593)4111(代) 予約☎09010120(489)300			
洛和会音羽記念病院			
〒607-8116 京都市山科区小山鎮守町29-1 ☎075(594)8010(代)			
洛和会音羽リハビリテーション病院			
〒607-8113 京都市山科区小山北溝町32-1 ☎075(581)6221(代)			
矢野医院			
すぎた耳鼻咽喉科クリニック			
二条駅前クリニック			
大津ファミリークリニック			
丸太町リハビリテーションクリニック			
らくわ往診クリニック四条			
淀みづクリニック			
洛和会東寺南クリニック			
洛和メディカルスポーツ京都丸太町 (医療法第42条施設)			
介護			
介護事業部			
洛和会医療介護サービスセンター丸太町病院			
洛和会医療介護サービスセンター音羽病院			
洛和会医療介護サービスセンター音羽記念病院			
洛和会医療介護サービスセンター音羽リハビリテーション病院			
老人介護支援センター洛和ヴィラ桃山			
洛和会医療介護サービスセンター北野白梅町店			
洛和会医療介護サービスセンター北大路店			
洛和会医療介護サービスセンター丸太町店			
洛和会医療介護サービスセンター三条会店			
洛和会医療介護サービスセンター右京山ノ内店			
洛和会医療介護サービスセンター右京常盤店			
洛和会医療介護サービスセンター東大路店			
洛和会医療介護サービスセンター四条鉾町店			
洛和会医療介護サービスセンター西京桂店			
洛和会医療介護サービスセンター醍醐駅前店			
洛和会医療介護サービスセンター淀店			
洛和会医療介護サービスセンター大津店			
居宅介護支援事業所北花山			
居宅介護支援事業所山科			
洛和会音羽リハビリテーション病院居宅介護支援事業所			
居宅介護支援事業所音羽			
洛和ヴィラ桃山居宅介護支援事業所			
居宅介護支援事業所醍醐駅前			
居宅介護支援事業所洛和ヴィラ天王山			
居宅介護支援事業所宇治			
居宅介護支援事業所大津			
居宅介護支援事業所石山寺			
居宅介護支援事業所坂本			
高齢サポート・朱雀 京都市朱雀地域包括支援センター (京都市委託事業)			
高齢サポート・音羽 京都市音羽地域包括支援センター (京都市委託事業)			
京都市中京区地域介護予防推進センター (京都市委託事業)			
洛和会訪問看護ステーション壬生			
洛和会訪問看護ステーション右京山ノ内			
洛和会訪問看護ステーション下鴨			
洛和会訪問看護ステーション四条鉾町			
洛和会音羽リハビリテーション病院訪問看護ステーション			
洛和会訪問看護ステーション音羽			
洛和会訪問看護ステーション桃山			
洛和会訪問看護ステーション醍醐駅前			
洛和会訪問看護ステーション天王山			
洛和会訪問看護ステーション宇治			
洛和会訪問看護ステーション東向日			
洛和会訪問看護ステーション亀岡千代川			
洛和会訪問看護ステーション大津			
洛和会訪問看護ステーション石山寺			
洛和会訪問看護ステーション坂本			
洛和会訪問看護ステーション瀬田			
洛和会訪問看護ステーション大津サテライトGRc-Ns唐崎			
洛和会訪問看護ステーション南草津			
洛和ヘルパーステーション北野白梅町			
洛和ヘルパーステーション丸太町			
洛和ヘルパーステーション北花山			
洛和会音羽リハビリテーション病院ヘルパーステーション			
洛和ヘルパーステーション音羽			
洛和ヘルパーステーション桃山			
洛和ヘルパーステーション醍醐駅前			
洛和ヘルパーステーション石山寺			
洛和ヘルパーステーション坂本			
洛和会音羽リハビリテーション病院通所リハビリテーション			
洛和デイセンターイリオス			
洛和デイセンターリハビリテーション音羽			
洛和デイセンターウラノス			
洛和デイセンター北野白梅町			
洛和デイセンター西ノ京			
洛和デイセンター右京山ノ内			
洛和デイセンター百万遍			
洛和デイセンター修学院			
洛和デイセンター音羽			
洛和デイセンター音羽のさと			
洛和デイセンター桃山			
洛和デイセンター宇治			
洛和会丸太町病院 訪問リハビリテーション			
洛和会音羽リハビリテーション病院 訪問リハビリテーション			
洛和ヴィラウラノス 訪問リハビリテーション			
洛和グループホーム二条城北			
洛和グループホーム西ノ京			
洛和グループホーム壬生			
洛和グループホーム太秦			
洛和グループホーム右京山ノ内			
洛和グループホーム右京常盤			
洛和グループホーム花園			
洛和グループホーム西院			
洛和グループホーム百万遍			
洛和グループホーム四条鉾町			
洛和グループホーム桂			
洛和グループホーム久世			
洛和グループホーム桂川			
洛和グループホーム勤修Ⅱ番館			
洛和グループホーム山科小山			
洛和グループホーム山科鏡山			
洛和グループホーム山科西野			
洛和グループホーム醍醐春日野			
洛和グループホーム伏見竹田			
洛和グループホーム醍醐寺			
洛和グループホーム大山崎			
洛和グループホーム天王山			
洛和グループホーム宇治			
洛和グループホーム京田辺			
洛和グループホーム八幡橋本			
洛和グループホーム大津			
洛和グループホーム大津若葉台			
洛和グループホーム石山寺			
洛和グループホーム坂本			
洛和グループホーム守山大門			
洛和グループホーム瀬田			
洛和看護小規模多機能サービス壬生			
洛和看護小規模多機能サービス音羽			
洛和小規模多機能サービス花園			
洛和小規模多機能サービス西院			
洛和小規模多機能サービス山科西野			
洛和小規模多機能サービス伏見竹田			
洛和ヴィラよつば(介護医療院)			
洛和ヴィラ桃山(特別養護老人ホーム)			
洛和ヴィラ桃山Ⅱ番館(特別養護老人ホーム)			
洛和ヴィラ大山崎(特別養護老人ホーム)			
洛和ヴィラ天王山(特別養護老人ホーム)			
洛和ヴィライリオス(介護老人保健施設)			
洛和ヴィラアエル(介護老人保健施設)			
洛和ヴィラウラノス(介護老人保健施設)			
洛和ホームライフ北野白梅町 (サービス付き高齢者向け住宅)			
洛和ホームライフ音羽 (サービス付き高齢者向け住宅)			
洛和ホームライフ御所北 (介護付有料老人ホーム)			
洛和ホームライフ室町六角 (介護付有料老人ホーム)			
洛和ホームライフみささぎ (介護付有料老人ホーム)			
洛和ホームライフ四ノ宮 (介護付有料老人ホーム)			
洛和ホームライフ山科東野 (介護付有料老人ホーム)			
FAN3ファンキュービック(紹介事業)			
保育			
子ども未来事業部			
洛和東桂坂保育園(認可保育園)			
洛和桂小規模保育園(小規模保育事業)			
洛和桂川小規模保育園(小規模保育事業)			
守山市立吉身保育園(指定管理)			
洛和みずのさと保育園(認可保育園)			
守山市立よしみ乳児保育園(指定管理)			
洛和なごみ保育園			
京都市音羽児童館(指定管理)			
京都市大塚児童館(指定管理)			
京都市花山児童館(指定管理)			
京都市深草児童館(指定管理)			
洛和山科小山児童園 てくてく親子教室			
洛和御所南学童クラブ			
守山市物部児童クラブ室(指定管理)			
洛和キッズアクターズスクールもりやま			
洛和若草保育園			
【洛和会音羽病院 院内保育室・事業所内保育事業】			
洛和会音羽病院 病児保育室 よつば			
洛和イリオス保育園(企業主導型保育事業)			
健康			
洛和会京都健診センター			
【洛和会音羽病院 健診センター】			
【洛和会東寺南クリニック 健診センター】			
教育			
洛和会京都看護学校			
洛和会介護教育センター			
研究			
洛和会京都医療介護研究所			
洛和会京都音楽療法研究センター			
洛和会京都医学教育センター			
洛和会学術支援センター			
障がい福祉			
楽和ヴィラ桃山Ⅱ番館(障害者支援施設)			
障がい者就労支援事業所 らくわ			
株式会社はたらくわし			
洛和ライフケアわくわくやましな(居宅介護・重度訪問介護事業所)			
洛和ケアセンターととのう			
相談センターこより			
関連事業部門			
ウエルネット 本社			
ウエルネット 大津支店			
ウエルネット 京都西支店			
ウエルネット 丸太町支店			
ウエルネット 京都南支店			
ウエルネット 物流センター			
シンザイ(洛和会資材センター)			
トランスポート(洛和会搬送部門)			
・救急患者搬送サービス・介護タクシー			
アールアイエス(洛和会情報システム部門)			
ファシリティアケア(洛和会施設管理部門)			
ワイズファイナンス(洛和会会計・給与部門)			
Medical Design Create(洛和会本部広報部門)			
らくの助ファーム			
東京			
居宅介護支援事業所洛和ヴィラ南麻布			
洛和ヴィラサラサ 訪問リハビリテーション			
洛和デイセンター南麻布			
洛和デイセンターサラサ			
洛和ヴィラ南麻布(特別養護老人ホーム)			
洛和ヴィラサラサ(介護老人保健施設)			
洛和ヴィラ文京春日(特別養護老人ホーム)			
高齢者あんしん相談センター大塚 (文京区委託事業)			
高齢者あんしん相談センター大塚分室 (文京区委託事業)			
大塚介護保険サービスセンター			
文京大塚高齢者在宅サービスセンター			
文京大塚みどりの郷(特別養護老人ホーム)			
洛和大塚みどり保育園(小規模保育事業)			
2025年10月第1版1刷			